IS〜インフィニット・ストラトス〜　【異世界に飛んだ赤い孤狼】

ジュデッカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　【異世界に飛んだ赤い孤狼】

【Ｎコード】
Ｎ１３３０Ｕ

【作者名】
ジュデッカ

【あらすじ】
地球連邦軍ＡＴＸチーム隊長であるキョウスケ・ナンブ。彼がＩＳ世界に飛び、奔走する物語を描く――予定。

設定資料集（前書き）

※一つの章が終わる事によって、随時加筆。ネタバレ多量な為、拝読の際にはご注意ください。

設定資料集

【キョウスケ・ナンブ（南部響介）】

本作の主人公。
地球連邦軍所属ＡＴＸチーム隊長のとして活躍していたが、突如として巻き込まれた空間転移によってＩＳ世界へとやってきた。記憶喪失であり、過去一切の記憶を失っている。
性格は無愛想で寡黙。しかし、実際は静かに燃える熱血漢である。また、常に分の悪い賭けに全力で突っ走る傾向も存在する。それが自身の持ち味でもあるのだが。
また、キレると更に無口になるが、その分手が付けられなくなるのに加え、更に無茶をしてしまう傾向がある。
現在の搭乗ＩＳはアルトアイゼン。

【大倉利通（おおくらとしみち）】

大倉研究所の所長であり、自称『天才』。他人から見れば“変人”と呼ばれている。
キョウスケを拾った人物であり、持っていたＩＳ『アルトアイゼン』に興味を持って研究所に住まわせた。基本的に知らない他人には興味がないようで、最初はキョウスケの事も他の所員に任せようとしていた点がある。
彼の専門はＩＳの武装開発であり、基本的には自作で武装を開発し、他国に売るというのがスタイル。ただ、それが他の所員に任せているために自分は武器開発だけに集中しているのだが。
他にも国から武器を注文されることもあるようで、色々と奇抜な

武装を開発している。最近発注されたのが『ガナリー・カーバー』である。
また、今作ではＢＴ兵器を提唱した人物となっている。その為にＢＴ兵器の稼働率を上げるためにセシリアが早めに来日して見てもらっている。
持論は『ありえないことなんて、この世にはない』。

【レビ・トーラー】

混沌（カオス）の構成員の一人。
番号こそ??と最下位だが、実力は一級品。また、レヴィに化けていた点からして変装もこなせる。
彼女もまた過去の記憶がなく、ミスタＪの命令に従っていれば自身の記憶が取り戻せると信じている。
その為か、ミスタＪの命令には絶対に逆らわず、ミスタＪの為ならば命を投げ出すことも覚悟の上。
搭乗してきたＩＳはジュベール。

【ツィーネ・エスピオ】

混沌（カオス）の??であり、レビと同じく幹部クラスの人間。
搭乗ＩＳはエリファス。

【ミスタＪ】

レビやツィーネと繋がりがある人物。謎が多い。

【アルトアイゼン】

キョウスケの専用ＩＳ。曰く『馬鹿げた機体。だが、俺の向きの機体だ』。

圧倒的な火力と突破力が特徴の機体。その為か、武装が近接と近接に近い中距離装備が備えられているのみである。

持ち味としては『可能な限り遠くの敵機の懐に飛び込み、必殺の一撃を撃ちこんだ後、急速離脱する』というもの。その為に過剰過ぎるほどの重装甲や対ビームコーティングが施されている。

ただ、これはＩＳ本来の高機動戦闘を捨て去るという結果となり、従来のＩＳのように上空を自由に飛び回るという事は出来ない。ただし、正面に関しては常人では反応しきれないようなスピードで接近する。

武装は三連マシンキャノン、スクエア・クレイモア、リボルビング・ステーク、ヒートダガー。

【ジュベール】

レビが搭乗したＩＳ。灰色の装甲に、両腕からは鋭利な爪が伸びているというシンプルな設計。

極限まで装甲を排し、その分機動性に重視しているという奇襲型ＩＳ。アルトアイゼン同様に近接戦闘に特化したＩＳだが、此方はキョウスケよりも速く動け、瞬時に敵を斬り裂く。

弱点は動きを封じられること。捕まえてしまえば此方の物で、キョウスケは密室という点も利用してレビを壁際まで追いやり、クレイモアをぶちかましている

主な武装は両腕に搭載されている双爪、マシンキャノン。

【エリファス】

ツィーネが搭乗するＩＳ。
蝙蝠（こうもり）のような羽を持ち、炎を発射するなどもはやＩＳ本来の性能を免脱しているような機体。
また、機動性も相当であり、瞬時にエリア内から抜け出すスピードも持ち合わせている。

プロローグ（前書き）

……ご期待に添えるように頑張りはしますが、あまり期待せずにいてください…。

プロローグ

新西暦１８６年末――１人の科学者が世界に対して戦乱を巻き起こした。

その名をビアン・ゾルダーク博士。彼はＤＣ（ディバイン・クルセイダーズ）という組織を結成し、地球連邦政府、及び地球連邦軍に反旗を翻した。

ビアン博士の目的は、来るべき異星人に対抗する為に地球圏に強大な軍事政権を打ち立てる事にあった。それが地球連邦になるか、それともビアン率いるにＤＣになるのか――ビアンの目論見は兎も角、戦局は当初ＤＣ寄りに傾いていた。

しかし、地球連邦も負けじと反抗。初期の頃こそ劣勢に追い込まれていた連邦軍であったが、とある部隊の活躍によって息を吹き返し、遂にはＤＣ本拠地であるアイドネウス島に対する奇襲作戦を決行。また、宇宙でもＤＣに協力していたコロニー統合軍の降下作戦も同時に奇襲攻撃。この戦いによって、ビアン博士、並びにコロニー統合軍総司令官であるマイヤー・Ｖ・ブラッシュタインもまた戦死した。

数多くの犠牲を生んだ戦乱、その名をＤＣ戦争と呼ぶ。しかし、その戦乱が収まった訳ではない。その後もＤＣ残党が各地に潜伏し、連邦軍に対してのゲリラ活動を行う。そして、ビアン博士の懸念の対象が遂に地球圏に姿を現した。

新西暦１８７年、後にＬ５戦役と呼ばれる事になるエアロゲイターによる争乱。

だが、このエアロゲイターもまた、ビアン博士やマイヤー総司令を倒した部隊を中心とした者達によって討たれる。数々の犠牲を払った結果、地球圏に平和が訪れた。

――が、始まった争乱が収まる事は無いに等しかった。ビアンの

意思を継いだ者たちによるノイエＤＣの結成。そして、新たな異星人が地球圏に現れる。
名をインスペクター。その中にも数々の思惑があり、私たちと極めて近く、限りなく遠い世界よりやって来たシャドウミラー隊の思惑も存在。そして――アインストという古来からの地球の監視者も出現した。
まあ、なんだかんだあって彼らを倒した私たちこと地球連邦軍。その後も修羅やらデュミナスやらがやって来て――、それが終わったかと思ったら、今度はうちの隊長が異世界に行ったらしく――。

「あいたっ！」

「……どういうレポートだ、これは」

「いやん、キョウちゃん。後ろにいるなら一言ぐらい声かけてよね～」

妙に軽いテンションで俺に対して話しかけてくる、金髪でややノリの軽い目の前の女。
そんな彼女の様子に対し、俺は溜息を一つ漏らし、こう述べる。

「…最後の部分だ。修羅達とデュミナスの件が適当過ぎる」

「別にいいじゃない。こんな辺境の地で、レポートも何もないんじゃない？」

確かに、言われれば正直答えることなど出来ん。
そう――。彼女……いや、エクセレン・ブロウニングの言うとおり、俺達ＡＴＸチームは今現在辺境の地――それこそ、誰が知って

いるのかも定かではないが――に配属されている。
要するに、厄介払いだ。それほど俺達は連邦の上官達にある意味嫌われているらしい。
……当然といえば当然かもしれないが。それに、扱いにくいというのも事実だ。
数々の事件にて最前線で動いた俺達。それ故に他の部隊のように気軽に動かせるような部隊ではないのだ。
それに、現在の連邦上層部は俺達の事を嫌っているのも確かだ。なにやらキナ臭い噂も耳にしているが……考えても仕方がない。

「どしたの、キョウちゃん？　一人で物思いにふけちゃって」

「…別に、なんでもない。ただ、少しだけお前に飽きれていただけだ」

「なにげに酷い言い方よね、それ」

俺の言い分に口を尖らせるエクセレン。これはこいつが少しばかり不機嫌になった証拠でもある。
俺はそんなエクセレンを一先ず無視し、エクセレンが書いているレポートに目を通した。
ますますエクセレンの表情が不機嫌そうに変わるが、これはこれで珍しかった。

「さて、さっさとレポートは済ませろ。時間が掛かりすぎだ」

「どうせ提出する相手はキョウスケなんだし、これはこれでいいんじゃない？　今更過去を振り返ってもあんまり意味もないと思うけどねぇ」

「……まあ、それはそうだが。分からない相手もいるだろう」

「……？」

俺――キョウスケ・ナンブという――の発言に、エクセレンは小首を傾げる。無理も無いとは思うが。

それだけ言うと、俺はエクセレンから離れる。

それから、エクセレンに言っておく事があった事を思い出し、俺はもう一度エクセレンに声を掛ける。

「エクセレン、俺に出撃命令が出た」

「え！？　もしかしてスクランブル！？　でも警報なんて鳴ってないわよ？」

「いや……。ＡＴＸチームは俺だけの出撃らしい。いつも通りだがな」

「またまた……。最近、別任務が多くない？」

「確かにな。まあ、それだけノイエＤＣの活動範囲が大きいという事だろう」

「だからってねぇ……」

何となく、エクセレンの声の音量が下がった気がする。

確かに不可解な事だろう。チームなのだから、共に行動するのが妥当な筈だ。

しかし、未だ壊滅していないノイエＤＣの活動が最近になって活発化している。現政府を打倒したとして、一体どういう政治を行っ

ていくのか――という事も彼らに問うてみたいが。
いや――既に、そんな事は考えていないのだろう。ただ、ビアン・ゾルダークの意思を継ぐという考えは、既に失われているにも違いない。
もはや方向性の見えない、ただの戯言――といえば彼らは怒るだろうが、果たして大義なく動いたところで意味はない。……俺の私見だが。

「それで、今日は何処の応援？」

「ロシア東方面だ。ブリットもクスハもテスラ研にいる以上、俺がいくしかないからな」

「少し遠いわねぇ。それで私はこの基地で指示があるまで待機、と。はぁ、どうせなら一緒に行かせてくれればいいのに」

「文句を言うな。俺達が出ている隙に此処が襲撃されれば元も子もない。それから、帰ってくるまでにレポートは仕上げておけよ」

「はいはい、分かってますよ。……気をつけてね、キョウスケ」

「分かっている……。それに、この程度で俺がやられると思うか？」

「むふふ、キョウスケの悪運は紙折つきだし。実を言うと、そんなに心配してないかも」

「……行って来る」

「早めに帰ってきてね、隊長さん？」

「了解した…」

それだけ聞き、俺は部屋を出る。

だが――俺は生涯、この出撃の事を後悔する……いや、なんといえばいいんだろうな。

兎も角。あんな事になるなんて、想定していなかった。――想定、出来る訳がないのだが。

そして、暫く――俺は、エクセレンを始めとした“この世界の人々”を思い出すことすらも間々ならなく事が出来ないようになるなど、想像もしていなかった。

もっと、警戒していればよかったのかもしれないな――。今となっては、もう遅いがな…。

第一話　爆発（前書き）

リメイクは第零章から始めます。最初からＩＳ学園ではなく、その前日談から。やや矛盾した設定になる……と思います。

零章では原作のキャラは二人ほど、後はすべてオリジナルキャラ（といっても、一人以外チョイ役程度）が出てくるため、前のような感じではなくなっております。

その辺はご了承ください。

第一話　爆発

地球連邦軍制式の大気圏外輸送機、タウゼントフェスラーの操縦席――其処で俺は腕を組みながら目を閉じていた。

輸送艦が護衛もなしに堂々と上空を飛んでいるのは極めて危険な行為であり、愚の骨頂。敵に索敵されて襲撃される場合も多々ある。更に最近で想定外からの遠距離攻撃――輸送機を沈める程度では使われるはずもないが――も存在するため、常に警戒を怠るわけにはいかない。

レーダーは主に索敵を行わせているが――実際には無駄だろう。“シャドウミラー”から流れた技術『ＡＳＲＳ』が今でも現役で使われており、それが元でノイエＤＣの奇襲は悉く決まっている。

敵が残党だからといって、なめて掛かれば手痛い一撃を食らわされるという事だ。

ただ、最近のノイエＤＣ残党も少しばか鳴りを潜めたようだが――また大規模な反攻作戦を練っている、というのも考えられる。その先遣隊として出てきた残党を狩り、今のうちに目を紡いでおくというのも当然納得は出来るが――本命を潰さなければ話にならないのも確かだ。

――が、幾らなんでもこれは少し不可解だ。基地を発ってから二時間ほどだが、想定済みであった筈の襲撃が一つもない。確かにステルスは起動中だが――至って快適に航行できていた。

一般の解釈からすれば、それはいいことなのだろう。ただ、俺はどうにもキナ臭く感じる。なにより、ＡＴＸチームの各自ををバラバラにしているという点も腑に落ちない。

ブリットとクスハはテスラ研に行っているからまだしも、本来チームである俺とエクセレンを引き離すとは――やはり、堪える。

アルト一機でもやれないことはないが、それでもヴァイスリッターエクセレンの援護は欲しい。その分、俺は俺の仕事を全うできるからだ。

「……静かすぎる。それに、操縦士も連れずに一人で行けとは……面子が足りないわけじゃない。何か裏が…？」

俺がそう思った矢先の事だった――。

何か後方で凄まじい爆発音が鳴ったかと思うと、その衝撃で輸送艦全体が激しく揺れる。俺は衝撃に対してとりあえず操縦桿を握り、状況を確認しようと原因を調べようとした矢先――警報が耳に届く。

【ビーッ！　ビーッ！　緊急事態発生！　緊急事態発生！】

「…ッ！？　どこをやられたんだ……？」

状況を確認するために機体の状態を確認する。

だが、衝撃の原因は襲撃…という訳ではない。爆発は機体の中からのようで、どうやら機関室が急に爆発したらしい。

機関室――すなわち、エンジンだ――という単語を目にしたところで俺は眼を見開き、同時に悟る。

「図られたか……！」

歯噛みをし、俺はモニターを睨む。

この出撃も恐らくは仕組まれたこと。ＡＴＸチームを…いや、恐らくは俺を快く思わない者――そんな奴ら、幾らでもいるだろうが――が仕掛けたのだろう。そして、こうして出撃命令を出してから輸送艦を爆破。俺を抹殺する魂胆だ。

――冗談ではない。となれば、あの基地の人間はそのほとんどが

上層部に飼われた犬達。残っているエクセレンも危ないという事だ――！

「通信を……チッ！　ジャミングが掛けられている……！　其処まで して俺を殺したいか！」

用意周到過ぎる対処に、俺は怒りを通り越して呆れてしまう。

拳は限界まで握られているが、事が起こってしまってからではもう遅い。まずは此処から脱出しようと背後の扉を開けた時、俺の視界に飛び込んできたのは――赤だった。

「……すでに火の海か」

俺が目にしたのは、一面の炎。灼熱の炎によって機体が焼かれ、火の粉が俺にも飛んでくる。

おまけに機体は地面に向かって降下しているのか、ややゆっくりとしたスピードで機体が落ちていっている。

どうにかバランサーが生きているので急降下はないが、落下しているという事実はどのみち変わらない。それに、機体が耐え切れずに爆発するという可能性も否めなかった。

それに――脱出しようにも脱出ポッドも全て焼けてしまっている。恐らくは此処にも爆弾が仕掛けてあったか、脱出できないように最初から積んでいなかったのだろう。

再び拳を握りしめ、俺は基地を発つ前に少々念入りに輸送艦の中をチェックしなかったことを恨んだ。任せきり、という訳ではないのは確かだ。

――それに、味方である筈の人間を疑う前にこうなってしまったというのが本音といったところか。

「だが――まだ、あいつがある」

そう呟くと、俺は一瞬だけ口元を動かして笑って見せる。そして同時に、一発で機体を沈めなかった事を悔やませてやるとも思う。

こんな絶望的状況の中、笑っている暇などないのだが――俺は信じていた。俺の“愛機”が、この程度で沈むはずがないと。

共に幾つもの戦場を駆け抜けた。ボロボロになりながらも、今の今まで一緒に戦ってきた愛機。だからこそ、あいつが――“アルトアイゼン”があると信じ、俺は火傷覚悟で火の海の中に突っ込む。

全身が熱く、煙が絶え間なく俺を包む。一瞬で意識がブラックアウトしてしまいそうな中、俺は気力を振り絞って輸送機の中を走り抜けた。

そして、破壊されていたドアを潜ると――其処にあった機体を見て、俺は走りながら再び笑みを浮かべる。

「…お前も悪運が強いようだな、アルト」

眼前にあったのは、まるで俺を待っていたかのように仁王立ちしているＰＴ、アルトアイゼン・リーゼの姿。

あれだけの爆発があったにも関わらず、アルトはこの通り無事だ。それこそ奇跡に近かったが、今はそんな事を考えている暇はない。

俺は立ち止まることなく走り、急いでハッチを開いて飛び込むようにコックピットに乗り込む。

乗り込んだ際にでようやく先ほど火傷した部分が痛みを生じるようになるが、俺はそれを気にしているよりも先にアルトを起動させる。

（こんなもの、過去の経験に比べれば軽いものだからな）

ラプターの墜落から始まり、機体の四股の全てを破壊されたり、無茶な戦い方であばらや助骨を折ったことは何度もある。それに比

べれば、この程度の火傷など大したことはない。
駆動系、問題なし。武装面、問題ない。やや機体に損傷こそ見受けられるが、動ければ問題ない。そう思い、俺はアルトの操縦桿を握った。

（後は輸送艦の壁をぶち破って外に出るだけだ……。だが、詰めの奇襲も考えられる。用心するに越したことは……む？）

考えを纏め、俺は壁をぶち破るためにアクセルに足をやった途端――機体内に警告音が鳴り響く。
外からの襲撃か？　と思ってコンソールに目をやると、俺は其処に書かれてあった文字を見て少しばかり目を見開く。

「…転移反応？　一体何が起こっている！？」

書かれてあった文字は、転移反応。座標軸は、今現在俺がいる場所――輸送艦の格納庫だ。
こんな狙った様なタイミングで転移とは――どこのだれか知らないが、やってくれる。

「また惑星エリアに飛ばされるのは御免だがな……」

過去にリュウセイやマサキと共に飛ばされた場所の事を思い出し、俺は苦々しげに表情を変えた。
俺が呟いた瞬間、俺とアルトの眼前に紫色の光が出現する。あれこそが空間転移の光であり、飲み込まれれば何処に飛ばされるか分かったものではない。それこそ――生きて帰れるかもわかったものじゃない。
それから逃げようとするものの、場所が悪い。更に機体は強い力によってどんどんと光に向かって引き寄せられていく。

足掻こうにも引っ張りの強さが尋常ではなく、それすらも無意味だった。
操縦桿を引くが、機体はいうことを効いてくれない。いや――それよりも、引きの力が強いといった方がいいか。

「無事でいろよ、エクセレン……！」

願うように呟き、俺は突如現れた紫色の光に飲み込まれていく。
飲み込まれた瞬間、空間がぐにぐにと異常なほどに曲がり、空間が捻じれる。俺とアルトも例外ではなく、何もすることが出来ないまま、よくわからない感触が俺達を襲う。
とてもではないが、こんな場所に長居はしたくない。
だが、動こうにも腕が全く動かない。まるで金縛りにあっているような――そんな感覚だった。
ただただ、見ているだけの状態が続く。虹色…いや、それよりも濁った色が俺には俺を過ぎ去っていく。

（今までの転移はすべて一瞬だったが……なんだ、これは？　何処に飛ばされるんだ、俺は…？）

そう思った刹那――。
急に頭の中に靄がかかったかと思うと、今まで俺が経験した記憶が、霞んでいくような感覚に陥る。
俺は何が起こったのか理解できず、反動的に体を動かそうとする。だが、今度はまるで鎖で縛られているような感覚により、俺は身動きさえ出来なかった。
その間にも、今までの俺の記憶が――戦いの記憶が、出会った人々の記憶が、アルトの記憶が、アイツの記憶が――次々と、煙のように消えてゆく。

「エク……セレ……ン」

意識を失う前に、辛うじて出た言葉はそれだけだった。

直後、周りが眩い光に包まれ――俺はまるで事切れたかのように意識を失うのだった。

＊

其処はどこかの演習場だろうか、其処には大量の標的（ターゲット）が存在した。

それらは自由自在に動き回り、その演習場内を自由気ままに飛び回っている。

その標的（ターゲット）は、見てくれは丸みを帯びている至って普通の代物。攻撃はしてこないタイプであったが、まるで生きているかのように動き回る。おまけにその動きも相当素早い。

そんな標的（ターゲット）が、耳をつんざくような音がしたかと思うと、バリンと音を立てて砕け散った。その音を合図に、今まで動き回っていた標的（ターゲット）が続け三つ音がなるや先ほどと同じく割れていく。

それら全てが不規則に動き回っている筈の標的（ターゲット）のど真ん中が正確に撃ち抜かれていた。

「お次は……」

金髪の髪を持った少女が手にしたライフル――自分の身長よりも高いものであったが――を軽々と構えながらも、再びトリガーに指

を当て、とんとんと軽く引き金を叩いた後、狙いを定めてトリガーを引き、ライフル弾からエネルギー弾を射出し、標的（ターゲット）をいとも簡単に撃ち抜く。

標的（ターゲット）を造作もなく撃ち抜いた少女。その彼女がちらと横に視線を送ると、彼女の周辺に浮かんでいた代物――形からして、ビット型と思われる――がギュンと音を立てて飛んでいく。

合計で四機存在し、直線移動によって標的（ターゲット）に近づく。標的（ターゲット）達はまるでレーダーでも搭載してあるのか、その兵器が近づくと同時に今度は距離を置くように後退していく。

だが、それらを逃がすような代物ではなかった。少女は意識を集中させて四機すべてを標的（ターゲット）を追従。そして、目標を捕えた瞬間――その兵器の射出口から淡い青色の光が射出された。

「今ですわ！」

威勢よく、少女が手を振り下ろす。その瞬間、逃げ回っていた標的（ターゲット）達が一斉に音を立てて割れてしまった。

不規則に動き回るものの、所詮は機械。パターンこそ同じではないが、機械故に動きは正確である。それを狙い撃てば、それでいい。搭載されているＡＩは独立思考型ではない。だからこそ、動き回っていようとポイントに到達した瞬間に放てば当たるのだ。

その後はまるで音楽でも鳴らしているかのように、順序良く――それでいて、綺麗な音色を響かせているような感じでその場に存在した標的（ターゲット）を全て撃ち抜く。

そして、最後の標的（ターゲット）を破壊する寸前で、その少女は自身の金髪に手を掛けながらも、至って余裕そうな表情へと変わる。

「これで状況終了ですわ」

今度はパチンと指を鳴らした瞬間、最後の標的（ターゲット）が音を立てて割れ

る。それと同時に少女の前にウィンドウが表示された。其処には撃墜スコアとタイム、そして射撃の正確さが表示されていた。

だが、少女はその結果を見るなり――自身の結果に、やや呆れたように息を吐いた。

「まだ……この程度ですか」

彼女が見た項目は、先ほど書いたような場所ではなく、『ＢＴ兵器の稼働率』という場所のみであった。他の全ての項目はほとんどパーフェクトに近かったものの、それだけは異様に低く――少女は肩を落とす。

それもその筈であり、今回の彼女の課題はこの『ＢＴ兵器の稼働率』に関してであった。それがこのような結果であるなど、正直に言って認められるものではない。

だが、落ち込んでいる暇はない。

やや肩を落としながらも、少女は周囲に展開していた先ほどのビット型の兵器を軽く撫でた。しかし、その身に展開していた物――見てくれからして、パワードスーツの類だろうか――は中々みられるようなものではないのも確か。

その姿はまるで何処かの王国騎士のようであり、鮮やかな青色に染められていた。特徴的なフィン・アーマーを四枚ほど背に従えており、その少女と相まって気高く感じるようなフォルムであった。

撫でたところで、彼女はそのパワードスーツを瞬時に“消し去り”、演習場に対して踵を返す。

いや、消し去るという表現は似つかわしくないだろう。正確に言えば、“待機状態に戻す”といった方がいいか。事実、その人物の左耳にはいつの間にか青色のイヤーカフスが存在しており、先に展開していたものはこれになっている。

これはこのパワードスーツらしきものを収納するの為には基本中

の基本の動作であり、金髪の少女ははそれをやったに過ぎなかった。
それだけでも十分に凄い事なのだが、少女は何事もなかったかのように終わらせると、自身の自慢でもある縦ロールに伸びている金髪の髪に手をやり、軽く撫でる。
その時、その人物が持っていた端末に通信が入ったかと思うと、その人物はすぐさまその通信に出るべく、端末を起動させる。

『なかなか見事なお手前だったね。それが使い物になっているようで僕も嬉しいよ』

「…いいえ、まだまだですわ。このＢＴ兵器は確かに素晴らしいものですが、慣れるには少し時間がかかりそうですわ…」

『ふーん、そうかい。じゃあ、今日の訓練は此処まで。時には体を休めることも大事からね、セシリアちゃん』

「……分かりましたわ、博士」

セシリアと呼ばれた金髪の少女はやや間を開けたものの、素直に頷いて端末を切る。博士と呼んだ人物の言う通り、この人物の名はセシリアといい、その本名はセシリア・オルコットといった。
セシリアは通信を切ると共にと軽く息を吐くが――指示には従わなくてはならない。
それが例え、彼女がもう少し続けたいと思っていたとしてもだ。
此処の責任者でもある彼の指示には逆らうことは出来ない。
いや、彼女の御目付け役は来ているのだが――実質的な権限はその人物の方にある。特に、“この敷地内では”。

「でも、やっぱり物足りないですわね……。わたくしはまだ大丈夫ですのに…」

少しばかりの愚痴を吐きながら、セシリアはゆっくりとした足取りで建物の中に入っていく。

瞬間、彼女を映していたモニターがザッと音を立てて掻き消え、その部屋は一瞬だけ静寂に包まれる。

しかし、モニターを見ていた一人の女性――すらっとした身長が特徴で、髪色は茶髪、黒いスーツを着用して眼鏡をかけている――が、隣に座っていた白衣の男を見下ろすような形で口を開く。

「……何故やめさせたの？」

「無理は禁物だよ。それに、焦っても仕方がないだろう？」

やや不服そうに女性は尋ねるが、白衣の男は至ってさも当然だというように答える。

それが女性には気に食わなかったが……それはともかく、今度はこう切り出す。

「それで、現時点でのＢＴ兵器の稼働率はどの程度かしら？」

「今の時点で三十五％だね。でも、“君の国”ではこれでもＢＴ適正Ａなんでしょ？」

「……」

白衣の男が皮肉ったような7笑みを浮かべながらそう返すと、その女性は苛立ったように歯噛みをするものの、彼に何も言い返せなかった。

ＢＴ兵器――先のセシリアが使っていたビット型の兵器だ――。

最近になって開発された代物で、まだ試作段階の武装。

実質的には有用性のある武装では間違いない。ただ、それを扱いこなせる人間が少ないというのが現在の課題だ。

「……それをどうにかするために、“あれ”を提唱した貴方にわざわざ会いに来たのよ。分かっているの？」

「それは勿論さ。一番初めに食いついてきたのは、君の国――イギリスだからね。協力は惜しまないけど、どうにかしろって言われても無理に決まってるじゃないか。それに知ってる？　女ってのは男に比べて空間認識能力が低いんだよ？　ＢＴ兵器もそれを利用している以上、こんな初期段階でさっさと結果を出せって言われても無理だよね～」

「……ッ」

得意げに呟く白衣の男を、今度は恨めしい視線で睨む女性。

そんな事など分かっているものの、わざわざそれを承知で提唱したの他でもない、この白衣の男本人だ。

この男でなければＢＴ兵器について分からない部分も多く、それが余計に女性の苛立ちを増幅させていた。

「ま、これもあの小娘がＩＳ（インフィニット・ストラトス）なんてものを作った故…か。核に代わる抑止力とは言ったものだね、ホント」

「それだけの有用性がＩＳ（インフィニット・ストラトス）にはあるのよ。それに、そのＩＳで私たちは他の国に差をつけ、更には時代を男から女へと移り変わらせた。貴方も本来ならば、私を敬わなければいけないのよ？　お分かり？」

ＩＳとは――通称、インフィニット・ストラトスとよばれている。本来は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォームスーツ

だ。

だが、『製作者』――この白衣の男曰く、「小娘」との事だが――の意図とは別に宇宙進出は一向に進まない。それどころか、その性能故に現在では軍事兵器と化しており、核に代わる抑止力だとも一部では言われていた。

さらに、その軍事兵器から今度は『国際スポーツ』にまでなっている。これも各国の思惑によってだが、大衆は新しく出てきたそれを受け入れる道を選んだ。

既存の兵器よりも速く、その汎用性と扱いやすさで瞬く間に広まったＩＳ。しかし、重大な欠点があり――なんと、女性にしか使えないという条件があった。

これも開発者の意図なのかと言われれば、分かったものではない。ただ、それによって世界は激変し――今では男卑女尊の社会が出来上がってしまっている。たった、十年少しでこうなってしまったのだから、いかにＩＳが素晴らしい兵器だと過信しているかが見て取れよう。

だからこそ、この女も白衣の男に向かってそんな言葉を吐いたのだ。私は女なのだから、私を敬えと。

しかし、白衣の男は至って平然としながらもこう答える。

「知らないね、そんな定理。僕には全くもってそんなものに興味がないよ」

「なんですって……？」

「だって事実じゃないか。それに、僕は誰の指示にも従うつもりはないよ。首相でも大統領でも、勿論君でもね。これもある意味善意での協力だしね」

白衣の男の言葉にその女性の眉が寄せられる。

この男のこういった態度が我慢ならない。怒りが収まらず、思わず懐に忍ばせてある拳銃に手が伸びかけるが――チッと舌打ちし、女性は視線を逸らす。

それに対し、白衣の男は平然とした様子でコーヒーを手に取り、啜る。所詮はインスタントなために恐ろしく不味いが、この男にはちょうどいい味だった。

「そんなにカッカしたら老けるよ？　ミス・レヴィ」

「大きなお世話よ……！」

さらに頭に血が上るが、拳を限界まで握りしめることでそれを耐える。

さて、このレヴィと呼ばれた女性だが――その名をレヴィ・パウレス。イギリス国の重役の一人であり、その地位も高い女性だ。

それ故に少々傲慢な面もあり、短気。更に男を完全に見下している傾向も強い。

事実、この白衣の男も内心では見下しているのだが――こいつがいなければＢＴ兵器向上の目途がつかないため、実際にはどうすることも出来ない。

そのどうすることも出来ないもどかしさを拭うため、彼女は彼から離れて自らの個人端末を覗き始める。が、別段白衣の男は気にする様子すらなかった。

が、そんなとき。この白衣の男の端末が鳴ったかと思うと、白衣の男はすぐさま端末を取り出して回線を開いた。

「どうしたんだい、武藤君？　僕ですよーっと」

『はい、所長。それが……つい先ほど一人の男を此方で保護したのでご連絡をと思いまして』

「へぇ、そうなんだ。でも保護ってことは迷子かなぁ？」

『いえ、その男は怪我人で酷い火傷を負っており、意識も不明です。奇跡的な事に命には全く問題ありませんが…』

「ほぉ、それは凄い。でも、その程度の事を報告されても、僕は興味すら沸かないよ。その彼の事は君たちに任せるからさ、僕は関係ないという事で――」

『しかし、所長……実は――』

武藤の表情に？マークを浮かばせる白衣の男。

しかし、彼の表情その後のは武藤の言葉を聞いているうちに――いつの間にかどんどんと面白そうな笑みを浮かべていた。

「……へぇ、なるほど。それは面白そうだね。分かったよ、僕も様子を見に行く。絶対に逃がさないでね、その彼」

『了解です、所長』

そういうと、白衣の男は端末を切って勢いよく立ち上がる。

通信の内容など別段興味がなかったレヴィはいきなり立ち上がった彼の事を少しだけ見るが、やはり怒りしか湧いてこないため、彼女は彼女で再び個人端末の方に目を移した。

そんなレヴィなど彼が構う事はない。白衣の男は薄暗い室内から即座に出ていき、口元を軽く動かす事で笑みを作る。

「さて、面白くなってきたね……。保護した男が、未確認のＩＳを所持している、ね……」

呟きながら、歩いていく白衣の男――名を大倉利通という――の表情は、先ほどと打って変わって晴れやかだった。

まるで、新しい玩具を見つけたような――そんな表情で、彼はその男がいるという医務室へと向かうのだった。

第二話　記憶喪失（前書き）

第二話を更新。今回は少々短いですが…許してください。

第二話　記憶喪失

目が覚めた時、俺の目に映ったのは、白く輝く蛍光灯だった。
軽く辺りを見渡せば、其処には医療器具が散乱している。その赤で俺には点滴まで打たれていた。全身は顔以外の殆どを包帯で巻かれている状態で、かなりの怪我を負ったことが伺える。
何故こんな状況になっているのかを思い出そうとする――が、俺は一体何をしてこうなったのかが……全然把握できなかった。
事の一件を思い出そうにも、頭の中に靄がかかったような感じが過ぎ、俺はたまらず頭を押さえる。

（何が起こった…？　此処はどこだ？　何故……俺はこんな怪我をしている？）

考えれば考えるほど、分からないことだらけだった。
しかし、一番肝心な事は――。

（俺は……誰だ？）

傍から見れば、口を軽く開きながらポカンと呆けるかもしれない。唖然とするかもしれない。
しかし――いくら俺が考えようにも、全く思い浮かばないのが現状だった。自分自身がこんな状態な事に対して内心で驚き、思わず頭を押さえた。
だが、当然この程度の事で俺が何者であるかなどを思い出せるはずがない。ただ、あまりにも唐突の事に頭が混乱したため、そんな言動を取った。
普通の人間ならば、この時どういう反応をするのだろうか？　叫ぶか？　嘆くか？　……いや、そんなものは関係ない。

とりあえず、今は現状を確認したい。
それだけだった。
そう思った矢先、近くにあった白いカーテンの向こう側に人ひとり分の影が出来たかと思えば、何の断りもなしにその影だった人物が入ってくる。
その人物は入ってくるなり物珍しそうな表情をしながら、俺に近付き——その口を開いた。

「目が覚めたかい？　るんるんりる、ご機嫌いかが？」

「……」

「おや、いまいち反応が薄いねぇ？　此処は笑うところだよ、タブンネ」

「……」

俺が冷静になろうとしていたところ、突如現れた白衣を着用した男——やや長身で肥えてもいないが、髪の手入れをしていないのか髪がボサボサなのが印象か——の第一声がこれだ。
当然、俺としては返す言葉もない。いや——返すのも少々馬鹿らしい。
そう感じ、俺はただその白衣の男を見続けることしか出来ない。
すると、男は小首を傾げる。

「あれ～？　ノーリアクションはきついね～。ちょっとはツッコミを入れてくれてもいいんじゃないかな？」

「いえ……呆気にとられていたもので」

彼の言葉に、素直にそう返す。
いや、もっとましな言葉が浮かばなかったというのもあった。
それこそ、俺も慌てることなく冷静でいられている事も不思議なのだが…今はいい。

「呆気にとられていた？　そうか、そうだよね。それも当然か。ははっ」

……俺の言葉に、白衣の男は急に納得したかのように笑い始める男。
この男の言動を見ていたが、益々意味が分からなくなる。笑う要素もなければ、なぜこうも笑っているのかも分からん。
ただ、これがこの男のペースなのだろう。本音を言えば、付き合いにくいが。

「まあ、前置きはこれくらいにして。初めまして、キョウスケ・ナンブ君――いや、君は日本人のようだから南部響介君といったほうがいいかな？」

「……南部、響介…ですか」

「そ。……って、え？　リアクションが薄いけど…まさか君、自分の名前が分からなかったりするの？」

「……恥ずかしながら。自分でも何が起こったのか理解できませんが……」

「ほっほ～……記憶喪失ってやつかな？　こいつはちょいと面倒になったねぇ」

やや驚いた反応を見せた白衣の男に対し、俺は微かに視線を逸らしながら頷く。
今時、自分の名前を知らないとは可笑しいにも程がある。いや、こいつが言ったように、俺は『記憶喪失』なのかもしれない。
全く実感が沸かないのだが…こういうものなのだろうか？

「記憶なし、か～。まさか君、過去の記憶もないってやつ？」

「……そのまさか、と言ったら？」

「フフフ～、どうしちゃおうかな～？」

俺がやや諦めたように男の方を見ながらつぶやくと、男は不敵に笑みを浮かべてきた。
やはり、この男相手だとやりにくい。おまけに何をし出すか分かったものではないのも確かだ。
さっさと空間から逃げ出したいのも事実だが――怪我をしているため、迂闊に動くのは出来ない。俺も命は惜しいからな。
すると、男はポンと手を叩いたかと思えば、先ほどの不敵な笑みをやめ、少しだけ真面目な表情へと戻した。

「ま、冗談はさておき。君の症状は記憶喪失……の可能性大だね。脳に大規模なショックが加えられたのかも」

「大規模なショック？　それは一体…？」

「おっと、原因はあくまで過程だからね。それに僕は君の身に何かが起こったのかも分からなければ、原因を究明する気もないから。それだけは覚えておいてね」

しかし、彼の言う大規模なショックか……。それは一理ある。
それが原因ならば、恐らくはこの怪我を負った時であろう。今となっては分からないが、その時は相当切羽詰まっていたに違いない。
おまけに生死の危機に瀕する何か――そう考えるのが妥当か。

「……」

「原因は君がどうにかして思い出すしかないね。君の身に起こったことは、君しか知らないし。時間が経過したり、何かのショックを気に思い出すこともあるようだしね。……ま、今の君に思い出して貰っても少し困るんだけど」

「…と、いうと？」

「ん？　フフ、そうだね……。全ては君の怪我が治ってから、という事にしておこうか。ちなみに三日間は絶対安静。その後は一応フリーだけど、少しの間は此処にいてもらうからね。宜しい？」

といっても、このような現状だ。何処に行けというのだろうか。
そう思いながらも、俺はやや諦めたように下を向きながら答えた。

「……行くあてもありませんし、それで構いません」

「今の言葉は本当だね？　それじゃあ、契約成立だ。ゆっくりしていってね！」

そういって、白衣の男は来た時と同じようにカーテンの向こう側へと去って行く。
彼がいなくなった瞬間、俺は軽く息を吐いて体をベッドに預けた。

脳裏に過るのは――あの白衣の男の言葉だけ。

「……食えん男だ。何を考えているのかも読みにくい」

そういった人物は、ある意味苦手な方だ。面白い、ともいえるが、奴は別だ。

考えを探らせず、意味深な事を言ったかと思えば煙のように消えていく。

しかし――俺は記憶喪失か。それならば、今までの記憶がないのも割とドライに納得できる。

（いや……あの男のせいで、妙に冷静になれたのも事実か…）

本来ならば、必死に何かを思い出そうと頭を抱えていたに違いない。

しかし、あのような男が出現した以上――何かを考えようとすると、どうしてもあの男の事が思い浮かぶ。

奴の顔などではなく、その言葉一つ一つの意味の方だが。

（思い出して貰っては少し困る？　……奴にとって、何か不都合な事でもあるのか？）

奴の言葉の真意が分からない。何を考えて、奴はあんな発言をしたのか――。

……まあ、今はいい。今は奴の言う通り、体を休めることが一番だ。

――考えるのはそれからでもいいと思い、俺は瞼を閉じた。

＊

薄暗い室内の中――先の白衣の男、大倉利通が研究員に近づきながら其処に映し出されているモニターを眺めた。

そのモニターに映っているのは、自分が見たこともない機体。中央部分こそ空洞ができたように何もないが、そんな事は対して気にならない。何故ならば、この場所には人が乗り込む部分だからだ。

では、何が気になるのか？　それは勿論、機体――――大倉曰く、ＩＳだが――――の性能を見てみたいという事だ。

そんな大倉の接近に、モニターと向かい合っていた職員はキーボードを叩いて様々な数字や図面が描かれたデータを表示していく。

「これが彼の持っていたＩＳの解析結果は？」

「そうですね……。やはり機体的にはアメリカのゲシュペンストをベースにしたカスタム機に違いありません。この機体にはそれに近いパーツが組み込まれていますので」

「ゲシュペンスト？　あの汎用性と有用性に富んだって噂のアメリカ式量産機ね……。でも、ゲシュのカスタム機って“”彼女“の機体が最後発だし、それ以降は開発が中断されたんじゃなかったっけ？」

「そうなんですが……どこを調べても、同じ結果です。間違いなく、この機体はゲシュペンストをベースにした機体かと」

「ふーん……不思議な事もあるもんだ」

職員にそう言われ、大倉は顎に手をやった。
アメリカで開発された機体、ゲシュペンスト。従来までのＩＳの全ての技術を結集し、ＩＳ統合整備計画と名付けられた開発プランの元に出来たのが本機であり、約二年前に行われた開発計画だ。
フランスのラファール・リヴァイヴと同じく最後発の第二世代型ＩＳでがあるが、その性能は第三世代型ＩＳにも劣らない。
まずは、豊富な後付武装。どのような状況下でも換装次第で適応でき、何よりリヴァイヴよりも拡張領域（パススロット）が大幅にデカいのが強み。
その分、基本装備（プリセット）が恐ろしいほどない。あるのは左腕に搭載されてある近接格闘用のプラズマステークのみ。後はすべて後付である。
しかし、その分様々な武装を取り付けることも可能。機動性も試作型の第三世代型に負けておらず、まさしく自分好みの特色に染める事が出来る。
が、計画で完成したのはたったの七機であり、そのうち一つはゲシュペンストの上をいくというコンセプトの元、カスタム機となり、現在も現役で活用されている。
なので、ゲシュペンストはこの世に七機しかないという珍しい機種。
おまけにその全てがアメリカの特殊部隊に配備されており――そのうちの一つが流れたとは考えにくい。

「何処かの国がコピった場合もあり得るけどね」

「…考えられますね。統合整備計画は各国の技術者が集まっていますし、それを基に開発した場合もあるかと。日本も似たような事をしましたしね。しかし――どうも、この機体はゲシュペンストにしては偏り過ぎだと思うのですが…」

「確かに、ゲシュのコンセプトとは全く真逆だね。スペックを見る限りでは、防御型かと思ったけど……本当は一点突破の機体だ。機

動性の面を大型スラスターで強引に解決している点から見ても明らかだよ。おまけに装甲も異常なまでにあるから、ある程度の反撃は覚悟の上。ただ残念なのが、これが全身装甲（フルスキン）じゃない事だね。それだったら、防御と攻撃を一体とした…それこそ、従来のＩＳの常識をぶち破る機体になってたのに。実に惜しいよ」

不敵に笑みを浮かべながら、感想を述べる男――大倉利通。

確かに機体的には偏り過ぎた性能かもしれないが、実際のところ大倉にとっては其方の方が面白い。

偏り過ぎたコンセプト…中々最高である。この機体を開発した開発者には是非とも賛美を贈りたい、と内心では思っていた。

しかし、疑問もある。これを、何故あの男――キョウスケが持っていたのか、という点。

「まさか、動かせるのかな？　彼が、このＩＳを」

「不可能でしょう。これまで幾多の男がＩＳに乗り込みましたが、全く動きもしませんでした。博士こそ同じだったでしょうに」

「だよね～」

大倉の言葉に、職員は即座に答えた。

男がＩＳを起動できる？　それこそ夢物語。今まで誰一人として出来なかった事を――こんな何処から現れたのかも分からないような人物に、起動できるはずがない。職員の考えはそれだった。

だが、大倉は相変わらず顎に手をやりながらも、目を細めると同時に職員に対して呟くように言ってやった。

「……確かにそうだね。でもね、この世に不可能なんて言葉はないんだよ」

「は？」

大倉の呟きに、思わず職員が彼の方を見やる。

すると、其処にはやけに面白そうな大倉の顔があり――その職員はその顔を見ただけで溜息を吐いてしまった。

「ん？　何かな、その溜息？」

「……また良からぬことを考えている、というのがバレバレですよ…」

「あ、ばれた？　でもいいじゃない。こういうイレギュラーがいるのは付き物だからね、この世の中は」

「……そうですね。博士の言う通りです」

やや呆れたように職員は大倉の言葉に賛同するが、大倉は既にその職員から離れ、別の人物に話しかけている。

やけに生き生きとした表情を見せている彼を見るのは久しぶりでもあり、またよからぬ事を考えている証拠でもあった。

「……何をする気やら」

そんな大倉の姿を見て、職員は再び溜息を漏らした。

第三話　起動（前書き）

今回は戦闘描写が主です。

相手は前回のように的――ではなく、ちゃんと動く相手です。ちょっと無理があるような気はしますが…ご勘弁ください。

第三話　起動

三日後――。怪我がだいぶ治った俺はあの男――先日俺に対して話しかけてきた男だ――によって、とある広場に連れてこられていた。

怪我が予想よりも早く治った事に関しては自分でも驚きなのだが。もっとも、若干の痛みはあるので完治とは言いにくい。が、体は問題なく動かせるので心配はないと信じたい。

連れてこられた場所は、パッと一目見た感じでは何処かの演習場に近かった。辺りはまるで軍事施設のような施設が整っているのだが、肝心の兵器は辺りを見渡したところで見つからなかった。

あの白衣の男――後で名前を聞くと、大倉利通（おおくらとしみち）というらしい――の案内、そして何か異様なスーツのようなものまで着用させられ、俺は演習場の真ん中で立ち尽くす。

周りには誰もおらず、何処かキナ臭く感じる。

あの大倉という人物が何を考えているのか分からない分、キナ臭さに拍車を掛けているも同然だった。

『さて。お待たせだね、南部君』

「……一体俺に何をやらせるつもりですか、貴方は」

『おお、怖い怖い。でも、生半可な事じゃないのは確かだよ』

いきなり通信を入れてきたかと思うと、相変わらずおどけた様子を見せてくる大倉。この態度に俺も反抗するかのように冷たい声を放ったが、どうやらこいつには通用しないらしい。

だが、こんな演習場らしき場所に連れてきた以上、何か大事をやらせようとしている魂胆は見えた。ただ――こいつが俺にそれをさせようとする理由が見えない。

キナ臭いと感じたのも、それが原因だ。奴にとって俺の存在は正体不明、おまけに記憶喪失の人物にやらせる事など……何か裏があるとしか思いようがない。

『ま、前置きはどうでもいいんだよ。本題はね…君がＩＳを動かせるかどうか、なのさ』

「ＩＳ……？」

その名前は聞きなれない言葉だった。

これに対しては記憶喪失を理由にしても、全く意味が分からない。ＩＳ…？　一体何を指している？　最新の戦闘機か戦車の名前か？

そんな事を考えている俺に対し、大倉は通信の向こう側から小首を傾げるが――すぐに先のように笑みを浮かべる。

『ＩＳの事についても忘れちゃったようだね。ま、仕方ないね……。ＩＳってのは通称、インフィニット・ストラトス。簡単に言えばパワードスーツの類だ。しかし残念な事に、これは“女性”でしか動かすことは出来ないんだよ』

「……俺は男ですよ」

『それくらい誰が見たってわかるよ。でもね……君はそのＩＳを持っていたんだ。おまけに待機状態でね。君が今現在左手につけているガントレット……それが君の持っていたＩＳだよ』

ちらと視線を左腕にやると、其処には確かに深紅色に染められた

ガントレットが存在した。
俺はそれをやや疑った目付きで見た。そもそも、そのＩＳとやらが男にしか動かせないのならば、当然俺が動かせるはずもない。――そう、そんなわけがなかった。
しかし、この大倉は俺が動かせるものだと思っているらしい。
今なおニコニコとしながら俺を見ており、その視線は全くぶれていない。いや――出来て当然、と言わんばかりの表情をしていると言った方が正しいか。
それに、やらなければ先に進めない。俺は大倉の方に軽く視線を向け、奴に尋ねた。

「それで、どうやれば起動が出来るのですか？」

『うーん、イメージだそうだよ、イメージ。自分の周りに装甲が出来るような感じだって。僕も起動したことがないからあんまり分からないんだけどね』

「……。ともかく、イメージですね？」

『そ。まあ、頑張ってみて』

他人事なので、そういう言い方も致し方がないか。特に大倉の場合は必然かもしれない。
ただ、俺は黙って軽く眼を閉じ、一回大きく息を吸い――吐く。
そして、左手のガントレットを掴む。

（……来い、ＩＳとやら）

俺がそう念じた――頭で呟いた、というべきか――瞬間、左手首から全身に薄い膜が広まっていくのが分かった。

俺が驚いて左手首に目をやると、その瞬間にもどんどんと俺の周りに装甲が形成されていく。それがすべて形成された瞬間――俺の体に蒼色に輝く物があった。

内心でやや驚き、俺は形成された拳を軽く動かす。そして動けるかどうかを確かめる為、右足を動かし、一歩前に出た。

ガシンと音が鳴って足が前方に出る。その地響きが辺りに響き、静さが漂う演習場に木する。

そして、その間にも俺の頭の中に様々な情報が駆け巡るように流れ込んでいおり、俺はその膨大な数の情報を何故か理解していた。いや――無理やり理解させられていたのかもしれん。

何が起こったのか、さっぱり理解できない。ただ、理解できるものは理解できる。そういうしか方法がなかった。

『そんな……！　男がＩＳを起動したですって!?』

『あはは、これが現実だよ、ミス・レヴィ。それに言ったじゃないか。この世の中に不可能な事なんかないってさ』

『くっ……！』

俺がこのＩＳとやらを起動した瞬間、モニターの向こうでは大倉とは違う人物――声からして女性のようだが――が俺の状態に対して驚きを見せたといわんばかりの声を上げた。

――当然だろう、と俺も思う。女しか動かせないと踏んでいたものを、こうして今現在俺が活用している…。それだけで問題だろう。

「…これでいいのですか？」

『うん、上出来だよ。でもその機体自身はまだ『初期化』状態のようだね……。早速『最適化』の処理も始まって、これから『一次移

行』へなろうとしているみたいだけど……その作業は今からの戦闘中の間に終わらせてくれるといいね』

「それはどういう……ッ！？」

いきなり専門用語をべらべらと話してきた大倉に俺は再び尋ねようとするが、その前に機体内でうるさいほどに警告音が鳴り響く。

ちなみにこの警告音は俺だけにしか聞こえない。例えれば頭の中に直接警告音が鳴っているようなもので、そんな状態をいきなりされたところで正直邪魔なだけだった。

しかし、その警告音と共にこんな内容が映し出されたウィンドウに赤文字で危険を示す言葉が書かれており、俺は即座に目を通す。

――警告！　本機がロックオンされております！

（ロックオン…？　何かが狙っているのか？　……っ！？）

刹那、俺に対して一発の砲弾が飛んできたかと思うと、それは俺に対して見事に直撃し、轟音と共に激しい爆発を起こす。

反射的に両腕を前方にやってその砲撃を防ぐが――その瞬間、ウィンドウに映し出されたシールドエネルギー残量とやらが減っていく。

このシールドエネルギーというのが機体を、そして俺を守ってくれたらしい。

しかし、これを撃ってきたのは――並みの相手ではなく、砲弾もややデカい。すぐさま俺はハイパーセンサーを作動させて、撃ってきた方向を確認する。

すると、其処には――大きさこそやや小さいものの、確かに『戦車』が存在した。おまけにその砲身は真っ直ぐに俺を狙っている。

『それは僕の用意した小型戦車だよ。普通の戦車より小さいけど、その分装甲も薄くして機動性を向上。射程も従来の戦車とほぼ同等にしてある』

大倉の言葉が俺の耳に鮮明に入ってくる。

戦車――恐らく、眼前にあるあれの事だろう。今この瞬間にも俺に対して砲撃を続けており、放たれた弾が俺の真横を過ぎ去っていく。

俺は目付きを鋭くさせて大倉の方を見やったが、彼は特に悪びれもせず、ただただ俺の方を面白そうに見ているのみだった。

『ちなみに、あれは全部実弾を装填してるから。死にたくなかったら全部破壊することだね』

次は不敵に笑みを浮かべ、冗談では済まない事を当然のように言ってくる大倉。

しかし、俺も同様に小さく口元を動かし――笑みを作る。それに、俺もこういう状況は嫌いじゃない。

「……理解した。好きに動いて構わないのですか…？」

『ははっ、それは勿論。全部無人機だからね。じゃあ、健闘を祈ってるよ』

ザッと音がして、大倉との通信が途切れる。

無論、そんな事を気にかけている場合ではない。俺は再びハイパーセンサーを駆使してまずは敵機の数と位置情報を割り出し、一先ず考えを纏める。

（前方に三機、東に二機か……まずは北から狙うべきか）

どうやらいつの間にか囲まれたようで、怒涛の砲撃が俺に襲い掛かる。
流石にいつまでもその場で棒立ちという訳にはいかない。俺は機体を滑らせるようにブースターを吹かして横に移動するが――まともに動かした瞬間、俺は眉を寄せる。

「反応が少々鈍いか…。おまけに機体も鈍い。だが、その分防ぐために活用されるシールドエネルギーでそれを補っている…というところか」

周りが重装甲で固められているのもそれが原因だろう。
事実、先ほどとはまた違った場所に受けた左足の装甲も吹き飛ぶことはなく、やや損傷こそしているがそれも軽微といったところだった。
ただ、その分機動性を失っているが――その程度、何の問題もない。

（ただ――何故だろうな、体が妙に馴染まない…）

情報は理解している。だが――頭でどう動かすのかが分かっていても、体がそれにいまいち適応できていないというのが現状だ。
何が原因なのかは分からない。だが、今は考えている暇はないのも確かだ。
俺も反撃しなければいずれは集中砲火で殺されてしまう――事実、大倉はそれくらいやってみせるだろう――ので、俺も反撃に転じるために左腕に装着された三連マシンキャノンを戦車に対して向け、発射する。
しかし、射程が短く、少しばかり距離がある戦車には届かない。
一番便利に使えそうな火器がこれでは…な。

「チッ、射程不足か」

軽く舌打ちし、ひとまずマシンキャノンは牽制に扱おうと決める。それに、威力を確かめてみたところ、この武装はやや貧弱。使わないことはないが、決め手には欠けていた。

そして、残りの武装を確認するが――あるのは右腕の杭打機…『リボルビング・ステーク』と両肩の近接炸裂弾。そして、オプションとしてヒートダガーという短剣――いや、短いながらも実体剣らしきものが搭載されているのみだった。

……近寄らなければ、武装の全てが意味を成さない。一応両肩の近接炸裂弾も存在こそするが、恐ろしく射程が短く、使い方も難しい。

「ともかく、接近しなければ始まらん。砲撃の中だが、距離を詰めてから…」

そう思い、俺は北側にある一機の戦車に狙いを定め、一直線に（・・・）に機体を動かした――瞬間、俺はあまりの事態に目を見開いた。

「……ッ！？」

何が起こったのかといえば、一直線上にアルトを動かしたかと思うと、アルトと俺は一気に戦車に接近していたのだ。おまけに、距離はほぼ零距離に近い。

あまりの速さに戦車も対応できていないのか、砲身が先に俺がいた場所に向いたままだった。あまりの速さに中身のＡＩが反応しきれていない事も示している。

恐らく、この中に人が搭乗していれば、間抜けそうに大きく口を

開けながら俺を見ていただろう。

「……くっ！」

驚いて目を見開いていた俺だが、慌てて杭打機――いや、リボルビング・ステークを動かして戦車の砲身ごと胴体を半ば強引に打ち砕く。

ステークで砕かれた戦車は、グシャという音がしたかと思うと、その反動でひっくり返る。其処に俺を狙った砲撃が降り注ぎ、その戦車は俺の盾になるように砲弾を受け、爆散した。

俺はそんな戦車の事など顧みることなく、機体を動かしてその場から離脱する。しかし、思う事はこれに尽きた。

（一直線上の加速が半端ではない…。思わず杭打機を使いそびれる所だった……）

予想していなかった事態に、冷や汗が一つしたたり落ちる。

扱う俺自身でも度肝を抜かれるような加速力。だが、それがアルトの強みだと――その時悟った。

「なるほど……。こいつは一点突破型の機体か。だからこそ、これだけの重装甲にあの加速力…か。だが、自分でやるとなると骨が折れるな……」

……何やら妙なフレーズが思わず飛び出たが、今は無視。

俺はとりあえず、先に撃墜した戦車から距離が近い戦車に目標を定め、相変わらず砲撃が降り注ぐ中を先の加速で一気に近づく。

「もう一機だ」

加速中に右腕のリボルビング・ステークを使用するために右腕を折りたたみ、距離を詰めた瞬間に戦車に対してステークを打ち込む。
見事にステークが戦車の車体を貫き、ステークがめり込むように車体に撃ち込まれる。
が、この程度ですぐさま破壊はしない。俺はその戦車を撃ち貫いたまま再び加速を行い、近くにいたもう一機の方へと向かっていき――車体から飛び出ていたステークでもう一機の方を同じようにぶち抜く。

「――此処でトリガー…落ちろ」

二機を力任せに上へと持ち上げると、俺は其処でステークの内部に装填されている実包の炸薬を撃ち出し、爆発させる。
凄まじい音と共に爆発音が鳴ると、貫かれた二機の戦車はただの鉄屑と化す。しかし、そんな戦果を振り返ることなく、俺は残りの二機を落とすために動き出していた。
今度の標的は、東側に展開していた戦車二機。先ほどから援護射撃とは言えないような砲撃をドカドカと放ってきており、その内数発を貰ってしまっている。
それでもこうして行動に支障がないのは、アルトアイゼンの性能故か。

「お前等で最後だ。あまり時間は掛けん」

キッと目付きを鋭くさせ、俺は移動しながらも砲撃を紙一重ではあるが、なんとか避けて見せる。
実際、避けきれているのもギリギリのものが多く、ある程度は危うく直撃しそうな物だが。

（やはり、少々反応は鈍いか。大倉曰く、『初期化』と言っていた

が……それが原因か？）

この蒼いアルトアイゼンの加速力は申し分ないが、普通に移動しているときはどうにも反応が鈍い気がしてならない。

初期化だの一次移行だの抜かしていたが……それが原因かもしれない。そんな状態でよくこうしてこいつを動かせているものだな、俺も。――いや、多少の違和感は相変わらず拭えないのも確かだが。

しかし、機体に文句をつけている場合じゃない。俺は狙いを定めて三度突撃し、少しだけ飛び上がって見せるや、戦車の真上を取る。

戦車とはいえ、ほぼ零距離の攻撃には弱い。おまけに真上には射程角度が追い付かず、必然的にそれは死角と化す。

（オプションのヒートダガー……使ってみるか）

今は機体に『収納』されているヒートダガーだが、俺は左手にその実体剣を呼び出や、ダガーを戦車の頭上から突き刺す。

それと同時に左手のマシンキャノンを発射。幾ら射程が短く、威力が低い武装だろうが、零距離からではその倍の威力と化す。

ガガガッという鈍い音がし、機体がショートしたのか、ジジッという音の後に中から爆発を起こす。

内部を見れば凄まじい事になっているだろうが、そんな俺に対してもう一機の戦車が狙いを定めると、仲間がいるにも関わらず砲撃を放つ。

いや、機械に仲間意識は皆無か。

「……流石は人工知能か。だが、人工知能故に…応用は効かんはずだ」

俺はその砲撃を避けるために、すぐさま戦車から飛び降りると、破壊した機体を拳で叩きつける事によって上空へと浮かす。

上空へと浮かび上がった戦車は先ほどの戦車が放った砲撃を必然的に受けることになる。相手が機械故に、こういった応用技など考えもしないだろう。

そして、俺はその浮かび上がった機体を体当たりするようにして押し出す。

なおも戦車が砲俺を仕留めようと砲撃を続けてくるが、俺が押し出している戦車が盾になっている事によって、その砲撃はすべて防がれていた。

「終わりだ――――」

目標との距離が詰められた瞬間、俺は壊れた戦車を左手で押しのけ、最後の戦車に対してステークを向ける。

今にも次弾が発射されそうな感じではあったが――俺はそんな事など構わず、その砲身に向けてステークを押し出し、撃ち貫く。

瞬間、最後の戦車もステークが撃ちこまれた事によって爆発四散する。

残骸がガラガラと音を立てて辺りに散らばるが、俺は右腕を横にやるだけでその場に立ち尽くしていた。

それと同時に、自動的に空になった炸薬のカートリッジが弾け飛ぶように吹き飛び、別の炸薬が自動で装填される。

爆発の後に残った炎が俺を少しだけ飲み込む。が、今ばかりはそれも気にならなかった。

「――確かに馬鹿げた機体だ。だが、こんな機体はそうそうお目にかかれるものではないな……。それに、俺向きの機体でもある」

口元を軽く吊り上げ、笑みを浮かべた瞬間、目の前のウィンドウにこんな文字が浮かび上がる。

――フォーマット、及びフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

ウィンドウの中心には『確認』の一文字。今更になって大倉が先に言っていた初期化、最適化が終わったらしい。

今更か、と内心で苦笑する。が、俺は指示通りに確認のボタンを押した。

刹那、先ほどと同じ――いや、それ以上の情報が俺に対して流れ込み、同時に機体がそれを整理していく。

それと同時に、俺を包んでいたＩＳ――アルトアイゼンの装甲も今までの蒼色と違って真っ赤に、それこそ燃え上がるように深紅に染められていく。

おまけに先ほど食らっていた実態ダメージが修復されていき、それは今度こそ真の姿となって俺の前に現れる。

「これがアルトアイゼン――――か。『古い鉄』とは粋な名前だがな」

馬鹿馬鹿しくも、妙に馴染みのある機体――ただ、少しばかりの違和感こそ感じたが――だと俺は感じだ。そして、この状態になってこそアルトアイゼンの真骨頂だ。

機体のスペックを改めて確認する限り、初期化の状態より機動性がやや向上している。調整不足という点が反応が鈍い原因であり、これによってそれも改善できたのではないかと思うが…いくらかの調整は必要か。

「さて、全て撃墜したか……。さっさとあのぶざけた男に連絡を……」

――――警告！　後方より敵機接近！

ほっとしたのもつかの間、再び警告音が俺の頭の中に響き渡った。
やっとの事で止んだかと思えば、またしても鳴り響く警告音には少々うんざりだ。が、一機残っていたという事は――。

（ステルスか…！）

何処かに身を潜め、俺が全機を撃墜したと思ったところの奇襲だろう。あの男のやりそうなことだ。
奴が開発したにしては雑なプログラムかと思っていたが、意外にそうではないらしい。その辺はやはり科学者であり、考えているようだ。大倉め。
しかし、迎撃しなければ俺がやられる。俺は瞬時に後ろへと振り返ると、もう一度突撃の構えを取る。
――が、その前に通信が割り込んできた。

『その機体はわたくしが仕留めさせていただきますわ』

「……！」

刹那、耳をつんざくような音がしたかと思うと、突っ込んできた戦車が急に動かなくなり――小さく爆発を起こすと同時に動かなくなった。
一体何が起こったのかを確認するためにＩＳ（アイエスアウト・ログ）活動記録をウィンドウに映し出す。
すると、映し出されたのは一発のエネルギー弾。それが正確に向かってきた戦車の急所を撃ち抜き、爆発を起こしたという訳だ。
大方、燃料部分も同時に撃ち抜いたのだろう。最早素人の技などではなく、それは相当な訓練を積んだ者でしか出来ない技だ。
そして、その戦車を見事に撃ち抜いた人物が――静かに俺に近づいてくる。

――戦闘移行状態のＩＳを確認。機体名『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中型射撃型。特殊装備を確認。搭乗者――

「詰めが甘いですのね、貴方」

「油断していたわけではない。一次移行に少し時間が掛かっただけだ」

「果たして本当ですか？　心の何処かで、少しばかり油断していたのではないかと思っていたのですが」

「……さあな」

近づいてきたのは、初期化状態のアルトアイゼンと同じ色をした蒼色の機体を纏った人物――ＩＳを纏っている時点で女だ――だった。

地毛なのか、髪は鮮やかな金髪。その瞳は白人特有のブルー色に染められており、それは機体――ブルー・ティアーズというらしい――とも妙にマッチしていた。

おまけに先の金髪はわずかにロールが掛かっており、高貴なオーラというものを醸し出している。その吊り上った目付きで俺を上から見下ろすようにしているのも特徴か。

「しかし、驚きましたわ。まさか男の方がＩＳを起動できるなどと……最初は何の冗談かと思いましたが」

「……知らんな。俺も成すがままにやらされただけだ」

金髪の女はやや見下した感じで俺に言い放ってくるが、俺は特に

気にせず、やや視線を逸らしていた。
事実、大倉は何の指示もなかった。ただ、ＩＳを動かせると分かった時点での戦車での一斉射。最初から狙っていたようだがな。
食えない男だとは思っていたが、此処までするとは。益々あの大倉の事をキナ臭く感じてしまう。

「しかし、まだまだＩＳに関しては不慣れなようですわね」

「当然だ。今日初めて動かしたばかりの機体だ。そう簡単に慣れるものか」

……などというが、多少の違和感こそ感じたものの、ある程度扱えたのも事実だが。
しかし、それは情報が流れ込んできた故。どうやって動かすのか、この武装をどういう状況下で使うのか――それが把握できたのが大きい。もっとも、全て近接戦闘用に近かったが。

「まあ、それはともかく。わたくしがわざわざ助けてあげたのですから、お礼を言うのは当然ではないかしら？」

「……知らんな。それに援護など不要だったのも事実だ。あの程度、一人でやれた」

別に頼んだわけでもないのでそう返したが、それは金髪の癪に障ったらしく、荒々しく声をあげてくる。

「な、なんですの、その態度は！　わたくしが直々に助けたというのに……不要だったですって！？」

「事実を述べただけだ。それに勝手に邪魔をしたのはお前の方だ」

「な、なんですって……！」

苛立ち、今にもその金髪が逆立ちそうなほどに激昂している金髪の女。

しかし、俺はそんな女の事を無視し、あのふざけた男――――大倉利通に回線を繋げる。

「まだ話は終わっていませんわよッ！」

「幾らでも話しておけばいい。少なくとも、俺には興味がないんでな」

「なっ……！　あ、貴方という人は…！」

何やら金髪の女が吠えているが、気にすることはない。

今はあのふざけた男に苦言でも漏らさなければやっていられん。

そう思っていると、すぐさま大倉と回線がつながり、奴の顔が映し出される。

『いや～、見事だったねぇ、南部君。いいデータも取れたし、僕としても嬉しいよ』

「……最初からこうするつもりだったのですか？」

『動かせた場合だよ。それに、機体の性能も見ておきたかったからね。中々面白いコンセプトだし。僕も好きだな、そういう機体は』

「……」

指を絡ませながら、相変わらず不敵な笑みを浮かべて俺を見てくる大倉。
そんな彼を、俺は射抜くような視線で睨む。大倉は動じることはなく、また悪びれた様子すら見せない。

「中々の策士ですね、貴方は…」

『お褒めに預かり光栄だね、南部君。それからしばらくは此処にいていいからね。その代り――』

「データを取らせてもらう、ですね？」

『察しがいいね。別にモルモットになれって言ってるわけじゃないから、その辺は考慮するよ。じゃ、また後でね』

「……分かりました」

それだけ聞くと、俺は回線を切る。
しかし――奴は食えない男だ。やはり何を考えているのか、あまり読めん。
俺を此処に置く理由も、データ収集の為ならば納得できる。――が、他にも何か裏がありそうで恐ろしい。
さて、これからどんな事をやらされるか……見極めも必要だな。

「……」

「…なんだ、まだいたのか」

「それはいますわよ……。まだお話は終わっていませんから」

気が付けば、金髪の女は腕を組みながら不服そうな顔つきをしながら俺の方を見ていた。
興味がないといった筈だが――どうやら、まだ話をしたいらしい。
何を話したところで無駄な気がするがな…。

「それで、話とはなんだ？」

「……とう……ですわ」

「ん？」

「決闘ですわ！　貴方を完全に叩きのめして差し上げますわ！」

「決闘だと……？」

いきなり何を言い出すかと思えば――そんな事か。
しかし、何故こんなに熱くなるのか……それも不明だ。しかし、それに付き合う道理もない。

「興味ないな」

「あら、まさか逃げる気ですか？　見損ないましたわよ」

「……何？」

金髪の女の挑発とも取れる言葉――それに対し、俺は思わず反応してしまう。
いや、少しばかり癇に障ったのも事実だ。眉根を若干寄せながら、金髪の女を見ているのがよくわかる。
だが、金髪の舌は止まることを知らなかった。

「男の方ともあろう者が、申し込まれた決闘から逃げるなど…考えられませんわ。それとも、わたくしに負けるのが怖いのですか？」

「……いいだろう。其処まで言うのならば、その決闘とやら、受けてやろう」

…流石に其処まで言われれば、引くに引けない。俺は金髪の女の方へと振り返り、その決闘とやらを承諾する。

それに――アルトに慣れるためにも、実戦経験は大事だ。こいつがどういう奴かは知らんが……な。

俺の返事に対し、女はやや余裕そうに口端を吊り上げた。

「フフッ、お受けいたしますのね？　わたくしとの決闘を」

「後悔しても知らんぞ…」

「それは此方の台詞ですわ。このわたくし――イギリス代表候補生であるセシリア・オルコットがお相手して差し上げますわ。勝負は…そうですわね、一週間後に致しましょう」

「了解した…。一週間後、此処でだな」

「ええ。吠え面をかかせてあげますので、それまで精々腕をお上げなさってくださいな」

そういって金髪の女――セシリア・オルコットは踵を返して去っていく。

しかし、セシリアとやらが言っていた代表候補生…？　……いきなりそういわれたところで、全く分からんが……とりあえず、実力

者だというのは確かだろう。

セシリア・オルコット――果たして、俺とアルトが何処まで通用するか、こいつを相手に見定めさせてもらうとしよう。

俺はセシリアの後姿を見ながら、ただそう思った。

第三話　起動（後書き）

さて、此処で皆様に少し質問があるのですが……。

実は第零章の展開についてなのですが……一度削除し、リメイクする…といったはいいのですが、果たして本当にリメイク（第二章の中盤まで）な内容にするか、それともこれからも新規ストーリーを書いた方がいいのか…というのがあります。

ということで、またしても意見を伺いたいのですが…如何でしょうか？

まず、第一章に入っても零章のようにオリジナルストーリーを書き続けるというのが一つ。この場合、スパロボＯＧにはまだ出演していませんが、とあるスパロボキャラがヒロインの一人として参加予定。ただ、一夏や箒などのＩＳ原作キャラとの絡みがやや薄まります。セシリアとシャルはそうでもない――いや、逆にプッシュしますが。

それか、第一章は零章の内容によって若干の変化こそあるものの、ほぼ前通りの展開にするかです。こちらの場合は先のキャラが削除されるかわりに一夏たちの絡みを増やす予定です。

…言ってみれば、スパロボ要素を増すか、ＩＳ要素を増すかの二択です。クロス先のＩＳを立てるのは当たり前ですが、少しはスパロボ要素も強くしてみたい、あるいは先とはまた違う展開を書いてみたいというのがあるからですが…。

皆様はどう思われますか？　勿論強制質問などではありませんので、

お気軽に答えていただければ幸いです。

第四話　突撃訓練（前書き）

今回はひたすら突撃練習。面白味は…薄いですかね、今回は。

それでも良ければ次にお進みください…。

第四話　突撃訓練

「しかし、まあ……いきなり決闘を申し込まれるなんて、君も災難だね～」

「…いえ」

セシリアとやらから決闘を申し込まれた翌日、俺は改めて昨日の演習場へと来ていた。

今度ばかりは俺一人ではなく、此処の責任者でもある大倉も同伴している。なんでも、ＩＳに関してレクチャーしてやるとの事らしい。

確かに一人でよくわからないもの――少なくとも、今の俺にとってはだが――を動かすより、その道の専門家がいてくれた方が助かるといえば助かるのも確かだ。

「けど、代表候補生から直々に決闘か～。よほど彼女のプライドに傷をつけたんじゃない？」

「それは知りませんが……その代表候補生というのは？」

俺は大倉の言葉の中から飛び出してきた言葉を彼に改めて問う。

この男、当たり前のように専門用語を言ってくるのが困る。此方もある程度の知識はある（記憶喪失にも関わらずに、だが）のだが、そのような専門の言葉を言ってくるとどうにも分かりにくい。

ただ、代表候補生という辺り、何かの代表になる前の人材の事だとは分かったが、正確な知識が欲しいというのもある。

「あら、それも忘れちゃったかな？　代表候補生っていうのはね、今の世界にはそれぞれ国があるだろう？　その国家代表のＩＳ操縦者として選出される前の状態――つまりは国家代表の卵みたいなものさ。お分かり？」

「なるほど…。それで、あのセシリアはその代表候補生の一人…という事ですか」

「そういう事。理解は早いね、南部君」

パチンと指を鳴らし、俺に指を向けてくる大倉。

普通ならば失礼な事だが、この男にはそんな事など考えもしないだろう。

俺もそれが分かっている――たった数回会った程度だが――ので、ツッコミを入れることはない。

「おまけにその代表候補生は、ＩＳをかなりの時間動かしているんだよ。国の威信を背負うんだからそれくらいはしなくちゃいけないよね」

「具体的には、どれくらいですか？」

「そうだね～。ざっと三百時間程度かな。おまけに訓練も相当厳しいらしいし、普通の人間ならば早々に悲鳴を上げながら帰るって噂も聞いたことがあるよ。ま、帰れないけど」

「……」

その中で生き残っているセシリアは、相当な実力者と見た方がい

い。
それに、先日の狙撃――あの戦車の急所を的確に撃ち抜いた点からしても、簡単に出来る事ではない。それこそ、相当の努力をした結果身についた技能（スキル）の筈だ。
だが、同時にセシリアは射撃型。距離を詰める事さえできれば、貫けない相手ではない。
――問題はどうやって、その懐に潜るか…という事だが。

「その為に僕がこうして来てあげたんでしょ、南部君」

「……そうでしたね」

俺は何も言っていないが、どうやら大倉には俺が何を考えているのかが読めたらしい。
余裕たっぷりに笑みを浮かべる大倉に、俺は若干苦笑しながら答えた。が、内心では益々こいつに対しての警戒が強まる。
何を考えているのか読みにくいだけではなく、こうして心まで読まれるとは――――侮れん。

「じゃ、早速訓練を始めようか。先日の戦闘を拝見したけど、君の機体――アルトアイゼンは突撃仕様だからね。肉を切らせて骨を絶つ、って言葉を地でいってるし。防御面もシールドエネルギーもエネルギー量が増加されているからね。その分、ＩＳならではの高機動戦闘をある程度無視してるけど」

つまりは、従来の機体のように自由に動き回って相手の攻撃を回避することは難しいという事らしい。
攻撃は避けれずとも、その為に相手に向かって直線に向かっていき、近接戦闘で決める。一見簡単そうだが、実はそうでもない。
何より、直線にしか加速できないのだ。おまけに猛スピード。途

中で止まろうにも、身体にかなりの負担がかかる。

「でも、そういう機体だからこそ燃えるものがあるよね？」

「そうですね…。それに、こういった仕様は嫌いじゃありません」

それは本心だ。

昨日の初起動の時もそう思ったが、癖のある機体だからこそ出来る芸当もある。

それに、今は形振り構っている暇でもない。あのセシリアに勝つには――こいつを物にしなくてはならないのも事実だ。

俺にはこいつしかないからな。

「しかし、一体どういった訓練を？」

「うん？　それは勿論……君の長所をさらに伸ばす訓練さ」

大倉がそういうと、俺に対して踵を返し、向こう側を見やる。

俺も同様に大倉と同じ方向を見ると――其処にはやや大きな的のような物が存在していた。

昨日の戦車と違い、何の武装も持っていない的。狙ってくださいといっているように立っており、俺は思わず首を傾げた。

「まずはあれに向かって体当たり。壊した後は何とかして機体を止めて、あっちの方向にもう一回突撃。その次は東側に向かって突撃と……まずは君の突撃性を上げる訓練だ。突撃した後は、素早く姿勢をなおして次の行動に繋げることも忘れないでよね」

「高機動戦闘が出来ぬ故、ですか」

「そ。分かってるじゃん」

不敵に笑みを浮かべ、俺を見てくる大倉。

短所などは長所で補ってしまえばいい……恐らくはそういう事だろう。

その第一歩として、まずはアルトの突撃性能に目を向けたのだ。

これを向上させない以上は、俺はどんな相手にも立ち向かうことは出来ない――からだと思われる。

「じゃあ、僕はモニタリングルームから見てるから。機体のエネルギーが切れそうな時はすぐにスタッフが飛んでいくからね。それが終わったら、すぐに再開。夕方までほとんど休みはないからね。覚悟しておいてよ？」

「…了解」

大倉の言葉に、俺はそう言って承諾する。レクチャーはどうした、という前に今日はこれをしろという事だろう。

ちなみに今現在は午前十時。夕方まで休みなく――というのは、昼食などないといっているに等しい。

しかし、今は一分一秒が惜しい状況。休んでいる暇があったら少しでもアルトに慣れておきたいというのが本音なため、不服はない。

……それに、これくらいしなくてはセシリアには追いつけないだろうからな。

「それじゃあ、訓練頑張ってね」

「……分かりました。早速開始します……！」

瞬間、俺は昨日と同様にアルトのとんでもないスピードを生かし、

直線上にあった的に向かっていく。
今回は突撃だけの訓練なため、重荷となるステークとマシンキャノンは展開しておらず、機体に収納している。
ＩＳには何時でも自分の好きな時にイメージしだいで武装を展開できるという機能が搭載されているらしく、俺はそれを利用しているに過ぎない。
ただ、今後はそれらの武装をどのタイミングで使用するか――という事も課題になってくる。一週間の訓練中にそれまでは身に着けておきたいところだ。
と、其処まで考えた時には先ほどの的が目の前にあり、俺はそれに体当たりすることによって破壊する。
体当たりした時の衝撃はＩＳの補助によって吸収されているらしく、パイロット――つまり俺には支障はない。これは少し物足りない気もするが、我慢することにした。
そして、俺は体当たりした直後に地を滑るにして機体を止めながらもその間に機体を反転させ、再びバーニアスラスターを噴かして突撃する。
反転させるときにＩＳの補助を持ってしても相殺できない衝撃が襲う。しかし、この程度ならば問題はなかった。

「次だ…！」

再び的に向かって体当たりし、的をぶち抜く。
基本的にはこれの繰り返しだが――まずは突撃になれなければいけないというのは先にも言った通り。俺はひたすらにこの作業を繰り返した。
言われるままじゃなく、これは俺の中でも必要だと感じたからだ。それに、いらない訓練などこうやって最初にやる分ならばあまりない。まずはやらなければどうにもならないというのもある。
そう思い、俺は再び眼前にある的に向かって飛び込むのだった。

＊

「……突撃がメインのＩＳか。時代からしてあまりにも逆行しすぎた機体……それでいてゲシュペンストのカスタム機だと？　笑わせる」

演習場の光景を一人の女性が眺めており、吐き捨てるように呟く。

女性の周りには誰もおらず、この研究所の職員もそれぞれの研究室か大広間のＩＳ武装開発部門に集中している。ということで、この場所は無人だった。

実際のところ、ほとんど使われていない場所でもあるのだが――この女性…いや、イギリス国重役である筈のレヴィ・パウレスはこの場所に来ていた。

理由は簡単、キョウスケのアルトアイゼンを見るため――いや、見極める為である。

昨日は男がＩＳを動かしていることに信じられない様子を見せていたレヴィだったが、今はそんな様子など全くなく、寧ろ冷ややかな目付きでアルトとキョウスケを見ていた。

驚きやという感情など存在しない。今あるのは、何者でも凍らせるような目付き――それだけだった。

「それに、ただでさえ使いやすさに重点を置いているアメリカがあんな馬鹿げた機体を開発するはずがない…。やるとすれば、あの変人だが……それも考えにくいか」

自分の持論を惜しげもなく披露するレヴィ。
どうせ、この研究所にはレヴィに関心を持つ人間などほとんどいない。それこそ、大倉と同じような変人ばかりおり、人間よりもＩＳに関して熱心になっている点が大きい。
だからこそ、動きやすいのも確かであり、“重要な資料”も入手することが出来た。
そんな時、彼女の個人端末に通信が入る。それを確認すると、レヴィは掛かっていた前髪を手で少しだけ横に持っていき、回線を開く。

『――――、首尾はどうだ？』

「順調です、ミスタＪ。それに、この研究所には私を疑うという人間がいませんから」

レヴィとの会話相手は顔は映っておらず、【ＳＯＵＮＤ　ＯＮＬＹ】としか書かれていない。おまけに声も変えているのか、その声はくぐもっており、機械音に近い。
レヴィとの通信相手、彼女曰く『ミスタＪ』。事実、この人物は通信しているレヴィですらその正体を知らない。いや――誰も知らないといった方が賢明か。

『そうか…。して、例の一号機の新型兵器のデータはは取れたのか？』

「無論です、ミスタＪ。それに、“例の物”があれば、あれを我らの手で運用することも可能になります。ですので、早期に我らのものとするのが得策だと思われます。すぐ、私目に作戦開始の意をお申し付けくださいませ」

『確かにな。だが、もう少し様子を見ろ』

「何故です？　すぐに工作員を動かせるよう、手配しておりますが」

『フフ、何……奪うのは簡単だが、少しは抵抗して欲しいというのもある。お前もそう簡単に奪っては面白くないだろう？』

「……ですが」

ギリッとレヴィがわずかに歯噛みする。

ミスタＪの言葉には絶対だが、彼女は仕事を済ませたいという気持ちが強い。悠長に待てないというのもあるのだが。

『ともかく、もう少し様子を見てからでも遅くはない。まだ目標（ターゲット）があの学園に入学する訳でもないのだ。チャンスはいくらでもあろう』

「……了解しました、ミスタＪ」

『いい子だ。ただ、私からの次の連絡が入り次第作戦を決行してもらう。それ以前に事を起こすのは……私への反逆だと思え。いいな？』

「……はい。肝に銘じております」

反逆、という言葉にレヴィはやや身を引きながらもなんとか口を開いた。

その姿にはいつもの彼女の姿はなく、どことなく怯えているようにも見えた。

『では、期待しているぞ。私の？？よ』

それだけ言うと、ザッと音がして通信が途絶える。
通信が途絶えたのを確認すると、レヴィは打って変わってやや苛立った表情を浮かべ、近くにあった壁を拳で思いっきり殴りつけた。
ガンと大きな音が部屋中に鳴り響く。しかし、気に掛ける人間などいないため、レヴィにとっては益々苛立ちが込み上げるのみだった。

「なんとかして地位を上げなければ……その為には…」

キッと鋭い目つきで外を見やり、彼女は再び拳を作った。

「……フフ、今のところ全ては私の手の中。イレギュラーの存在があるとはいえ、あれは無視して構わないレベルだ。それに――あの鉄屑は我々には必要ない。ゲシュペンスト本体ならばともかく…だが」

再び彼女が呟き、笑みを作る。
その笑みは美しいように見えて、実は恐ろしい。それが彼女――レヴィ・パウレス…いや、『彼女』だった。

「すべては我らの為に……。ミスタJの為に……」

＊

……その日の夜、俺は柄にもなくがっくりとうな垂れていた。

疲れた、とかの問題ではない。あれだけの時間をああして突撃ばかりにしていてはこうもなる。

更に昼食は抜いたために恐ろしく腹が減った。今はパンをかじっているが、時期に夕食も届くことだろう。

と、俺がそんな状態でパンをかじっていると――ふと俺の近くに誰かが近寄り、傍に座り始める。

何の断りもなしに堂々と俺の隣に座ったが、俺は特に言及しない。いや、しようとしても出来なかったというのが正しいか。

それに、隣に座ったのは――あのセシリア・オルコットだ。こいつに注意しても恐らくは無駄だろうと踏んでいるので、何も言わなかったのもある。

「あら、御機嫌よう。ムッツリさん」

「……誰がムッツリだ」

「勿論、貴方の事ですわ」

セシリアの言及に、俺はただそう返した。

言われる筋合いのない言葉だが、何と呼ばれようが別に構わん。

今は、この疲れをどっと増やす原因のような人物を何処かにやってくれる方が一番いいと思う。

「…で、何の用だ？」

「別に用などありませんが、たまたま傍を通りかかったものですから。挨拶をするのは当然ではないかしら？」

「……そうか」

セシリアの言葉に、俺はそのままの姿勢で単に頷く。
正直、今はあまり体力を使いたくない。明日もまた大倉から特別メニューを渡されており、それを実行しろとの事らしい。
大方、今日と同じような感じで訓練は続きそうだが――これもデータ収集の一環なのだろうか。鬼畜とも言えかねないが、あの大倉の性分を考えれば納得せざるを得ない。

「……それよりもどうなさったのですか？　昨日の生意気な態度を見せなければ、反論もしてきませんけど」

「…疲れているだけだ。分かったらさっさと行け」

言い終わると、俺は先ほど淹れたコーヒーをのどに流し込む。
此処にはインスタントしかないが、ないよりはマシだ。これで少しばかり気も落ち着く。疲れは取れんがな。

「相変わらず失礼な態度ですわね、貴方は。嫌われますわよ？」

「知らん。これが性分だから仕方ないと思え」

セシリアに嫌われたところで、別に支障はない。
それに、喧嘩を吹っかけてきた時点でセシリアの俺に対する評価は相当低いだろう。今でも何故こうして話しかけてきているのか分からんくらいだ。

「…そうですか。お疲れのところ、すいませんでしたわね」

「分かってくれればいい。……一週間後の対戦、楽しみにしている」

「当然、勝つのはわたくしですけど」

「…そうか。だが、俺を甘く見るなよ」

立ち上がって去っていくセシリアに、俺は自分でも少々小生意気と思えるような態度で返した。

ただ、セシリアは何も答えずにそのまま立ち去っていく。俺としては願ったり適ったりだが、本当に何をしに来たのかが見えない。

「…ん？」

その時、セシリアが座っていた場所に一つのビンがあるのが見え、俺はそれを手に取った。

見てみると、それは栄養ドリンク。これに対し、俺は軽く苦笑してセシリアが去って行った方向をもう一度見た。

「……余計な気遣いだな」

――それでも、何故こんなことをして来たのかは分からない。

ただ、俺は栄養ドリンクの蓋を開け、それを口に流し込むのだった――。

第五話　決闘（前書き）

アルトらしさ…出てますかね？

ひたすら突撃ではありますが、まあ最初なのでこんなものかと。うーん、あんまり自信がない…。

第五話　決闘

時間というものはあっという間に過ぎ去って行き、気が付けば約束の一週間後になっていた。

決闘の場所は、俺が今までＩＳについての訓練を行ってきた演習場。その中央部分は特に施設がある訳でもなく、此処ならばＩＳで戦闘を行っても研究所自体に支障はない――との事らしい。

それもこの『大倉研究所』所長の大倉利通が言うのだから、まず間違いないだろう。更に、俺の初実戦でいきなり戦車――小型ではあったが――を投入している点からしても明白。

ちなみに何故他のＩＳと戦わせなかったかといえば、この大倉研究所は“ＩＳの武装専門”の研究機関であり、おまけに大倉があのような性格の為、政府からＩＳの所持を許されていないらしい。

本人もＩＳ本体ではなく、武装の方に重点を置いているために問題はないといっていた。ただ、研究所防衛や開発したＩＳ武装を搭載したＩＳ――それこそ、他国や自国である日本に――に武装を売りつけた後の実戦テストとして、ああして戦車などを組み立てているらしい。

送りつけるのではなく、取りに来させるとは――と思ったが、輸送中にその武装の高性能さやそれぞれの国によって撃墜、あるいは奪取される可能性が高いからとの事。

つまりは、武装を開発してやるから実際に取りに来て性能を試せ、という事だ。それは今から俺が相対するセシリア・オルコットのＩＳ『ブルー・ティアーズ』も同様の理由。

それ以外にも訳があると大倉は言うのだが――生憎、それ以上は何も言わなかった。……聞かれてはまずい事でもあったのだろうか？

とまあ、大倉から聞いた話はその程度だ。別に機密でもなんでもないようなので話してくれたが、そんな説明も正直それだけしか覚えていない。

というのも、それは全て大倉から課された訓練メニューを終えた後に聞かされたのだ。

そんな状態であまり聞けるはずもなく、大倉の言葉を半ば聞き流す形。更に俺は一日を振り返っていたのだから。

内容はメニューをこなしたうえでの反省点と次回に生かす事。どうにも癖が強いアルトアイゼンを動かすうえでも必要な事であり、前日の反省を明日に生かすのも大事だ。

考えるよりもまず行動だ――とは思うが、此処の研究所の演習場は夜間の間使用禁止となる。だからこそ、頭の中で色々とシュミレートし、翌日の訓練で試すというのが最近の日課だ。

ただ、一週間は意外と短い。反省点は大いにあるのにも関わらず、それを克服できていない。

しかし――今はやるしかない。

そして、俺の眼前にいるのはＩＳ『ブルー・ティアーズ』を展開したセシリアの姿。

武装は右手に持っている長大な銃――六七口径特殊レーザーライフル“スターライトＭｋ－？”。そして。その周囲を飛んでいるビット状の武装――これもまたブルー・ティアーズというらしい。

これは大倉が開発した武装の一環で、通称ＢＴ兵器と呼ぶらしい。大倉曰く『空間認識能力が～』と言っていたが、別に俺が使う訳でもないので無視したが。

しかし、これは全方位からのオールレンジ攻撃を可能にしている。あまり回避向きではないアルトには分が悪い相手だ。

「逃げずに来ましたのね、ムッツリさん」

「……売られた喧嘩は買わなければならんからな。それに、対ＩＳ戦闘にも慣れておきたいというのもある」

ブルー・ティアーズを纏ったセシリアは、腰に手を当てながら俺を見下ろすような位置へと飛翔している。

このＩＳは元々宇宙空間の活動を前提に作られているらしく、原則としては空中に浮いている。俺も二日目の訓練から飛行訓練を開始したが――正直、陸にいた方がやりやすいといえばそうなる。

だが、ＩＳは基本的に空中戦が主だ。陸戦ではどうしても一方的になることが多く、また不利な展開になりやすい。だからこそ、俺も飛行訓練を開始した。

正直、飛ぶという感覚は性に合わないのだがな――何故かは知らんが。

「大した自信ですわね。しかし、その自信も終わる頃には完全に消失なさっているでしょうが」

「……さて、どうかな。此方も手加減はせん。お前も本気で来い」

「それは当然ですわ。では――」

そういってセシリアの視線がスターライトの方に向けられた瞬間、素早く銃のセーフティが解除され、初弾が装填される。

その間にもセシリアがスターライトのトリガーに指を当てており、すぐさま俺に向けて銃口を向けた。

「お別れですわね！」

「どうかな！」

セシリアのスターライトの銃口が火を噴き、先日にも聴いた耳をつんざく音が俺の耳の中に入ってくる。
しかし、俺は臆することなく――また、避けようともしない。ただ、次の行動に向けて予め展開したリボルビング・ステークを使うために右肘を折りたたんでいた。
それに、セシリアが放ったのはエネルギー弾。ならば、此処でアルトの特性が生きてくるというものだ・

「あら、避けることも出来ませんの？」

「言っただろう？　どうかな…と」

スターライトから放たれたエネルギー弾は見事に俺に直撃する。が、そのエネルギー弾はアルトが瞬時に展開したバリアで防いだ。
バリアのせいで少々目がチカチカするが、さして問題ではない。
ただ、驚いたのはセシリアの方だったが。

「なっ…！？　バリアですって！？」

「……」

そう、バリア――正確には『ビームコート』だが――だ。これはビーム兵器やエネルギー攻撃に対して有効なもので、回避に優れないアルトアイゼンをカバーする為に存在するもの。
ただ、このバリアもシールドエネルギー系統ではなく、稼働エネルギーの方のエネルギーを食うため、多用は出来ない。
だが、その前に決めれば……問題はない。

「次は此方の番だ…！」

瞬間、俺は爆発的な加速を使用してセシリアと距離を詰める。
相変わらず凄まじい加速力だと内心で感嘆するが、今はセシリアに攻撃を当てる方が先だ。折りたたんだ右ひじを伸ばし、セシリアを貫かんとする。

「……速い！？」

「取ったぞ…！」

得意の加速力により、セシリアの懐に潜ることは成功した。後はステークでこいつを貫けばいい。
すぐさま俺は右ひじを折って、構えを見せる。ただ、セシリアも俺がステークを使う事は予測していたのだろう。危機を察知したのか、セシリアは上空へと飛翔し、追撃をさせないようにスターライトを放ってくる。

「ちっ」

流石は代表候補生なのか、仕掛ける前に反射神経を生かして、回避に転じたようだ。だが、バリアがある以上は此方も逃さないとばかりに追撃を仕掛ける。

「っ……！　しつこい男は嫌われますわよ！」

「知らんな……」

そんな事を言われたとて、動揺する訳でもない。だが、セシリアは俺に的を絞らせないように回避行動を取り続け、俺が一直線上に来ることを避けているような攻撃スタイルへと変わっていった。
俺も何とかしてセシリアと距離を詰めたいが、こればかりは少々

厄介だった。見境なしに直進しても意味を成さず、したところで狙い撃ちされるのが関の山か。
おまけに、セシリアの射撃はとても精密だ。避けれるものがほとんどなく、おかげで見事に直撃する。ただ先ほどのビームコートが反応してエネルギー弾を防ぐため、直接俺にはダメージは届かない。

（あのバリアが邪魔ですわね…。あれをどうにかしなければ…）

（まずいな…。近付かなければ、セシリアの思うつぼだ…。何とかして突破口を…）

これではお互いに詰んでいる状況だが、俺の場合はバリアを作り出している方のエネルギーが尽きればそれこそ集中砲火を浴びて終わりだ。幾ら装甲が厚いとはいえ、向こうも火力はある。
その前に何とかして距離を詰めたい。しかし、まずは牽制の為に左腕に三連マシンキャノンを展開し、セシリアに対してブースターを噴かせながら放つ。

「その程度の射撃では、わたくしには当たりませんわよ！」

「ちぃ……！」

回避行動を取りながらも、セシリアは再びスターライトを放ってくる。
おまけにどういう訳か俺が移動する方向に射撃し、それが見事に当たる。機体が重いというのもあり、先読みされる可能性は大きいという事か。
しかし、ひるんでいる暇はない。俺は再び突撃を敢行し、セシリアへと向かう。

「くっ！　接近などさせませんわ！　それに、直進なら……」

そう、確かにこの突撃は一直線のみにしか出来ない。ただ、普通の人間には反応出来ないからこそできるものがある。

ただ、こうして訓練を受けているであろう相手には突撃だけでは無理だ。しかし、この突撃も応用することによっては――避けられた方に行くことも出来る。

（それに、この程度は想定済みだ…！）

そう思った矢先、俺は機体を急停止させ、セシリアが回避行動を取った場所へと突撃する。

体にやや防ぎきれないGの衝撃が襲い掛かるが、歯を食いしばることによってそれを耐え、再び突撃。

この一週間でやってきた訓練の一つで、突撃→急停止→突撃の構築は出来ている。いや、こうでもしなければまず距離を詰めることが出来ないという事もあるからだ。

「なっ……！　なんて無茶を……」

「零距離、取ったぞ！」

眼光鋭く、俺はセシリアに対して再びステークを向ける。

が、そんな俺の急接近にもセシリアは少しばかり慌てたのか、俺が向けてきたステークに対してスターライトをぶつけ、矛先を晒すと同時に、急速離脱していく。

「……チッ」

「危なかったですわね…。しかし、そろそろわたくしも貴方に攻撃

を通したいと思っているところでしたから……まずはそのバリアを壊させていただきますわ！　お行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

セシリアが威勢よく腕を振るった瞬間、今までその周囲に浮かんでいるだけだったビット型の兵器が遂に動き始める。

ただ、動きとしては直線機動だ。しかし、それが四機もあるとなると――中々狙いを絞りにくくなるのも事実。それに――セシリアも本気を出してきた、という事になる。

「さあ、舞い踊ってくださいな！　わたくし、セシリア・オルコットの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

瞬間、ビット型の兵器の銃口が開き、其処からレーザーが飛び出す。

直線に向かってくるそのレーザーを俺は何とか紙一重で避けきるが、いつの間にか後ろを取っていたビットがタイミングよくレーザーを放ち、後方にビームコートが発動する。

「ちっ……オールレンジ攻撃か。厄介だな……」

囲まれると一溜まりもない。これが実弾でないのが唯一の救いか。

しかし、止まることはないセシリアからのオールレンジ攻撃。避けたかと思えばいつの間にか後ろにビットが存在する。

更には本体であるセシリアからも援護射撃とばかりにエネルギー弾が放たれ、俺に直撃する。ただ、先ほどステークの矛先を変えるために無理やりあてたも同然だったので、何かしら故障を起こしているのか、先ほどのような出力はなかった。

だが、それでも脅威には違いない。おまけに先ほどからうるさいほど警告音が俺の頭の中で鳴り響き、思わず切ってしまいたい程にうるさかった。

だが、その攻撃の全てをビームコートが防いでいるが、正直なところは限界寸前だった。これほどまでに苦戦するとは思っておらず、俺は思わず歯噛みする。

（くそっ……なにか、突破する術を見つけなくては…。ん…？　待てよ…）

その瞬間、俺にある考えが思い浮かぶ。いや――セシリアの行動パターンを見ていて、気付いたことがあった。

それこそ、今まで集中的に攻撃を食らっていた中で気付いたことではあるが――試してみて損はない。

「なかなかしぶといですわね…。ですが、これでバリアは終わりの筈ですわ！」

「今だ……！」

セシリアの構えたスターライトの銃口が俺に向けられた瞬間――俺はセシリアに向けて突撃を行い、銃身に正面から体当たりして砲口を逸らす。

無茶苦茶な行動だが、これこそが狙いだ。対するセシリアは少々驚いたような表情を見せているが、俺には関係ない。

「……お前の弱点は、そういう事か…」

「な、なにを……。それに、幾ら距離を詰めるからと言って、無茶苦茶しますわね」

「さっきのお前と同じ事をしたまでだ」

「けれど、それこそ無駄な足掻きですわっ！」

セシリアが後ろに後退することによって距離を取り、近くにいた一機のビットに指示を送り、俺へと向かわせる。

そのビットは俺とセシリアの間を塞ぐような場所へと現れ、その砲口を開く。

しかし、俺は構わずに突貫。レーザー砲が俺とアルトに当たるが、俺は構わずに展開しておいたヒートダガーでビットを一閃。真っ二つに割れたビットは爆発四散する。

「本当に無茶な戦い方をいたしますわね…。ですが！」

続けてもう一つのビットが俺に向かってくるが、俺は今度はビットに向けて加速。

一気に距離を詰めたところで、右腕のステークをぶち当てる。

「なんですって！？」

「本体に比べ、ビットは反応がやや遅れている。それに、この兵器は一回ごとにお前が命令を送らなければ動きはしない。更には…」

ステークを炸裂させ、二機目のビットを破壊。残りは二機。

「お前がこの兵器を動かしている間は、他の攻撃をすることができない事だ。それに、ビームコートは先のビットへの突撃で消え去った。今ならば攻撃が通るし、ライフルで撃てるはずだ。だが、お前はそれをしなかった。いや――出来なかった、の間違いか」

「……！」

それはどうやら図星のようで、セシリアが若干怯む。
しかし、その隙を見逃す俺ではない。すぐさま加速し、セシリアに詰め寄る。

「今度は此方の番だ。逃がしはせん」

「――そうですか。しかし、逆に間合いを詰めてくれた事はわたくしとしても助かりましたわ」

瞬間、セシリアがにやりと笑みを浮かべる。
何をする気だと俺は訝しむが――セシリアの腰部に搭載されていたスカート状のアーマーの突起物が外され、俺に対して向けられる。

「お生憎様、ブルー・ティアーズはこうして六機ありますのよ！」

「ならば、こうするまでだ…！」

此処からステークに持ち込んでもいいが、それでは新たに出てきたビット――おまけに先のようなレーザー型ではなく、実弾…いや、ミサイル型だ――に対処は出来ない。
ならば、セシリアにダメージを与えつつ武装までも破壊する…こいつに掛けるしかない。
誘爆の危険性は高いが、それも承知の上だ。そう思い、俺は両肩のコンテナのセーフティを解除、ガコンという音と共に開く。

「ま、まさか……この距離でその炸裂弾を放つおつもりですか！？」

「それ以外に方法はないからな……。巻き添え覚悟でいかせてもらおう！」

今更回避してもどうせ間に合わん。ならば――攻めるのみだ！

「クレイモア……全弾、持って行けぇ！」

「くっ…！　ならば、此方も！」

俺が近接炸裂弾――スクエア・クレイモアを放った瞬間、セシリアも一か八かの賭けに出たのか、両腰部に搭載されているビットのミサイルを放つ。

ほぼ零距離からの同時攻撃――――おまけに破壊力も負けておらず、炸裂弾とミサイルが当たった瞬間、俺達の間で凄まじい爆発が巻き起こる。

その爆発は赤を超えて白く、もはや互いの視界すらも奪うような爆発が俺達を包んだ。

「きゃぁぁぁぁ！！！」

「くぅぅ……！」

セシリアの悲鳴が聞こえ、俺も歯を食いしばって耐えようとするが――爆発の勢いには勝てなかった。

その爆発が起こった瞬間、俺は真っ直ぐに地表へと落ちていく。

それこそセシリアも同様だ。全身のＩＳアーマーが剥がれ落ちており、俺のハイパーセンサーには戦闘続行不能と書かれていた。

たった一撃でこれだけの威力――いや、近接でのミサイルと指向性地雷でもあるクレイモアだ。それだけの傷を負って当然だろう。

俺は装甲が厚い分もあって何とか動けるが、セシリアの場合は難しいだろう。それに、セシリアも薄らと意識こそあるものの、ＩＳ自身が動かないようなものだった。

「……仕方がない、か」

痛む体を気合で抑え込み、俺は生きているブースターを噴かしてセシリアに接近し、彼女を抱え込む。

それと同時に機体を反転させ、ゆっくりとした動作で地表に降り立つ。降り立った瞬間、セシリアをゆっくりとした動作で下し、俺自身も片膝をつく。

機体損傷度は――約六十%といったところか。……無理もないが。

「……無茶を、し過ぎたか…」

『本当だよ、南部君。あのまま二人とも死んじゃうかと思ったじゃない』

俺が呟くと、通信に割り込んできたのか大倉のウィンドウが映し出されていた。

その表情は別段変わらず、特に心配している様子も見られない。

これこそが大倉という人間なのだろう。

…今はそんな事など構う事はないが。

『ま、代表候補生相手にギリギリとはいえ、いい勝負をしたんじゃない？　今回は引き分け…でいいのかな？』

「……あまり認めたくはありませんが、それでいいですわ…」

大倉の言葉に反応したのか、ややボロボロの状態のセシリアが少しだけ体を動かし、大倉に返事をする。

確かに彼女からすれば認められることではないだろう。しかし、互いにこの損傷であり、セシリアもこの有様だ。妥当な判断だとは

思う。

「…あまり喋るな、セシリア」

「こ、このくらい……平気ですわ」

「嘘をつくな。少し休め」

「……わ、わかり、ましたわ……」

少しばかり不服そうだが、セシリアは大人しく従う。

そんな姿に俺は苦笑するが、すぐに大倉の方に視線を向け直した。

「救護班を頼む…。急ピッチでな」

『今向かわせてるよ。あと少しで到着するはずだから、それまでは安静に宜しくね。あ、それは君も同じだからね、南部君』

「……了解」

それまで聞くと、俺は大倉との回線を切る。

今更だが、ＩＳによって防ぎ切れていないダメージが俺にも届き始めたようだ。痛みはかなりあるが、この程度なら問題ない。

――なんだろうな、前にも度々こんな事があったような気がするが……気のせいだろうか？

「その……ムッツリさん…」

「……俺の名前は南部響介だ。ムッツリじゃない」

「南部……響介さん、ですか。わたくし、少し誤解してましたわ…」

「……何をだ？」

相変わらず片膝をついたまま、俺はセシリアの方も見ずに尋ね返す。

何を誤解していたのかは知らない。それこそ、興味もない。

しかし、俺は何故かセシリアの言葉に耳を傾けていた。聞かなければならない…と、心の何処かで何かが訴えているようだったのだ。

「……の……た……い」

「ん？　一体何を……？」

「…フフ、秘密…ですわ」

……訳が分からん。おまけに小声で呟くように声を発していたため、聞き取る事すらも出来なかった。

しかし、若干嬉しそうなセシリアの様子。それを見て、俺は呆れたように息を吐く。

それから三分後ほどしてから、大倉の派遣した救護係が到着し、俺とセシリアを医務室へと運び込んでいくのだった。

＊

「無茶な戦い方ね……。二人ともだけど」

「引き分けになっただけマシな方でしょ？　何を怒ってるのさ、ミス・レヴィ」

「……ＢＴ兵器の稼働率がまだまだ低い事によ。あの程度では困るわ」

「あっそ」

先の戦闘の映像を見ていたレヴィと大倉。大倉はキョウスケと話した時とは打って変わって面白そうな表情を浮かべていたが、レヴィの方は険しい表情だった。

そんなレヴィがＢＴ兵器の稼働率が低い事に怒りを表すのも大倉は一応分かってはいる。だが、それ以上は何も言わなかった。

いや、言ったところでまたレヴィの逆鱗を買う事になると思うと、正直面倒だという方が大きいか。

「けど、南部君は危険も恐れないよね。僕好きだな、ああいう戦い方」

「私は断固拒否するわ。あんな戦い方……理に反するもの」

「でも、それを現実でやっている子もいるって事だよ。そういう意味ではイギリスもヤバいんじゃない？」

「……そうね」

軽く呟き、レヴィは再びモニターの方に視線を移す。

ただ、その目付きは鋭く、射抜くようにキョウスケの方を見やっていたのだが。

第五．五話　決闘翌日（前書き）

今回は五．五話。内容自体は短いです……すいません。

第五．五話　決闘翌日

セシリアとの決闘があった翌日の事――この研究所の中心部である武器開発室に来ていた。

此処には通常武装から特殊武装までありとあらゆるものを開発している専門機関であり、通常武器はその武装自体を極限まで追求し、新開発部門は大倉の提案を基に武装を編み出している。

研究所のメインを占めているといってもいいこの場所で俺が一体何をしているのかといえば――先日破損したアルトアイゼンの修理を行っていた。

他にもメカニックが手伝ってくれているので心配することはないが、一応自分の機体だ。自分で触らなければ分からない点も存在する（恐らくだが）。それに、なんでも人に任せきりはよくないからな。

「流石は重装甲ＩＳだ、装甲が所々壊れていてもまだ動けるぜ」

「……何かをパロったつもりですか？」

「いやいや、そのままの感想を言ってみただけよ。しかし、タフなＩＳだぜ。お前さんはいい機体に恵まれたな」

「ありがとうございます」

そういって俺の肩をバンバンと叩く整備班係の田中さん。歳は四十後半で、その片手にはスパナを持っていた。

俺が訓練を終えた後にいつもアルトを整備してくれる人で、俺も

彼から色々な事を教わった。
それこそ、今では自分でＩＳのチェックぐらいは出来るようになっている。別に整備の道を志すわけでもないが、少なくとも自分のＩＳくらいは…というのは先ほど話した通りだ。

「ま、後は俺に任せておきな。お前さん、今日は所長から休暇を貰ってるんだろう？」

「そうですが……田中さんに任せきりにするというのも…」

「いいって事よ、若造。俺もそろそろ武装だけじゃなくて、ＩＳもいじりたくてよ。なに、明日までには新品同様にして返すからよ」

「……分かりました」

田中さんの言葉に、俺はやや仕方なく頷く。この人は俺が何を言ったところで聞いてはくれないだろう。
それに、これも田中さんなりの気遣いかもしれない。
俺が気を張り詰めていた…というものを直感で感じたのかもしれないな。

「では、宜しくお願いします」

「おうよ！　明日を楽しみにしとけよ！」

ニカッと笑い、片手をあげて答える田中さん。俺はそんな田中さんに感謝しながらも、武器開発室を出ていこうとした矢先――とある機体を目撃する。

「あれは…ブルー・ティアーズか」

俺が目にしたのは、先日俺のアルトアイゼンと決闘したＩＳ、ブルー・ティアーズ。
整備課の人間たちが何人もいる点からして、相当なダメージを被ったのだろう。装甲部分は修復されているが、今は俺が破壊してしまった二機のレーザー型ビットとミサイル型ビット、更にあの時の爆発でスターライトまで破壊されたので、その修復に追われていた。
それを見て少しばかり罪悪感を感じてしまうが、整備課の人々は決まって『これが俺達の仕事だ』といってくるに違いない。
彼らがなければＩＳ搭乗者はやっていけない――そう改めて思わされる光景だった。

「あら、南部さん。此処にきていらっしゃいましたの？」

「セシリアか。もう大丈夫なのか？」

「ええ、この通りですわ」

そういって律儀に挨拶をする人物――セシリア・オルコット。
彼女も俺と同様に怪我を負っているが、ＩＳの保護機能もあって大したことではないらしい。しかし、ブルー・ティアーズがあんな状態な為、彼女も今日はＩＳを使用した訓練は出来ないのだろう。

「ブルー・ティアーズの様子見か？」

「まあ、そんなところですわ。わたくしもブルー・ティアーズに相当無茶をさせてしまいましたから、少し心配になりまして…」

目線を細めながら呟くセシリア。
その目に映っていたのは、修復されたブルー・ティアーズの姿。

その姿にほっと安心したように息を漏らした。

「よかった……」

「安心したか？」

「ええ、それは勿論。此処の方々には迷惑をお掛けしていますが……」

そういって今も忙しそうに駆け回っている整備課の人々の方に目を向ける。

国籍は違えど、こうして自分の為に動いてくれている。

幾ら女尊男卑の社会（よくは知らんが）と言えど、セシリアはそんな彼らに感謝していると…思いたい。

「ところで、これから南部さんは何をなさるつもりなのですか？」

「いきなり休暇を貰ったが…正直、何もすることはない。ただ、恐らくは体を動かしているだろうが」

ＩＳを動かせなくとも、少しでも向上させるためには自身の体も鍛えなくてはならないと俺は思っている。

それに、アルトのような癖のある機体だとそれはどうしても表に出てしまう。それに応えるためにも、俺自身が精進しなければならない。

「タフですわね、南部さんって…」

感心したようにセシリアが呟く。

確かに昨日の今日でいきなり走り出しても体に悪いだろうが……

どうも落ち着かないからな。

「ではな、セシリア。俺はこれから「でしたら、わたくしも付き合いますわ」……ん？」

急にセシリアが俺の声を遮ったかと思えば……そんな事を言い出してきた。

流石にその言葉には俺も黙らざるをえず、やや唖然としてしまう。

しかし、セシリアは俺の方を向きながらやや口を尖らせてくる。

「なにか御不満ですの？」

「……大丈夫なのか、そんな体で？」

「それは南部さんも一緒ですわ。それに、わたくしも代表候補生の一人ですから、体くらい動かさなくてはなりませんので」

胸に手を当てながら誇らしげに言ってくるセシリアに対し、俺は苦笑する事しか出来なかった。

それに、ついてくるといった相手を止めはしない。それが幾ら気品が高そうなお嬢様であってもだ。

「では、行くぞ。遅れるなよ」

「分かっていますわ。南部さんこそ、わたくしより遅れたら恥ですわよ？」

「…そうだな」

それは確かに笑い事ではすまない。そう思いながら、俺はセシリ

アと共に走り始める。
最初はスローペースだが、中盤からはどんどんとスピードを上げて自分を追い込んでいく。そして、スパートは限界ギリギリの速さを持続する。
はたして本当についてこれるか…？　と不安であったが、俺は構わずに走り続けるのだった。

――――結果、セシリアは見事についてきた。終わる頃にはかなり息が荒くなっており、終わった後もゼーゼーと息を吐いている。
俺はそんなセシリアを見て、またしても苦笑してしまった。

「な、なにを、笑って、いらっしゃるの、ですか？」

「少し落ち着いてから話せ。その方が話しやすいだろう」

そうセシリアを諭してやると、彼女は大きく深呼吸し始めるや、どんどんと呼吸を整えていく。
しかし、本当についてくるとは予想外だった。別にセシリアを馬鹿にしていた訳ではないが、これには少々感服してしまっている俺もいる。
そして、ようやく落ち着いたのか、もう一度俺に対してこう尋ねてきた。

「……わたくしの何を見て笑っていらしたのですか、南部さんは？」

「そうやって汗だくになるまでついてくるとは想定外だったからな。つい、笑ってしまった」

「失礼ですわね…。わたくしは代表候補生ですわよ。これくらいは

出来て当然ですわ」

「そうか」

堂々と発言してくるセシリアに、俺はそういって返す。

その態度にセシリアはやや不服そうだった。しかし、他に返す言葉もないので今はこれでいい。

「そういえば、南部さんも春にはＩＳ学園の方に受験なさるのですか？」

「ＩＳ学園……？　何だ、それは？」

突如として知らない学園の名前を出され、俺はそう返す。

対するセシリアは俺の発言に対してやや驚いた様子を見せるが――コホンと一つ咳払いをすると、悠長に語り始めた。

「ＩＳ学園というのはＩＳに関しての専門機関であり、様々な知識を教える為の学校ですわ。そうですわね…決してＩＳだけの学校、という訳ではありませんが、基本的にはＩＳの全てが学べる場所と思っていただければいいかと思われます。ちなみに、わたくしも来月にはそのＩＳ学園で試験を受ける予定ですわ」

つまりはＩＳの専門機関らしい。恐らくは其処に入学し、技術や知識を更に向上させるのが狙いだろうが――生憎、俺は此処から離れられない身だ。

大倉に行けと言われれば行くかもしれないが――あの男が俺という実験道具をそう簡単に手放すとは思えない。

「なるほどな。…頑張れよ。セシリア」

「それは当然ですわ。わたくしはイギリスの代表候補生ですし、落ちることはまずないと思われますので」

「それは頼もしい限りだな」

軽く笑い、セシリアに対してそう言ってやる。

対するセシリアも軽く笑って返してきた。もはや、一週間前の蟠りはないといっても過言ではない。

しかし、出会いがあれば別れもある。セシリアも此処に長居はしないだろうし、ＩＳ学園とやらに行くのならば、当分は会えないだろう。

ならばその前に……出来る限りの事を彼女から吸収しておきたいと、そう思った。

「セシリア」

「どうしました、南部さん？」

「唐突ですまんが……俺にＩＳについて教えてくれ。頼む」

いきなりの俺の頼みに、セシリアは少しばかり黙っていたが、やがてくすっと笑い始める。

「……？」

「……フフ、構いませんわ。ですが、わたくしの訓練は厳しいですわよ。それでも宜しくて？」

「……構わん。それに、個人的には其方の方が断然いいからな」

「では、明日からこのわたくしが南部さんにレクチャーして差し上げますわ。しかし、生半可な覚悟では駄目ですからね、南部さん！」

ビッと俺に対して指差してくるセシリア。――失礼な行為だが、此処はあえて突っ込まなかった。

ただ、俺は彼女に対して黙って頷くだけだった。

明日からの訓練――――今まで以上に本気でやらなければな。

そう、俺は内心で決意した。

第六話　異変（前書き）

今回から急展開。それから零章のクライマックスへと突入。

……かなりの急展開で申し訳ありませんが、どうかお付き合いください。

第六話　異変

セシリアから指導を受けることになってから早一週間が経過。
今現在もセシリアから受けた課題を只管こなしている最中である。
内容自体は大倉の提示してきた課題よりもいくらかハイレベルなものになり、最初こそ専門用語の羅列で頭を悩ませたものだ。
セシリアはそれらの意味が分かっていても、それを実行する俺が分からなくては意味がない。
仕方がないとばかりにセシリアに質問したところ――当のセシリアは両腰に手を当て、やや呆れたように溜息を吐いてきたが。

「仕方がありませんわね……。わたくしが直々に実践して差し上げますので、それを真似てくださいな」

「分かった」

言い方こそ多少むかつくものがあったが、俺は素直に頷く。此処で否定したところで何も生まれず、また事態は進展しないということくらい分かっているからだ。
強情な奴こそ反抗したくなるのかもしれないが、生憎俺の場合はそうではない。セシリアは俺よりも経験者であり、ＩＳに関しては実力もある。
そのようにして分からない点はセシリアに尋ね、俺はセシリアの提示してきたメニューをなんとかこなしている毎日が続いていた。
出来ない事は何度でもする。セシリアは細かく指示してくるので、それ通りにするのは難しいが――それも完璧を目指すセシリアだからこそ。

「南部さん、少し射撃の角度がずれていますわ。あと七度ほど修正すればいい感じになるかと思うのですけれど」

「……俺の射撃の腕は低いぞ」

「ですが、いつまでも近接戦闘ばかりに頼っているにも不安ですわ。射撃の腕も少しばかり上げておくのも効率がいいかとわたくしは思いますが」

「……分かった」

従うと決めた以上、俺は素直に肯定する。

そして、用意された的に向かって移動中に三連マシンキャノンを放つが、どうにもセシリアの納得するような射撃ではない。

確かに的こそ壊れるのだが、セシリアはやや不服そうに腕を組んでいた。

「あと三度修正ですわよ、南部さん」

「……いちいち細かい奴だ」

「聞こえてますわよ、南部さん…」

「……」

どんな小さい声でも大抵の事は聞き逃せない仕様とは……厄介だな。

しかし、指摘されてはいるが、決して俺の射撃の腕が壊滅的だという訳ではない。それこそ、セシリア曰く『初心者の腕ではありませんわね』という事からして、記憶を失う前の俺はその辺りの訓練

を行っていたらしい。
だが、セシリアのような一級品レベルになってくると話は別だ。それこそ教える立場なのだから、俺にも射撃の重要性を伝えたいのだろう。
ただ、俺の専門は近接格闘だ。――決め手がそれしかない、と言われれば返す言葉すら思い浮かばないが。

「…やはり、射撃は性に合わんな」

マシンキャノンを放ちながら、俺は自嘲気味に呟いた。

＊

午前中の射撃訓練が終わったところで、俺はまたしてもセシリアに指摘されていた。
流れ落ちる雫をタオルでぬぐいながらも、俺は真剣な眼差しでそれに耳を傾けていた。

「南部さんは射撃を牽制用の武装としか見てませんから一向に射撃の腕が伸びないのですわ」

「それ以外に使い道がないからな。よく言えば零距離から発射して仕留める事しかないかもしれん」

「はぁ……。南部さんには射撃の素晴らしさが分からないのですかね…？」

またしても溜息を吐かれる。それに射撃の素晴らしさと言われてもすぐにピンと来るものではない。

マシンキャノンについては何を言われても致し方がない。なにぶん射程は短く、威力は低い。

ステークやクレイモアに繋げるための武装としか俺も見ていないため、其処まで当てにはしていないというのもある。

無論、ステークやクレイモア、更にはダガーが使えなくなったときは最大の武装と化すが――心もとないのも事実。出来るだけ近づいて零距離射撃になるのが関の山か。

――やはり、機体の特性故か全ての項目において俺は近接戦闘に持ち込むという癖がついているのかもしれん。……それを変えるつもりはないがな。

「それに、俺とセシリアは戦闘のスタイルが異なるというのもある。確かに射撃について教えてもらうのはいいが、俺には合っていないような気がするのも確かだからな」

「まあ、それはありますけど……」

腕を組み、横目で俺を見てながらセシリアは不服そうに口を尖らせる。

レクチャーしてくれるのは大いに助かるが、この機体の場合は長所を引き延ばして短所をへし折るのが特徴だ。悪いが、他の機体のように応用は全く効かない。

――当初に大倉が言っていたことが、セシリアと訓練を行うようになってからはよりそう思うようになった。

それに、今更違うスタイルに変えるというのは骨が折れる。

「……。わたくしとしては少し不満がありますが、南部さんがそ

うだと仰るのならば仕方がありませんわね…」

「すまんな、セシリア」

「別に構いませんわ。それに、あっていないスタイルに変更するという方が駄目な方向に進みますから」

先ほどとは違ってやや柔らかな表情を浮かべるセシリア。

俺も同じような表情を浮かべることによってそれに応える。こうして俺の事をある程度分かってくれているので、此方としてもやりやすいというのもあった。

「さあ、次は午後の訓練ですわ。はりきっていきますわよ、南部さん！」

「……了解だ。お手柔らかに頼む、セシリア」

「さて、それはどうでしょうか？　わたくしの訓練は厳しいと一週間前にも言ったはずですわよ？」

「そうだったな」

俺は苦笑し、セシリアと共に歩き始める。

午後からは俺が本業とし、これからもその予定の近接格闘の実戦訓練。武器の扱い方、武装の展開のスピード向上、素早く相手の間合いに詰めるなど――やる事は山のようにある。

今こそはセシリアがいるからいいものの、いずれは彼女も何処かへ行ってしまう。その前にどうにかアルトをものにしたい。

そう考えているうちに、いつの間にか俺は足を止めて外を見ていた。

まだまだ季節は冬の真っただ中だが、そんな冬空にも太陽は輝いていた。

「どうしましたの？　おいていきますわよ」

「少し、考え事をな。あまり気にするな」

首を傾げながら訪ねてきたセシリアにそういって返し、俺は歩みを止めていた足を再び動かして前に進む。

――前に進む、か。いや、進むしかないのか。

それは今の俺の心情。

記憶という大事なものが抜け落ち、俺が何者であるかも分からない状態が今現在も続いている。

だが、こうして運よく知り合った人物たちは皆よくしてくれる。

大倉は――考えが読めないというのもあるが、悪人ではないはずだ。いや、そう信じたい。

俺は一歩ずつ前進する。それしか方法がないからだ。

一歩一歩、距離は短くとも――俺は進む。

＊

例え、誰になんといわれようとも……前に。

夜。

その夜はやけに静かだった。風のざわめく音もなければ、虫の鳴き声すらも聞こえない。ただ、その夜空には満月となった月がいとも誇らしげに輝いているのみだった。

そんな不気味ともいえる空間。そんな中を、数体の影が通る。

音を殺しながらも、微かに聞こえる足音。風を切るかのように足音が過ぎ去ってゆく。

ざくざくざくざくと。

足音が次第に大きくなっていき、やがては止まる。

そして、その人物たちは立ち止まった場所で片膝をつき、各々に配備されていた通信機に向かって小声で語りかける。

「第二小隊、作戦ポイントに到着。指示を願う」

『手筈通りに実行しろ』

「了解」

淡々と言葉を発し、その人物は通信機を切った。

切ったところで隣にいた者に対して頷いてみせると、その人物は手にしていたスイッチらしきものを顔の近くに持っていき――真ん中にあったボタンを何のためらいもなく押す。

刹那、遠くの方で盛大に爆発音が鳴り響く。轟音が耳に届き、規模としてはかなり激しいものに違いなかった。

その人物たちは近くでそのような爆発が起こったにも関わらず、やけに冷静であった。

それどころか、いつの間にか彼らの手には拳銃やライフルらしき

ものが握られており、銃のセーフティを外しているのが伺える。
そして、準備が完了したかと思うと――彼らはすくっと立ち上がる。

「作戦開始。目標――イギリスの試作型ＩＳ『ブルー・ティアーズ』の確保」

「「了解」」

またも淡々と命令を復唱し、今度は音を鳴らしながら走っていくその者達。
狙いは――――最新型のＩＳの奪取。

「何処がやられたんだい？」

「研究所外周部です。おまけにシステムにもある程度侵入されてますから、迎撃システムが作動していません。尚、研究所内に多数の侵入者あり」

「……参ったね。それで、その侵入者の数は？」

「おおよそ二十ほどです」

「武装付き？」

「はい」

警報が鳴り響く研究所内。

モニタリングルームにて、大倉研究所所長――大倉利通は研究員の話に耳を貸し、これはやられたとばかりの表情を浮かべていた。
ほとんどのモニターは事前に仕掛けが施されてあったのか、そのほとんどが死んでいる。ただ、辛うじて残っているモニターが研究所内を映し出しているが――そんなもので状況が好転するわけでもない。

「彼らの狙いはなんだと思う？」

「我々が開発している最新型の武装でしょうか？　日本政府に要請されている“例の物”ではないかと」

「でも、だったら彼らはすぐに中央研究室に向かうと思うんだよね。だけど、彼らは興味がないみたいだ」

「では……？」

「武装なんかよりも、此処にはいいものがあるだろう？　そうだな…例えば最新型のＩＳとか…かな？」

「ＩＳ…？　まさか……彼らの狙いは！？」

「そのまさかだよ。恐らく目的はセシリアちゃんが持っているブルー・ティアーズの確保だね。情報が洩れてるってことは、イギリスも一枚岩じゃないってことを意味してるけど」

其処にいるのはいつものおどけた態度の大倉とは違う。
見たことがないような視線でモニターを覗き込み、その眼光は鋭かった。
ただ――打つ手がないというのが最大の欠点か。迎撃システム

が作動しない時点で内部に誰かが侵入していたのは確かだ。
誰が手引きしたのか――おおよその予想はついている。が、泳がせておいたのが仇になったようだ。

「どうなさるつもりですか、所長？」

「政府や軍に連絡を取ろうにも、ジャミングをかけられてるからね。解除するのは無理じゃないけど……時間もないからね、僕たちも」

「え……？」

大倉が呟き、入口を見た瞬間――モニタリングルームのドアが激しい音と共に蹴破られ、其処から数人が侵入してくる。その全てが全身を黒い服装で身を固めていた。
更にその手には銃が握られており、その全てが大倉と傍にいた研究員に向けられている。抵抗は無意味だと、大倉は瞬時に悟る。

【大倉利通だな？　大人しくしてもらおう】

「別に抵抗する気なんて更々ないさ。僕もまだ死にたくないんでね」

暗視スコープをつけていた一人の黒服の男がが呟くと、大倉はややおどけて言い返す。
ただ、その表情は至って変わらない。表情も先と同じく険しさを保ったままだった。

「それで、君たちは僕をどうするつもりだい？」

【無論……消えてもらう。我らの主の為に】

「あらあら。殺る気満々な事で」

考えるまでもなく、こいつらは大倉を殺す気なのだろう。

援軍は到底期待できない。それに――隣にいた職員はやや怯えたように椅子にしがみ付いていることからして、戦力にはならない。

恐怖が彼を支配しており、更には頭を抱えながらガタガタと震えるまでに至った。それも仕方がないだろうな、と大倉は思うが――今は構っている暇はなかった。

「僕を殺したところで、困るのは君たちの方だと思うけどな～」

【戯言を。それに貴様は第一種排除対象だ。我々の未来の為、此処で死んでもらう】

「ふーん、未来ねぇ……」

やや口元を動かし、大倉は笑みを浮かべてみせる。

その余裕染みた態度が、彼らの癪に障る。中心にいた男の手が軽く上がった。

【構え】

ひどく冷たい声が室内に響き渡る。

その指示が下るや、じゃきという音と共に大倉に銃口が向けられる。

しかし、大倉は動じない。それどころか、彼らに向かって両手を広げ始める。

大倉の奇怪な行動に真ん中の人物は思わず眉を寄せる。

だが、その狙ってくださいとばかりの大倉の眉間に向かって銃口を構えた。

【言い残すことは？】

「ないね。でも、後悔することになると思うよ？　主に君たちが…だけど」

【撃て】

真ん中の男の指示と共に――大倉に向かって一斉に銃声が鳴り響くのだった。

＊

「…っ。一体どういうことですの…？」

研究所の第七ブロック。其処にセシリア・オルコットはいた。

宛がわれた寝室で眠っていたところ、急な爆発。跳ね起きたところ、何者かが近づいているというのを察知し、セシリアは室内から退避した。

というのも、狭い研究所の通路などでＩＳを展開したところで移動しにくくなる。それに、研究所の人間だけを置いていくことも出来ず、ともかく状況を確認する為に警戒しながらもモニタリングルームへと走っている最中だった。

視界は真っ暗だが、道則だけは覚えている。いや、そもそも道が

一本道なので迷う必要などないのだが。
訓練でこういった突然の襲撃に対する内容はやった覚えがある。
しかし、それは訓練止まりであり――実戦は皆無だ。
酷く落ち着かない心を冷静に保とうとするが、それこそ難しいもの。今のセシリアは新兵同様の気持であった。

「ともかく、急ぎませんと……！　南部さんや大倉博士も無事だといいのですが……」

「何処へ急ぐっていうの？　セシリア」

再び走り出そうとしたところ、ふと誰かの声が聞こえたため、セシリアはその足を止めて振り返った。
すると、其処には――イギリス国の重役であり、セシリアの随伴としてこの大倉研究所にやってきた筈のレヴィ・パウレスの姿がある。

「レヴィさん……！？」

レヴィの存在に安堵したセシリアは安堵したが――何故かその内側で警鐘が鳴っている。
何故か？　そんなものは分からない。ただ、レヴィの接近にセシリアは身構えてしまう。

「どうしたの、セシリア？　怖い顔をして」

「……」

無言ながらも、セシリアは険しい表情を崩さない。
それどころか、意識を自らのＩＳであるブルー・ティアーズに集

中させており、いつでも展開できるような状態にまでしている。
そう、違和感を感じるのだ。このレヴィは――セシリアの知っているレヴィではないという――そんな違和感が。

「貴方……誰ですの？」

「誰？　フフッ、貴方も知っているでしょう？　私はレヴィ・パウレス。イギリスの「…いえ、違いますわ！　それに本物でしたら…耳に小さな穴が開いている筈ですもの。でも、貴方は空いていない。今まで黙っていましたが、それがなによりの証拠ですわ」

セシリアの言葉に、レヴィは一瞬押し黙る。が、ククと小さく笑ったかと思えば――彼女はかけていた眼鏡を片手で外し、無造作に投げ捨てる。

「フフフ……そう。よく見てるじゃない。流石はスナイパー。眼だけは一級品か」

薄気味悪く笑い、やや顔を上にあげるや、セシリアを見下ろすような格好になるレヴィ――いや、彼女の格好をした誰か。
それを確認したセシリアはすぐさま行動に移し、ブルー・ティアーズを展開。呼び出したと共にライフルを彼女に向ける。

「答えなさい！　レヴィさんを何処へやったのかを！」

「フッ……安心するがいい。奴は今もイギリスにいる。ただ、隙を見て奴を誘拐し、私が変装して入れ替わったに過ぎない」

「入れ替わった……？」

「イギリス内にも我らの協力者はいるという事だ。そのおかげもあって、私はこうしてお前の前に立っている。気付くのが遅かったな、セシリア・オルコット」

「……！」

ぞくっと、セシリアの背筋に悪寒が走る。

それは感じたこともない悪寒で、酷く気持ちが悪い。

だが、セシリアは臆せず、ライフルを彼女に向け続けていた。

「さて、我らにも限られた時間がある。お前のＩＳ――ブルー・ティアーズを頂こうか」

「させませんわ！」

刹那、セシリアは彼女の足元に向けてライフルを放つ。

ライフルを放った瞬間、後ろに向かって急速離脱。こんな狭い場所ではブルー・ティアーズは性能を発揮できない。

ならば、一旦身を引くべきだ。そう思っての行動だった。

しかし――それは突如として浅はかな考えだったと悟ることになる。

何故か？　それはセシリアが下がった瞬間、勢いよく研究所内に配備されていた火災様な隔壁が下がり、道を塞いだからだった。

はっとしてセシリアは機体を止め、彼女の方を見やる。その手には何やらスイッチらしきものが握られており、それで隔壁を下したのだろう。

「逃がしはしない」

「くっ……。だったら、壊すまでですわ！」

言い放ち、セシリアは隔壁に向かってライフル弾を放つ。
しかし、その隔壁に直撃こそしたものの――隔壁はどういう事かびくともしない。それどころか自分のエネルギー弾が隔壁前に現れたバリアによって防がれたではないか。

「そんな……！　バリアですって！？」

「大倉も粋な男よ。隔壁程度にバリアを仕込ませるなど……。奴は遊びでやったつもりだろうが、それが今は功を奏した。今だけは礼を言わねばならんな」

「……っ」

セシリアの表情が歪む。
こういう時だけ本当に余計な事をしてくれる男だ。しかし、セシリアに残された道はただ一つ。
この女と――戦うしかない。

「フフ、ようやくその気になったか。では私もＩＳを呼び出すとしよう。出でよ、ジュベール」

彼女がそういった瞬間、その周りに灰色の装甲が展開される。
その姿こそ軽装であったが、それは極限まで装甲を排した――つまりは高速機動型のＩＳだという事を表している。
その名をジュベール。聞いたことも見たこともないＩＳであった。

「それは一体……？」

「驚いたか？　我らの技術によって生まれたＩＳ『ジュベール』で

お前と相手をしてやる。ただ、勝つのは私だが」

「ならその台詞は……そっくりそのままお返しいたしますわ！」

刹那、再びセシリアはスターライトからエネルギー弾を射出し、ジュベールに浴びせる。

「フッ、無駄だ」

しかし、そのエネルギー弾はジュベールに当たることない。

それどころか、ジュベールはいつの間にかセシリアの背後を取っており、セシリアが気付いたころには右腕に装着された鋭利な爪がセシリアの間近に迫っていた。

「なっ……！？」

「遅いぞ、小娘」

警告音が頭に鳴り響くが、回避するよりも早くその爪先がセシリアに直撃し、大きくダメージを与える。

たったの一撃でかなりのダメージを負った事に驚くセシリアだが、ジュベールの猛攻は止まらない。

セシリアが反応する前にまたしても後ろを取ると、今度はセシリアを背中から蹴り上げる。また後ろを取られたことに歯噛みするセシリアだが、相手が早すぎて次の行動がとれないのだ。

おまけにこの空間はほぼ密室。ＢＴ兵器もろくに稼働できず、ほとんど中距離専用のブルー・ティアーズでは分が悪すぎる。

だが、それはジュベールにとっては好都合な条件だ。狭い密室空間の中で動き回れ、ましてや相手に反撃の隙を与えない。

装甲をギリギリまで排しているのは、そういった狙いがあるから

だ。これはいうなれば奇襲型ＩＳ。特定の状況下でその性能を発する事が出来る機体だ。

「あああっ！」

「ハッ！　叫べ！　喚け！　そして恐怖せよ！　この私になぁ！」

容赦なしにセシリアに斬りつけるジュベールを駆る彼女。
足が、肩が、腕が、どんどんと傷つけられていく。
反抗しようとミサイルビットをジュベールに向けるが、この密室で放てばそれこそ終わりだ。一対多数向きのブルー・ティアーズではどうすることも出来ない。
対抗できる武装がないわけではない。だが――展開しようにも、相手がそれをさせてくれない。それだけの猛攻だった。

「ぐっ、ああっ！」

「フフフ……ハハハッ！　所詮、代表候補生もこの程度か！　他愛もない……他愛もないぞ、セシリア・オルコット！」

崩れ落ちるセシリアに、彼女は容赦のない言葉を浴びせ――倒れたセシリアを踏みつける。
ギリギリと音がするほど強く踏みつけられ、その痛みにセシリアは苦痛の為に顔を歪める。

「う、ああ……」

「そろそろ仕上げだな…。あれを使うか」

そういって彼女は何処からか四十センチほどの大きさだろうか、

四本足になった装置らしきものを手にし、それをセシリアに向けて落とす。
その装置が駆動音を鳴らして脚が開き、セシリアに取りついた瞬間――セシリアの体に電撃に似た何かが流された。

「あああああっ！」

「フッ……これでいい」

電撃に似た何かはしばらく続いた。
もはやそれは苦痛どころではなく、激痛へと変わっていた。セシリアの悲鳴が室内に響き渡るが、それを助けるものはいない。
と、しばらくたった後で装置が外れ、その装置を彼女は拾う。そして、其処にあった“何か”を手に取り――口元を動かす。

「そ、それは一体……」

「お前の体を見てみればわかるだろう？　今、お前には何がない？」

「……そ、そんな！」

彼女の言葉にセシリアは眼を見張る。
そう、セシリアが気付いたのは――自分の周りに展開されていた筈のＩＳがない事だ。
はっとして彼女を見ると――その手には輝きを放っている球型のクリスタルが目に映る。
間違いない、あれは――ブルー・ティアーズのコアだ。それがいつの間にか彼女の手に渡っている事に、セシリアは驚きを隠せなかった。

「ど、どうして……？」

「さっきお前に取りつけた装置――剥離剤（リムーバー）といってな、ＩＳを強制解除できる優れものだ。これで私の任務も終了。持ち帰れば、私は……」

其処まで言ったところで、一瞬だけ彼女の表情が暗くなったが――すぐに切り替えたように表情を元に戻し、セシリアに対して踵を返す。

「さようならだ、セシリア・オルコット。その惨めな姿をイギリスに晒すといい。それはそれで見ものだが、生憎私も忙しいのでな。これで失礼させてもらおう」

それだけ言うと、彼女はＩＳ展開状態のまま歩き始める。

そんな姿を、セシリアは見ている事しか出来なかった。

あまりにも不甲斐なく、悔しく堪らない。

何も出来ず、このまま終わるなど――許されることではない。ただ、体が動かなかった。

相当な激痛がセシリア自身を襲い、今にも意識を失いそうだった。

目には大粒の涙が溜り、それが徐々に流れ落ちる。守れなかった。

扱う事が出来なかった自分に腹が立つから。

本国（イギリス）に、研究所の皆に、そして――何故かキョウスケに申し訳がたたなかった。

なんとか手を伸ばすが、それは届くことはない。

どんどんと遠ざかっていく彼女。追いかけようにも体はいう事を効かない。

「……け……さん」

微かに、その名を呟く。
今現在、セシリアの心を何故か占めていた人物。その名を、セシリアは呟いていた。
そして――同時に、願っていた。彼が、必ず来てくれると。
確証はない。いや、それはセシリアの願望だったのかもしれない。
だが――今、一番信用している相手。そして、何故か気になる相手。

どうして、こんな気持ちになるのか分からなかったが――ふと、セシリアは気が付いた。

あの時の戦闘で感じた彼の姿――それこそ、絶対に諦めないとばかりに全力で向かってきた彼の強い瞳に。
あれから一週間の間見ていたが、それは変わることがない。そして、それは憧れていた母に似たようなものだった。
強くて、凛々しかったセシリアの母。自分も将来はこうなろうと、そう強く願った。今でもそうなろうと努力している。
だが、今の自分はそれにまだほど遠い。現に、こうして成す術もなくやられてしまった。
こんな姿に、彼は何というだろうか。なんていわれるだろうか。
少しだけ期待して、かなり怖い。
怒るだろうか。それとも慰めてくれるだろうか。――どちらでも構わない。

ただ、今は彼に会いたい。それだけだった。

「響介さん……」

今度はハッキリと、彼の名前を呼ぶ。

「助けて……！」

【クレイモア……！】

刹那、反対側の隔壁が轟音を鳴り響かせて弾け飛ぶ。
その音に反応したのは“彼女”。眉を潜め、音の鳴った方を振り向く。

「お前は……」

「後はお前だけだ。覚悟するんだな、レヴィ・パウレス…」

「……フッ、来たか。イレギュラーめ」

その声と姿を見た時、セシリアは今度こそ涙を流した。

抑えようとしても流れ落ちてくる涙。決壊したようにボロボロと零れ落ちてくる。

だが、今はそれでもいい。来てくれたのだ、彼が。待ち望んだ人が。

「遅いですわよ……響介さん！」

セシリアの目の前にいたのは――――アルトアイゼンを纏ったキョウスケの姿だった――。

第六話　異変（後書き）

セシリアが簡単にやられすぎじゃない？　なんて意見もあるかもしれませんが……狭い室内の中でビットは動かせませんよ…。

インターセプターはイメージをさせず、ライフルは当たらない。頼みのミサイルビットも巻き込む可能性が高いため使えず……という状況だったという事で。

次回は零章においての戦闘部分においてのクライマックス。

ちなみにレヴィ――いえ、レビが使用していたジュベールについては、いずれ載せる予定である設定資料集に乗せる予定です。

……え？　手抜きしすぎなＩＳだって？　いやいや、これでも高性能（ｒｙ

第七話　蒼い雫（前書き）

修正版の第一弾、『蒼い雫』を投下。

これが本来の初期案でしたが、ややありえないかな？　と思いカットした次第でしたが……今回はその初期案を基に描いてみました。

批判は大いに受け付けます。私としてもあまり納得できるものではありませんでしたので……。

それでよろしければ、次にお進みください。

第七話　蒼い雫

「響介さん……」

「…無事のようだな、セシリア」

「ええ、なんとか……ですが」

「それならいい」

待ち望んでいた人物――キョウスケの出現に、セシリアはボロボロの姿ではあったが、ゆっくりと微笑んだ。

セシリア自身も自分で情けない姿だとは思うが、なによりキョウスケがこうして助けに来てくれたことの方がとてつもなく嬉しかった。そして、その姿は頼もしく見えた。

ただし、当のキョウスケはセシリアを気遣った後はその視線をレヴィ――いや、別の誰かか――に向けており、その周囲には殺気を充満させる。

もはや近寄りがたい雰囲気を前面に醸し出しており、その目には眼前にいる女の事しか映っていなかった。

「はっ、今更来たか。だが、遅かったな。セシリア・オルコットのブルー・ティアーズは既に我が手中にある」

女はその手の中にある球型のクリスタルコアをキョウスケに見せつけ、怪しく笑みを浮かべた。

だが、キョウスケは相変わらず黙ったまま。それどころか、臨戦

態勢を敷き――女を瞬時に貫かんとするような姿勢を見せていた。
そんなキョウスケを見て、女は眉を寄せる。それと同時に自身が展開していたＩＳ『ジュベール』をあろうことか解除した。

「……何のつもりだ？」

「フフ、お前にはジュベールよりも――こいつを使ってやろうと思ってな。我が元に出でよ、ブルー・ティアーズ！」

女が高々と宣言したかと思うと、その手にしていたブルー・ティアーズのクリスタルコアが女に吸い込まれるようにして消えていく。
それと同時に、女の周囲にブルー・ティアーズの装甲が展開される。その全てをセシリアに合わせて調整された筈のＩＳを、女はいとも簡単に展開したのだ。
本来ならば、操縦者のデータなどを書き換えなくてはならない作業を、この女は奪った瞬時にとり行った。
その行動に、今度はセシリアが目を見開く。信じられない事が目の前で起き、彼女自身も驚くしかなかった。

「そ、そんな……。どうしてブルー・ティアーズが起動しますの……？」

「クク、我ら――【混沌（カオス）】の技術に掛かれば、この程度造作もない。まあ、この場合はＩＳを強制的に服従させただけだが」

「服従……させた？」

「そうだ。詳しくは私も知らんが……ともかく、剥離剤（リムーバー）を使用したと同時にそうする仕様になっていたのだ。流石は？？が作った技術だ、素晴らしい」

ブルー・ティアーズを舐めるように見ながら、女はうっとりとする。

だが、奪われた側のセシリアからすればたまったものではない。悔しさで表情は険しさを増し、拳を力強く握った。

だが、女はそれをあざ笑うかの如く、手にした長大なライフル――スターライトＭｋ―？をキョウスケの方へと向ける。

セシリアの時と同じく、構えただけでエネルギー弾が装填され、セーフティは解除される。まるで長年付き添ってきた相棒のような――そんな感じがした。

「さっさと撤退したいところだが……こいつの性能を試してやろう。お前でな、イレギュラー」

「御託はいい。……さっさと来い」

女の挑発とも取れるような発言に、キョウスケは淡々と返す。

女はキョウスケの返しに眉を潜めるが――同時に口端を動かす。

――まだまだ青いな。所詮は若造、か。

女は悟ったのだ。キョウスケが完全にきれている事を。

だから先ほどから言葉を発さず、隙あらば攻めようと姿勢を崩していなかった。

女もそれぐらいは承知しており、セシリアと話しているときでも常に警戒は崩していなかった。それが今も同じである。

「……では、早速始めようとしよう。だが、此処では少々分が悪いのでな……。勝負は外で付けよう」

「……」

黙ってはいるが、異存はないらしい。それに、キョウスケとてこのような狭苦しい場所では自由に動けないのも確かだ。

女は肯定したのを確認すると、ブルー・ティアーズのスラスターを噴かして、先ほどキョウスケが破壊した壁から出ていく。

キョウスケもそれに続こうと機体を向けるが、出ていく前にちらとセシリアの方を見やる。

「必ず取り返す…。待っていろ」

「はい……」

コクンと頷き、キョウスケを見つめるセシリア。

キョウスケはそれを確認すると、女同様に背後のバーニアスラスターを噴かして加速状態に入った。

ぎゅんと一瞬だけ風が舞ったかと思うと、すでに其処にはキョウスケの姿はない。

セシリアはゆっくりと立ち上がりながら、その胸元を力強く、そして祈るように握った。

（響介さん……）

その視線はしばらくキョウスケが出て行った方向に向けられていたが、やがてセシリアもその場から足を引き摺るようにして歩き出していく。

キョウスケだけに戦わせることなど、出来る筈はない。何かできずとも、見守る程度の事は出来るのだから。

そして、キョウスケの姿をしっかりと見ておきたいという気持ちも――彼女の中では強かったのだった。

「必ず、勝ってください……！」

セシリアの微かな、それでも力強い呟きが静かに流れるのだった。

＊

キョウスケが指定通り外に出た瞬間、耳をつんざくような音と共にエネルギー弾が襲い掛かる。

だが、その程度の奇襲など予測済みだ。外に出ても加速を終えず、エネルギー弾も後ろの方を通り過ぎていく。

「フン、読まれたか」

面白そうに女は鼻を鳴らすと、続けてライフルを連射。キョウスケのアルトアイゼンを襲う。

いつまでも直線加速を続けているわけにもいかないキョウスケは、機体を一瞬だけ制止して反転、横に移動しながら反撃とばかりに展開したマシンキャノンを放つ。

だが、それが女に当たることはない。おまけに、女の扱うブルー・ティアーズはキョウスケの扱うアルトアイゼンとは違って高機動戦闘を可能にした機体でもある。その程度の射撃を回避するなど、造作もない。

「ちっ」

現時点で射撃は当てにならないと感じ、接近戦に移行しようと女に狙いを絞る。
いくら相手の扱っているＩＳがブルー・ティアーズだろうと、動きを止めなければ此方がやられてしまう。
なんとか動きを止められればそれで構わないが――なにはともあれ、接近しなければ話は始まらない。

「まずは……」

「接近戦を仕掛けるつもりか？　笑止！」

ライフルによる射撃を続けながらも、女はあろうことか周囲に展開していたビット達を動かし、キョウスケに向かわせる。
その行動に今度はキョウスケが眉を寄せた。確か、ビットとライフルの同時に攻撃は出来ないとセシリア自身が言っていた筈だった。
だが、女はそれを可能にしている。いや――それは女が並大抵の実力ではなく、セシリアよりも強大だという事を示しているも同様だった。

「行け、ブルー・ティアーズ。私――レビ・トーラーの指示に従い、奴を撃ち貫け」

女――自身をレビ・トーラーと名乗った彼女は、いとも容易くＢＴ兵器を扱って見せた。これにもまた驚きの事態であるが、今は構っている暇はない。
しかし、ＢＴ兵器のオールレンジ攻撃もセシリアとの訓練で見慣れている。射線に入らなければ、攻撃自体は避けられるのだから。

（攻撃開始と共に奴に突貫。奴にステークをぶち込む……！）

攻撃方法自体が分かっているのだから、あとは意表をついてやればよい。

キョウスケはハイパーセンサーを駆使し、ビットが飛んで行った方向をすべて詮索させる。そして、その全てが出揃ったところで、予測される射撃ポイントも割り出し、把握する。

「死ね、イレギュラー」

レビの冷たい一言がキョウスケの耳に入った瞬間、ビット達の砲口が一斉に火を噴いた。

だが、それを狙っていたかのようにキョウスケは瞬時に加速し、レビの正面を取る。

「取ったぞ……！」

「フン、確かに早い事は早い。だが……その考えはお見通しだ」

「抜かせ！」

恐ろしく早いスピードで放った筈のステーク。だが、レビはいつの間にか手にしていたショートブレード【インターセプター】により、キョウスケの一撃を阻む。

「近接戦闘武器……？」

「そういえばお前は知らなかったな。このブルー・ティアーズに近接戦闘武器が搭載されていたことを。それに、次の手を考えようにも……もう遅い」

手早くヒートダガーを展開しようとしていたキョウスケの耳に、

耳障りな警告音が鳴り響く。
何事かと思い、確認しようとした瞬間――背後から先ほど回避したはずのブルー・ティアーズのレーザー砲が一斉に直撃した。
おまけに悪い事に、それらは全て同じ個所を撃ち抜いた。いくらバリアがあろうとも高出力のレーザー砲が一度に同じ場所にこられては防ぎきることは出来ない。

「ぐっ…！　なに……！？」

衝撃と防ぎきれなかったダメージが同時に襲い掛かり、キョウスケの表情が歪んだ。

「ハハハッ！　私があの小娘と同等の性能しか引き出せないと思ったか？　私がわざわざこの研究所に潜入したのは、他でもない――BT兵器のデータを盗む事でもあったのだ。これの扱い方は既に頭に叩き込んでいるのでな、机上の空論であった偏向射撃（フレキシブル）も可能なのだ。驚いたか？」

高笑いを上げるレビ。既に大倉研究所にあったデータはレビの手中にあるらしく、それすらもインプットしたらしい。
まるで機械だな、とキョウスケは聴きながら思う。そして、セシリアとはまた違うのだと改めて思い知らされた。
セシリアよりも数倍上をいく実力。これは本当に分の悪い勝負だ――。

「……フッ」

軽く、キョウスケが笑う。
レビには分からないような、小さな笑み。それでもキョウスケがこのような状況下にも関わらず、笑ったのは事実だった。

それに――――切り札は、まだ残っている。

「さて、そろそろ終わりにしてやろう。ブルー・ティアーズの餌食となれ、イレギュラーよ」

レビの呟きと共に、一斉に火を噴く銃火器。

ビットが、ライフルが、ミサイルが――――キョウスケに向かい、直撃する。

ただ、何故かキョウスケはそれらの攻撃を避けなかった。まるで、意図したかのようにその場に留まり、自ら攻撃を受けたのだ。

その様子にレビは眉を寄せたが、あれだけの攻撃を受けてキョウスケが無事である筈がない。爆発の中からキョウスケが現れ、アルトアイゼンごと地表へと真っ逆さまに落ちてゆく。

「哀れな…。だが、奴のＩＳも奪うべきか。腐ってもゲシュペンスト、それなりの価値はあろう」

落下していくキョウスケを見つめていたレビであったが、スラスターを動かし落下していった場所へと降下する。

はたして、其処にはぐったりとうな垂れているキョウスケの姿があり、レビはフッと口元を動かし、地に降り立った。

「他愛もないな、お前も…。いや、私がティアーズを握っていた以上、本気を出せなかったというのも大きいかもしれんが…これが勝負だ」

ザッザと草を踏み、ゆっくりとした動作でキョウスケに近寄るレビ。

ただ、レビが近寄ってもキョウスケはピクリとも動かなかった。

生体反応がある以上、生きてはいるが――気絶しているのかもしれ

ないとレビは思う。
だが、とどめを刺すならば今のうちだ。男がＩＳを扱えるなど――言語道断。それに、生かしておけば危険な存在に違いない。
「我ら混沌（カオス）の為、ミスタＪの為――――貴様には死んでもらう」
ガチャリとライフルが向けられ、その砲口の先にはキョウスケがいる。
ライフルが向けられたのに気付いたキョウスケは、ゆっくりと瞼を開き――その場にいたレビを見やる。
ただ、動けはしない。辺りを見渡せば、ライフルの他にビット達がいつでもキョウスケを撃ち抜けるように待機しており、逃げ場はない。
いや――レビがそう易々と逃してくれるかも甚だ疑問だが。
「……混沌、か。くだらんな」
「……貴様に言われる筋合いはないな。いや――その減らず口を私が動かなくしてやろう。ありがたく思え」
淡々と言葉を述べ、トリガーに指を掛けるレビ。
キョウスケもその一連の動作を見ていたが――何故か、彼はフッと口元を動かし、再び笑った。
その行動に、レビは苛立ったように眉をよせる。とてもではないが、死ぬ間際の人間がとるような行動ではなかった。
「…何故笑う？」
「おかしいからに決まっている」

「おかしい……？」

頭が狂ったか？　と、キョウスケの言葉を聞きながら思うレビ。

しかし、それは同時に死の恐怖を紛らわすための動作だと思えばなんてことはない。ただのやせ我慢だ。キョウスケなりの――。

「フン、狂ったか」

「違うな……」

「違う？　では、何が違うというのだ？」

レビの尋ねに、キョウスケは正面からレビを見やり――こう、口にする。

ただ、その表情は何故か晴れやかであり、なにかを確信した――そんな目付きであり、表情であった。

「お前がまんまと、俺達の術中に嵌まっていることにだ。時間稼ぎはもういいですか、大倉博士？」

『ああ――待たせたね、南部君。こっちは終わったよ』

「……！？」

瞬間、レビの目が見開かれる。

何が起こったかと言えば、形成されていたライフルが消え、自身を覆うように展開されていたＩＳアーマーが消え、再びコアクリスタル状態へと戻ったのだ。

一体何が起こったのか理解できず、形相を変えてキョウスケの方に目を向けるレビ。

だが、その瞬間にはキョウスケはブースターを噴かせてレビに体当たりを食らわせると、その手にしていたコアクリスタルが宙を舞う。

宙を舞っていたコアクリスタルは、パシッという音と共にキョウスケが掴んだ。

「コアは確かに返してもらったぞ、レビ・トーラー」

「くっ……！　私になにをしたというんだ……？」

胸元を押さえながら、体当たりを食らった個所をギュッと掴む。

何が起こったのか理解できていないレビは、叫ぶようにキョウスケに言い放った。

だが、帰ってきたのはキョウスケではない別の誰か――それこそ、レビからすれば死んだと思っていた人物、大倉利通その人であった。

『僕がやったのはＩＳの強制解除さ。君の扱った剥離剤（リムーバー）とはまた違って、コア・ネットワークに直接ハッキングしたんだよ。それで、書き換えられていた部分を修正しただけさ』

にやけ面がレビに向けられ、レビは悔しくてたまらず歯噛みをしながら激昂した。

「馬鹿な……！　そんな、事が……出来るはずがない！　我らの技術が、貴様程度の男に……いや、そもそもコア・ネットワークにハッキングだと!?　ＩＳには興味がないはずの貴様に、そんな事など…ありえるはずがない！」

『出来るよ。だって、僕天才だから。それに、僕の持論は【ありえない事なんて、この世にはない】だよ。そう――元々は人間が作り

出した技術だよ、これは。出来ない筈がないのさ』

「ふざけたことを……！」

『僕は至って真面目だよ、レビ・トーラー。君自身が僕を殺しに来なかったのが一番の失敗だったね』

きっと、向こう側でほくそえんでいるに違いない大倉を思い浮かべるだけで、レビの怒りは限界まで到達する。

キッと鋭い目つきが研究所の方に飛んでいくが、大倉はそんな事をされたとて気にはしない。

だが、キョウスケは違う。機体を立ち上がらせると、殺気だった目付きを前面に押し出しながら、レビと改めて対峙する。

「そういう訳だ、レビ・トーラー。俺は単に時間稼ぎをしていたに過ぎない。……奴の指示によるものだが」

キョウスケもキョウスケで研究所の方をちらと見やるが――大倉の提案のおかげでブルー・ティアーズを取り戻せたのだ。

ただ――後はキョウスケの仕事だ。セシリアを甚振り、研究所を滅茶苦茶にしてくれたレビを、倒すだけだ。

「…行くぞ」

「ちっ…！　出でよ、ジュベール！　奴を斬り裂くぞ！」

怒りで周りが見えないレビは、自身が初めから持っていたＩＳ『ジュベール』を展開する。

決して重装甲ではないそれは、ギリギリまで装甲を排して結果のＩＳだ。特徴と呼べる武装は、なんといっても腕に搭載されてある

巨大な双爪だろうか。
その双爪をレビは構え、展開すると同時にキョウスケに向かって突進、まずは右爪を振り下ろす。
だが、キョウスケもヒートダガーを展開して素早く振り下ろされた爪を防ぐや、そのままマシンキャノンを発射する。

「くっ！　味な真似を！」

バッと飛び退くように後ろに後退するレビだが、すぐさまキョウスケは追撃に入っており、気が付けばレビの眼前にキョウスケの姿があった。
その姿に一瞬ハッとなるが、追撃をかけてきたキョウスケに対して左爪を向ける事によって斬り裂かんとする。
レビの攻撃は確かに手早く、一瞬で攻撃が迫ってくる。だが、キョウスケも近接戦闘では負けておらず、直感でステークを押し出し、左爪にぶつける。
ガリッという音と共に両者の間で火花が散るが、その耳に残るような嫌な音もキョウスケは気にせず、背後のブースターを噴かしてレビに向かって突撃した。

「がぁっ！」

「このまま……押し出す」

爪を止められた際に出来た一瞬の隙を逃さず、キョウスケはレビに向かって体当たりし、研究所の外壁へとぶつける。
ゴウンという轟音が辺りに鳴り響き、衝撃を抑えきれなかった分のダメージがレビへと直接襲い掛かる。
口からは微かに血がにじみ出た。その血を右手で拭い、未だ眼前にいるキョウスケに向かって双爪を向ける。

キョウスケはその双爪をダガーとステークの両方を駆使して遮る。
だが、両腕を封じられれば後は相討ち覚悟のクレイモアしか選択肢はない。

「……」

「ここでその近接炸裂弾を扱うつもりか？　それは愚かな選択肢だぞ、イレギュラー」

「確かにな。だが――お前を仕留められれば、それはそれでいい。それに、動きを封じた時点で俺がとる選択肢も一つだ」

にやりと、キョウスケが笑う。
その笑みにレビの背筋にぞくっと悪寒が走るが――キョウスケは迷うことなく両肩のハッチを開放し、レビへと照準を合わせる。

「ば、馬鹿な事はやめろ！　お前まで巻き添えだぞ！」

「誘爆の事を言っているのか？　……残念だが、一度経験済みでな。だが…死ぬほど痛いと思っていた方がいい」

この発言に、レビは改めて目を見開く。
機動性と奇襲性に重点を置いたジュベールでは、こうした馬力のある機体に抑えられれば当然力では勝てる筈がない。
だからこそ、なんとかして抜け出したかった。だが、キョウスケはそんなレビの考えなど、半ば無視し――呟く。

「クレイモア…！　全弾、持って行け！」

勢いよく射出されるクレイモア。その炸裂弾が直撃した瞬間、両

者の間で爆発が鳴り響くのだった――――。

＊

「ぐっ……がはっ！」

辺りが煙に包まれる中、這い出るようにして出てきたのはレビだった。

元々薄い装甲に包まれていたレビの体は、その所々が破壊され、唯一の武装であった双爪も左爪がへし折られたようになくなり、右爪も五本中三本がなくなっている。

地を這うようにレビは移動していたが、何かが込み上げてきたかと思えば、それが口から吐き出される。

それは、血。あまりにもダメージを負いすぎたため、吐血したのだった。

「く……そっ……！　何故だ、何故こうも……うまくいかないのだ……！」

悔しさと怒りが混合し、レビは拳を地に叩きつける。

ミスタＪの期待に反する――。それはレビが一番恐れている事だ。その恐怖も同時に襲い掛かり、レビはわなわなと震えながらも、それを抑えようと自身の体を必死に包む。

「うわぁ……ああっ……ああああっ！」

先ほどの様子とは一変し、頭を押さえがら叫び始めるレビ。
恐怖に体を支配され、体の自由が利かなくなる。ガタガタと体が震え、抑えは効かない。

「嫌だ……嫌だ……。あのころは、もう嫌だ……。アヤ、アヤ……私を助けて、アヤ……！」

誰かの名前を必死に呟き、目をギュッと閉じるレビ。
そんな彼女の傍に誰かが近づく。それはキョウスケではなく――別の誰かだった。

「無様ね、？？」

「ああっ……あああああっ！！！」

「……おやおや、例の持病が出たようね。連れて帰るしか方法はないか…」

その誰か――バイザーで表情こそ隠しているが、其処から出ている髪の色は深紅に染められており、妙に露出度が高い衣装を身に纏っている――は、震えているレビを担ぐと、自身のＩＳを展開した。
そのＩＳはピンク色に染められ、その背後からはまるで蝙蝠（こうもり）を彷彿させるかのような巨大な羽を展開する。
それはまるで生き物のように鮮明に作られている。まるで、意図したかのように――。

「さて、帰るよ。作戦は失敗、長居は無用だ」

「う、あっ……」

「と、今は聴けるような状態じゃないか。でも、其処のアンタは逃がしてくれるつもりなんてないんだろう？」

その声に、反応したのは――キョウスケだ。すぐにでも接近できるように臨戦態勢を敷いており、ステークを構えている。

だが、突如現れた人物――ＩＳを展開している点からして、女であろうが――はどうやら戦う気はないらしい。キョウスケの方を見てはいるが、此方も此方ですぐに飛翔できるような構えに入っていた。

「逃がしはしない…。その手助けを行うというのなら、お前ごと貫くことになるが？」

「フッ、そう簡単に貫かれちゃ敵わないからね。でも……レビはまだ必要な存在だから、渡せはしないのさ。我らの主、ミスタＪにとってもだけどね…」

「……知らんな」

静かな声が辺りに響く。女はキョウスケの態度にフッと笑みを浮かべるが、その手から青白い炎を出現させると、それをキョウスケに向かって射出する。

「……炎っ！？」

「この【エリファス】は特別でね、そういった技能もあるのさ。じゃあ、私らは失礼させてもらうよ」

「逃がさん……！」

咄嗟の事に驚きはしたものの、その炎を弾いてキョウスケは女の追撃にかかろうとする。

だが、女のＩＳは予想していたよりも数倍素早く――瞬時に飛びあがったかと思えば、背後にあった蝙蝠（こうもり）の羽のようなものを羽ばたかせ、研究所から撤退していく。

流石のキョウスケもこれには苦虫を潰したような表情しか浮かばすことが出来ず、女が飛び去った方向をじっと見ている事しか出来なかった。

「レビ・トーラー……そして、混沌（カオス）か…。次こそは、必ず……」

飛び去って行った方向を見やりながら、キョウスケは微かに呟くのだった――。

第八話　はじまり（前書き）

修正版――いえ、零章の最後を投下。……といっても、あと一話投稿しなおす予定でありますが……主によくわからない話をｗ

ではでは、今回こそ短くなりますが……宜しければお読みください。

第八話　はじまり

「いやー、それにしてもこっ酷くやられたもんだね～」

「……私は死ぬかと思いましたが」

研究所内を歩いているのは、大倉利通と彼と一緒にモニタリングルームにいた研究員だった。

かなり破壊された様子の研究所内を見渡しながら、大倉は辺りをチラチラと見ながら歩き続ける。既に避難していた整備班や補修班が損傷部の修理に入っており、夜中――それも深夜にも関わらず彼らの声が研究所に内に響く。

「やってるね、皆。いいことだよ」

「しかし、セシリア嬢のＩＳが目当てとはいえ……此処まで破壊するものなのでしょうか？」

「ま、それが彼ら――――混沌（カオス）のやり方でしょうに。以前から情報こそ掴んでたけど、いざ目の前に現れるとビビるよね。ま、あの設備が役に立ったけどさ」

「……確かに、モニタリングルームにエネルギーフィールドを用意しているなど考えもしませんでしたよ」

今更だが、何故大倉たちが助かっているのかといえば、大倉は非常用に幾つもの設備を構えている。

無論、それはモニタリングルームも過言ではなく、あの場所には予算をつぎ込んで完成させた小型エネルギーフィールド発生装置が

常備してる場所でもあるのだ。
それを発生させた事によって襲撃者達の銃撃を防いだ。そう、あの場にいるという事は、絶対的に安全な地帯ということになる。

「ま、撃退は南部君任せだったけど」

「彼がＩＳを動かせるのは非常に助かりましたね。奴らは彼の実力を軽視していたようですし、そのおかげで多くの所員が助かりました」

実を言えば、キョウスケはセシリアを探しながらも研究所に侵入していた侵入者たちを撃退していたのだ。
モニタリングルームに入ってきた侵入者たちもキョウスケの手によって排除。今は拘束し、日本政府へと引き渡す準備に入っている。
おまけに、負傷者こそいるものの、死者はゼロという輝かしい成績。キョウスケがいなければフィールドがあるとはいえ反撃することは出来なかった大倉は非常に助かった存在だといえよう。
――ただ、そのおかげもあってセシリアを救出するのが遅れた訳だが。

「しかし、一体どうなさるおつもりですか？」

「どうって……何が？」

「分かっておいででしょう。南部響介の件です。今回の事もありますし、やはり政府に連絡を入れた方がよいかと」

「……分かってるよ。今回の件で南部君の株は上昇したも同然だからね。やっぱり……彼にはちょっと苦痛だろうけど、ＩＳ学園に行ってもらう事にしようか」

そういって、大倉は自嘲気味に笑った。
いや――最初から大倉はそのつもりだった、と言った方が正しい。それが今回の件で拍車をかけるような事態になったといった方がいいのかもしれなかった。

「それに、セシリアちゃんも喜びそうだしね。南部君のＩＳ学園入学は」

「はぁ……？」

「ああ、意味は分からなくていいよ。それより、例の武装……どう？」

「例の武装……日本政府の要望にあった“ガナリー・カーバー”はロールアウト寸前です。しかし、あの機体――バルゴラは次期主力量産機の座を失っていますから、実質一機のみですが…」

「構わないよ。それに、日本政府もガナリー・カーバーのスペックが高すぎてバルゴラの量産を見送ったんだ。僕自身もあれを設計するのには骨が折れるし、十機以上開発したら此処の研究所が火の車だからね」

諦めのポーズ……いや、両手を広げながら、大倉はそう嘆く。
プロジェクト・グローリー――。アメリカで開発されたゲシュペンストを超える主力量産機の開発プランであり、その試作型として生み出されたのが大倉のいうＩＳ『バルゴラ』である。
しかし、機体そのものに問題はないものの――そのオプションとしての武装であるガナリー・カーバーと呼ばれる武装のスペックが広大であり、とてもではないが量産ができるような代物ではなかっ

たのだ。
　結果、従来通りに日本政府は打鉄を量産型として固定。ただ、バルゴラは機体自身は量産型のスペックでありながら、ガナリー・カーバーの性能故に専用機として扱われることになっている。

「で、そのパイロットが……この子か」

「はい。名はセツコ・オハラ。小原節子……と言った方がいいのでしょうが……それはともかく。彼女は幼いころに何者かに両親を殺され、日本政府の管轄下で育っています。その間、ＩＳの適性が高いというのと機体操縦が丁寧だという事で一気に代表候補生の一人へ。今度はＩＳ学園に進む予定らしいですが……」

「ふむふむ、それにしても可愛い娘だね、この子」

「……所長」

「個人的な感想だよ、これは」

　写真を見ながらククと笑う大倉。
　そんな大倉の様子に所員は頭を抱えて溜息を吐くが、大倉はそんな事など気にせず――再び写真に目をやった。

「幼いころに両親を…ね。犯人は判明済み？」

「いえ。まったくと言っていいほど進展はないそうです。尚、彼女はその時は二歳程度らしかったので、覚えていないそうなのですが……」

「それはそれは。でも、扱えるかな？　その彼女に」

「癖さえ掴めば問題はないかと」

「ま、そうだね。あ、そういえば一つ気になることがあったんだけど」

「なんでしょう？」

「アメリカが進めてるプロジェクトＴＤって……どうなったの？」

「ＴＤ……確か、フィリオ・プレスティ博士の死後、一時頓挫。ですが、計画のメンバーの一人が何人かのメンバーと共にプロジェクトを再び押し上げ、代表候補生まで上り詰めたと聞いていますが……」

「そっか……フィリオが逝ったんだったね」

何かを思い出すかのように軽く頭を上にあげながら、ポツリと呟く大倉。

そして話題のプロジェクトＴＤとは――こちらはアメリカで推し進めていた計画の一環である。

内容はＩＳ本来の目的である宇宙進出計画。しかし、ＩＳであるが故にアメリカがその為に二つ以上のコアを手放すのを渋っていたが、フィリオ・プレスティ博士によってようやく推し進められた計画の一環。

だが、進んだのはいいものの、その後にフィリオは病に侵されて帰らぬ人となり、その妹はＩＳを持ったまま失踪。現在も捜索中である。

尚、その中に日本人が紛れていたという噂もあるが――その人物も消息は不明との事。

しかし、そのうちの一人はどうしても諦めることが出来ないのか、なおも計画を続行し――今では代表候補生の一人らしい。
ただ、候補生の中でも実力は最下位らしいが――今度のＩＳ学園の受験資格を得ているらしく、アメリカのデータ収集の為にＩＳ学園を受験するらしい、入手したデータにはある。

「ほう～、ＴＤもいいところまできたね。それで今年はセシリアちゃんと南部君も加えて専用機持ちは四人か……あ、間違えた。倉持の馬鹿のところも合わせて五機だったね」

「……まだ、倉持博士とは折り合いがつかないんですか？」

「興味がないだけだよ。それに、彼は頭でっかちだ。あいつの頭では出来もしない武器の構築――マルチ・ロックオン・システムなんてものを搭載するだって？　馬鹿の極みだね、奴は」

「……」

吐き捨てるように言ってのける大倉だが、それほど倉持という人物と大倉の間では何かがあったのだろう。
事実、今の大倉はまるで見たことのないような冷たい目つきをしており――その表情にはいつものふざけた様子は微塵にも感じられなかった。

「泣きつかれた場合はどうするおつもりですか？」

「けり落とすよ。僕とあいつはそういう仲だからね」

職員の尋ねに、大倉はいとも簡単に言ってのける。
その目は本気であり、その考えをかえるつもりはないらしい。職

員は一瞬だけ目を伏せるが、すぐに手元の資料を眺め始めた。

「けど、今年の専用機持ちは従来に比べて多いね……いや、異常だ。何かが起こる前触れかな？」

「確かにそうですね…。ですが、南部響介の情報を流せば他の国々も黙ってはいませんよ。特にフランスのデュノア社なんかは来るんじゃないですか？」

「あそこはラファールのせいで統合整備計画に参加できなかったからね。ゲシュペンストをベースにしているアルトアイゼンのデータ収集に誰かを仕向けそうだけど……どうかな？　デュノア社も最近不穏な噂を耳にしてるし。ま、僕には関係ないけど」

大倉はそれだけいうと、職員に対して踵を返す。

専用気持ちが五人――うち、三人は大倉の方から武装を出すことになる。

――これはまた、面白い事態だね。それに、彼……南部響介、か。似てるよね、“彼”に。――そうだ。彼女に教えてやろう。その方が楽しくなりそうだからね。

とある事を思いつき、大倉はぽんと手を叩いた。

一体何事かと思って職員は大倉の方を見やると――大倉はもう一度踵を返して職員の方を振り向いた。

「どうなさったのですか、所長？」

「連絡を入れてほしいところがあるんだけど……頼まれてくれないかな？　僕の名前を出せば一発の筈だから」

「連絡……ですか？　一体どこへ……？」

首を傾げる職員だが、大倉はにやりと笑みを浮かべながら――こう発する。

「ＩＳ学園教員、織斑千冬に――――ね」

それこそ、全てのはじまりだった――――。

＊

深夜。

時刻としては午前四時ほど。襲撃が起こってレビ達が撤退してから一時間ほどが経ったときの事だ。

研究所の屋上にキョウスケの姿はあった。真ん丸であり、更に金色に輝く月はキョウスケを照らし、キョウスケもそれに身を任せていた。

この日までに色々な事があったと、キョウスケは今日までを振り返る。

大倉に拾われ、ＩＳを動かし、更にセシリアと決闘をして、今日

の襲撃――――。短い期間であったが、実に様々な事があった。
だが、これだけの出来事が連続しても自身の記憶が元に戻るわけではない。いや――寧ろ、サッパリだった。
このまま、自分は何処に行くのだろうか――――ずっと、このままなのだろうかと思った時もある。

（俺は……誰なんだろうな）

それが一番の疑問であり、変わらない疑いだ。
自分が分からない――これほどまでに怖いと思う事はない。出自は？　家族は？　――それすらも、いや――何も知らない。
ただ、そんな自分が此処にいるのも、ＩＳを動かせるからという理由。懐かしさと共に違和感を感じる機体。それがこのアルトアイゼンだ。
掌を広げ、キョウスケはそれを上に掲げる。
そして、それを軽く握りしめ――――力なく落とす。

瞬間――深夜にも関わらずにごうと風が鳴り、キョウスケのメッシュがかかった前髪が揺れる。
その時、ふと後方に人の気配を感じたが――――キョウスケは黙っていた。やがて、その人物はキョウスケに迫ると、声を掛けてくる。

「お隣、宜しいですか？」

「……好きにしろ」

素っ気なく答えてやると、その人物――予想通り、セシリアだったが――はキョウスケの隣に腰掛ける。
ふとキョウスケが彼女に目をやると――セシリアは少しばかり小首を傾げる。

そんな彼女を見ながら、キョウスケは手にしていたコアクリスタルを取り出し―、セシリアに渡す。

「約束通り取り戻したぞ。いや……借りを返した、といったところか」

「借り……ですか？」

「……この前の栄養剤の事だ」

「ああ……あの程度の事など別に、気にしないで宜しいですのに……」

やや頬を赤らめながら、セシリアはおずおずとそれを受け取る。

渡したキョウスケもそれ以上は何も言わず、再び正面を見ていたが――唐突に、こう切り出した。

「そういえば、まだ起きていたんだな」

「……あんな事があった後ですから、そう簡単に眠れませんわ。南部さん……いえ、響介さんも同じなのでは？」

「そうだな……」

自身の事を名前で呼んだが、キョウスケは特に気に留めなかった。

呼び方は人それぞれだ。別に許可を下したわけではないが、セシリアがそう呼びたいのならばそれでいい。特に嫌な気分はしないのも事実だ。

「それに……怒ってます？」

「……何をだ？」

「わたくしがあんな簡単にやられてしまった事ですわ。その……相当無様な、姿でしたし……」

悔しさ半分、恥ずかしさが半分といった表情か。

やや視線を泳がせながらキョウスケに尋ねるセシリアだが、当のキョウスケはフッと軽く笑ってやった。

「馬鹿を言うな。やられたくらいで何故俺が怒る必要がある？」

「ですが、わたくしは響介さんの訓練を見ている立場ですし、その……」

モゴモゴと、何かを言いたいが言い出せないセシリア。

そんなセシリアに対してキョウスケは再び笑って見せた。

「な、何が可笑しいのですか？」

「いや……お前もそういう表情をするのだと思ってな」

「……失礼ですわよ、それは」

口を尖らせ、不服そうなセシリア。

またしてもキョウスケは吹き出しそうになるが、なんとか堪える。

と、いきなり真面目そうな顔つきへと変わり、セシリアの方を見た。

「だが、これだけは言っておく。……あまり、無茶をするな」

「え……？」

「無茶をするのは、俺だけでいい」

そんな事をいうキョウスケに、セシリアは一瞬ポカンとなったが――直後、フフッと声を上げて笑った。

今度はキョウスケの方が不服そうな顔を浮かべたが、セシリアは笑顔のまま。そんなセシリアを見て、キョウスケはやや諦めたように息を吐いた。

「おかしいか？」

「それはそうですわ。ですが……残念ながら、その要望には応えられかねますから」

「……？」

キョウスケがやや不思議そうに首を傾げると、セシリアはキョウスケの左肩に頭を乗せる。

そして、目を閉じ――こう言った。

「響介さんの無茶には――わたくしもお付き合いたしますわ。何処までも……いつまでも」

「フッ……好きにしろ」

フッと微笑み、キョウスケは黙って彼女の頭に手をやり、軽く撫でる。

サラサラの髪質で、流れるような金髪。キョウスケはややゆっくりとその髪を撫で、同時に内心で彼女に対して感謝する

（すまんな、セシリア……）

この時、キョウスケもセシリアもある程度悟っていたのかもしれない。

“それは到底適わぬ望みである”という事を――――。

だが、彼はそれを受け入れ、少女はそう宣言した。

今だけは――――今だけでいいから、この温もりに浸りたい。

そんな男女二人を見守るのは金色に輝く月のみだった――――――。

＊

「ミスタJ、真に面目ありませんが……今作戦は失敗いたしました」

『……構わない。それに、これもまた予想していた事だ。案ずることはない』

「……」

深紅の髪を持った女がやや肩をすくめる。
モニター上には相変わらずの【ＳＯＵＮＤ　ＯＮＬＹ】の文字が表示されており、その姿は見えない。
彼女も一体誰に仕えているのか時々分からなくなってくるが――だが、ミスタＪの意見に賛同したのも彼女自身だ。
だからこそ、彼に仕えると決めた。誰に何と言われようとも――。

『……レビの容体は？』

「今は落ち着いており、眠っています。ですが、当分の間の作戦行動は不可能かと」

『…よかろう。今、レビに欠けて貰っては私としても困る。だが、次は――お前の番だ、？？――――いや、ツィーネ・エスピオ』

「はっ」

恭しく頭を下げる女。いや、その名をツィーネ・エスピオといった。
その瞳は、静かに、そして怪しく光っているのだった――。

第八話　はじまり（後書き）

【第一章予告】

突如出現した混沌（カオス）の工作員、レビを撃ち破ったキョウスケ。
しかし、それは同時にキョウスケの株を上げることと同義であり、どうしても研究所ではかくまいきれなくなってしまう事にも繋がっていた。
それはまるで意図されたかのような襲撃――。しかし、大倉はキョウスケにこう切り出した。

「君、ＩＳ学園に通って見ない？」

「……は？」

周りを見渡せば、女、女、女のＩＳ学園。誰が望んでこんな場所に入ったか？　否、キョウスケは全くもって望んでいない。
しかし、其処で出会う新たな友。何処かで見たような気がする人物に、何やら妙な目付きで見てくる教師。
――そして、更なる謎がキョウスケを襲う。

「小原節子…です。その、宜しくお願いします……」

「アイビス・ダグラスだよ。宜しくね、響介」

「もぅ……少しはわたくしの事も見てくれては宜しいのではなくて？」

口を尖らせながら、やや不満そうに呟くセシリア。

「なんで……なんでアンタが生きているんだよ、響介さんっ！」

激昂する一夏。

「あいつは……死んだ。あいつは別人なんだ、一夏……」

千冬姉は、今まで一度も見せたことがないような表情で淡々と呟く――。

「接近戦用の機体か……」

「だが、悪くはない」

篠ノ之の呟きに、俺は笑みを浮かべながら答える。

「【さあ、絶望しろ！　お前（君）の絶望は私（僕）の糧となる！　さあ……さあ！】」

「貴方だけは……貴方だけは！」

『この世界は腐敗しきっている……。だからこそ、私は動く。この世界を一度破壊する為に……』

「フフッ、それでこそ貴方なのかもしれないわね…。私も人の事は言えないけど……特に、“妹”にはね」

ミスタＪの発言に、女は若干目を伏せた。

さまざまな思惑が絡み合い、一つとなる。だが、これもまだ序章に過ぎない。

出会いが始まり、キョウスケの新たな生活がスタートする最中――それをあざ笑うかのように戦いは終わることを知らない。

誰が仕組んだのか、それは神のみぞ知る。そして――混沌（カオス）が、『監視者』が徐々に動き出してゆく。

第一章『ＩＳ学園』、始まる――。

閑話1（前書き）

うーん、よく分からない話で申し訳ない…。

多少今までの雰囲気を壊すような話となりますが、それでもよろしければご覧ください。

閑話1

「私は馬が好きだ。うん、馬が好きなんだよ、馬が」

「はぁ」

唐突にそんな事を抜かし始めた大倉を見ながら、大倉研究所で勤務している職員――松本という――は、いきなり何を言ってるんだコイツ…みたいな表情を浮かべながら、問題の人物の方を仕方なく見た。

しかし、当の本人はうんうんと首を何度も縦に動かしながら先ほど同じような事を呟きまくっている。まるで壊れた人形のようだ、とは死んでも口にはしないが。

そんな上司……そう、これでも一応上司なのだ。それに頭を悩ませる一人でもあるのだが、松本はそんな彼に尋ねる。

「馬の飼育でもするつもりですか、所長？　どうせ馬刺しにして食べるのがオチなんですから、無駄な努力はやめておいた方がいいですよ」

「馬刺し？　……ハッ、これだから馬鹿は困るね」

やれやれと逆に呆れ顔をされながら馬鹿にしてきたため、これには思わず手が動きそうになった。いや、手が出なければどうするというのだろうか。

しかし、相手は上司だ。抑えろ……抑えろ……と心の中で何度も繰り返す。そもそも、こんなのを相手にしてしまった自分が悪いといえばそうなる為、今更になって面倒になってきたとしてもとりあ

えず相手をしてやることにする松本だった。

「じゃあ、何の馬が好きなんですか？　言っておきますが、この研究所で馬は飼えませんよ」

「だからなんで僕が馬を飼育する話に持っていこうとするかな、松平君！」

「松本です」

名前を間違えられたことに対しても、手がピクッと動き出しそうだったが、自分でもやけに冷静に返答できたな、と松本は内心そう思う。

まあ、大倉が突拍子に発言してくるのはいつもの事なので、どうせ今日もその類だろうと松本が思っていたのも事実だ。

「大体、この僕が生き物の面倒なんか見れると思うのかい？」

「無理ですね」

即答。

だが、その答えこそ正解だったのだろう。大倉は何の自慢にもならないにも関わらず、堂々と胸を張りながら高らかにいってのける。

「だろう？　松形君が即答するくらいの人間なんだよ、僕はねっ！」

「きっぱり言い切らないでください。それから僕は松本です」

「そんなどうでもいいことを突っ込んでいる場合じゃないよ、松木君！」

「松本です」

わざとやってるのか、この野郎…と思わざるを得ない。

わなわなと手が震え、今にも大倉の顔面めがけて右ストレートがぶっ飛びそうな勢いであったのだが、先ほど同様に心を静めて落ち着きを取り戻す。

ちなみに、これでもマシになった方だ。初期の頃は容赦なくぶん殴っていたので、これは大きな進歩である。――いや、呆れて物も言えないとは彼の事を刺すのではないか、と最近になって思うようにもなった。

まあ、つまりはあれだ。あれ。あれってなんだ、という問いは自分で探すように。

「まあ、そんな事はともかく。僕が馬に固執しているのは、言うまでもない……競馬さ」

「はぁ」

松本の顔がなんともいえない表情へと変わるが、大倉は何も気にすることなく、話を続ける。

「最近全然勝てなくてさ～。ほら、なんだっけ？　あの一番人気の黒い馬の名前だよ！」

「【ダイトロンベ】ですね。日本語にすると大竜巻。騎手はレーツェル・ファインシュメッカーさんで、これまた不思議な名前ですね。【謎の食通】って……竜巻と関係ないような。……」

「そうだよ、ダイトロンベ！　あれが競馬会に現れてから、他の馬

が霞んでしまったんだよ！　前々のデ〇ープイ〇パクトの時と同じよう感じだよね、今は！」

「また懐かしいものを出してきましたね、所長……」

ずずっと音を出しながらお茶をすする松本。

その間も大倉は絶え間なく何事かを愚痴っているが、それに耳は貸さない。面倒だからである。

そもそも、そのダイトロンベとやらとレーツェルという男が出てくる前からでも、大倉は何故か競馬にのめり込んでおり、その殆どを外しまくっている。

何故か？　それは彼が一番不人気の馬をあえて選ぶからだ。勝てば確かに一攫千金だが、リスクが非常に高すぎる。しかし、それでも大倉は今日も懲りずに競馬の話をし始めるのだ。

「ちなみに所長がその馬にかなりの額を賭けてもいるから、此処の設備はもっと充実しないんですよ。今でもカツカツなんですから」

「はっはっ、当たれば一攫千金さ。ま、君らに与えるお金は一円もないけどね」

「ですよねー」

いけしゃあしゃあと言ってのける大倉。既に松本は諦め体制へと移行しており、ただ聞いてはそれとなく返すだけのスタイルへと変更していた。

いや――そうでなければ、本気で暴れてしまいかねない。だからこそ、こうしてモニターを眺めながら、お茶を啜るのが一番なのだ。

「しかし、他のギャンブルはしない癖に競馬だけはしますよね、所

長は」

「……そうだね。そうなんだよね……」

「……？」

ふと、大倉の声のトーンが低くなったのに気付き、松本は彼の方に視線を向ける。

しかし、松本が顔を向けた時には新聞紙を片手に、赤鉛筆をくるくると回転させている大倉の姿があり、ますます首を傾げてしまう。

「……所長？」

「うん？　なんだい、松田君？」

「……いえ、なんでもありません。それから僕は松本です」

「えー？　名前なんてなんでもいいじゃない。えーっと……松なんとかさん」

コトッと、湯呑みが静かに置かれる。

松本はゆっくりと席から立ち上がると、大倉の方へと近づいていく。それこそ、満面の笑みを浮かべながら。

「所長」

「うん？　なんだい？」

「歯、食いしばってください。貴方を修正してやります」

「またまた、そんなカ○ーユみたいな事をいっちゃって。相変わらず短気だな～、もっ君は♪」

ペコちゃんスマイルをしながら、人指し指を松本へと向けながら状況を更に加速させそうな事を恥ずかしげもなく言い出す大倉。その顔は非常にウザかった。

刹那、満面の笑みを浮かべた松本から繰り出される渾身のストレートが大倉へと直撃するのだった。

＊

大倉とは別に、此処にも競馬の事について悩む一人の青年がいた。その名を南部響介――キョウスケの事――といい、記憶喪失という結構厄介な事情を抱えた青年である。

彼もまた、大倉と同様に新聞紙を机上へと広げ、赤鉛筆で何事かを書き込んでいる姿があった。

「今日の大穴は5番か……。やはり人気は7番のダイトロンベに集中してるが、今日こそは勝たせてもらおう。よし、5番に全賭けだ」

新聞紙上に赤丸を描くキョウスケ。彼もまた、博打好きであった。しかし、選んだ5番の馬――これもまた、本当に大穴であった。まさしく万馬券と呼ぶに相応しいもので、キョウスケお得意の方法だ。

これこそ、ギャンブル。ただし、キョウスケなりの。だが、当たるも八卦、当たらぬも八卦である。特に意味はないのだが。

ちなみにそれをセシリアに話したところ、やや困惑したような表情をされたのは記憶に新しい。

まあ、セシリア自体がギャンブルとは無縁（やろうと思えば出来たが、それどころではなかった）なので、キョウスケの言にそのような対応しか出来なかったというのが本音だが。

そんな時、ふとドアが開けられたかと思うと――其処から右頬を押さえながら部屋の中へと入ってくる大倉の姿があった。

キョウスケも彼の姿こそ確認するが、どうせいつもの事だろうと特に気にはしない。いや、気にしては負けだ。

「南部君、決まった？」

「……今日も大穴狙いで。打倒7番といったところでしょうか」

「おおっ、奇遇だね。僕も今日は大穴狙いでいこうかと思ったんだよ。最近7番が大暴れだからねぇ。そろそろギャフンといってほしいんだけど」

7番の項目をトントンと指で叩きながら、大倉は頬杖をつき始める。

未だに先ほど殴られた場所がじんじんと痛むが、キョウスケはやはり気にはしない。ただし、その視線は新聞上に向けられていたのだが。

「で、どうよ？　此処の生活には慣れた？」

「大体は。毎日ＩＳの訓練で大変ですが、記憶を取り戻す上では致し方がないものかと割り切っていますので」

「記憶を取り戻す、ねぇ」

頬杖をつきながらキョウスケの言葉をもう一度呟く大倉。
大事な事なので二回――などではないかと思う。タブンネ。

「……でも、取り戻してから分かることもあるかもしれないね」

「……？」

「いやいや、今のはいいよ。それより、今度はどうかね？　勝てると思う？」

「フッ……。勝てるか？　じゃありません。勝つ……それだけです」

「おっ、いいこと言うね。で、賭け金だけど……「勿論全賭けです」……うん、そうしよう」

無責任極まりないのだが、大倉はそれでもキョウスケの言う通り全賭けで勝負する。
勝負したるもの、それくらいの気合で臨まなければならない。例え、どんなに分が悪かろうと――それが勝負師というものだからこそ、譲れない事も当然のようにあるのだ。

「だけど、負けた場合とかどうしようか――「水と砂糖水があれば生きていけます」……そうだね……」

淡々と返答するキョウスケ。しかし、大倉も何故かキョウスケの誘導に従わされているような感じが否めないのも事実だ。
一体何があったのか――そんな事、知る由はない。いや、そんな事に興味を持って如何とする。

――まあ、なにはともあれ。キョウスケと大倉の運命は、一頭の馬に託された。

こいつが勝てば、億万長者。負ければ水と砂糖水の生活である。背に腹は代えられないが――以下、上記と同文。

頑張れ、馬よ。万馬券よ。

彼らの運命は、お前が握っている――！

後日。

「響介さん？　最近水しかお飲みになられていないようですが……なにかあったのですか？」

「……こまけぇこたぁはいいんだよ！！　フッ、まさかぶっちぎりの最下位とはな……唖然としたな、あれは」

「……はい？」

「いや、気にするな。それより、セシリア。……一つ、頼みたい事があるんだが」

「な、なんですか、響介さん？」

「そのパン、分けてくれませんか（キリッ」

「……」

今日も（一部を除き）大倉研究所は平和である――。恐らく。

閑話1（後書き）

うーん、ネタが欲しい……。『会長と目安箱』というネタはある程度思い浮かんでいるのですが……え？　めだかと被る？　……こまけぇこたぁいいんだよ！！

他にもネタがあり次第、いただければ幸いです。それでは、今回はこれにて失礼を。

第九話　悩み（前書き）

第一章修正版の一話を投稿。……修正、といっても零章の事を踏まえて多少追加したのみですが…。

第九話　悩み

それは早朝の事だった。

大倉研究所中央演習場にて、一人の少女がＩＳを展開、用意された標的に対して射撃訓練を行っている様子があった。

その場にいたのは、セシリア・オルコット。その目は真剣そのものであり、ただ一心に標的を見やっている。

ライフルにて標的を次々と撃ち抜き、間を置かずに次弾を装填。一切の無駄などなく、至って冷静に作業を進めていた。

（まだ……まだですわ）

ライフルのエネルギー弾を射出しながらも、セシリアはいつもとはどこか違った。

その姿は何処か焦っているような――そんな感じが見て取れる。一体、彼女に何があったといわれれば、それは先日のレビの襲撃が大きな原因だ。

まだ怪我こそ完全に完治していない状況。それでも、セシリアは先日の敗北をこれまで忘れたことなどなかった。いや――忘れる事など出来ようか（・・・・・・・・・・）。

「……そこ！」

刹那、セシリアはＢＴ兵器『ブルー・ティアーズ』を展開、先日のレビが行ったのと同じこと――ＢＴ偏向射撃（フレキシブル）を実行しようと強く念じた。

（お願い、曲がって――――！）

それをまるで水が流れるような――そんなイメージを頭の中で思い浮かべる。
しかし、それは無情にも届くことはない。ビットから射出されたレーザー砲はただ真っ直ぐに進んでいき、直線上に存在した標的を撃ち抜く。
ただ、この結果にセシリアは肩で息をしながらも、僅かに視線を下に落とした。

「どうしてですの……？」

ギリッと、悔しさのあまり奥歯を強く噛みしめるセシリア。
レビは、自分より遥かにブルー・ティアーズを使いこなしていた。レビがあそこまで出来るという事を証明したという事は、セシリア自身も可能であるという事に間違いはないだろう。
だが、出来ない。レビのように――応えてはくれない。

「どうして、わたくしの時は――――！」

下に視線を向けながらも、セシリアはその悔しさを思わず吐露する。
悔しい――悔しくてたまらない。何故、自分が出来なくてレビには出来たのか。そして、そのレビに成すがままにやられてしまった自分が。

「響介さんは気にしないと仰ってくださいましたけど、わたくしは――」

――それが一番、セシリアが思い悩んでいたことかもしれない。
キョウスケ・ナンブ――。突如として現れ、セシリアの窮地を救

った男。記憶喪失で何も分からない彼。そんなキョウスケに、セシリアはいつの間にか目を向けており、それはいつしか気になる存在へと変わっていた。

どう言い表していいのか、うまく表現は出来ない。だが――彼にこれ以上迷惑はかけられない。不甲斐ない自分を見せたくないという自尊心が、この訓練を行うようになっていたのかもしれない。

だが、セシリアには出来なかった。レビのようにティアーズを稼働させることが。

「……どうした、セシリア？　こんな朝早くから訓練か？」

「……！」

その時、後ろから掛けられた声に対してセシリアはビクッと反応し、何故か直立してしまう。

いきなりの事だったので、彼女も驚いたのだろうか。ただ、声を掛けてきた人物はやや首を傾げながらセシリアを見ていたのだが。

「……セシリア？」

「な、なんでしょうか？　……響介さん」

ゆっくりとセシリアが振り返ると――其処にはＩＳスーツを着用したキョウスケの姿。

突如声を掛けられたせいか、心臓が酷くバクバクと唸っていた。。

（きょ、響介さんが来るなんて……！）

今、一番会いたくなかった相手がキョウスケだった。

いや、自分が密かに特訓している姿を晒したくなかったといった

方がよいのだろうか。それこそ、キョウスケにＩＳを教えている立場上、やや恥ずかしいというのもあるのだが。

「今日は……いや、最近は早いな」

「え、ええ、まあ。もう少しでＩＳ学園の受験ですし、早いうちから調整をしておかなければなりませんから……」

やや視線を彷徨わせ、苦し紛れのような、それとも理にかなったような事を言い出すセシリア。

ただ、キョウスケはその事に対してそうか、と一言だけ返す。そして、彼は自分の愛用機であるアルトアイゼンを展開する。

「では、俺も早朝訓練に入る。また、朝食でな」

「……。ええ……分かりましたわ」

満面――とはいえないが、微笑んで返すセシリア。

そんなセシリアの様子を見るや、キョウスケは機体のバーニアを噴かして向こう側へと行ってしまう。

あそこには大倉が開発した小型戦車がある地帯であり、どうやら朝からドンパチとやるみたいである。

「……」

キョウスケの後姿を見送りながら、セシリアは左手を胸に当てた。

――果たして、セシリアはキョウスケになんといって欲しかったのだろうか。

「気にするな」といって欲しかったのか。「頑張れ」と励まして欲しかったのだろうか。

「響介さん……わたくしは……」

乙女心というものは、複雑だ――――。

＊

俺がこの大倉研究所に来てから、早二週間が過ぎようとしていた。
来る日も来る日もＩＳの訓練に追われ、少しでも操縦技術の向上を狙う。早朝の訓練も同様だ。
それに、前回の襲撃者――レビ・トーラーのような人物たちがいつ現れてもおかしくない状況下でもある。
大倉曰く、レビの属している組織名は俗に『混沌（カオス）』と呼ばれていることが判明した。
どういった目的で動いているのか、一切不明の団体。構成員も謎に包まれているそうだが、大倉は偶然にも彼らの情報を掴むことに成功し、密かに調べていたらしい。
――もっとも、大倉もレヴィ・パウレスが混沌（カオス）の構成員だとは分からず、後手を取ってしまったらしいが。…果たして、本当にその通りなのかは知らんが。

「どったの、南部君？　相変わらず考え事？」

「……そんなところです」

場所は大倉研究所・中央研究室。相変わらず機械音が鳴りやまない場所でもある。

その研究室にいた大倉は俺の方をちらと見て言葉を掛けてきたが、俺はそう返した。

……相変わらず、というのが少しばかり引っかかる感じはするのだが、それはいい。大倉もすぐさま顔を正面に戻し、眼前にある物を眺め始めた。

大倉の眼前にある物――それは必然的に俺の目の前にも同じ物があるという事だ。

見てくれは、何かの武装。青色を基調とした代物で、形は長方形。中心よりも少し左に武装のそれよりも少し水色になったようなものが存在し、その少し上には持ち手も存在する。

一体何の武装だ…？　と俺はそれを見て疑問に思う。

大倉曰く、『射撃も格闘も全部一つでやれる十徳ナイフみたいな代物だよ』といっていたが、形を見ただけではどうもピンと来ない。どのように扱うかだけでも見る事が出来れば、対処も変わってくるのだが。

「ガナリー・カーバー出来た～？」

「勿論ですぜ、博士！　この通り、しっかりとした物に出来上がりましたぜ！」

「うんうん、僕の頭の中で描いた通りの武装だね。流石は田中君、いい仕事するね～」

珍しく大倉は褒めたかと思えば、整備士の田中さんはへっと鼻を鳴らす。

彼は整備課の人間でありながら、武装の開発も担当するという。まさに大倉にとってはなくてはならない人物であり、その仕事も完

壁だ。
俺も一度アルトを彼に見せたが、返ってきた時は素晴らしく調整がなされており、俺はアルトを起動したときに彼に対して感服した。
セシリアも同じだったらしく、今までよりもブルー・ティアーズの調子が良くなったといっていた。果たして、どんな事をすればこうなるのだろうか。是非ともご教授願いたいものだが。

「おっと、南部君の事を忘れていたよ。ほれ、こっちこっち」

大倉が手招きしながら俺を呼び寄せるので、俺はそれに黙って従う。
別にそれが嫌だという訳ではない。俺としてもこの武装の事は知っておきたいというのもある。知識欲と同時に、何か記憶を取り戻すヒントになればいいのだが――それは流石に難しいか。
ともかく、俺は大倉の横に立つと、その武装――ガナリー・カーバーと呼ばれる武装を拝見することにした。

「これがガナリー・カーバー……ですか」

「そ。これは日本政府から依頼された武装でね、バルゴラっていうＩＳへ搭載予定なんだ。でも、これ見た目以上にスペックが滅茶苦茶高くてね～、全然量産できないんだよ。量産されれば、それこそこれ一つで近接格闘から長距離支援まで出来るんだけどね」

……それはまさに、ＩＳの展開や収納に頼らずにこれ一つで全ての状況下で戦う事が出来るという事を意味している。
状況に応じて武装を展開するものが一般的だが、これはその全てが詰まっている――そういう事だろう。
ただ、欠点を上げるならば『ガナリー・カーバーさえ破壊してしまえば、対抗武器をほとんど失う』という事だ。

有用性はあるようだが、リスクは高い。だが、使いこなすことが出来れば自身にとっては頼もしく、相手にとっては脅威となるだろう。

其処まで考えたところで、俺は大倉の方を少しだけ見ると、疑問に思っていた事を口に出す。

「それで、これを何故俺に見せたのですか？」

「うん？　特に意味はないけど、もしかしたら同級生になるかもしれないでしょ？　このバルゴラを使う子と」

「……話が読めないのですが」

こいつは何が言いたいのか、俺にはサッパリ理解できなかった。いきなり同級生と言われたところで、意味が分からん。こいつは俺を何処かに飛ばす気なのか？　冗談じゃないぞ。

「あっ、そっか。そういえば南部君に説明してなかったね」

「おいおい、博士。そういう事はさっさと教えておくもんだぜ？」

「ごめんごめん、すっかり忘れてたよ」

頭を軽く掻きながら、田中さんに答える大倉。

しかしまた、こいつは何を言い出すつもりなのだろうか。俺が黙ってその場に立ち尽くしていると――大倉は俺に対し、こういってきたのだ。

「君、ＩＳ学園に通って見ない？」

「……は？」

……いきなり言われたところで、全く状況が飲み込めないんだが。
ＩＳ学園に通ってもらう？　何故だ？　理由が全く分からん。
こいつは本当に……俺に何をさせたいというんだ？

「意味が分からないのですが…？」

「だから、今年の春からＩＳ学園に通ってもらいたいんだよ」

「……何故です？」

「だって、君……ＩＳ動かせるじゃん」

是非もない。
それに、前にセシリアから説明を受けたが――ＩＳ学園というのはＩＳに関しての専門機関であり、世界でたった一つしかない場所。
ＩＳの全てが学べるらしく、此処に入学すればとりあえずの将来は安泰だとも言われているらしい。ただ、ＩＳを動かせるという事で当然女子しかいない。
……そんな場所に俺を放り込むつもりか、こいつは。

「うん、その通りだよ」

「……」

大倉の言葉に、俺は絶句せざるを得なかった。
何故考えが読まれた？　という事など最早どうでもいい。少なくとも、俺にそういった趣味はない。

「男の憧れ、女子高に入学できるなんてまさに夢のようじゃないか！　その権利を君は持っているんだよ、南部君！」

「……」

俺の方に人差し指を向けながら豪語し始める大倉。人に指を向けるな。

しかし、正直言ってあまり嬉しくはない。誰が好き好んで女子高に転入したがるというんだ？

ＩＳの事が学べるのは大いに歓迎だが、場所が女子高ではな…。俺以外全員女子？　笑わせてくれる。

「却下します」

「残念でした。もう願書は提出済みで、政府にも連絡済だよん。明日君の様子を見に来るってさ」

「……初耳ですよ、それ」

「だって今言ったし。それに専用機持ちだからね、受験こそするけど受かったも同然だし。気楽でいいからね～」

「……はぁ」

思わず零れてしまう溜息と、何故か頭痛がしたために頭を押さえた。

どうしてこいつは何の相談もなしにポンポンと事を進めていくのだろうか。呆れて何も言えん。

「でも、デメリットばかりじゃないでしょ？　ＩＳに関しての専属

機関で学べるってことはさ」

「……そうですね」

「ははっ、流石のお前でも博士には勝てないな」

ガハハと笑う田中さんの笑い声が、妙に耳に残った。

と、もう一つ聞きたいことがあるのを忘れていた。俺は真面目な表情に戻し、大倉の方を見る。

「……ん？　まだ何かあるのかい？」

「……セシリアのブルー・ティアーズについてです。相当、思い詰めているようでしたから」

「……なるほどね」

俺の発言に、大倉はふふと鼻で笑ってきた。

だが、その表情は先ほどのようなどけた表情は微塵もない。俺と同様に至って真面目な表情を浮かべており――そして、横目で俺を見ながら口を開いた。

「先日の強奪事件での事、まだ引き摺ってるの？　彼女はさ」

「……それは当然だと俺は思います。目の前で自分以上の操縦をされた以上――思い詰めるのは仕方がないものだと思いますが」

「そんなものかねぇ…」

はぁと嘆息し、腕組みをしながら壁に寄り掛かる大倉。背中を壁

へと預け、その顔をゆっくりと天井へと向けた。
そんな様子の大倉に対し、俺は黙って奴の方を見ているだけだ。
…別に、大倉に期待している訳ではないのは確かだ。
ただ、解決の糸口になれるような事が出れば、少しはあいつの足しになれるとは思うのだが――そううまくはいかないか。

「ま、僕らがとやかく言ったところで、彼女は聴こうとはしないよ。努力家ってのは、自分自身で答えを導き出すものさ。まさしく彼女の事だと僕は思うけどね」

「しかし……」

「他人の都合に押し入ろうなんて、君らしくもないよ。いや――それこそ、僕が口を挟む事でもないんだけどね。ま、答えは簡単だと思うけどね……。彼女のＩＳの本当の意味さえ分かれば、次のステップに進むことも造作ではないよ。それこそ、一から二へと進むように……彼女とティアーズも、ね。勿論、君も同じだけど」

「……」

次のステップ……。それは、セシリアがまだ伸びるということを確実に示している発言だった。
果たして、大倉はどういった事を頭に思い浮かべているのか――俺には分からん。
だが、大倉のいう事も一理ある。見守るという事も、必要な事であるのだろう。

もっとも、俺に言えたようなことではないのだが――。

＊

「響介さんもＩＳ学園を受験なさるというのは本当ですか！？」

「……半ば強引にだが。それに、考えてみればこの研究所でいつまでもくすぶっていてもどうしようもないからな。それから、近いんだが」

「そんな事は、今は関係ありませんわ！　響介さんが受験するというのですから！」

「……そうか」

その日の夕方、一日の訓練を終えた時の会話だ。セシリアが形相を変えて迫ってきたので、俺はやや引きながらもそう返した。

最初こそは冗談じゃないと本気で思ったが、考えてみればこの研究所以外に俺の行く場所は何処にもない。

残っていたところで、新型武装の性能を試すための実験台が関の山だろう。様々な武器にこそ触れるものの、どうも物足りない。

それに、ＩＳについてもっと深く学べばなにかしら記憶を取り戻すヒントになることもあるかもしれない。そう思ったからこそ、俺は意を決した。

――――もっとも、逃げ切れるような状態じゃなかったというのも理由の一つに入っているのだが。

「それに、前回の襲撃のような例もある。これ以上博士たちに迷惑

は掛けられん」

「確かに、そうですわね…」

混沌（カオス）の狙いは、どういう訳かＩＳだった。

俺やセシリアが此処にとどまることで、前回のように博士たちが襲われる危険性もある。

それよりもＩＳ学園に向かった方がセキュリティもしっかりとしたものになっているし、そう簡単に侵入されないような作りになっているという。

世界最高峰のセキュリティレベルを誇るらしいので、それくらいは当たり前か。レビと当分戦えないのは癪だが、この際仕方がない。

「それに、お前もいる。一人で突っ込むのは流石に分が悪すぎるが、知り合いがいれば心強い」

「……響介さんにとって、わたくしは知り合い程度の存在ですのね……。はぁ」

「何か言ったか？」

「…なんでもありませんわ」

何事かを呟いたかと思えば、今度は俺から顔を背けるセシリア。

…意味が分からん。

最近になり、セシリアはこうした態度がやけに増えた。不機嫌になった証拠らしいが、全くもって理解不能だ。

大倉は『乙女心が分からないね～、南部君は』などといっていたが。乙女心？　……悪いが、興味がないのでな。

「まったく……わたくしの気も知らないで……」

「……なんだ？」

「なんでもありませんわ！」

「そうか」

今度は怒鳴られた。益々わからん。

と、そんな時。俺はふと思い浮かんだ事柄を率直にセシリアに尋ねる。

「なあ、セシリア」

「……何ですの？」

「ＩＳ学園の受験の項目は……何だ？」

「はい？」

俺の質問に、セシリアはポカンとした表情を浮かべた。非常に間抜けそうだったが、特に何もいうことはしない。

しかし、今の俺にとっては気になる事柄。ＩＳ学園の入試は一体何をするのか――疑問で仕方がない。

筆記試験があれば死活問題だ。何も分からんぞ。それは冗談でもなんでもなく、本当の事だ。

「そうですわね……。わたくしが聞いた話によると、午前は筆記試験、午後からはＩＳの適性試験が主らしいですわ」

「ＩＳの適性試験？」

「適性がない方はすぐに撥ねられるようですから。一般の受験生は大抵それで落とされますわね」

それはまた…シビアな世界だ。

まあ、ＩＳの適性が低いにも関わらずＩＳ学園に来るというのがそもそもおかしいのだが。ＩＳを学びに来ているのに、ＩＳをまともに動かせないのならば話にすらならない。

そのことからも学園側も適性の高い者を優先して取りたいというのもあるだろう。将来的にＩＳに関する技術者や操縦者を出すのならば尚更だ。

しかし、やはり筆記試験も存在するのか……。まずいな、これは。

「試験内容は？」

「筆記試験は中学までの復習と応用問題。実習の方は稼働から操縦、基本動作が主ですわね。それから学園の教師方との模擬戦もあるという事ですが、そう簡単に勝たせてはくれませんわね…」

ＩＳ学園の教師と言えば、それはもう化け物クラスの人間が数多くいるのだと……思われる。

しかし、その程度か。これくらいならばなんとかなりそうだが…

…少しばかり味気がないような気もするのだが。

「だが、試験内容が薄すぎないか？」

「なんでも試験会場の時間制限があるそうで、短時間で進めなくてはならないらしいですから。ただ、代表候補生などはほとんどスルーパスのようなもののようですが」

つまり、セシリアは受かったも同然という訳だ。いや、それも当然か。

イギリスの代表候補生で、専用機持ち。専用機持ちの人間が不合格になる筈がないのだ、常識的に考えて。

「羨ましいな、セシリアは」

「いきなりどうしましたの、響介さん？」

「いや……。それよりもセシリア、俺に勉強を教えてくれ」

「……はい？」

「頼む」

「ま、まあ、響介さんがそう仰るのでしたら構いませんわ。その、今日からですの…？」

「当然だ。まずい事に、勉強しなくてはどうしようもなさそうだからな」

言い切る俺だが、先ほども言ったように冗談でもなんでもない。実際、今からでも冷や汗ものだ。正直に言えば、少しばかり焦る事態になりかねん。

「響介さんと密室で二人っきり……。こ、これは、その……」

「……？」

何故か赤面しながらいやいやと顔を振り始めるセシリア。……一体何を想像しているのだか。

しかし、俺は汗だくになった体をサッパリさせたいという気持ちもある。妄想に耽っているセシリアに踵を返し、歩き始める。

「では、また後でな。勉強の件はすまん」

「二人っきり……二人っきり……」

「……なにか言ったか？」

「な、なんでもありませんわ！」

……何故か強く否定された。この会話もこれで三度目か。だが、聞こえないものは聞こえないので仕方がない。

それはともかく。俺は少しばかり体を休めるためにその場を後にする。

ただ、考えていることは勉強の内容についてだったが――――果たして、大丈夫だろうか？

第十話　入学（前書き）

三十日までに間に合わなかった……ｏｒｚ

試験編はカットし、今回から原作突入。それからこれから夏休みにも突入します故、その期間だけは少々更新スピードを上げて行きますのでよろしくお願いします。

感想、ご意見などお待ちしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

では、長くなりましたが本編をご覧ください。少々短めですが……。

第十話　入学

車内――黒い一台の車が、日本のとある場所を走行していた。
どうにも豪華な、それこそリムジンを思い浮かべられるようなやや縦に細長く、その車内も普通の車とは訳が違う。
そんなどうにも金持ちが乗りそうな車の中に、キョウスケはいた。
指を絡ませ、前方にやや体重を乗せたような姿勢で座っている。
それでも車は走っていることも忘れてしまうかのように走っており、その言葉はまるで快適としかいいようがない。
だが、キョウスケもキョウスケでそんな事など気にはしない。
いや――そんな事よりも、これからキョウスケが向かう先の事の方が、最優先事項だったか。

「……」

「緊張しているのですか、南部君？」

「いえ……いつもの事です」

その前方に座っていたスーツを着た男がやや心配したように声を掛ける。
しかし、キョウスケはそのままの表情、姿勢で自分は大丈夫だと返す。事実、緊張などはしていないのは確かだ。
ただ、考えるだけで少々げんなりしてしまう――というのは否定できないのだが。

「そうですか、それはよかったです。しかし、貴方も幸運ですね」

「…何がですか？」

「まさか男の貴方があの学園――世界に誇れる機関の一つ、ＩＳ学園に通う事が出来るとは。私としては羨ましい限りですよ」

「では、変わりましょうか？」

「はは、ご冗談を。私はそんな歳でもありませんよ」

「……」

キョウスケの冗談とも本気とも取れる言葉だったが、その男は軽く右手を振りながらやんわりと否定する。

この男、名を沢渡健二といい、日本政府におけるＩＳ部門最高責任者だ。

ＩＳに関する軍事や管理を担当しており、その手腕は世界からも評価されている。ただ、立場が立場な為、気苦労することも多いと本人は苦笑している。

そんな重役とキョウスケが何故一緒にいるかといえば――事は一か月前。大倉の言った『君、ＩＳ学園に通って見ない？』という言葉が全ての始まりだった。

なんでもレビとの戦闘によって、混沌（カオス）と呼ばれる組織に事実上マークされたといっても過言ではなく、研究所に置いておくにはリスクが高いと判断された。

だからこそ、彼をＩＳに関する専門知識が豊富な学園に通わせ、且つ保護を兼ね揃える為だという。勝手にポンポンと事が決められ、キョウスケとしてはやや眉を寄せたが、異を唱えたりはしなかった。

そして、一定の試験を受けた為、こうして此処にいる。いや、試験など受ける必要こそなかったのだが、形式上そうしなければならないというのもあったため、止む無しといったいいか。

もっとも、その試験場において専用機『アルトアイゼン』を駆り、

試験官の教員とかなりの激しい勝負をしたというのもあり、その勝負を見ていた沢渡も見入っていたというほどらしい。

「しかし、あの時の勝負は私としても久しぶりに興奮しましたよ。相手は、かの有名なＩＳ学園の教員で、おまけに有能と噂のエドワース・フランシィ教員。機体こそフランス製のラファール・リヴァイヴでしたが、初手の動き、そして近接格闘戦や相手に間合いを取らせない突撃戦法は見事なものでしたよ」

「……無我夢中でやっただけです」

「それこそ、貴方の実力ですよ。自分の機体の事をよく理解し、長所を生かしながら的確に動くことが出来る。それこそ、今のＩＳ稼働者に求めている一番の課題ですから。貴方はそれを理解している。――怖いくらいにね」

「……」

沢渡の口元がやや吊り上り、やや面白そうなものを見るかのような視線がキョウスケに突き刺さる。

しかし、当のキョウスケはやや視線を下に移した。沢渡に言われ、あの時の事を振り返る。

（……ただの奇襲戦法だ。それに、アルトの突撃を初見でどうにかすることは難しい事もある）

それこそ、自分でも少々驚いたほどの加速力だ。あれを初見でどうにか出来る事の方がおかしい、といっても過言ではないが――。

ただ、まだまだアルトを使いこなしているとは言いにくいとキョウスケ自身が感じていた。まだまだ、こんなものではないと。

（それも、今から上達できればいいのだが……）

アルトの事をもっと知り、その上で運用する。

まだまだ、伸びが期待できると踏んでいたキョウスケの考えはそれにつきた。

「ああ、それから。学園の方でフランシィ教員を見かけたら、ぜひ声を掛けてあげてください。彼女も喜ぶと思いますから」

「…何故です？」

「なんでもです。それから、彼女は今現在彼氏募集中らしいですよ。立候補してはどうですか？　それに、噂通り美人ですし」

「何を期待しているのですか、貴方は…」

やや呆れたような視線を沢渡に送るが、当の沢渡はニコニコと笑顔を振りまく。

全く、一体どうして教員に手を出そうなどと出来ようか。キョウスケはやや視線を下げ、彼から顔を背けた。

「はは、冗談ですよ」

「そうは聞こえないのですが……」

「そうですか？　と、そろそろ到着するようですね」

軽く笑いながらも、沢渡は窓の外を見るとそう報告してくる。

キョウスケもその言葉に従い、後方にあった窓から外の景色を

眺める。まるで巨大な施設のような場所が目の前に存在し、自然とキョウスケの表情も引き締まってゆく。

「いい表情ですね、南部君」

「さて……どうですかね」

沢渡が言ってきたが、キョウスケはただ視線を窓の外へと向けたままであり、これからこの学園で過ごすことを考え――静かに拳を握るのだった。

＊

ＩＳ学園の入学式も無事に終わり、俺は割り振られた教室へと来ていた。

俺へ割り振られたクラスは、一年一組。なんともまあ、狙ったかのような振り分けだと俺は思ったが、ぞろぞろとクラスメイト達が入室していく姿を見て、俺も教室へと入る。

その瞬間――俺が入ってきたと同時に、クラス中の生徒たちの視線が俺へと集まった。いや、当然の事であろうが。

「ねえねえ、あの人って噂の男子の一人よね？」

「うんうん、確かそうだよ。一緒のクラスでよかった！」

「うわぁ、髪にメッシュをいれてるなんてオシャレね～」

……などとそわそわした声も聞こえてくるが、俺は即座に自分の席を目指し、座る。

やはり、この空気には慣れることはない。周りを見渡せば、其処にいるのは全て女子。男は――今はいない。

いや、それも当然か。この学園はいわば女子高であり、俺は無理やり入れられたも同然。おまけに教員までもがすべて女で構成されているのだという。

一般からすれば夢のような場所だが、いざ入れられて見ると相当なものだ。未だに視線は俺へと集中させられ、逸らそうにも場所がない。

予想していた事態ではあるが――いざ目の前でそうなってしまうと、返す言葉もないとはこの事だろうか。

俺は諦めたように溜息を吐き、頬杖を作る。そんな時、誰かが近づいてきた気配を感じ――そちらの方を振り返った。

「セシリアか。久しぶりだな」

「ええ。お久しぶりですわね響介さん。わたくしもこの一年一組ですから、これまで以上に宜しくお願いしますわ」

「それは此方こそだ。お前がいてくれれば、多少はマシだからな」

それは本心だ。

こんな場所に一人で投げ出されるより、知り合いがいれば多少はマシになる。それに、セシリアは大倉研究所でも一緒に訓練していた仲だ。

ただ、時というのは早いものだ。こうしてセシリアと会うのは、二週間ぶりか。大倉研究所から政府の保護下に移された事で、必然的に彼女とも別れたのだが――再会できると信じていたため、それ

ほど悲しむことはなかったが。
それに、セシリアとはメールのやり取りも行っていた。通信手段が消えたわけではなかったため、それほど気にはならなかったが。

「あの子、彼の知り合い？」

「私見たことあるよ。確か、イギリスの代表候補生でモデルもしてるし」

「イギリスの？　それにしてもいい雰囲気なんだけど……」

またしても周囲がひそひそと話してくるのが聞こえるが、当のセシリアはフフッと嬉しそうに顔を綻ばせ、自慢げに周囲を見やる。
……何が楽しいのかは不明だが、気にしない方がいいのだろう。
俺はややセシリアから視線を逸らし、前方を見やる。
と、前方を向くと同時にとある女子に目が行った。
髪は黒に近い茶髪で、すらっとした印象。ただ、俺の方をチラチラ見てきているが、俺が彼女の方を軽く見るや、気付いたのか慌てて顔を前にやった。
その様子に俺は首を傾げるが、その時誰かが俺の前に来ると、バンと軽く机を叩いた。

「響介さん、わたくしを無視しないでくださいますかしら？」

「……知らん」

「知らん、じゃありませんわ。折角こうして会えたというのに、冷たいですわね……」

「……知らん」

「もぅ……」

一体何が不服なのか、セシリアは腕を組みながら口を尖らせる。
ただ、今の俺にはあまり相手にする元気というものはなく、相変わらず頬杖をついているのだが。
そんな折、教室のドアが開かれて二人の人物が入ってくる。一人は眼鏡をかけており、その手に出席簿のようなものを持っている点からして、教員の一人であろう。
そして、もう一人は――男、だった。俺と同じように周囲から視線を向けられ、やや恥ずかしそうに頭を掻いたが、すぐさま自分の席へと座る。
おまけに何の因果か、一番前の中央席というまるで仕組まれたような席だった。これには同情せずにはいられないが、俺はそれよりも俺以外に男がいるという事の方が驚きだった。

「俺以外にも男がいる……？」

「響介さんは知らされていないのですの？」

「いや、特には。……何があった？」

セシリアの呟きに、俺は改めて彼女に視線を送る。
沢渡は特に何も言ってこず、俺としてもこれは流石に意外だった。
入学式もどうやら場所は離れていたようで、会ってはいない。

「響介さんとは別に、二人目が発見されたとニュースで言ってましたわ。恐らく、それがあの方なのだと思われますが」

「……なるほど、俺以外にもＩＳを動かせる奴がいたという事か。

奇遇だな」

それはそれで、面白い事だ。俺もそうだが、イレギュラーが二人もいるとは……何の因果やら。

その矢先、パンパンと手を鳴らしたような音が聞こえたかと思うと、先ほどの教員らしき人物が正面に立っており、にっこりと微笑みを浮かべながら口を開く。

「はい、皆さん席についてください。ＳＨＲ（ショートホームルーム）を始めますよ～」

教員の言葉に、それまで話し込んでいた女子たちは一斉に自分の席へと戻っていく。

その道中、俺の近くを通るものはどうしても俺の方に視線を向けていただが……仕方がない、の一言で済ませる。

「では、響介さん。また後程」

「ああ」

踵を返して席へと戻っていくセシリアに、俺は軽く手を上げて返す。

セシリアも先ほどの教員と同じようににっこりと微笑み、やや嬉しそうにしながら自分の席へと戻ってゆく。その後姿を見送り、俺は再び前の方を向いた。

「はい、皆さん席につきましたね。私の名前は山田真耶といいます。このクラスの副担任という立場ですが、皆さんどうぞよろしくお願いします」

ペコッと頭を下げる教員――いや、山田先生。しかし、顔を上げ

ると共にかけていた黒縁眼鏡も少々ずれていた。
よくよく見てみると、どうにも服のサイズがあっていないようにも見え、本人がやや小さく見えてしまう。背伸びしたい子供、という印象が浮かんだが、曲がりなりにも教師という立場上、そう見せたいのだろう。
ともかく、山田先生が自己紹介したのだが――教室内は静寂で包まれている。
誰一人として、先ほどのようにベラベラと話すわけでもない。反応というものが皆無であり、これには山田先生も顔を引きつってしまっていた。

「そ、それでは簡単な自己紹介をお願いします。えっと……まずは…アイビスさんからお願いしますね」

顔を引きつり、うろたえながらも声を絞り出す山田先生。いきなり災難だな、と俺は思うが――これればかりは仕方のない事だろう。
しかし、自己紹介か…。何を言えばいいのか分からないのだが。
しかし、山田先生の言葉通りに自己紹介は始まり、まずは一人の少女がゆっくりと立ち上がる。

「え、えっと……あたしはアイビス・ダグラス…です。一応、アメリカの代表候補生で、その……と、ともかく、宜しくお願いします！」

何処か緊張した様子の少女――アイビスだったが、皆から拍手を受けたことで胸をなでおろす。
アイビスと名乗った少女――何故だろうな、何処かで見た事があるような気がしてならない。
必死になって思いだそうと考えるが――無理だった。見覚えがある筈なのに、どうしてもそれが浮かんでこない。摩訶不思議な現象

だ。

しかし、俺がこう思うのならば、あのアイビスという人物は俺の事を知っているのではないか？　という僅かな希望も生まれてくる。後で話を聞くのも悪くはないと思い、一旦頭の片隅へとやる。今は――俺の自己紹介をどうするのかを決める方が先だ。

さて、本当にどうするか……。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

俺が考えているうちに、どうやら自己紹介の出番は俺以外の男――名を織斑一夏というらしい――に順番が回っていたようだ。

しかし、唐突に声を掛けられたために織斑は素っ頓狂な声を上げてしまう。その声はクラス全体に響き渡り、今まで緊張感に包まれていた教室内ではあったが、くすくすという微かな笑い声が聞こえる。

これは流石に恥ずかしい事であり、先ほどから何処かそわそわしていた織斑は、やや慌てたように山田先生の方を見ていた。

しかし、当の山田先生もかなり慌てており、織斑の方を見ながら身振り手振りを交えながら声を出す。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？　ゴメンね、ごめんなさい！　で、でも、自己紹介の順番が次は織斑君の番だから、自己紹介してくれないかな？　だ、駄目かな？」

かなり焦った様子が此方にまで伝わってくる。本当にこの人が副担任で大丈夫なのか、という微かな疑問が脳裏を過るが、今はいい。

しかし、山田先生の慌てっぷりには織斑も唖然としていたが、や

や笑顔を見せながらやんわりと彼女をなだめ始めた。

「えっと、そんなに謝らなくても……自己紹介しますから、先生も落ち着いて下さい」

「ほ、本当ですか？　本当ですね？　先生、この耳で聞きましたからね！」

勢いよく顔を上げた山田先生は。大事な事を尋ねるようにするような感じで織斑に詰め寄る。

これには織斑も先ほどの山田先生のように顔を引きつるが、やるといったからにはやるしかないと思ったのか、アイビスと同じようにゆっくりと立ち上がる。

立ち上がったところで、ゆっくりと周りを見渡す織斑。周囲の女子は彼がどんな事を話すのだろうと期待に満ちたような視線を送っており、織斑としては益々喋りにくくなっているに違いない。

と、その時。俺と織斑の視線がばったりとあった。

表現的におかしいかもしれないが、こういうほかに言い方はない。互いに見合う形になった訳だが、何故か織斑は俺を見た瞬間に目を見開き――力を込めて拳を握る。

その様子に、俺は眉を寄せる。確か、織斑とは初対面の筈だ。別に因果をつけられるようなこともしてはいない。

しかし、織斑から感じる事が出来る明確な“敵意”に似た何かを、俺は感じ取っていた。いや、敵意ではないな、これは――――。

「あ、あの、織斑……君？」

心配そうに織斑を見ながら声を発する山田先生。

だが、織斑の耳に山田先生の言葉は聞こえてはいないのか、ただ俺

の方を見ており――奥歯を食いしばる。

「……んで……だよ……」

「……？」

「なんで……アンタが此処にいるんだよ……！　アンタは、あの時に……」

ギリッと、歯を噛みしめる音が聞こえる。

それと共に、ただならぬ雰囲気が俺と織斑の間に漂うが――正直なところ、首を傾げるしかない。

いや、織斑も俺の記憶に関わる一人だと考える事が妥当なのだろうか。

そんな途方もない事を考えていた俺であったが――織斑の発言に、俺は眉を寄せることになる。その発言とは――これだ。

「なんで……なんでアンタが生きてるんだよ、響介さんっ！」

教室内に、信じられないような言葉が響き渡るのだった――。

第十一話　勘違いと流星と（前書き）

今回は過去最長の長さになります。どうぞお付き合いください。

第十一話　勘違いと流星と

張りつめた空気が教室内に漂い、静寂という言葉が支配していた。
原因となったのは、織斑一夏の一言。これ以上ないくらいに俺を睨めつけており、俺もまた返すように一夏を睨んでいた。
若干の殺気が織斑から感じられる。今すぐにでも殴りかかってきそうな織斑であったが、拳を力強く握ることでなんとかセーブしているようにも見えた。
そんな織斑が、俺に向かって再び口を開く。

「どうして、今まで黙っていたんだよ……」

（……どうにも話が見えんな）

なにか、俺の事を知っているかのような発言。
黙っていた？　生きていた？　――聞いているだけではさっぱり分からん。
しかし、もしかすれば過去の俺の記憶を持っているのかもしれないという微かな希望も生まれてくるが――現状ではそんな事を言っている場合ではないのは明らかだ。

「アンタは…響介さんは、二年前の飛行機事故で死んだって……。それで、千冬姉がどれだけ泣いたか知ってるのかよ！　それに、アンタのおかげで千冬姉はＩＳにも乗れなくなった……！　響介さんを守る事が出来なかったって……思い詰めて……。それなのに、アンタは……！」

「……」

俺から目を逸らし、視線を伏せる織斑。
俺はただ黙って織斑の方を見ていたのだが――すまないとは思うが、何も分からん。
記憶を失う前――俺は、何処で何をしていたんだ？　織斑を……知っているというのか、俺は？

「なんとかいえよ！　まさか、覚えてないとは言わせないからな！」

「……残念だが、その通りだ。俺は、お前の事もお前の姉の事も……知らん」

「……は？」

ようやく口にすることが出来た言葉だったが、織斑は内心かなり驚いたような表情で再び俺を直視してくる。
だが、俺は嘘を言っていない。これは本当の言葉だ。
ただ、いきなり知らんと言われて織斑が納得する筈がない。
限界まで眉間を寄せ、遂には早足で歩き始めたかと思いきや、俺の正面へと移動してきた。

「なんだよ……。なんだよ、それ。冗談だよな、響介さん……？」

「知らないものは知らない。それに、俺と前は初対面の筈だが？」

「ふざけんな！」

すっかり激昂してしまっている織斑が俺の胸倉を掴み、怒りの表情を俺に向けてくる。
かなりの怒気が織斑から伝わってくる。それほど、俺の発言が頭

にきたという証拠であり、その面は仕方がない。
だが、当の俺は何も思い出せないのが現状だ。過去のフラッシュバックは愚か、こうして言ってくる織斑の事も――思い出す事が出来ない。
しかし、織斑は俺の事を知っている。それに対し、俺が知らないというのは普通に考えておかしなことだ。
――なら、俺は一体誰なんだ……？

「お、織斑君！？　何があったのかはわかりませんけど、乱暴は「先生は黙っていてください！」……ふぇぇ」

もはや涙目にするしかない山田先生。いや、先生としてもいきなりすぎる出来事に戸惑っているのだろう。
あたふたと落ち着きがなくなり、言葉を掛けようにも勇気を振り絞れず慌てふためく山田先生の姿を見て、もはや自分でどうにかするしかないと悟る。
今にも殴りかかってきそうな織斑を見ながら、俺はこの状況をどう打破しようかと思考を巡らせようとした瞬間――教室のドアが盛大な音を立てて開いた。
その瞬間、威圧感に近いものが流れだし、その人物がゆっくりとした歩調で歩いてきたかと思えば、織斑と俺の方を見ながら、怒気の籠った声で呟く。

「……ＳＨＲ（ショートホームルーム）早々から何をやっているんだ、お前は？」

「――――！？」

その声を聴くと同時に。今まで激昂していた筈の織斑の表情が固まった。
一体どうしたのだ？　と俺は内心で首を傾げるが、織斑は俺の胸

倉を掴んだまま硬直し、何か嫌な汗をかいているようにも感じられた。

（……なんだ？）

いきなり固まった織斑を見ながら、俺が持った感想はこれに尽きる。

その間にも、教室に入ってきた何者かは俺と織斑の方に近付いてくる。ややゆっくりとした歩幅であったが、その音が近づいてくると同時に織斑の手が若干震えてくる。

静寂が支配した教室の中、その靴音だけが鳴り響く。そして、その音が止まったかと思えば――パァンという激しい音と共に、織斑が崩れた。

「いっ――――！」

「馬鹿者が……。公の前でその話をするな。……幾らこいつが“あいつ”に似ていようと、絶対にな」

「で、でも……って、千冬姉！？　ど、どうして此処に……？」

なにやらいきなり現れた人物――黒いスーツを着用した女性だ――と織斑は知り合いらしい。いや、織斑が千冬姉といった時点で、この人が先ほど織斑が言っていた千冬という人なのだろう。

しかし、織斑の姉がどうしてこのＩＳ学園にいるのか？　という疑問が織斑にあるらしく、俺の時への怒りは何処へ行ってしまったのか、千冬さんを見ながら首を傾げていた。

そんな時、俺と織斑の争いを止めようとしていた――が、結局何も出来なかった山田先生が、千冬さんの方に小走りで近寄ってきたかと思うと、先ほど同様若干の涙目ながら安堵した表情を浮かべ、

口を開いた。

「お、織斑先生～！　あ、あの、私、どうしたらいいのか分からなくて、その……ご、ごめんなさい！」

「ああ、構わない。それより私の方こそ済まなかったな。――予想できた事態だったが、少し疎かに考えていたようだ。私の方こそ謝ろう」

山田先生がブンブンとこれ以上ないくらいに頭を下げる中、千冬さんは織斑にかけた時とはまた違って優しげな声で彼女をなだめる。だが、驚かない方がおかしいのは織斑の方だ。姉が先生と呼ばれた時点で心底驚いていたようだが、まるで聞いたことがないような声質にも驚きを隠せないらしい。

「せ、先生……？　千冬姉が……？　え？　これなんてドッキリ？」

「寝言は寝てから言え。それから私は“織斑先生”だ。いいな？」

「は……？　えっと、意味が分から「二度も言わんぞ」……はい」

どうやら姉には頭が上がらないらしい。頭を下げ、早々と敗北宣言を告げる織斑。いや、これはこれで当然の事か。

そんな織斑の反応を見終わり、今度は俺の方をちらりと見てきた千冬さん……いや、織斑先生。

しかし、すぐに俺から視線を逸らし――織斑の肩を掴むや、自分の席へと引っ張ってゆく。

「痛い、痛い。千冬姉、痛い！」

「織斑先生だ。何度も言わせるな」

「いや、それとこれとは話が別で……いてっ！」

またしてもパァンという乾いた音が鳴り響く。

気の毒だとは思うが仕方がない。

それよりも――俺は先ほどの千冬さん――――いや、織斑先生の視線の方が俺にとっては気にかかっていた。

（……悲しげ、だった？）

感じたのはそれだった。

悲しみ――いや、どうにも目を合わせる事が出来ない、といった方がいいか。

堂々とした態度とは裏腹に見せた、俺への態度。――あの視線を見る限り、やはり俺と千冬さん――いや、織斑先生には何らかの縁があったと見ていいのだろうか。

そう考えていた矢先、織斑を自席へと座らせた織斑先生は、教壇の前に立つと、クラス全体を見渡しながらこう言い放つ。

「諸君、先ほど其処の馬鹿の発言から大体予想はついたかと思うが――――私が織斑千冬（おりむらちふゆ）だ。一年間の間だが、この一年一組を受け持つことになる。その馬鹿者とは姉弟の関係だが、だからといって特別扱いするわけではないので安心しろ。さて、話を戻すが、私の仕事はお前達新人を一年で使い物になる操縦士にするという事だ。私の言う事はよく聞き、そして理解しろ。出来ない者には出来るまで徹底的に指導してやるから覚悟しておけ。逆らってもいいが――――その分、後に響くという事は覚えておけ。いいな？」

腕組みをしながら、高圧的態度で言い放ってくる織斑先生。

鋭い視線が生徒たちを射抜き、誰もが声を失う――かと思いきや、それとはまた別に教室中から黄色い歓声が鳴り響いた。

「ち、千冬様！　憧れの千冬様がこんな間近にいるなんて！」

「私、ずっとファンでした！」

「千冬様にご指導いただけるなんて……あぁ、私もう死んでもいい！」

などと各々が甲高い声を発するが、当の織斑先生は軽く頭を押さえ始める。

更にはやや鬱陶しそうな表情を浮かべ、ため息までは放つ。仕草を見る限り、こういうものはあまり好きではないらしい。

「毎年毎年、私の元には馬鹿しか集まらないのか？　思わず感心してしまうぞ。……やれやれ、これだから毎年入学式の季節は好かん……」

本気で鬱陶しがっている様子の織斑先生。

だが、その言葉こそ逆効果だったのだろうか。またしても黄色い歓声が織斑先生の元へと飛ばされる事となった。

「きゃあああ！！！　もっと、もっと罵ってください！」

「それでこそ千冬様！　私たちの憧れの存在です～！」

「……馬鹿が」

またも溜息を一つ零す。しかし、何故ここまで人気なのか、俺に

はあまり分からないのだが。
そのことは後でセシリアにでも聞いてみる事にする。
と、そんな事を考えている時、ＳＨＲ（ショートホームルーム）の終わりを告げるチャイムが校舎内に鳴り、織斑先生はパンと手を叩いた。

「さて、ＳＨＲ（ショートホームルーム）は終わりだ。諸君らにはＩＳについての基礎知識を半月以内で覚えてもらう。その後は実習に突入するが、授業で学んだ事をしっかりと実践しろ。それから、必ず返事をしろ。私の言葉には特に、な」

その言葉と共に、クラスのほぼ全員がはいと大きく返事する。
元気なクラスで申し分ないが、織斑先生は構わずに持ち込んでいた教科書を開き、再び俺達の方を向いた。

「さて、これよりＩＳ基礎理論授業を始める。全員、教科書の三ページを開け」

……どうやら、このＩＳ学園はＳＨＲ（ショートホームルーム）と一時間目の間のインターバルはないらしい。織斑先生の指示通り、周りの女子たちはすぐさま教科書を開いていた。
無論、俺も例外ではない。沢渡さんから渡された教科書を開き、織斑先生の授業に耳を傾ける事にした。

＊

一時間目が終わり一時の休み時間に突入する。

ざわざわと話し声が教室内を浸透していき始めるが、その中でやや早足でセシリアが俺に近付いてくるや、心配そうな表情を浮かべながら俺に言葉を掛けてきた。

「大丈夫でしたの、響介さん!?　お怪我などされてないですか!?」

「……ただ胸倉を掴まれただけだ。問題ない」

心配そうに、そして焦ったようにセシリアが言葉を掛けてきたが、俺としては別になんともないのでそのように返した。

無論、ただ事ではない事は承知している。こうしてセシリアも普段とは違って不安げな表情を見せてきているのが何よりの証拠だ。

そんなセシリアを見て、俺はなんともないと苦笑を浮かべたのだが、セシリアとしてはそうはいかないらしい。

いつの間にか俺の手をその両手で握り、蒼に染まった瞳でまっすぐに俺を直視してくる。

「大丈夫ではありませんわ！　響介さんにこんな事をするなんて……絶対に許せませんわ！」

「……そうか」

其処まで心配してくれるというのはありがたいのだが、これは俺と織斑の問題でもある。

口だし無用――といいたいところだが、そもそも織斑があれほど怒っていた理由がよく分からん。

――俺の記憶になにか関係があるのかもしれないがな……。

「よくもわたくしの響介さんにあのような真似を……！　絶対に、

絶対に許せませんわ！」

……なにやら妙な事を口走っていたが、特に気にはしないことにする。

あの出来事――――例の襲撃の事だ――――の件から、セシリアがおかしな発言をしているのは見慣れているのでな。

「えっと、その……大丈夫？」

「…ん？」

その時、セシリア以外の誰かに声を掛けられたので、俺は其方の方を振り向いた。

其処に立っていたのは、先ほど自己紹介をしていた少女――――アイビス・ダグラス。

彼女もセシリアと同様、心配そうな表情をしながら俺の方を見てきている。

彼女の表情を伺う限り、他の連中とは違って決して物珍しさではない事が分かる。

「お前は……確か、アイビスだったか。俺に何か用か？」

「え？　あ、うん。その、いきなりあんな事があったから大丈夫だったかな？　って、思ってさ…」

……やはり、先ほどの件はかなりまずかったらしい。

アイビスに悟られぬように周りを見てみるが、好奇の視線もあれば困惑の視線も交じっていた。織斑と俺の間、そして織斑先生の間で一体何があったのか――という事が一番の理由だろう。

――――妙な噂が流れなければいいのだが。

と、其処まで考えたところで俺はアイビスの方に視線を戻す。そして、やや苦笑を浮かべながら彼女に言ってやった。

「心配するな。俺もいきなりの事で驚いたが、怪我をしたわけじゃない。……実を言えば、俺も戸惑っているのだが」

「そうなの？」

「ああ」

俺が頷くと、アイビスは意外といった表情に変わった。
いや、誰もがそのような反応をするのも当たり前だろう。
先ほども知らんと言ったが、果たしてそれが本当の事なのかは定かではないからな。

「……響介さん？　わたくしの事をを無視してません？」

「気のせいだ、セシリア」

先ほどからブツブツと何事かを呟いていたセシリア。俺は聞き流していたが、物騒な事ばかり呟いていたので若干無視していたのも嘘では――ない。
そんな俺の反応に不満だったのか、セシリアはふくれ面をし始めるが――ここは関わらない方がいいと見て、視線を逸らす。

「そういえば、俺の方の自己紹介がまだだったな。俺は南部響介だ。響介でいい」

「アイビス・ダグラスだよ。宜しく、響介」

微笑を浮かべながら改めて名乗るアイビス。
ただ、セシリアはどうにも面白くないのか、胸の前に手を当てたかと思うと、頼まれてもいないのに彼女も自己紹介を始めてくる。

「わたくしはセシリア・オルコットといいます。イギリスの代表候補生ですわ」

「え？　イギリスの？　あたしと同じなんだ……」

やや驚いたような表情を見せるアイビスだったが、同時に何処か納得した様子でもあった。
此処はＩＳ学園。世界中から選りすぐりの人員が集まる場所であり、代表候補生が何人いても決しておかしくはない。
しかし、セシリアの発言を聴いたアイビスは打って変わって引き締まった表情に変わっていったのだが。

「ま、負けないからね……」

「それは勿論わたくしも同じですわ。それより、貴方もわたくし達と同様に専用機持ちなのですか？」

「専用機？　うん、そうだよ。あたしのＩＳの名前はアステリオン。将来的には宇宙（そら）を飛ぶための相棒だよ」

「宇宙（そら）？」

これは意外な言葉が出てきたため、俺はアイビスに問いかける。
すると、アイビスは俺の尋ねに何ら迷いもなく素直に頷いた。

「ＩＳの元々の開発理由は宇宙進出だからね。将来的にそうしたい

から、このＩＳ学園に入ったんだ。あたしはまだまだ勉強不足だし、宇宙を飛ぶためにはＩＳの事をもっともっと知る必要があるからね…。その為に代表候補生にもなったし、少しずつだけど一歩ずつ前に進んでいきたいんだ」

それがアイビスの夢――か。

ＩＳ本来の目的である、人類の宇宙進出という事を成し遂げたいが故であり、自分自身にとって大きな夢なのだろう。

もっとも、現状ではＩＳというのは“兵器”に等しい扱いだ。当然、内の事しか見ていない自国を説得するのは相当骨が折れたことだろう。

だが、アイビスがその程度で折れるとは何故か思えなかった。自分が思った事には何処までも突き進む事が出来ると――そう、俺には感じられた。

「いい夢だな」

「そう？　でも、あんまり女の子らしくなって皆に言われるんだけどね……」

「だからどうした。自分の夢を明確に持っている――それだけで凄い事だ。俺は応援するぞ、アイビス」

「あ……。う、うん！　ありがとう、響介！」

ニコリと、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

それに、俺も本心の言葉を言ったに過ぎない。嘘でもなんでもなく、本当の事を――。

しかし、“夢”か。……残念だが、今の俺には縁のない言葉かもしれない。

……欲を言えば、万馬券の馬が不動の一番人気『ダイトロンベ』に勝って欲しいというところか。
――いや、それはただの願望だ。とてもではないが、夢ではない。

「またわたくしを無視して……。ですが、ＩＳの宇宙進出は現実問題で考えると、難しくもありますわ。なにより、アメリカがそう簡単にＩＳのコアを一つ手放すとは思えませんから」

「……それはそうだよ。でも、あたしはやらなくちゃいけないんだ。いなくなったタカクラチーフや、フィリオさんの為にも……それから、スレイの分まで……星の海を往くって決めたから……」

セシリアの発言に目を伏せたアイビスだが、ギュッと拳を握ってその決意の固さを述べる。
やはり、彼女は本気だ。だからこそ、その夢を応援したくなるというのもある。

「決意が固いですわね…。いえ、それほど本気だという事ですのね？」

「勿論だよ。誰に止められたって、あたしは夢に向かって突き進む。絶対に…」

それを聴くや、セシリアもそれ以上は何も言わなかった。
しかし、「夢…ですか」と小声で呟き、何故か俺の方をチラチラと向いてきた理由がいまいち分からないのだが。
と、その時機を図ったように二時間目の授業開始を告げるチャイムが鳴り響き、それに気づいたアイビスは時計を見て時間を確認した。

「もう二時間目か…。それじゃあ、また後でね」

「ああ」

軽く手を上げ、踵を返すや自分の席へと歩いてゆくアイビス。

俺はそれを見送っていたのだが――未だに俺の隣でブツブツと小言を呟いていたセシリアの方に再び視線を送り、仕方なく彼女に声を掛ける。

「……セシリア、二時間目が始まるぞ」

「わたくしの夢、それは響介さんと……ああ、これ以上は！」

「……」

…どうやらセシリアの頭の中はお花畑でいっぱいらしい。

ほんのりと両頬を染め、いやいやと恥ずかしそうに首を振っているセシリアに、俺はもはや声を掛ける事は出来ず、無視することと決める。

ただ、その様子を見ていた織斑先生が近づき、セシリアの脳天を遠慮なしに一発叩いたのだが。

「い、痛いですわ、響介さん！」

「……誰が南部だ。さっさと席に着け、オルコット」

「……も、申し訳ありませんわ、織斑先生……」

バッと勢いよく俺の方を見てきたセシリアだったが、相手が織斑先生だと分かると、やや萎縮しながらも小走りで自分の席へと戻っ

てゆく。
しかし、戻る道中に俺の方をやや恨めしそうに見てきていたのだが――俺が何か悪い事をしたというのか？

……女というのは、分からん。

＊

放課後。
入学式が終わった早々、いきなり授業に突入したＩＳ学園での最初の一日が終了した。
というのも、このＩＳ学園は普通の高校のように悠長に事を構えている暇などない。ＩＳについては事細かく教えていくため、時間がとても惜しいらしい。
そのため、こうして入学式でも構わずに授業を行うということらしい。ちなみに学校案内などは自分自身で周っておけ、との事だ。
しかし、俺は学校内を周ろうという気力が起きない。何故か？
――それは、物珍しさという事なのだろうか、女子たちがぞろぞろと付いてくるからだった。
何処に移動しようにも、女子の大群が俺を追ってくる。セシリアもやや引いたような感じであったし、一緒に昼食を取ったアイビスも苦笑を浮かべていたが。
そんなこんなで、予測していた事態でもあったが――肩身が狭い思いをしなければならなくなった。
これは研究所で大倉と二人で三時間ぐらい一緒にいるくらいに疲

れる。主に心理的にだが。
しかし、当分この状態が収まることはないのだろう。予想しただけでがっくりと肩を落とすが、そんな俺にセシリアとアイビスが近づき、アイビスが昼休みの時同様に苦笑を浮かべながら声を掛けてきた。

「えっと……響介、大丈夫？」

「……これは流石に堪えるな……」

思わず弱音を吐いてしまうほど、俺は疲れ切っていたのかもしれない。
おまけに、未だに教室の外では女子たちが俺と織斑を見るために待機している。もっと他にすることがあると思うのだが……いや、もういい。

「ところで響介さん、今日は訓練をなさるおつもりですの？」

「訓練？　…そうだな、こうしてうな垂れている時間も惜しいな」

女子に追い掛け回されてすっかりと忘れていたが、このＩＳ学園でも許可さえ取れればＩＳの訓練を行う事が出来る。
ただ、一般の生徒などは訓練機を借りる際に膨大な数の書類を書かなければいけないため、申請まで相当時間が掛かるとの事。
しかし、専用機持ちは許可さえ取れれば用意された訓練スペースでＩＳを運用する事が出来る。
放課後などは特に使用する頻度が高く、上級生で上昇志向が強い者などは、すでに其処にいるのだろう。

「それで、もう許可は取っているのか？」

「勿論ですわ。この二週間、響介さんの指導も出来なかったですし……響介さんが訓練を怠っていないかの確認の意味もありますので」

さも当然だというような感じでセシリアが腰に手を当てるといういつものポーズで述べる。

確かに研究所から離れた二週間の間は色々とあったが、だからといって訓練を怠った訳じゃない。沢渡さんに頼み、訓練スペースというのは確保してもらっていた。

ただ、相手がいなかった事が最大の問題だったか。研究所のように無人機がいる訳でもなかったため、少々物足りなかったが。

「訓練か……。ねえあたしも一緒にしていいかな？　一応専用機持ちだし、響介達のＩＳも見てみたいしね」

「それは断る理由もない。此方こそお願いしよう」

それは此方としてもお願いしたいところ、というのは本当の事だ。セシリアも高い実力を持っているが、レビの襲撃以降はＢＴ兵器向上の為に一人で訓練をする光景も多くなっている。事実、こうして提案してくれたわけだが――実を言えば、自分の訓練に集中したいのが本音なところだろう。

しかし、俺の指導役としては、俺が実力を落としていないかが気になるところ、といったところか。その為に時間を空けてくれるのだから、彼女に感謝しなくてはならない。

それに、個人的にアイビスの実力も見ておきたい、という俺自身の願望もあった訳だが――な。

「それで、何処に行けばいい？」

「今日は第二アリーナを借りていますので、其方に向かいましょう。……ちなみに響介さん？　更衣室は別々ですので、お忘れなきように。で、ですが、どうしても見たいというのでしたら、わたくしは別に……」

「……」

……何を当たり前の事を言っているのだか。それから、またしてもよく分からない事を口走り始めたセシリア。

もはや、こうなったセシリアに構うのは時間の無駄だと思い、俺はゆっくりと席を立ちあがった。

「行くぞ、アイビス」

「え？　う、うん。でも、オルコットさんはいいの？」

「……無視しておけ。後で追いつくだろう」

それだけ言うや、俺はアイビスを連れてその第二アリーナとやらに向かう。学校案内がない代わりに、ＩＳ学園全体の地図だけが渡されたので、それに従っての行動になるが。

「……」

教室から出ようとしたとき、誰かの視線が俺に向けられていたので確認すると――それは織斑からの視線だった。

なにか言いたげであったが、どうにも言いにくい、といった状態か。

しかし、今は織斑に構っている暇はない。俺は織斑から視線を逸らすと、そのまま教室から出ていこうとする。

「おい」

「……今は忙しい。今度にしろ」

俺が出ていこうとした矢先、織斑が俺に声を掛けてくる。

その声質は、どうにも怒気が含まれており――やはり、俺としては何と言っていいのか分からなくなる。

――果たして、俺の過去を知っているのか…？　という疑問が頭から離れない。ただ、何故か聞く気にはなれなかった。

俺が再び歩き出すが、織斑はただ一言だけ――こういった。

「本当に……覚えてないのかよ」

「……その通りだ」

その問いに、俺はやや間を置いて呟き、今度こそ教室を出ていく。

知らないものは知らない。――いや、寧ろ教えてほしいのは俺の方だった。

だが、どうにも違うと俺の心の中が言ってきている。それは、違うと。

……一体、何がどうしたというのだろうな、俺は。

「響介……その、なんて言ったらいいのか分からないけどさ……」

「気にするな、アイビス。それより、少しお前に聞きたいことがあるんだが……いいか？」

「あたしに聞きたいこと……？」

「そうだ。……前に、俺と会ったことはないか？」
「え？　確か、ないはずだけど……どうしたの？」
「いや……なんでもない。忘れてくれ」
「……？」
いきなりの尋ねに、アイビスは首を傾げるが――――もっともな事だ。
俺としてもこのような問いかけは、聊か疑問を感じずにはいられない。
ともかく、俺とアイビスは第二アリーナへと向かう。――――その後ろに、大勢の女子を引き連れてな。
――――本当に、この女子たちをどうにかしてほしいのだが。

＊

ＩＳ学園第二アリーナ。既にＩＳスーツに着替えたキョウスケとアイビスが、広場の中央で何事かを話していた。
キョウスケの読みとは裏腹に、本日の第二アリーナは訓練する人間がほとんどおらず、事実上キョウスケ達の貸切同然といっていいほどガラガラだった。
入学式でもあり、おまけに噂の男子が入学するというこの世にも珍しい日――確かに上昇志向が強い生徒は何人もいるのだが、訓練よりも噂の男子を一目見ようという意識の方が圧倒的に強かったと

いうのがある。
しかし、アリーナの広場自体はガラガラであったが、客席はそうでもない――いや、中々の人だかりを見せていた。
全てが埋まるほど、というのはとてもではないが言い難い。しかし、キョウスケがＩＳを稼働させるという話を聞いた生徒達がぞろぞろと集まっているのも確かだ。
そんな中――静まり返った関係者席に、一人の女性が腕組みをしながら立っていた。
その人物は鋭い目付きでアリーナ内を見ているのみで、微動だにしない。ただ――キョウスケを見ている時だけは、どうにも様子がおかしかった。
鋭い目付きの中で見せる、寂しさを交えた目線――。それがキョウスケに向けられている。
そんな視線を向けていたのは、キョウスケ達の担任である織斑千冬。
いつも厳格で、誰にとっても憧れである筈の存在である千冬が――キョウスケを見るたびに、締め付けられるような思いが自分自身の中に巡ることを明確に感じていた。

「響介……」

自分にしか聞こえないくらいの音量……それでいて、やや寂しげに千冬は呟く。
“彼”の事は嫌でも知っている。いや、知り過ぎている。
だが、あそこにいるのは千冬の知らない響介だ――――。と、割り切っているつもりだったが、いざ対面するとそうでもなくなってしまった自分が、何処か腹ただしかった。
――――それは、どれだけ後悔しても後悔しきれない、“あの事件”があった時からずっと――だが。。

「――お前なのか？　いや、違う。あいつは……死んだんだ。あの時に……」

ギュッと、拳を力強く握りしめる千冬。

力不足だった――。だから、彼を守る事が出来なかった。そして、千冬の目の前で――。

「――――っ！」

思い出したくもない記憶が脳裏を過り、千冬は顰め面を浮かべた。

“あの事件”以来、千冬はＩＳに乗れなくなった。いや――乗るのを、恐れるようになった。

『怖い』のだ。自分のせいで、大切な人が死ぬのは。それも――彼女の目の前で。

世界最強と謳われた、あの千冬が――。

「響介……。今の私を見て、お前はどう思う……？」

手に持っていた一枚の写真を見ながら、切なそうに語りかける千冬。

その写真に映っていた人物は――――。

場所を移し、第二アリーナ内の広場。

まだＩＳこそ展開していなかったが、キョウスケとアイビスは今この場にいる。其処にぷりぷりと怒った形相を浮かべているセシリアも合流し、キョウスケは苦笑を浮かべながらセシリアの方を見や

った

「随分と遅かったな、セシリア」

「まったく、誰のせいだと思っていますの……？」

「……さあな」

「…まったく。それより、わたくしとしては本当に響介さんの腕が鈍っていないかが心配ですわね」

「そう疑うな。一応独自のトレーニングはしてきたつもりだ」

ややジト目で見てきたセシリアに対し、キョウスケは苦笑を浮かべながらもそう言い返した。

一日の鍛錬を怠れば、他の者よりも一段と差がつく。キョウスケ自身がそれを感じているため、沢渡のところに行っても一通りの鍛錬はきちんと行っていたというのは、先ほどキョウスケ自身が述べたとおりの事だ。

それに、キョウスケとしてはいつまた例の集団――『混沌（カオス）』の襲撃が向かってきても、対応できるようにしなければならない。

次こそは絶対に、逃さないために。

「其処まで仰るのでしたら、一応は信じますが……」

「すべて事実だ」

一応は信じたらしいが、それでもまだ疑いの視線を解かないセシリア。

これにはキョウスケも嘆息するしかないが、ふとセシリアはアイ

ビスの方を見ると――ある考えを思いつき、二人に提案する。

「でしたら、これから響介さんとダグラスさんが模擬戦を行うというのは如何でしょうか？　わたくしとは何度も模擬戦を行ってますし、お互いある程度の手は見えています。ですが、ダグラスさんとは初めてですし、わたくしと同じで代表候補生ですから、丁度いいかと思われますが」

「ええっ！？　響介と模擬戦！？　そんな勝手な……」

セシリアの提案に一番驚いたのは、アイビスだった。

確かに一緒に訓練するとついてきたものの、まさかこうなるとは予想外だったらしい。

しかし、当のキョウスケは少し考えを巡らせていたのだが、やがてはゆっくりと首を縦に振り、肯定の意思をセシリアに伝える。

「いいだろう。それに、どうやら今日は他に人もいないからな……。模擬戦をするにはうってつけだ」

「……はぁ。やる気満々だね、響介は…」

その返答には、アイビスもがっくりと肩を落とすしかない。

しかし、これはアイビスにとっても実力を示すいい機会であり、自分たちのプロジェクトを推し進めるいい機会になるかもしれない。

アイビス本人としてはあまり乗り気ではないが、少しでもＩＳを――いや、自機であるアステリオンを使いこなすためにも、ふう静かにと一回息を吐き、表情を引き締める。

「よし……。行くよ、アステリオン」

アイビスが集中するように目を閉じたかと思うと、一瞬だけ胸につけていたペンダントが輝きを放つ。
と、次の瞬間には爆発的な光を放ってアイビスを包んだかと思うと、アイビスの周りにＩＳ『アステリオン』が形成される。
装甲はやや軽装で、色は白銀と白色を基調としたデザイン。最大の特徴はアメリカで開発されたやや大型のテスラ・ドライブを装着した両肩であろうか。
このテスラ・ドライブとはＩＳ本来の特性であるＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）の効力をより生かすための空中浮遊機関であり、これを装着することによって、従来のＩＳよりも出力を二倍以上に引き上げることができる代物。
ただ、それによってかかるＧも従来とは比べものにならず、パイロット自身の負担も大きい、だが、宇宙進出を目指すアイビスたちにとってはなくてはならないＩＳであり、希望の機体でもあった。

「リオンの名があるということは、第一世代型の発展機という事ですか…。アメリカではすっかり消えてしまった機体だと思っていたのですが、まさか後継機が開発されていたなんて…」

アイビスの機体を見て、少しばかり驚いたような声をあげたのは、セシリアであった。
セシリアの言う通り、アステリオンの基となった機体は、リオンというＩＳ。当時は戦闘機が主流の時代であり、唐突に人型のパワードスーツを出されたところで、それに似合うＩＳというのは中々考えられなかった。
その中で、戦闘機のようなスピードとＩＳ本来の機動性を掛け合わせるというコンセプトの元、開発されたのは当時のリオンという訳だ。
しかし、実際にはあまりにも運用しがたい機体と化していたため、それ以降の後継機というのは開発されず、結果としてゲシュペンス

トなどの扱いやすく、人型に近い機体を開発するという路線を辿って行った。

ただ、このリオンは宇宙においてもっとも運用しやすい機体だというのを実証したとある研究者が、政府に掛け合って封印されていた二つのリオンのコアを入手。その研究者のチームが開発したものが、このアステリオンだ。

他にも『カリオン』という機体も存在したのだが、その研究者の妹が研究者の死と共に持ち去った為、行方知らず。アメリカ政府は今現在血眼になりながら捜索している――という情報がある。

「……行くぞ、アルト」

今度はキョウスケが左腕に装着しているガントレットに意識を集中させる。

すると、キョウスケもアイビス同様に爆発的な光が一瞬だけ包み込み、すぐさま深紅の装甲が展開されていく。

アイビスとは違って、頑丈に出来ている装甲。それを見てアイビスは硬い唾を飲み込むが、再び集中することで臨戦態勢を整える。

これでも代表候補生だ。戦闘訓練も当然のように受けており、セシリアの時と同様にその表情は真剣そのものだった。

「やけに堅そうな機体だね……」

「それがアルトのコンセプトだ。此方も本気で行く。アイビスもお前も……本気で来い」

「分かってるよ、響介。じゃあ……あたしから行くよ！」

アイビスは手早く飛翔し、俺に向かってくると同時に両肩からマシンキャノンを放ってくる。

それをハイパーセンサーで感知。キョウスケとしては珍しく後ろに後退するが、アイビスのアステリオンは思いの他早く、ギュンと音が鳴ってキョウスケの真横を過ぎ去ったかと思うと、キョウスケの背後を取った。

「遅いよ、キョウスケ！」

「確かに早い機体だ…。だが、懐に飛び込むのならば――アルトも負けてはいない」

背後を取り、展開したバーストレールガンをキョウスケに向けるアイビスだったが――振り返ったキョウスケは躊躇することなく背後のブースターを噴かし、アイビスに突撃を敢行する。

そのあまりもの速さに、アイビスは驚き制止してしまった。そう、戦場において、それもＩＳ同士の戦闘という局面において、停止してしまうというのは致命的である。

おまけに、装甲も薄いアステリオンだからこそだ。

ようやくアイビスがハッと気が付いた時には、すでにキョウスケがアイビスの眼前にいたのだが。

「は、速い――！？」

「動きを止めるという行為は、命取りに繋がる…！」

「っ！？」

突撃すると共に、キョウスケは展開していたヒートダガーでアイビスが持っていたバーストレールガンを斬り裂く事によって、破壊する。

小規模の爆発が起こってバーストレールガンが破壊され、アイビ

スは思わず後ろに下がった。
しかし、キョウスケは更に詰めるようにアイビスに接近し、ヒートダガーにてアイビスに斬りかかる。鋭利な刃がキラリと光り、アイビスは思わず息を?む。

「まずは一撃……貰ったぞ!」

「っ……! ま、まだだよ!」

斬りかかってくるキョウスケに対し、アイビスも使うつもりが全くなかった武装『アサルトブレード』を展開し、キョウスケのヒートダガーの太刀をなんとか止める。
しかし、キョウスケの猛攻は止まらない。近接格闘戦が不得意のアイビスであったため、三回ほど刃同士を合わせたところで力量差なのか、アサルトブレードがいとも簡単に弾かれてしまう。

「くっ……! でも、まだまだ!」

キョウスケが斬りかかろうか、という場面でアイビスは後ろに向かって急速離脱。
それどころか、後退したところでキョウスケに追撃されないように大きく弧を描くような軌道を描き、一旦の間だけではあるが、間合いを取った。

(機動力は確かに一級品だ。だが、どうにもアイビスがまだ機体を扱いきれていないというのが、今のところの感想か…)

現状で思った事は、それに尽きる。
アイビスが機体をうまく扱えていない状態――代表候補生としては致命的な部分である。

アステリオンという機体こそ申し分なく、射撃と急速離脱をすることによって、とてもではないがアルトでは追撃がしきれない機体になるというのが、ハイパーセンサーで機体を探らせた結果から導き出された答えだ。

そうなれば、少し癪だが防戦に徹し、仕掛けられるタイミングを見極めた上でカウンターとばかりにステークの一撃を撃ち込む――というのが、アステリオンのデータを見た時に思い浮かんだ戦術だった。

だが、現状は違う。決してアイビスの技量が低いわけではないとは思うのだが、まだアステリオンクラスではないという事か。それに――突如の事に関しての経験不足というのも当然存在するだろう。

しかし、この程度で諦めるアイビスではない。どうにか突破する手はこれしかないと思い――アイビスは再び意識を集中させ、スピードを上げることでキョウスケへと突撃する。

「フィールド収束！　行けぇーっ！」

突如として突撃を敢行してきたアイビスに、キョウスケは眉根を寄せたが――両肩のテスラ・ドライブが輝きを放ったかと思うと、其処からシールドエネルギーを利用したフィールドが生成されていく。

「…なるほど、そういう手か」

フッと口端を動かし、ならばこちらもとキョウスケもアイビス同様に背後ブースターを噴かして勢いよく突撃する。

アイビスの取った手、これはアステリオンの攻撃の一つであるソニック・ブレイカー。周囲に展開されているシールドエネルギーを応用し、それを前面に収束。そのまま相手にぶつける戦法だ。

中々肝が据わった戦法だが、突撃戦法ならばキョウスケも負けて

はいない。右腕にステークを展開し、アイビスと改めて対峙する。

「うわぁぁぁぁぁ！！！」

「……浅い！」

ガツンと激しい衝撃と共に、キョウスケに体当たりを食らわせるアイビス。

だが、キョウスケのＩＳ――アルトアイゼンは、重装甲に特化した機体だ。アイビスの捨て身に近い突撃も、キョウスケの前には浅い攻撃に過ぎなかった。

それもアイビスはやった後で感じ取っていたのか、気付いて顔を上げるが――時すでに遅し。凄まじい勢いでリボルビング・ステークがアイビスに襲い掛かり、彼女にぶち当たる。

「っ――――！？」

「確かにいい手だ。だが――――少し、詰めが甘かったな」

それが、その時アイビスに聞こえた最後の言葉だったか。

その後の事は正直アイビスは覚えていなかったが、どうやら気絶したらしいとの事だった。

それもそのはずで、至近距離からステークを撃ち込まれてはただでは済まないからに尽きる。がっくりとアイビスはうな垂れ、そのまま意識を失ってしまう。それをキョウスケは抱えるのだった。

しかし、その瞬間――アリーナの客席では歓声が上がっていた。

男でありながら、女の搭乗者――それも代表候補生を破ったというのは生徒達からすれば驚きであり、やや決め手は早かったものの、一年生などはこれがＩＳ同士の戦闘だという事を間近で感じられる機会になったに違いない。

傍らで見ていたセシリアも、満足げに首を縦に振っていたが――キョウスケだけは、どこか違った。

（まだまだ、実戦経験が必要なのかもしれんな……。アイビスも、俺も……まだ、これからだ）

キョウスケもアイビスも、まだまだこんなものではないと内心で感じる。

こうして勝てた訳だが、まだキョウスケとしても納得の試合が出来た訳ではない。事実、距離を詰めておきながらも更に追撃が出来なかった事は反省点であり、修正しなくてはならない件だ。

それに、アイビスのタイプというのは中々いるものではない。キョウスケとしてはいい練習相手にもなると思っている。

それは必然的にアイビスも同時に伸びるという事――いや、伸びてもらわなければ困る存在だ。彼女自身の夢の為にも。一緒に学ぶ友人としても、だ。

やや上から目線になってしまったが、現状で思った事はこれだった。

訓練は確かに積んでいる模様だが、近接格闘戦やソニック・ブレイカーの精度も上げることがアイビスにとっての課題になるのだろうか。

（なんにせよ、全てはこれからか…）

静かに決意をし、ゆっくりと機体を地上へと降下させるキョウスケだった――。

第十二話　決闘宣言（前書き）

少し遅くなりましたが、更新いたします。

今回は前回のような長々しい話ではありません。少しばかり短いですが…。

それで宜しい方は、次にお進みください。

第十二話　決闘宣言

「……」

「……え、えっと、その……」

今、俺の前には一人の少女――彼女も一年一組のクラスメイトの一人なのだが――がおり、どう喋ればいいのか分からないというような表情を浮かべていた。

外見は、黒髪に近い茶髪をしており、すらっとした印象。――いや、今思い出してみれば、俺が教室に入った時に俺を見ていた少女だと思い出すことができる。

その少女が、今現在俺の目の前にいるのは……遡る事一時間前。アイビスとの模擬戦が終わった後、山田先生が駆け寄ってきたのが始まりだった。

部屋が決まったといい、鍵を渡す山田先生。しかし、どうにも様子がおかしく、しどろもどろに話をしていたかと思えば――こういう事か。

部屋に入った時から違和感というものを薄らと感じていたが、まさかこうなるとは。

彼女も彼女で、俺を見た瞬間にビクッと反応し、驚いたように背筋を伸ばしていた。仕方がない面もあるだろうが、な。

しかし、少女が何かを話そうとしても、勇気が出ないのか口を軽く開けてはすぐに閉じてしまう。静寂が部屋を支配し、せっかく部屋に戻ってきた筈なのにそれどころか疲れにきたような感じであった。

無論、いきなりやってきた俺も悪いのだろう。それから、彼女に

報告していなかった教師陣も同様だ。
おまけにいきなり男と相部屋など、考えられるはずがないだろう。

「あ、あの……」

「……なんだ？」

「い、いえ。その、なんでもないです……」

すぐに口を紡ぎ、視線を下に向けてしまう。
そんな様子に俺は軽く彼女を見たのみであったが――これでは埒が明かないと俺は内心で溜息を交えながら思った。
とりあえず少女の事はさておき、俺は寝転び、横にあったＩＳに関する基礎理論という本を手に取って開く。
中身はＩＳに関する情報や規則について書かれた内容であり、出来るだけ分かりやすくしているのか、絵や図を文字を交えながら事細かに説明してあった。
ただ、専門用語の羅列というのが難題か。授業中も織斑が頭を抱えていたが、初心者には相当辛い事なのだろう。
しかし、これほど詳細に内容を説明してある教科書も稀だろう。
冊子が五冊ほどあるのも頷けるが、まだ分からない事が多いという事もあり、詳細は不明という項目は幾つも見受けられる。
ならば、それほど詳細ではないのでは？　というツッコミはなしだ。あくまでも『他』に比べての話だ。

「……」

しかし、どうにも落ち着かない。
会話もなければ、音もしない。本当ならば教科書などではなく、競馬新聞でも読んでおきたいところだが――生憎そうもいかない。

ともかく、俺はこの空気の中を長い事耐えられる自信はない。もう寝ようと瞼を閉じた。

この学園に来てから早々、色々な事があった。そのおかげか、不思議と眠気が体中を襲い、俺はいつの間にか眠りの中へと落ちて行った。

＊

「……あの、南部、さん……？」

キョウスケが眠りの中へと落ちて行った時、キョウスケと相部屋になっていた少女がやっと勇気を振り絞って声を掛けた。

だが、返事は当然帰ってこない。その様子に少女は肩を竦めるが、そのすぐ後に微かな寝息が耳に届く。

「……はぁ」

ややほっとしたように、その中でも少しばかりがっかりした感じで、少女は息を吐く。

いきなりの事で驚いた彼女だったが、そう決められた以上は仕方がない。それに――少女にとって、キョウスケとの会話は意味を成さない事であった。

――いつも、私は一人だから……。

両親が何者かに殺されたという話で、いつの間にか政府の施設に

いた少女――名は、小原節子（おはらせつこ）。周りからは隔離され、人との接点はほとんどなかった。

来るのは、勉強を教えに来る女の先生と、食事を与えにくるスタッフのみ。友達などは皆無だった。

そんな時、ＩＳの適性検査を受けた。結果として素質は高いとされ、政府の監視下で訓練に勤しんだ。そして、成すがままに代表候補生にまでなったが――それも全て流されるままの人生を生きてきた。

今も、彼女にとっては同じ。ＩＳ学園における三年間も流されるままに生活するのだと――。

（それに私は――）

ボソッと何かを呟くが、それは彼女にしか聞こえない。

そのまま、部屋の静寂が彼女を、セツコを包み込むのだった。

＊

翌朝。

教科書を頭に乗せながら寝ていたのか、それをどけて俺は起き上がる。

眠気を押さえながらもゆっくりとした動作で立ち上がり、俺は洗面をしようと水道の方へとふらふらとしながらも向かった。

其処で蛇口をひねって水をだし、俺はそれを思いっきり顔に当てる。ひんやりとした水が顔面に当たり、終わったころには何処かすっきりと出来ていた。これも不思議なものだが。

そして、濡れていた顔をタオルで拭く。目覚めはすっきりだ。恐らくは、だが。

それも終わったところで、早速学校に行く準備を始めようとするが――俺の目に映ったのは、すでに支度を終え、早速食堂に行こうかと準備をしていた少女――名前はまだ知らん――の姿が映った。

「なかなか早いんだな」

「え？　あ、はい。その、ご迷惑でしたか……？」

「いや、そういう訳じゃない。感心しただけだ」

「そ、そうですか……」

困ったような表情をしてくる彼女に、俺はやんわりと言ってやる。それに対し、彼女は軽く微笑を浮かべたが――何処かぎこちなかった。

その後、俺もまた彼女同様に準備をしようかと思った矢先、彼女は鞄を持つやそそくさと部屋を出て行った。

彼女の後姿を見送っていたが――やはり、男と相部屋など勘弁、といったところだろうか。彼女の心境も心底穏やかではないに違いない。

――別に悪い事はしていないが、申し訳ない気持ちが込み上げてくる。なんなのだろうな、これは。

と、そんなくだらない事を考えていた矢先、部屋のチャイムが部屋中に響く。

来るだろうと感じていたので、すでに着替えを済ませていた俺は、迷うことなく部屋のドアを開けたが、其処にいたのは膨れ面をしながら俺をジト目で見ているセシリアの姿だった。

「……お前も早いな、セシリア」

「お前も、とはどういう事でしょうか？　……と、そんな事はさておき。響介さん？　先ほどこの部屋から女の方が出てきましたが……あれは一体なんですの……？」

妙にくぐもった声質で、俺に語りかけてくるような喋り方をするセシリア。

その後ろからは真っ黒いオーラのようなものが発せられ、話しかけたくても話しかけられない。いや、別に俺は何も悪くないため、ただ普通にこういってやった。

「彼女と俺は相部屋だ。それだけの話だが？」

「あい……べや……？　ど、どどどういう事ですの！？」

まるで『なん……だと……？』と某漫画の台詞を言わんばかりの口調だが、セシリアは急に俺へと顔を近づけ、事の真相を知ろうとしてくる。

しかし、これは本当の事なため、俺は他に話すことがない。いや――何故か最近暴走気味のセシリアの扱い方を、誰か教えてくれ。このままでは俺が持たん。

「あ、相部屋ですって！？　な、なんて羨ましい……いえ、駄目ですわ！　不純異性行為は認めませんわ！」

「お前は俺の保護者か……」

指を刺しながら宣言してくるセシリアに対し、俺はため息交じりに呟く。

しかし、セシリアは顔を真っ赤にしながら未だに俺に接近してくる。近いんだが……。

「響介さんとのお付き合いが長いのは、他でもないわたくしですわ！　それを、他の女にとられるなんて……認めませんわよ、絶対に！」

「……諦めろ、セシリア。もう何を言っても通用しないだろうからな」

「できませんわ、そんな事！　この私に屈辱を味わえと仰るのですか！？」

誰も其処まで言ってはいないが……もはや止まらぬ様子のセシリア。

この状態になれば、もはや無視するのが道理か。

逃げ道を探すように辺りを眺めるが、其処に此方に近付いてくるアイビスの姿を発見し、俺はセシリアを無視してアイビスに近寄る。

果たして、俺に気付いたアイビスは軽く手を上げてきた。

「あ。おはよう、響介」

「ああ、おはよう。それよりアイビス、早速だが飯だ。早くいかなければ席がとられてしまうぞ」

「え？　あ、うん。あたしもそのつもりだけど……って、響介！？」

もはや返事を聴くまでもなく、俺はアイビスを通り越してさっさと食堂へと向かう。

あのままセシリアと話し込んでいても、状況は見えている。賢明

な判断だと自分では思うのだがな。

「ちょ、響介！」

「お待ちなさい、響介さん！　まだわたくしの話は終わっていませんわよ！」

「……はぁ」

――入学早々から、疲れる事ばかりだ。

いや、何故俺ばかりがこんな目に合わなければならないのか。これは誠に不思議な事態であった。

＊

「……」

「……」

「え、えっと、一体何が何やら……」

場所は食堂。

昨日から続く好奇の目が俺に集められている中であったが、俺とセシリア、そしてアイビスは共に食事を採っていた。

しかし、俺とセシリアは黙々と食べ続け、アイビスはそれを見ながら苦笑を浮かべる。状況を理解していないので仕方がないといえ

ばそうなるのだが、説明している暇はない。

「あのー……二人とも、どうしたの？　不機嫌なのか、疲れてるのかは分からないけどさ……。と、ともかく元気出していこうよ！ね？」

――何やら見当違いな方向に進んで行っているアイビスだったが、相変わらず俺とセシリアは黙々と食事を進めているのみ。

そんな俺達の状況を見て、アイビスはがっくりと肩を落とす。そして彼女もスプーンを手に取り、スープを口へと運ぶ作業に移った。

……まさに沈黙。食事に集中することは大いに結構なのだろうが、あまりにもシュールな光景に違いない。

周りの女子たちも好奇な視線と共に一体どうしたのだろうか、という目付きも交じってきている。ただし、そう思われたところで仕方がないのだが。

そんな時、今まで黙々と食事を進めてきていたセシリアが唐突に手にしていたフォークを礼儀正しく置いたかと思いきや、バッと俺の方を見てきた。いや、睨んできた、と言った方が正しいのだろうか。

「響介さん、本当にあの方と相部屋になったのですか……？」

「……そうだ。文句を言うなら山田先生に言ってくれ。決めたのはあの人らしいからな」

「そうですか……」

セシリアの疑問に、俺はコーヒーを手にしながらそう答えた。

話の内容を聴けば、山田先生が涙目になるのは間違いないが――

――彼女も考えて決めたとことだろう。それに……あの少女は、何処

か放っておけないような感じがした。
何だろうな……。俺が口を挟むことではないのだろうが、その瞳は何処か悲しげに見えた。
――理由は分からん。ただ、俺の直感がそういっているだけだ。……あてにはならないだろうが。
そう思いながら、俺は黙ってコーヒーを啜る。味はブラック。砂糖など邪道だ。
と、その時。セシリアが立ち上がったかと思うと、食器が乗っているトレーを手に取る。先に教室に向かうのだろうと、俺は彼女を横目で見ながら思った。

「響介さん、ダグラスさん。わたくしは先に教室に行っていますわ。それでは、後程」

「ああ」

「うん、また後でね」

踵を返しながらも、セシリアから発せられた発言に俺は簡単に返した。
それだけ聞くと、セシリアはさっさとこの場を離れ、返却口へと向かっていく。俺はセシリアの方は見ず、ただコーヒーを飲むのみだった。

「えっと……喧嘩したの？」

「違うな。理由は知らないが、不服なのだろう。あいつの沸点など、俺には分からんからな」

首を傾げながらアイビスが尋ねてきたので、俺はコーヒーを置き

ながらも苦笑を浮かべる。
長い付き合い――といっても、ほんの一、二か月の付き合いだ。
そんな詳細の事まで分かるものか。
だが――最初の頃は、かなり険悪だった筈だが、不思議なもので一緒に食事を採るようにもなっているとは驚きだ。
――俺も、あいつと出会わなければどうなっていただろうか。
今も、大倉研究所でくすぶっていたか、それとも――。

「……響介？」

「…なんでもない。気にするな、アイビス」

「そう？　それならいいんだけどさ」

笑顔を浮かべてくるアイビスに対し、俺もクスリと笑った。
考えていても仕方がない。俺は……前に進むだけだ。

そう――今は、それでいい。

＊

場所は教室。授業に至っては、三時間目に突入していた。
そろそろ昼食が待ち遠しくなってくる頃だが、そんな事は口が裂けても言えない。ましてや授業中に腹を鳴らすなどもっての外だ。

まあ、そんな事を言っている場合ではない。現在の授業は担任である織斑先生の授業であり、今まで授業を行ってきていた山田先生も後部座席の方でノートを手に取り、メモしている姿が見受けられる。

というのも、織斑先生はＩＳの事に関しては相当博識らしく、山田先生でも織斑先生から習う事は数多いという。

他の教師陣からも頼りにされている存在で、本人は望んでいなくとも、実質的にこのＩＳ学園を引っ張っている存在らしい。

――以上、何処かの情報通の受け売りは終了だ。誰なのかは聴くな。

と、それはともかく。今の今まで教科書の内容や補足事項などを話している織斑先生。

しかし、授業内容は確かにいいのだが、彼女はその内容のほとんどを黒板に書かないのが特徴か。

まるで大学の授業みたいだ、といっていた奴もいたが、まだ大学の教授の講義の方が黒板に何かしらを書くとは思う。それほど黒板に文字は書かず、ほぼ口頭で話をしているのが織斑先生の授業スタイルだ。

それに、皆が皆真剣に授業を聴き、ノートに内容を書くことも重要だ。普通の高校のように一々字を書くのが面倒、という訳ではないとは思う。決してな。

「ＩＳは今でこそお前たちが知っているような形――兵器やスポーツなどに利用されているが、元々宇宙での作業用に開発されたものだ。その為、操縦者の体を保護する為に特殊なエネルギーバリアーが施されている。更に生体機能を補助する役割も果たしている事を忘れるな。これによって、ＩＳは操縦者の肉体を安定された状態に保っているという訳だ。いかに加速をしようが、普通ならば死んでしまうような攻撃を何発も受けようが、ある程度ならばＩＳ自身が役割を果たし、操縦者を保護するという訳だ。ただ、それをあまり

過信するな。当然ＩＳにも限界は存在し、それを超えた場合は操縦者の命も危険な状態に繋がる。貴様たちも近いうちにＩＳを操縦することになる。その時、このことだけは絶対に忘れるな。それと同時に、ＩＳを使っているとはいえ、自分で考えて自分で動くことも重要だ。いいな？」

教科書も見ずに、内容通りにぺらぺらと噛まずに話を進めていく織斑先生。

これではメモを取るだけでも相当大変であり、修業が終わる頃には手が悲鳴を上げているのだろう。

しかし、周りを見渡せば見渡すほど真剣な表情で授業を聴いている生徒たちがほとんどだった。真っ直ぐに織斑先生の方を見ており、時には手を動かす。――いや、常時か。

だが、経験者は語るとでもいうのだろうか。言葉の一字一句が重みのある言葉であり、当然の言葉ながらも本当に大切な事なのだと感じる事が出来る。

貫禄、というやつも当然存在するのだろうが、そう思わせる事が出来る織斑先生も相当なものだと、内心で思う。

と、そんな時。区切りがいい場所で一旦織斑先生が話を止めると、何かを思い出したかのように顔を上げ、俺達の方を見やったかと思うと、こういい始めた。

「そういえば、再来週に行われるクラス対抗戦（リーグマッチ）に出場する生徒――いや、代表者を決めなければならないな……」

クラス対抗戦（リーグマッチ）――確か、入学時点での各クラスの実力推移を測るイベントだと聞いた。圧倒的に優位なのが専用機持ちがいるクラスらしい。

ただ、俺はそういったイベントに参加する方ではない。見て賭けるのは大いに推奨するのだが、決して実際にやる方ではない。

――俺がそう思ったところで、どうせ誰かが推薦するのだろう。全く面倒な事だが、今回は自体だ。それに、そういった柄じゃない。しかし、織斑先生の言葉にクラスは先ほどまでの真剣な表情はどこかに消え失せてしまったのか、ざわざわと色めきだった。そんな折、誰かが手を上げたかと思うと、こんな事を発言した。

「はいっ。私は織斑君がいいと思います！」

「私も同じです！　織斑君でしたら、きっとなんとかしてくれると思います！」

「お、俺！？」

他の女子たちも口々にそうだ、そうだと賛同し始める。それに対し、織斑は今頃になって状況を理解したかのような声を上げた。しかし、一体何を根拠に…と問われれば、それは織斑先生の弟だから、と女子たちは答えるに違いない。

何にせよ、飛び火することはなさそうだが――先ほども織斑先生が言っていたが、幾ら織斑先生の弟だからといって、その力を過信するのは頂けないと俺は思う。

確かに男であり、頼りにしている――のかは知らないが。その過信こそ、命取りに繋がるという事も忘れてはならない。

いうなれば、危機意識が薄いという事か。優秀なのはわかっているが、実戦というものを経験した事がない為、簡単にそのような事が言えるとも思う。

――いや、何を考えても無駄な事だ。

ともかく、先ほども言ったようにクラス代表などは俺の柄ではないからな。

「ま、待ってくれ！　俺以外にももっといるんじゃないのか！？」

「うるさいぞ、織斑。さて、今のところ推薦は織斑のみ…か。他にはいないか？　自他推薦は問わないぞ」

「だ、だから千冬姉……いてっ！」

「黙れ、馬鹿者。それから私の事は織斑先生と呼べと言ったはずだ。そんな事も理解できんのか、お前は」

「は、はい……。申し訳ありません、織斑先生……」

酷い言われようだ。おまけに容赦なくグーでゲンコツとはな。

織斑はしゅんとなっておずおずと席に着くが、頭を抱えてどうしようか迷っているようだった。

まあ、いきなりクラス代表になるなど予想もしていなかった事なので、仕方がないといえばそうなるだろうが――。

だが、そんな折を見てか、急に甲高い声が教室内に響くと同時に、今度は俺が頭を抱える羽目になるのだった。

「わたくしは南部響介さんを指名いたしますわ！」

……言葉を放ったのは、他でもないセシリアだった。

こういう時こそ、『自分こそが！』と言いそうな感じがしたが、まさか俺を推薦してくるとは。ある程度の予想してはいたが、本当になるとは思わなかった。

俺も織斑同様に頭を抱え、机に伏せる。飛び火はないと思っていたのだが…やはりか。

「ふむ、候補者が二人出たか。織斑と南部……か。よし、ならば両者にはどちらがクラス代表の座に相応しいか、来週の月曜に勝負し

てもらう事とする」

「はぁ！？　話を勝手に進めないでくれよ、千冬姉……ぐえっ！」

「いい加減黙っていろ、この愚か者め。それに、お前たちには因縁もあるようだ……。それに、一夏……あいつとは違うという事を、その目で確かめる機会でもあるからな……」

「千冬姉……」

この時ばかりは、織斑先生は織斑の言動に対して何も怒ることはなかった。

それどころか、目を細めて――それはまるで、昔を思い出すかのような――織斑を見ていた点からしても、やはりなにかあったのだという事を思わせる。

――しかし、それは……本当に俺と関係があったのか？　疑問は尽きない。

「……ともかく、この話はこれで終了だ。授業に戻る。教科書の八ページの真ん中だったな。ＩＳの基礎理論の続きだが――」

パンと手を叩いたかと思えば、織斑先生はすぐに切り替えて皆に授業に戻るように促す。

おまけに指示した瞬間に即授業再開だ。慌ててシャープペンシルを手に取り、必要な事をノートへと書き写してゆくクラスメイト達。

無論、俺も例外ではない。頭を抱える作業は既に終了し、俺も皆と同様にノートに内容を書くのだった。

集中していると意外に早く時間は過ぎ去って行き、早くも三時間

目が終了。

終了のチャイムと同時に織斑先生も手にしていた教科書を閉じた。

「よし、これにて三時間目の授業を終了する。以上だ」

言うや持ってきていた荷物を纏め、さっさと教室を出ていく織斑先生。後に続くように山田先生がパタパタと慌てた様子で教室を出ると、先ほど同様に教室中がざわめく。

実に緊張感あふれる授業であった。おまけに有意義な時間を過ごせたと。自分でも思えてしまう。

しかし、問題はそんな事ではない。俺はゆっくりと席を立ちあがり、セシリアの方へと向かう。無論、先ほどの推薦の件についてだ。

だが、俺がセシリアの方を向いた時にはセシリアは俺ではなく、別の方――其処にいたのは、俺と相部屋になった少女がいた――へと向かっていき、其処で立ち止まった。

「貴方が響介さんと相部屋になった方――小原節子さん、ですわね？」

「え、ええ……そ、そうですが……」

腰に手を当て、胸を張るといういつものポーズをとりながら少女――名を小原節子というらしい――へと威圧感たっぷりに話しかけるセシリア。

当の小原は、そんなセシリアの態度にやや引いていた。おまけに一体何の用でセシリアが来たのか、あまり分かってはいないらしい。いや、俺も同様なのだが。

しかし、次の瞬間――俺は耳を疑うような事を、彼女は小原に言ってのける。

「わたくしと決闘なさい、小原さん！」

「け、決闘……？」

「……」

セシリアの言葉に、俺は唖然とするしかなかったのだった――。

第十三話　本当の意味…？（前書き）

第十三話の投稿です。

今回もまた短く、戦闘描写もありません。それでもよろしければ次へお進みください。

第十三話　本当の意味…？

「け、決闘…ですか？」

「ええ、そうですわ。貴方とわたくし、どちらが強いかをハッキリさせようかと思いまして」

セツコに向かっていったセシリアの突然の発言に、発言を受けたセツコは愚か、聴いていた俺でさえも言葉が出なかった。

いきなり俺を推薦したかと思えば、セシリアはセツコに宣戦布告をする始末。

一体何が不服なのかは知らないのだが、セシリアの態度を見る限りは本気に違いなかった。

「で、ですが、理由が……」

「理由ならばありますわ。貴方はこの国、日本の代表候補生であり、わたくしはイギリスの代表候補生ですわ。同じ代表候補生同士ですし、早いうちに実力を示しておくのも悪くないと思いまして」

戸惑うセツコを余所に、セシリアはいつもポーズ――おまけにやけに自信満々だが――という中々高圧的な態度を取っている。

そんなセシリアの様子を、俺はただ黙ってみていた。

レビ戦からの彼女を見ていたのだが、やはりＢＴ兵器を使いこなせていないのが現状だ。

前にボソッと漏らしていたが、やはり熟練度や様々な戦闘パターンのデータが欲しいと漏らしていたこともある。

だからこそ、同じ代表候補生であるセツコに勝負を挑んだのだろうと勝手に解釈する。――恐らく、別に私欲の為にセツコと戦う訳でもないだろう。理由も見当たらないからな。

だが、挑まれたセツコとしてはいきなり且つ唐突で話も見えていないだろう。困惑した表情でセシリアを見ると共に、何処か自信がないかのように視線を落としていた。

「勝負は三日後の放課後、第三アリーナにて行いますので、そのつもりで。それでは御機嫌よう」

言うや、セシリアはセツコから踵を返して自分の席へと戻ってゆく。

その道中で俺とセシリアの視線がばったりとあったのだが――セシリアは俺を見た途端に微かに微笑む。

しかし、すぐに俺から視線を逸らしてしまい、それからは止まることなく歩き続けていた。

「どうしたのかな、オルコットさん…」

「フッ……さあな」

いつの間にか後ろにいたアイビスが漏らした声に、俺は軽く鼻で笑って返す。

その反応にアイビスは首を傾げた。当然と言えば当然ではあろうが――俺はアイビスにその理由をいう事はなかった。

しかし、時間というものは相変わらず早いものだ。次の授業が始まるチャイムが鳴ったかと思えば、図ったかのように織斑先生と山田先生が教室内へと入ってくる。

「全員さっさと席に着け！　これより四時間目を開始する！」

その怒号と共に、今までざわついていた教室内は一瞬で静まり返り、皆が文字通りさっさと席へと戻ってゆくのだった。

＊

その日の放課後。

今日は第一アリーナの使用許可を取り、俺とアイビスは早速第一アリーナへと向かっていた。

ちなみにセシリアは集中したいという理由からか一人で第三アリーナの方へと向かった。――恐らくはＢＴ兵器の稼働率向上の訓練をあまり見られたくはないのだろう。

それくらいは分かっており、気を利かせるという意味でもこうしてアイビスと共に第一アリーナへと来たわけだが。

「そういえば、今日は何をするのか決めてるの？」

「そうだな……。アイビスの接近戦の間合いが甘いところを中心にやってみるというプランはある。それから、攻撃が浅いところも含めてな」

「……全然ダメってことだね、あたし……」

「それは違う。だが、あの機動性は脅威に等しい。肝心の攻撃があれでは、その能力を半分も生かせていないがな」

「うぅ……。でも、それは響介のＩＳが固すぎるだけだよ……」

アイビスが肩を落としながら呟くが、あの機動性は体験しなければ分からないかもしれないが、本当に脅威だ。

アイビスの突撃が甘かったため、あのようなカウンターが仕掛けられたが――あれを真正面から受け止めようとするのは、やはりアルトだからかもしれない。

いや、それこそがアルトの本来の扱い方だ。一点突破――か。

「まあ、ともかくだ。俺も接近戦に関しては多少の心得がある。俺を相手に練習してみるといい」

「あたしの本業は一応射撃なんだけど……」

「それでもだ」

射撃の分野はセシリアだが、今は他人に教えている場合ではないだろう。

ならば、俺が代表候補生であるアイビスに教えられるもの――近接戦闘しかないだろう。ただ、今のアイビスはアステリオンを使いこなす方が先だとは思うが…それは置いておく。

と、そのような話をしながら第一アリーナのピットを通して広場に出るや――途端に俺達は意外な人物を発見した。

「む、あれは……」

「あれって……小原さん？」

そう、俺とアイビスが見たのは――蒼色に染められた装甲が特徴のＩＳが隅の方で稼働している姿だった。

更にそのＩＳにはセツコが搭乗しており、手にした長大な物体を駆使し、大倉研究所でも見覚えのある標的（ターゲット）を撃ち抜いている様子が伺えた。

（手にしている物体……あれは、ガナリー・カーバーか？）

俺が注目した点は、セツコが手にしていた長大な物体――いや、武装だ。

あれはかつて大倉研究所で大倉に見せてもらった事がある武装、『ガナリー・カーバー』そのものであり、あれを使用しているという事は、セツコが稼働させているＩＳこそバルゴラなのだろうという予測も自然のうちに立てることができる。

バルゴラが量産向きの機体でありながら、量産化を見送った原因――ガナリー・カーバー。状況に応じて様々な扱い方が出来る武装らしい。

今は射撃を行っているが、大倉に見せてもらったデータでは実体剣や鎌状の形をした高出力のビーム・サイズも出せるとの事。

近接から長距離まで出来るという素晴らしい武器、ガナリー・カーバー。それを果たしてセツコが使いこなせているのか――と問われれば、分からないとしか返しようがない。

ただ、見ている限りでは武器の扱い方が丁寧だという印象がある。セシリアのようにすぐさま目標を定めて発射する事はないが、出来るだけ見定めて撃つという特徴があるか。

――もっとも、そんな動作で戦場に出てはいい的になるだけだとは思うが。

「小原さんもオルコットさんとの決闘に向けての訓練かな？」

「だろうな。彼女も一応代表候補生だ。売られた喧嘩を買わない訳にはいかないだろう」

「そんなものかな…？　でも、オルコットさんもなんで小原さんにいきなり決闘なんて申し込んだんだろう？」

「さあな。セシリアにも思うところがあったのだろう。恐らく、だが」

俺としても、セシリアの真意が測りづらいというのは本心からの言葉だ。

気にしていない、という訳でもないが、実際のところはセシリアから唐突に決闘を申しこまれたのは俺と同じだ。

あの決闘があったからこそ、今では友人同士になっているが――果たして、今回もそれがうまくいくものか。

いや、セシリアが俺の時と同じ理由で挑んだとはどうにも考えにくい。何が原因やら……。

そんな時、今まで射撃訓練を行っていたセツコが俺達の存在に気付いたのか、俺を見た瞬間にピクッと肩を軽く動かすのが見えた。

どうやら人付き合いは苦手なようだ。そのせいもあってか、今まで順調に破壊していた標的（ターゲット）から銃弾が逸れるようになり、セツコはガナリー・カーバーを縦に構えると、射撃をやめてしまった。

「……はぁ」

やや落ち込んだように肩を落とし、嘆息するセツコ。

そんな様子のセツコに話しかけてよいものかと俺とアイビスは顔を軽く見合わせるが――気が付かれてしまったものは仕方がないため、セツコに近寄って声を掛ける。

「お前も訓練か？」

「は、はい。その……南部さん、もですか……？」

「ああ、そのつもりだ。む？　しかし、お前に名を名乗った覚えはないが……」

「その、有名ですから……。私もそれくらいは……」

「なるほどな」

予感こそしていたが、俺の名前というものは広がっているらしい。俺からすれば面倒な話だが、ＩＳを稼働させたと噂の男だ。認めたくはないが、割り切るしかないか。

「それにしても、小原さんのＩＳが最新の日本製ＩＳなの？」

「え？　あ、はい。元々は量産機使用だったのですが……今は専用機扱いです」

やや臆しながらも、アイビスの問いにはしっかり答えるセツコ。だが、それでも声の音量はやや小さく、先ほども思ったが自信がなさそうに話すことが癖になっているのか、話し方からも弱気な感じがにじみ出ている。

これは中々重症だと俺は思ったが、口に出すことはしなかった。いや、そんなことなど出す筈がないが。

「ふーん……。でも、アメリカのゲシュペンストを基に作った割には、結構違いが出てるね。それに、ゲシュペンストよりも関節構造なんかが柔軟だし」

セツコのＩＳを眺めながら、アイビスは思った感想を述べていた。

アイビスもゲシュペンストとやらとセツコのＩＳ『バルゴラ』の関連性は知っているようで、機体を見ながら軽く頷いていた。
ただ、セツコの方は何処か落ち着かない様子で視線を彷徨わせていたのだが。

「あの、そのくらいでいいですか……？」

「うん？　あ、ごめんね。ちょっと気になったものだから、つい…」

「い、いえ……。その、あんまりそういう風にみられたことがなかったので……」

セツコはアイビスを見ながらも、やはり視線を軽く落としながら口を開いていた。
もはや癖というか、なんというか。その動作自体が体に染みついているのかもしれないと――俺は彼女を見ながらそう思った。
ただ、それだけの過去がセツコにあるという事にも繋がる。果たして、彼女の身に何があったのか――いや、其処まで深く探っても仕方がないか。
ともかく、俺達は訓練をするために此処に来たはずだ。俺はアイビスの肩を軽く叩き、彼女を促す。

「さて、そろそろ俺達は訓練に入る。……小原も一緒にするか？」

「いえ、迷惑でしょうから、私は……」

「そうか。では、また部屋でな」

やはり引いてくるセツコであったが、その言葉と共にセツコに対して踵を返し、セツコから離れていく。

アイビスも俺に付いてくるが、時折セツコの方を気にするような素振りを見せていたのは事実だ。
と、歩きながらアイビスが小声で俺に話しかけてきた。

「いいの、響介？」

「なにがだ？」

「小原さんの事だよ。一緒に訓練をした方が効率はいいかな…ってあたしは思うんだけど」

「本人がいいと言っている以上、あまり無理に誘う事は出来ん。だが、小原とセシリアで戦った場合は……セシリアの方が一枚上手だろうな」

理由としては、やはりセシリア自身が場馴れしているという事があげられるだろう。
模擬戦の回数、自分の長所の引き伸ばし、状況判断応力に射撃の高さなど……セツコよりも上回る点がいくつも挙げられる。
無論、セツコも代表候補生なのだからそれ相応の実力であろうが――果たして、それがセシリアに通用するかどうか。
一応セシリアの実力を知っている。だからこそ、こういうのかもしれないが。
いや、セツコと実際に模擬戦を行ったわけでもない俺が、このような事を言っていいのかも甚だ疑問ではあるが。

「ともかく、俺達は俺達の訓練をする。小原の件は……まあ、少し先延ばしだ」

「少し？　じゃあ、もしかして……」

「……。アイビス、ＩＳの展開だ。今日はみっちりと訓練するぞ」

「はいはい…。行くよ、アステリオン」

アイビスが首からぶら下げているペンダントを握ると、途端にＩＳの装甲が展開される。流石は代表候補生であり、展開時間も全く掛かってはいない。

俺も右腕のガントレットを握り、ＩＳを展開。それと同時に右腕部にステーク、左腕部にマシンキャノンを同時展開する。

「さて、いつでも来い」

「よし…。じゃあ、行くよ！」

アイビスは修復されたバーストレールガンを展開し、俺に向かって発射するのだった――。

＊

「響介の戦法ってさ、『肉を切らせて骨を絶つ』っていう戦法だよね」

「そのための重装甲、火力に特化した機体だからな。自然とそういった戦い方にもなってくる」

「ですが、ＩＳでその戦い方をするのは少々危険ではありませんの？　エネルギーはどんどん減っていきますし、割に合わないとわたくしは思っているのですが…」

「だが、機体がこう作られている以上はその通りにするのみだ。お前達みたいに細やかに動き回れるわけでもないからな、アルトは」

訓練が終わった後の食堂での会話。其処にはアイビスだけでなく、セシリアも合流して共に食事をとっていた。

今の話題は、アイビスが言ってきた『俺の戦い方』についての事。セシリアもアルトについては思うところがあったらしく、こうして言ってきたわけだが。

だがアルトの戦い方を変えようにも無理な話だ。確かにシールドバリアーが尽きればそれで終わりに違いはないのだが、その前に懐に潜り込めばいい。

回避は其処までする気はない。決定打さえ決めさせなければ、多少の傷は問題ないからな。

ただ、従来のＩＳの乗り手からすれば聊か運用し辛い仕様になっているのは確かだ。まさしく、専用機と呼ぶに相応しい性能にもなっている。

――俺からすれば一番扱いやすい仕様なのだがな。

「しかし、セシリア……決闘の件はどういうつもりだ？」

「どうって……そのままの意味ですわ。どちらが強いかを白黒つけようかと思っただけですわ」

「でも、唐突すぎない？　小原さんも困ってたし…」

「……ともかく、決闘の件は置いておきましょう」

そういうや、セシリアは口を紡いで食事に戻る。

アイビスはやや苦い顔を浮かべたが、これ以上セシリアが口を割るつもりはないと悟ったのか、同様に食事に戻った。

しかし、セシリアの態度を見ている限り――やはり、ＢＴ兵器の事に関してではないのか、と思う事が出来る。

大倉が言っていた『機体の本当の意味』――それは一体、何なのであろうか。

謎かけか、あるいは事実を直接言ったのみか…。事実はともかく、これはセシリアに伝える必要があると思っていたが…。

どうにもあの言葉はいつもの戯言ではなく、真剣みを帯びていた言葉であったのも覚えている。それだけ重要であり、またセシリアのレベルアップにも繋がると信じたいが…な。

と、俺がセシリアを見ながらそう思っていると、その視線に気づいたのかセシリアが少しだけ顔を上げたかと思うと、何故かやや頬を染めてきた。

「な、なんですか、響介さん。そんなに私の方を見つめて……は、恥ずかしいですわ」

「いや、特に意味はない。ただ、大倉が言っていた『セシリアの機体の本当の意味』というものを考えていただけだ」

「本当の……意味？」

それに反応したのはアイビスであった。

比べてセシリアはやや不服そうに憮然としていたが、事が自分のＩＳの事なので耳を傾けている様子だった。

「前に大倉博士が言っていたが、セシリアが機体の本当の意味さえ知る事が出来れば、次のステップに進むことが出来るとな。果たして、その意味がなんだろうかと思ってな」

「ブルー・ティアーズの本当の意味……ですか」

その言葉に対し、セシリアはふむと唸って顎に手を当てて考え始める。

ブルー・ティアーズとは、『蒼い雫』という意味がある。それはまるで、流した涙を模したようだ。

それから、これも思ったが――前にセシリアの模擬戦を行い、至近距離でクレイモアを放ったときに墜落するセシリアを見ながら、同様の事を思った事もある。

――いや、まさかな。この線はない筈だと信じたい。

「でも、機体の本当の意味って……なんだろうね」

「さあな。大倉博士は存在自体が不思議な奴だ。彼なりの言葉だろうが、真意はさっぱりだ」

本来奴はそういった性格だ。しかし、自分の事に関してはボロを出すことはない。

奴が何を考え、何をしようとしているのか――それすらも探らせないかのように、奴は平然としている。

――まあ、永遠に分かることはないのだろう。考えるだけ時間の無駄か。

「蒼い雫……。ブルー・ティアーズ……」

相変わらずセシリアは考え込んでおり、この分では当分此方の話

に加わる気はないだろう。
俺はそれを見て苦笑を浮かべるが、傍らにあったコーヒーを手に取り、それを口に流し込むのだった。

第十四話　小原節子（前書き）

今回はセツコとの模擬戦がメイン。やはり例によって……な展開です。

それでも宜しければ、次にお進みください。

第十四話　小原節子

部屋に戻った俺は、昨日と同じように寝転んでいた。
時刻は午後7時。食堂はもうそろそろ閉まる頃であり、各々が自室へと戻って寛いでいる時間だ。
だが、俺はそう簡単にくつろぐことは出来ない。何故か？　理由は簡単だ。
それは、俺と相部屋になった人物――小原節子がいるからだ。こうしてルームメイトになった訳だが、どうにも会話らしい会話というものは俺達の間にない。
セツコは今日の復習でもしているのか、机に着いて教科書を広げ、ペンで何事かを書いていた。その様子を俺は横目で見ながらも、どうにも同じように勉強する意欲は沸いてこず、こうしてベッドに寝転んでいる訳だが。
しかし、ＩＳ学園での生活は二日目を終えた。一応学園の流れこそ掴んだが、未だに他の女子たちの好奇の目は収まりそうにない。
授業中はさほどでもないが、休み時間と昼休み、放課後は女子たちがぞろぞろと付き纏ってくる。珍しいのは分かっているのだが、これればかりは流石に呆れるしかない。
更に分からないのは織斑の件だ。何かを知っているような口ぶりだったが、話したところで平行線に終わる可能性は高い。
――思い出すだけで、どっと疲れが押し寄せてくる。おまけに学園側が取り揃えたのかは定かではないが、俺が今いるのは高級ベッドの上だ。眠気が襲ってくるのも無理はない。
だが、こんな早い時間に寝るつもりはあまりない。俺はゆっくりした動作で起き上がると、眠気覚ましにコーヒーでも淹れることにした。

その時、ふとセツコと目が合う。どうやら起き上がったのを感じたのか、此方を見た矢先に目があったのだろう。
セツコはすぐに俺から視線を逸らすが、対して俺は彼女にこう尋ねた。

「…コーヒーでも淹れるが、お前も飲むか？」

「は、はい。いただきます……」

返ってきた返事は意外にも肯定の返事だった。
だが、俺はそれだけ聞くや予め沸かしてあったお湯を使ってコーヒーを作る準備に入る。部類はインスタントで、食堂にあるような普通のコーヒーとは大違いの味だ。無論、苦くてまずいという意味合いになるが。
しかし、部屋にあるコーヒーはこれしかない。俺は別に構わないが、セツコは果たしてどうだろうか。
その点においては聊か不安があるものの、コーヒーを作り終えた俺は黒い液体が入ったカップを持ってセツコの方へと向かう。
相変わらず熱心そうに今日の授業内容を復習していたセツコであったが、俺の接近に気付いたのか、手を止めて此方の方を向いてきた。

「インスタントだが、構わないか？」

「あ、はい。ありがとうございます」

俺の差し出したコーヒーのカップをおずおずとした様子で受け取り、軽く口をつけるセツコ。
俺も同様にコーヒーを啜るが、少々苦そうにしながらコーヒーを飲んでいるセツコを見て、思わず苦笑を浮かべてしまった。

「苦かったか？」

「……えっと、はい……」

「まあ、仕方がないか。待ってろ、砂糖とミルクを取ってくる」

「あ、はい…」

指摘され、恥ずかしそうに視線を落とすセツコ。

俺は変わらずに苦笑を浮かべていたが、こうなることは予測していたので砂糖とミルクを取りに戻る。

セツコはそれでも頑張ってコーヒーを飲もうとしていたが、俺は先ほど言ったように砂糖とミルクを彼女に差し出した。

「あ、ありがとうございます」

「いや、俺の気遣いが足りなかった。すまん」

「い、いえ……。南部さんは何も入れないんですか？」

「俺はブラック派だ。特に何も入れはしないな」

「そうなんですか……」

コーヒーのこだわりを言うや、セツコはコクコクと首を縦に振って納得したような感じであった。

しかし、早速砂糖とミルクをコーヒーに入れて飲む点は、やはり女子というべきか。苦いのはあまり好みではないらしい。

「それにしても、小原は勤勉だな。部屋に戻るなり、いきなり今日の復習とはな」

「……そのくらいしか、することがありませんから」

「…確かにな」

セツコの言葉に、俺は苦笑を浮かべながらもその通りだと感じた。他の生徒とは違い、セツコの同居人は俺だ。話す内容も本当は何を言っていいのか分からないのだろう。

俺は改めてインスタントコーヒーを流し込むが、それはいつも飲んでいる筈のコーヒーよりも更に苦く感じた。

「……それから、すまないな」

「え？　何の事……ですか？」

「セシリアの件だ。いきなり決闘などと……お前の都合も考えずに申し込んだようですまない。なってしまったものは仕方がないが、俺から詫びを入れておく」

「い、いえ……。その、平気ですから。心配しないで大丈夫です」

「……」

彼女は平気だというが、果たして本心はどうだろうか。

大丈夫だと、そういっているセツコだが――いや、引き受けるしか方法がないと割り切っているのか、それとも断る気すらないのか。

それに、セツコの目や表情を見ている限り――どうにも、引っかかる。その表情通り、そして瞳の奥底が暗くなっているような感じ

が、何故かした。
それを深く追及するつもりなどは毛頭ない。だが、放ってはおけなかった。
気が付けば、俺はセツコに対してこのような提案を出していたのだった。

「小原」

「はい？」

「明日、第一アリーナに来い。セシリアの戦術は一応知っているつもりだ。少しは教える事も出来るとは思う」

「え……？」

いきなりの提案に、セツコはポカンと口を開けて唖然とする。
俺としても、なぜこのような提案を持ちかけたのかは分からん。
だが、理不尽な決闘に巻き込まれる彼女を、なんとかしたいという気持ちがあったのだろうか。
――分からんな、どうにも。

「で、でも、迷惑じゃ……」

「迷惑なら、こんな提案などするものか」

「……」

俺の発言に、セツコは当然のように黙り込んでしまう。
それも致し方がないかと俺は思い、再びコーヒーを流し込もうと口をつける――が、すでに中身がなくなっていた事に気づく。

いつの間にか飲み終えていたようだ。いつもより少なかったか？と自問自答するが、それはさておいて、再びセツコの方を見やる。セツコは、視線を下に落としていたが――どうするかを考えている様子はあった。

俺としても、無理やり誘った様な形な為、本当に来るかどうかは疑問なところであったのだが。

「では、俺は先に寝る。また明日な、小原」

「……あ、はい。おやすみなさい、南部さん」

声を掛けられて顔を上げたセツコに、俺は軽く手を上げることによって答える。

コーヒーカップを流し台へと置き、歯を磨くために洗面場へ。その際に時間を確認したが、まだ三十分しか経っていなかった。

だが、体が疲れているのは言うまでもない。先ほどは寝ないといったが、やはり休んだ方がいいだろうと思う。

そして、俺は今日最後の溜息を吐くと、洗面場へと入っていくのだった。

＊

翌日の放課後。第一アリーナにて。

其処にはＩＳを展開状態にしたキョウスケとアイビスがおり、キョウスケは腕を組んだままピットの方を見ていた。ちなみにセシリアは例によって今日も別のアリーナにて訓練をしている最中である。

アイビスは何をしているのかといえば、そんなキョウスケをやや不思議がりながらも、どうにかアステリオンの機動性をものにしようとアリーナ内を飛翔する。

しかし、アイビスが飛び回っている最中でもキョウスケは仁王立ちしていて、動くことはない。不思議に思って首を傾げるアイビスだったが、急に警告アラートが響いたかと思うと、ハッと気づいて眼前を見やる。

「わっ、わわっ！？」

眼前にあるのは客席。それを阻むようにＩＳのシールドバリアーと同じものが展開されている為、一言でいえば障壁に近い。

慌てて反転して回避しようとするが、それは間に合うことなく障壁へとものの見事に突っ込むアイビス。

余所見という某キャラがやらかした事と同じような真似をし、アイビスは文字通り墜落して行く。

「……何をやっているんだか」

それを見ていたキョウスケはそう呟いた。

アリーナ内を飛翔していたかと思えば、急な墜落。おまけに今はアリーナのアスファルトで出来ている壁の辺りで伸びており、どう言ってやればいいのか分からなかった。

『無事か、アイビス？』

『…う、うん。あはは、またやっちゃったよ……』

『笑い事じゃないだろう。余所見などするからだ』

『うぅ……。何も言い返せない…』

ＩＳのプライベートチャンネルでの会話で、キョウスケは呆れたようにアイビスに言い放つ。おまけに墜落の原因もしっかり分かっていたようで、アイビスは反論すら出来なかった。

個人的には、「またやってしまった」というフレーズは気になるが、キョウスケにとって、それは今関係のない事だった。

アイビスとの会話を続けていてもなお、目線はピットの方を向けていた。

すでにアリーナに来てから一時間が経とうとしている。客席にいる女子生徒達からもキョウスケは何を待っているのか、という声がするが、生憎客席とアリーナ内部の声が遮断されており、その話声は届くことはない。

更に、アイビスも気にして障壁に激突、墜落してしまう始末。これは彼女が悪い点もあるが、キョウスケが何を待っているのかは彼女自身も気になる点であった。

（もう一時間もああやって待ってるけど……誰を待ってるのかな、響介は…）

遠目でキョウスケを見ながら、一向に動き出さない彼を見て疑問符しか浮かばないアイビスであった。

しかし、そんな目線をキョウスケは気にすることはない。と、急にキョウスケが視線を上にあげたかと思うと――フッと口元を吊り上げる。

「ようやく来たか」

「……？」

軽く笑いだしたキョウスケ。相変わらずアイビスは疑問符しか思い浮かばないが、キョウスケの目線を追ってピットの方を見やると――その答えはすぐに出た。

キョウスケとアイビスの目線の先には――ＩＳ『バルゴラ』を展開したセツコの姿があり、彼女はキョウスケの姿を見るや、バーニアを噴かしてキョウスケへと近づく。

「遅かったな」

「す、すいません」

申し訳なさそうに謝るセツコだが、キョウスケの言い回しを聴く限りでは、必ずセツコは此処に来ると踏んでいたのだろう。

そうでなければ、一時間も何もせずに待つことは不可能であるのも確かなのだが。

「ですが……宜しいのですか？　私なんかの為に、南部さんの時間を……」

「その程度、気にすることはない。それより時間は限られている。今のうちにお前の実力を測っておきたい」

「え……？」

言うや、キョウスケは右腕部にステーク、左腕部にマシンキャノンを展開という従来のアルトアイゼンの武装を同時展開する。

この同時展開も大倉研究所で練習した成果であり、今では何事もなかったかのように展開することができる。もっとも、キョウスケ自身としては最初から展開されている方がやりやすいといえばそうなるのだが。

「小原、お前の実力を測る。……遠慮はいらん。来い」

「うわぁ……。響介もセシリアに負けないくらい強引だよね……」

会話を傍らで聞いていたアイビスも呆れるほど、キョウスケの言葉は唐突であった。

確かにこの第一アリーナは人が少なく、模擬戦をするにはもってこいという環境。ただ、セツコの方はいきなり言われて困惑するしかない。

しかし、キョウスケとしてはセツコがどの程度の実力を出せるのかが分からければ、どうセシリアに対抗してもいいのか分からない、というのもある。

それに、自分でセツコの実力を測っておきたいというのも事実だ。自らで性能やセツコの実力を把握し、対策を練ってみるのも悪くない。

いや――それこそ、キョウスケがしようとしていることであった。

「で、ですが……」

「俺に勝てないようでは、セシリアとの決闘など話にもならない。お前が俺に対して手を出しにくいというのは分からないでもないが、いざ実戦になればそうもいかなくなる。此処に来る決意をしたように、俺に対しても全力でぶつかってこい」

「……」

キョウスケの言葉に、セツコは口を紡ぐ。

しかし、キョウスケの言っていることはもっともだった。

セツコ自身、一体何の為に此処に来たのか。下唇を噛んでいたセ

ツコだったが、そのことを思い出して少しだけ顔を上げる。

「わ、分かりました……。その、宜しくお願いします」

「無論だ。アイビス、離れていろ」

「分かってるよ。……小原さん、最初の一撃が脅威だから、注意してね」

「あ…はい。ありがとうございます」

キョウスケに促されて下がるアイビスであったが、セツコの傍を通り過ぎる際に彼女に小声でアドバイスを送る。

その言葉にセツコは素直に感謝し、頭に置いておく。

事実、その後は最初の一撃――と頭の中で何度も繰り返していた。

「では――早速行くぞ」

「……！？」

セツコもバルゴラの武装であるガナリー・カーバーを展開してキョウスケに向ける。

そして、キョウスケが初めの合図をした瞬間、その持ち前の加速力で一瞬でセツコの前に躍り出た。

「あ……」

キョウスケのあまりに速い加速に、セツコは目を丸くするしかない。

それこそ、アイビスが言っていた最初の一撃であり、そのことを

今になって再び思い出すが――その時にはすでに遅かった。

「初手、貰ったぞ」

「そ、そうは……させません！」

キョウスケが遠慮なしにステークを撃ち込むとするが、セツコは咄嗟――本当に咄嗟の反応でガナリー・カーバーを自分の前面へとやり、ステークを防ぐための盾とする。

ガリリッという耳障りな金属音と共にその部分から火花が飛び散る。だが、キョウスケは攻撃をやめることなく、そのままステークを押し出す。

「う、うぅ……！」

力ではキョウスケが勝っているため、セツコは自然に押され始める。

その瞬間を逃さないキョウスケは、更にバーニアスラスターを限界まで噴かす事によって、セツコを押し出す。これはレビ戦でもやってのけた方法で、力任せに壁に打ち付け、逃げ場をなくす手法だ。

ただ、セツコも簡単にやられるわけにはいかない。どうにかガナリー・カーバーを動かしてキョウスケに反撃をしようとするが――すでに障壁は目と鼻の先であり、すぐさま激突するようなスピード。

ガナリー・カーバーもステークを抑えるために必死である。ならば――と考え、セツコは左腕にバルゴラに搭載されているもう一つの武装であるレイピストルを展開し、キョウスケに対して頭の中で負い目を感じながらも放とうとする。

だが、その前に衝撃がセツコを襲う。後方にはアリーナに設置されている障壁に激突したためだった。

「……っ！」

「次だ……」

衝撃を抑えきれない分が直接セツコへと伝わり、それは痛みに代わる。

だが、キョウスケは攻撃を止めない。ガシャと鈍い音をさせた後でマシンキャノンをセツコへと向け、発射しようとする。

しかし、いつまでもやられている訳にもいかない。セツコは歯を食いしばってどうにか左腕をキョウスケに向け、レイピストルを発射。一瞬だがキョウスケの気を逸らす。

「ビーム系か……」

ただ、レイピストルから放たれるのはビームガン。キョウスケのアルトアイゼンの前には無にも等しく、それはあえなくビームコートによって弾かれてしまう。

「でも、まだ…っ！」

その間にセツコはガナリー・カーバーをキョウスケの方へと向け、実体弾であるストレイターレットを発射する。

流石に実体弾は分が悪い。だが、キョウスケは下がることはせず、左腕で胴体をかばう事によってストレイターレットを防ぐ。

当たった瞬間にドンと音が鳴って軽い爆発が起こるが、セツコはすぐにバルゴラを飛翔させ、ガナリー・カーバーの後背面を使う事によって、それをキョウスケへとぶつけるモーションパターンを行使する。

「このタイミングで……！」

そのままセツコは急降下。キョウスケに浴びせようとする。
だが、キョウスケもその行動はハイパーセンサーを駆使する事によって把握していたため、それを迎え撃つ――いや、返り討ちにするかのように両肩部のコンテナを開放し、呟く。

「容易に接近し過ぎだ。クレイモア……！」

近接格闘はキョウスケの十八番であり、セツコの間合いの詰め方はまだまだ甘い。
それを把握してか、キョウスケは躊躇うことなくクレイモアを射出。降りてくるセツコへと浴びせた。

「きゃあああ！！」

これはセツコも予想していなかったのか、チタン製のベアリング弾が何発も直撃し、爆発を起こすや簡単に弾き飛ばされてしまった。
かなりのシールドエネルギーが減り、これにはセツコも顔をしかめるが――それと同時に、浅はか過ぎたと後悔もしていた――すでにキョウスケはセツコに接近しており、左腕部のマシンキャノンにてセツコに狙いを定めていた。

「零距離ならば……外さん」

「こ、これ以上のダメージは……」

向けられたマシンキャノンを前に、セツコはガナリー・カーバーを握りしめるが――それよりも早く、キョウスケのマシンキャノンがセツコに対して放たれる。
キョウスケの発言通り、零距離での全弾命中。幾ら威力が低いと

はいえ、それだけの数を受ければ危ういのは見えている。
結果、先ほどのクレイモアのダメージと合わさって、バルゴラのシールドエネルギーは更に減っていく。

「うぅ……」

まるで追い打ちをかけるような攻撃であったが、セツコはバーニアを噴かして一旦間合いを取るために後退する。
だが、キョウスケの追撃は止まらない。間合いを取ろうにもあの加速力でセツコを追い詰め、今度はヒートダガーを展開すると、セツコに対して斬りつけてくる。

「そうくるならっ……」

それを見てか、セツコはいとも簡単にガナリー・カーバーを振り回したかと思いきや、その先端部分から今度は実体剣を出現させる。
なるほど、十徳ナイフとはこのことか、とキョウスケは内心笑みを浮かべるが――望むところだと思い、新たに出現させた実体剣と相対する。

「はぁぁぁっ！」

「……その程度か」

目先を鋭くさせたキョウスケは、突撃しながら実体剣を向けてくるセツコに対して、そのような事を呟く。
セツコは下段からの袈裟切りをキョウスケにぶつけようとするが、その程度の袈裟切りなどキョウスケにとって受け止めるのは造作でもない。
金属音を響かせながらその実体剣を受け止め、弾き飛ばす。その

衝撃でセツコがよろめくが、やはりキョウスケは隙というものを絶対に逃さない。
手早くセツコに接近し、速い動作でセツコを斬る。それも、斬る瞬間に機体を加速させ、より素早く斬ったのだった。

「えっ……！？」

「機体性能は確かにいい。だが、少々武器に頼りすぎている印象が強い。いい武装が揃っている分、仕方がない点もあるがな」

勝負ありだった。セツコのＩＳのシールドエネルギーはその時点でゼロとなり、キョウスケの勝利となる。
それを確認し、キョウスケはＩＳを解除して地に降り立つ。
一方のセツコは、キョウスケの方を見るが――指摘された通りだと思い、視線を下に落とした。
そんなセツコの様子を見てか、キョウスケは彼女の方に近付き、再び声を掛ける。

「すまんな。実力を測るためとはいえ、手は抜けなかった」

「いえ……当然の事だと思いますから。気にしないでください」

「……そうか」

セツコの返答を聴き、キョウスケは苦笑する。
だが、キョウスケの内心は苦笑ではない。先ほどの戦闘を思い返しながら、考えを纏めていた。

（先ほど見たのは、実体弾と近接格闘のモーションパターン、実体剣にそしてあのビーム兵器か。組み合わせこそ悪くはないが、小原

もアイビス同様詰めが甘いのが特徴か。的確に、そして狙い澄ましたように撃ってくるセシリアに対抗するのは難しいかもしれん……）

確かにあのストレイターレットを発射してからの近接格闘に持ち込んだことは評価できるが、所詮はマニュアル通りの戦い方だ。

もしかすれば、ガナリー・カーバーはまだまだ性能を発揮できるのかもしれないが――やはり、アイビス同様にセツコもまだまだガナリー・カーバーを使いこなせていないのが現状か。

それに比べ、セシリアの攻撃はキョウスケ同様に容赦がない。かなり不安になってくるが――まだ期限は残っている。どうにか修正していくしかないのだろう。

そんな事を思っていると、今度はセツコがキョウスケに近寄り――急に頭を下げる。

「その……南部さん、今日はありがとうございました。でも…本当に気にしなくて大丈夫です。私は……」

「……関わった以上、無下には出来ん。それに、俺達はルームメイトだ。困ったことはお互い様だと思うが」

「あ……」

その言葉を聴き、セツコは意外といった表情を浮かべると共に――その心の中で、嬉しさを感じていた。

何も関係のない筈の自分に対して、キョウスケは手伝ってくれる――。それが何故なのか、セツコは分からない。

いや、キョウスケだって実際のところは分からないのかもしれない。だが――放っておけないというのは理由の一つといっていいだろう。

（南部さん……ありがとう、ございます）

こんな自分の事を手伝ってくれるキョウスケに内心で感謝しながら、セツコはキョウスケの後姿を見ているのだった――――。

第十五話　決闘当日（前書き）

決闘のタイトルが多いですが、御気になさらずに…。

第十五話　決闘当日

轟音。

自分の目の前で、巨大な機体が激しく炎を上げながらどんどんと高度を落とし、海面へと向かって一直線に墜落してゆく。

それを、その光景を、何も出来ずに――成す術などまるでないかのように、女性が一人立ち尽くし、呆然となっている姿があった。

その女性の体を覆っているのは、灰色を基調とした装甲を全身に散らばせたＩＳ『暮桜』。ところが、その暮桜の装甲は所々が損傷しており、実際のところ限界ギリギリのダメージを被っていた。

だが、そんなことなど搭乗者の女性は気にならないほど、眼前で起こっている光景に対して何も考える事が、そして動く事すら出来なかった。

相変わらず、目の前で爆発を起こしながら墜落してゆく機体――見るからに飛行機のようだが――を見続け、体が硬直したように微動だにしない。

目を限界まで見開き、空中で立ち尽くす女性。何も考えられなかった女性であったが、ポツリと一言、零れるように――そして、微かな声で言葉を漏らした。

「きょう……すけ……」

呟いた瞬間、女性の瞳から一滴の雫が流れるように滴り落ちる。

その雫はゆっくりとした速度で女性の頬を伝い、やがて落ちていく。一つの水滴となった雫は、下方に存在する海へと落ち、同化した。

「フフ……。私の目的は達しました。では、失礼いたします」

誰かが女性に向かってそういってきたが、女性はその言葉すら耳に入らなかった。

女性の目の前で起こっている事が信じられなかったからだ。受け入れることが出来なかったからだ。

何故、彼が巻き込まれる事になったのか。何故、彼が死ななければならないのか。

自分を支えると――約束してくれたはずなのに。守ってやると、彼の前で宣言したはずなのに――。

「響……介……。きょうすけ……きょうすけぇ！」

「その絶望と怒り……そして、悲しみ。どうかお忘れなきよう。フフフ……」

深い緑色の髪を持った女性が立ち尽くす女性に対して囁くように言い放つと、背中のブースターを最大出力で噴かして何処かへと飛び去っていく。

呆然と、そして大粒の涙を流しながら燃え盛る機体に対して、手を伸ばす女性をあざ笑いながら――。

「……ッ！」

屋上にて、夕日を眺めていた千冬は、思い出したくもない記憶が脳裏に浮かんだ事をまるで嫌悪するかのように頭を振った。

思い出したくもない――だが、忘れてはならない出来事。

――無論、忘れる事など不可能であるのだが。

（響介……）

頭の中で、彼の事を思い出す。

ギャンブル好きな奴であったが、初めて――初めて、弟意外に自分をさらけ出せた人物。

だが、その彼が消されてしまった。誰にか？　あの、緑色の髪を持った女に。

「あれだけ大口をたたいた割には、私は無力だった……。お前は、私を恨んでいるか？　響介……」

左の掌の上に乗っていた銀色の指輪を眺め、『彼』の事を思い出しながら千冬は自嘲気味に笑った。

それは、弟の一夏にさえ見せたことのないものであり、彼女のファンが見れば印象がガラリと変わってしまうほどのものに等しい。

しかし、千冬は気にはしない。したところで意味はないからだ。

所詮、世界最強の称号こそあるとはいえ、千冬も一人の人間である。人間なのだから、色々な表情があっても不思議ではないのだ。

世間の評判など、彼女自身としては知ったことではない。それに、今だけは――この瞬間だけは、本当の自分をさらけ出したかったのだ。

風が静かに吹き付け、千冬の髪が微かに揺れる。それが収まった時、後方に誰かの気配を感じたのだが、千冬は気付いていてもすぐには振り返らない。

何故か？　それは、後方にいる人物が誰なのかを直感的に感じたからである。

「やっぱりそれだけは持ってたのか、千冬姉は」

「……一夏か」

聞きなれた声――織斑一夏の声を聴き、千冬は先ほどまでの柔らかな表情を一変させると、今度こそ一夏の方を振り向く。
対する一夏は、ただ真っ直ぐに千冬を見つめていた。ただ、その表情は真剣そのものであったが、内心では千冬の事を案じていたのだが。
――もっとも、今の千冬が一夏の心を読めるかどうかは別として、だが。

「やっぱり、忘れてないんじゃないか……千冬姉は」

「……忘れるものか。あんな……お前以上の愚か者の事など、な」

指輪を握りしめ、千冬は腕組みをしながら柵に背中を預け、一夏から視線を逸らして校庭の方を見やる。
だが、一夏には千冬が寂しげに語っているのが、よくわかった。
弟だからこそ、姉の態度の変化もすぐにわかる。
そんな千冬の表情や心境を見てるからこそ、一夏はキョウスケに対して怒りが込み上げてくるのだ。
何故、千冬や一夏の事を知らないといったのか。
『響介』にとっても、千冬の存在を忘れる事など出来るはずがない――と信じているからこそ、込み上げてくる。

「俺が……」

「ん？」

「俺が絶対、思い出させてやるから……絶対に！」

「……フッ」

千冬はただ乾いた笑みを浮かべ、目を閉じながらも寄り掛かっていた柵から身を離すと、ゆっくりと歩み始める。
一夏は抑えきれない怒りを力拳へと変えながら千冬を見ていたのだが、千冬は一夏の隣辺りで立ち止まると、一夏の方を軽く見て、囁く。

「一夏、一つ言っておく」

「……なんだよ」

「あいつは……死んだ。あいつは別人なんだ……一夏」

寂しげに、そして『彼』の事を思い出すかのように空を見上げる千冬。
しかし、一夏は奥歯を噛みしめると同時に千冬の前まで移動し、若干声を荒げながら彼女に対して発言する。

「そんなの……千冬姉の勝手な思い込みじゃないか！　確かに年齢的に今更高校生なんて…って感じはするけど、希望が消えた訳じゃない！　千冬姉だってそう思ってるんじゃないのか！？」

「…くどいぞ、一夏」

「ちょ、千冬姉！」

声を荒げる一夏を余所に、今度の千冬は冷たく言い放った。それと同時に再び歩き始め、校舎の中へと入っていく。
一夏は去っていく千冬を追いかけるが、それを遮るように扉がバンと音を立てて閉められてしまう。

「千冬姉……」

すぐに追いかければ間に合うものの、一夏はそれ以上千冬を追いかける事が出来なかった。

予想以上に傷が深く、そして千冬自身としても深入りしてほしくない出来事だという事を象徴しているようで――それ以上は足を進めることが出来なかった。

「くそっ……」

閉められた扉を一夏はドンと一つ大きく叩く。

千冬の役に立てない自分自身が――悔しかった。

＊

キョウスケとセツコの部屋――部屋番号は１０３７室。

セシリアとの決闘を翌日に控えたセツコは、今日もキョウスケとアイビスと共に訓練に勤しんだのだが、やはりセツコの動きを見ていると、訓練マニュアルにならって動くのが癖にもなっているように感じられた。

それはそれで構わないのだが、セシリアのような実力がある者との勝負では、マニュアル通りの戦い方ではまず歯が立たない。

だが、身に染み込んでいる戦い方を短時間で変えていくというのは無理としか言いようがなく、キョウスケ自身も指摘されたところで同じなために無理に迫ることはなかったのだが。

「いよいよ明日か……」

「はい……。あんまり自信はないですけど……」

視線を軽く下に向け、言葉通りの態度を見せるセツコ。

こうも後ろ向きでは、キョウスケとしてもやりにくい。気合の入ったセツコというのもまたギャップがあってやりにくいのだが、此処までくると重症レベルで果たして済ませてよいものかと疑ってしまう。

（……マニュアル以前の問題か）

戦い方を変える、というよりも意識を変えることもまた大事なのかもしれない。

更にセツコは元来から優しい性格であり、あまり他人に対して積極的になれない性格が災いしてか、どうしても攻撃を仕掛ける時に遠慮をしてしまう事が多々ある。事実、前の模擬戦においても実体弾であるストレイターレットもキョウスケの急所から外していたのだ。

狙って外した、という訳ではない。無意識に銃身をやや下げ、急所を逸らしたという方が正しいかもしれなかった。

優しいのはいい事ではある。だが、戦場においては情けなど掛ければやられるのは自分自身だ。それを十分に（・・・）分かっているからこそ、キョウスケとしてはそのように思ってしまう。

（分かっている……か）

そう、分かっている。

だからこそ、キョウスケは勝負ごとにおいて遠慮という事はしな

い。相手の為にもならなければ、自分の為にもならないという事をよく知っているからだ。
本気で相手にぶつかっていくことに意義がある。こう思っているからか、なかなか手は抜けなかった。
それが例え――セツコのような人物であったとしても、同じだ。
（それに…セシリアも小原の様子を見れば怒り出すかもしれないな……）
セシリアの性格を顧みれば、それは予想できる出来事に違いない。ただ、怒られたところでセツコは謝るしかない。いや、出来ない。それが、それこそが、小原節子という人間なのだから。
「……」
「あの……どうしました？」
黙りこくっているキョウスケに、セツコは恐る恐る声を掛けた。不安がらせてしまったか、と内心で悟るものの、キョウスケは別に「なんでもない」と片手を上げながら彼女に答える。
「そ、そうですか……」
セツコはホッと胸を撫で下ろし、そのままキョウスケから視線を外した。
すると、セツコは少し考えた後で自身のＩＳであるバルゴラのデータを引き出し、それを見ながら機体のチェックをし始めた。
「バルゴラに問題はないか？」

「えっと……大丈夫です」

キョウスケの問いに、セツコは首をコクンと縦に動かす事によって、肯定の意を示す。

そのまましばらくバルゴラのデータを色々と見ていたようだが、やがてそれをしまうと大きく息を吐いた。

「幸せが逃げるぞ、小原」

「でも……その、緊張してしまって……」

「……そうか」

苦笑を浮かべながらも胸を押さえ、再び嘆息するセツコ。

緊張――なるほど、確かにそれはあるかもしれない。勝てる勝てない以前に、相手に迷惑をかけたらどうしようか、うまくやれるのだろうか――などと彼女は考えているに違いない。

ただ、今のセツコの技量でセシリアに傷を負わせるのは中々難しい事ではないか、とキョウスケは内心で思う。

少なくとも、今の意識では――彼女はこの先もずっと前には進めない。

だからなのだろうか。ふと気づけば、キョウスケはセツコに対して声を掛けていた。

「小原」

「……はい？」

急にキョウスケがセツコを呼んだので、彼女はキョウスケの方をゆっくりと向いた。

もっとも、一体何の用でセツコを呼んだのか分からなかったため、小首を傾げながらであったが。

「俺が口出しする事ではないが……もう少し、自分に自信を持て。今のお前は、とてもじゃないが見ていられん」

「で、ですが……」

「自分に臆するな、小原。自分の事ぐらい、信じてやれるようになれ」

「南部さん……」

その言葉が、セツコの胸に突き刺さるように響く。

『自信を持て』――これこそ、セツコが今もっとも必要な事であろう。

それが分かっているからこそ、実行できない自分が悔しい。もどかしい。ベッドのシーツを軽く握りしめ、下唇を軽く噛みしめた。

（自信……。でも、私は……）

だが、どうしても負の感情というものがセツコの中にどんどんと込み上げてくる。

変われるはずがない。所詮、自分はそんな人間なのだからと、勝手に自分の中で決めつけて。殻を作って。

それがいつしか自然になっており、変えようとも中々変えられなくなっている自分がいた。それは、今もそうだった。

だが、セツコは再びキョウスケの方を向き、軽く笑みを浮かべながら一言だけこういった。

「ありがとう…ございます。南部さん」

「構わん。明日の決闘……頑張れよ」

「はい……」

それだけ言うと、キョウスケはベッドへと転がる。

柄でもない事を言った気がするが、こうでもしなければセツコは変わらない。いや、言ったところで彼女が変わるかどうかも分からないのだが。

だが、何もしないよりは遥かにマシだ。誰も手を差し伸べないのなら、自分が差し伸べればいい――。

（お節介、か）

自分の行動に、キョウスケは内心で笑ってしまう。

だが、後悔はしていない。ともかく今日はもう寝ようと、キョウスケは瞼を閉じるのだった――。

＊

翌日の放課後。セシリアが指定した決闘の日である。

場所はこれも彼女が指定した通り、第三アリーナ。比較的に標準なアリーナであり、日本の首都東京にある超大型アリーナと設計も同様にしてあるという場所だ。

というのも、出来るだけ実戦により近い形での勝負を経験させた

いという狙いもあり、このような設計になったという。ちなみにその東京アリーナの方では、今年の夏に世界中のＩＳ稼働者たちが集まり、オールスターに似たようなとり行いをするという話があるが――それはまた、後にする。

そして、この第三アリーナのＢピットに、キョウスケとアイビス、そしてセツコはいた。現在、セツコのバルゴラを稼働させて前日出来なかった細かな場所の最終チェックを行っている。

「機体面に問題はないか、小原」

「はい、大丈夫です。ガナリー・カーバーも正常に稼働しますし、大丈夫です」

「そうか」

腕組みをしながらセツコを見ていたキョウスケ。彼女からの返事を聴くと、ただ一言だけそう返した。

返事をしたセツコは、ふうと大きく息を吐く。心を少しばかり落ち着け、ガナリー・カーバーを握っている右手に若干であるが力を込めた。

ハイパーセンサーも問題なく動いており、すでにアリーナ中央で待機しているセシリアの情報も掴んでいる。ただ、それを見るたびに益々緊張してしまい、また大きく息を吐いて落ち着かせるという行動を取ったのだが。

「そう緊張するな。お前の実力を出せば、善戦できるだろう」

「しっかりね、小原さん！」

「は、はい。すぅ……はぁ……」

もう一度大きく息を吐き出すと、セツコはピット・ゲートへと機体を進める。
機体をピット・ゲートへと進めたところで、セツコはもう一度キョウスケの方を見る。キョウスケもそれに応えるように首を微かに縦に動かした。

「……行きます」

セツコがバルゴラを微かに傾けたところで、機体はふわりと浮かび上がって前進する。
前進したところで正面ゲートが開き、明るい視界が開けてくる。
セツコはその場所に対して飛び出すように背中のバーニアを噴かし、アリーナの広場へと出ていった。

「大丈夫かな、小原さん……」

「さあな。ともかく、俺達は見守る事しか出来ん。どういう結果になろうと、帰ってきた時に小原を出迎えてやればいい」

「そう…かな？」

「少なくとも、俺はそう思っている」

「そっか…。そうだね、うん」

アイビスが納得したように頷く。
といっても、アイビスがそうしている間にキョウスケはアリーナ内部を映し出すモニターの方に目をやっており、出てきたセツコとセシリアの姿を見ていたのだが。

（さて、何処までやれるか……）

セツコのバルゴラと、セシリアのブルー・ティアーズを見ながら、キョウスケは自然とそう思うのだった。

さて、場所はアリーナ内。

其処には、対戦相手であるセシリア・オルコットがスタンバイをしており、愛銃である『スターライトＭｋ－？』を片手にしながら、セツコが来るのを待っていた様子であった。

セツコがピットから出てくるのを確認すると、彼女もブルー・ティアーズを動かしてセツコへと機体を動かす。

向かい合ったところで、セシリアはスターライトを構えながらも、セツコに対して口を開いた。

「遅かったですわね、小原さん」

「えっと……その、機体の調整で少し手間取って……」

「まあ、いいですわ。それより小原さん、勝負を始める前にこれだけは言っておきますわ」

「……？」

セシリアの言葉に、セツコは首を傾げる。

一体、何を言い出すのか全く予想できなかったために仕方がないのであるが、セシリアは構わずにセツコに対して指を刺すと、こういい始める。

「わたくしが貴方に勝ちましたら、わたくしと貴方で部屋を変わっ

ていただきますわ！」

「……え？」

突如として言われた言葉に、流石のセツコもポカンとする。

部屋を変わる？　全く、この少女は何を言っているのか、と言わんばかりの状態。しかし、セシリアの舌は止まる事を知らない。

「前にも言いましたが、やっぱり長いお付き合いであるわたくしの方が、響介さんと相部屋になった方がいいと思います。べ、別にやましい事をするという訳ではありませんわ。その…響介さんの寝顔を見てみたいというわたくしの……オホン」

頬を上気させ、いやいやと頭を振るセシリア。

言葉の中にうっかり本音のようなものが出てきたが、それ以上はさすがにまずいと感じたのか、セシリアは咳払いをして話を区切った。

もっとも、セツコとしては全て耳に入ったものの、頭の中では困惑している状況なのだが。

「と、ともかく！　わたくしが勝った場合、部屋を交換していただきますので、そのつもりでいてくださいな」

「えっと……わ、分かりました……」

何故か承諾してしまうセツコ。

といっても、話が唐突過ぎて、実際のところこう答えるしか方法がなかったのだが。

「まあ、話はこのぐらいにして……早速始めますわよ、小原さん！」

「……はい」

先ほどまでの態度から一変し、キッと表情を引き締めるセシリア。セツコもそれを感じ、ガナリー・カーバーをセシリアに向かって構えた。

その間だけ、二人の間には短い時間だったとはいえ、かなり長い時間が経っているように感じられた。動けず、動かず。初手をどう打つか、その後は、決めは――そのような事を考えている時間のようにも感じられる、長くも短いその間。

そして――試合開始を告げるブザーが鳴ると同時に、まず動いたのはセシリアであった。

「初めに、左足をいただきますわ！」

「……っ！」

開始直後、セシリアは左目を射撃モードに移行し、手早くスターライトを構えてセツコに向けてエネルギー弾を発射。宣言通りにセツコの左足に向けてレーザー砲を放つ。

しかし、セツコも代表候補生の訓練を適当に受けてきたわけではない。最初の一発を飛翔することによって開始し、ガナリー・カーバーのセーフティを解除し、セシリアに向ける。

「は、反撃を……」

「遅いですわね！」

だが、射撃に関してはセシリアの方が早かった。

セシリアは素早く右側に動くと、左目にてセツコをロックオンし

ながらスターライトの銃弾を再び放つ。
動きが早い、とセツコは内心で驚くが、飛んでくるレーザー砲を紙一重で回避し、反撃とばかりにこちらもストレイターレットをセシリアに向かって発射する。
しかし、その弾丸は無情にもセシリアの後方へと飛んでいく。撃ってもセシリアに当たることはなく、次々に回避されていく。

「そんな射撃、わたくしには届きませんわよ！」

「狙いが……定められない……」

円を描くように飛びまわりながらも的確に銃弾を発射しているセシリアに対し、セツコのストレイターレットはセシリアに掠る様子もない。
おまけに攻撃をどうにか回避しながら反撃することは難しい。どうにか狙いを定めようにも目標がこうも動き回っていては、それどころではなかった。

「ともかく、距離を……」

四方から迫りくる射撃は非常に厄介だ。
セツコは、それから逃れるように降下。対するセシリアは降下していくセツコに対して、追撃とばかりに銃弾を放つ。
しかし、距離が離れれば少しではあるが、回避しやすくなるのも事実。小刻みに機体を動かし、本当に紙一重ではあるものの、セツコはセシリアの射撃を回避しながら地へと降り立ってセシリアと距離を取る。

「ならば……いきなさい、ブルー・ティアーズ！」

周囲を飛んでいたビット達に指示を送り、セツコに向かわせると同時にセシリア自身も少々降下する。
その間にもビット達は訓練された動きであっという間にセツコの周りを取り囲む。
セツコはそのビット達の包囲から逃れるように飛翔するが、キョウスケと共に大倉研究所にいた頃よりＢＴ兵器の扱い方が上達しているのか、速度を上げてセツコを追撃し、遂には包囲する。

（偏向射撃（フレキシブル）が出来れば、このような事にはならないのですが……ともかく、今は勝つことが大事ですわ。小原さんには悪いですが、これで……）

「閉幕（フィナーレ）ですわ！」

セツコを追い詰めたビット達に再び指示を送る。
ビット達はセツコに対して砲口を開き、淡い青色の光が発行したかと思えば――それは一直線にセツコに向かって飛んでいく。

「直撃だけは…させないっ！」

まずは直線から放ってきたレーザー砲に対し、セツコはガナリー・カーバーを盾にすることによって防御する。攻防一体となった武器の為、そう簡単に貫通させることは難しいのだ。
だが、四方を取り囲んだビット達は絶え間なく攻撃を行う。キョウスケのアルトアイゼンのように重装甲な訳でもないセツコのバルゴラは、一発当たるごとにかなりのダメージを被ることになる。

「ううっ！！」

打開策はないものか、と考えているうちにビットのレーザーを一

発貰ってしまう。
右腕に受けたそれは、展開されていた装甲を一瞬のうちに吹き飛ばせるほどの威力。更にシールドエネルギーも減っていき、セツコは苦い表情を浮かべた。

（このままじゃ……）

やられてしまう。セツコの脳裏にそのことが思い浮かんだ。
だが、やられたところで所詮はこんなものだ。代表候補生に選ばれたとはいえ、それはセツコの本意ではない。
この勝負に負けたところで、セツコは失うものはなにもない。せいぜい、セシリアと部屋を入れ替わる程度である。
それならば――いや、その程度ならば、別に構わないのではないか。そう、セツコは一瞬だけ思った。

（でも……）

でも――それは、違うと思うセツコもまたいた。
なぜこのような考えが出たか。それは、こんなどうしようもない自分に、言葉を掛け、手を差し伸べてくれた人がいたからだった。
今まで一人だった――。孤独で、話をするような友など一人もいなかった。
だが、それでも。それでも、あの人は――そんなセツコに声を掛けてくれた。ルームメイトだからか？　友人がいきなり喧嘩を吹っかけたからか？　そんな理由でも構わない。それでも、セツコは嬉しかったのだから。
その人が――彼が、この戦況を見守っている。その人に自分の諦めるような姿など…見せたくはない。見せたくもない。
そして、昨晩彼に言われた事を――セツコは、もう一度思い出す。

『自分に自信を持て、小原』

（自信……。……っ！）

その時、セツコの表情が若干強張る。

すると、セツコはガナリー・カーバーを軽く天へと掲げるや――其処から高出力のビーム・サイズを発生させた。

「な……？　エネルギー兵器ですって！？」

「バルゴラ……。私に、力を貸して……」

ガナリー・カーバーを握りながら、セツコは呟く。

その言葉に呼応するかのようにガナリー・カーバーから出現したビーム・サイズ――通称『バーレイ・サイズ』が輝きを放つ。

「ですが、それも近接戦闘用武装の一つですわ！　まだ、わたくしには届きません！」

ガナリー・カーバーから発生したバーレイ・サイズを見てやや驚いたセシリアであったが、再びビット達に指示を送ってセツコを襲わせる。

だが、セツコは先ほどとは違って怖いぐらいに落ち着いており――動いたかと思えば、一機のビットに狙いを定める。

「なっ、正面から！？」

「はぁぁぁぁ！！！」

先ほどとは違う行動を取ってきたセツコに、セシリアは一瞬だけ判断が遅れてしまう。
その間、セツコはガナリー・カーバーを軽々と一回転させると、バーレイ・サイズを振り上げるようにして、狙いを絞ったビットを一機、真っ二つに斬り裂く。
小規模の爆発と共にビットが爆発四散し、セシリアは眉を潜めた。まさか、そう出てくるとは…と思ったが、それと同時にセシリアも面白くなってきたと口元を吊り上げる。

「面白くなってきましたわ！　ですが、勝つのはわたくしですわよ！」

「私も……負けません。私も少しだけ……自分に自信が持てましたから……！」

その目は、信念が籠っているような目でもあった。
それが出来たのは、自分でも出来ると教えてもらったから。背中を押されたからである。
だからこそ、諦める訳にはいかない。自分でもやれるという姿を――見せたいのだ。『彼に』。

（私でも出来る……。そうですよね、南部さん……！）

ピットの中で観戦している筈のキョウスケの事を思い出し、セツコは再び表情を引き締める。
その時、ガナリー・カーバーの中央部が微かに輝きを放ったのだが、それを確認できたものは現時点ではいなかった――。

第十五話　決闘当日（後書き）

終盤の展開が少々弱いのでは？　と思われた肩は、感想やメッセージにてご連絡をいただければ嬉しいです。

おこがましい要望をあとがきで書いてしまって申し訳ない…。

第十六話　決着（前書き）

決闘の続きは今回で終了。その後はグダグダの内容になっております。

それでもよろぢければ続きをどうぞ。

第十六話　決着

ガナリー・カーバーを手にし、セツコはやや上空へと飛翔する。
相対するセシリアは、セツコの先手を取ろうとブルー・ティアーズを稼働させてセツコを再び取り囲む。だが、三機しかないビットでは思うような連携が取れず、苦い表情を浮かべた。

（元々量産機だとは聞いておりましたが……量産機にしてはスピードが段違いですわ。おまけに先ほどよりも動きが…）

セツコの動きを見て、セシリアは苦い表情を崩さないままブルー・ティアーズたちに指示を送る。
例え三機になろうが、彼女がやることには変わらない。それから、スターライトＭｋ－？を構え、射撃モードを再び展開。
ビットのレーザーが発射されると、間を置かないようにレーザー砲を射出。

「……っ」

警告音が頭の中を過ると、ビットのレーザーを回避したセツコは右斜め横から迫ってくるエネルギー弾を確認した。
今までとは異なった戦法にセツコは内心で驚くが、展開していたバーレイ・サイズを薙ぎ払うように振り上げる事でエネルギー弾を真っ二つにする。
しかし、それを狙ったかのようにセシリアは口元を吊り上げるや、セツコの後方へと一機のビットを動かし、彼女にレーザー砲を浴びせた。

「背中ががら空きですわよ！」

「なっ……くっ！」

不意を付かれた形ではあったが、背中から一発を貰ってしまうセツコ。

バーニアの一機が火を上げるが、セツコはとっさの判断でその部分を限定的に排除することで破壊されたバーニアが下方へと落ちる。

ただ、その間にもお返しとばかりにストレイターレットを先ほどのビットに向かって発射し、撃墜する。

「動きがよくなりましたわね、小原さん！」

「負けたく…ありませんから！」

弱気な彼女にしては珍しく、真剣な眼差しでセシリアを見やるセツコ。

そして、今まで展開していたガナリー・カーバーからバーレイ・サイズの光を消すと、今度は先端から実体剣を抜きだす。それと共に、残ったバーニアを最大出力で噴かし、セシリアへと迫った。

「ビーム・サイズの次は実体剣ですって！？」

「はぁぁぁぁ！！」

驚くセシリアを余所に、セツコはセシリアに迫ると実体剣である『ジャック・カーバー』にて斬りぬこうとした刹那――セシリアの口元に笑みが浮かび、それと同時に渾身の力を込めた筈のジャック・カーバーが受け止められた。

「なっ…？」

「浅いですわね！　そんな近接格闘戦など、響介さんに比べたらなんともないですわ！」

驚くセツコを余所に、セシリアは大倉研究所での訓練も甲斐あってか、素早く展開できるようになったショートブレード『インターセプター』でいとも簡単にジャック・カーバーを受け止め、切り払う。

これは、キョウスケとの度重なる模擬戦によって、彼の接近戦にある程度慣れたから出来る代物である。もしも、セシリアが入学前にキョウスケと出会っていなければ、今頃どうなっていただろうか。

切り払ったところで、セシリアは左手に持っていたライフルをセツコへと向け、至近距離で発射する。果たして、それはセツコに直撃し、彼女は防御の体制を崩してしまった。

「……そ、そんな……」

「終わらせるのは幾分かもったいなく思いますが……最後ですわ」

指をパチンと鳴らすと、残ったブルー・ティアーズ二機がセツコに向かって狙いを定め、同時に光が発射される。

なんとか防御をしようとセツコはガナリー・カーバーを構えようとするが、それよりも早くセシリアの攻撃がセツコへと届き、その全てを貫ってしまった。

「あああっ！」

「今度こそ……閉幕（フィナーレ）ですわ」

自慢の金髪をサッとかきあげ、セシリアはそう宣言する。
それと同時にバルゴラのシールドエネルギーがゼロになったのを確認したアリーナ内のコンピュータが終了のブザーを鳴らし、試合の終了を告げるのだった――。

＊

「負けたか……」

「惜しかったね…。それにしても、オルコットさんの機体に近接格闘武器が搭載されてるなんて思わなかったけど…」

「俺も最初はそう思った。だが、もしもの為の保険という意味合いだろう。それに、俺としてもあそこまで上達しているとは思わなかったが……」

試合の状況を見ていたアイビスとキョウスケが、まず感想に上げたのがセシリアの近接格闘についてだ。
キョウスケもこれに関しては少々予想を超えていた。しかし、考えてみるとキョウスケは何度もセシリアの懐に潜っての攻撃を行ってきた。
射撃特化の機体において、距離を詰められるというのは非常にまずい――いや、タブーといってもいいくらいの事だ。
だが、セシリアはまだまだ代表候補生の存在。いくら実力があるとはいえ、若さゆえの甘さというのも当然存在する。だからこそ、

あのショートブレードも搭載されたのだろう。
そして、その危険性はキョウスケと出会ってから強まったに違いない。アルトアイゼンが異例の機体とはいえ、ああも簡単に接近を許してはならない。だからこそ、セシリアもＢＴ兵器の稼働率向上と並行して、近接戦闘の訓練を始めたのだ。
それに、セツコの近接戦闘技術はそれほど高くはない。言っては悪いが、キョウスケとはかなりの違いがあるのも確かだ。
キョウスケとの模擬戦に比べれば、セツコの格闘など物足りない。そういった事情があり、セシリアはセツコに勝つことが出来た。
また、セツコがまだまだセシリアに比べれば力不足という点もあるのだが。

「だが、セシリアの例はアイビスにも応用できる。射撃戦闘がメインと言っても、近接格闘もやっておいて損はないだろう」

「そうだね」

キョウスケの言葉に、アイビスは軽く頷く。
それに、自分の夢の為には力をつけるしかない。認めてもらうしかないのだ。
それに、キョウスケのことばは理に適っている。スレイがやって見せたようなソニックブレイカー――――あれを、アイビスもやらなければならないのだから。
さらに、それに繋がるマニューバ『ＲａＭＶｓ』も、完成させなくてはならない。

「……やるよ、あたし。教えてもらっていいかな、響介…？」

「構わない。ただ――覚悟しておけ、とでもいえばいいか？」

その言葉に、アイビスはクスッと笑った。
だが、アイビスの決意は変わらない。首を縦に動かすことで肯定すると、キョウスケはポンとアイビスの頭の上に手を置く。

「…？　どうしたの、響介？」

「いや、なんとなくな。」

そういってキョウスケが踵を返すと、ピットに戻ってきていたセツコの方に向かって歩き出す。
アイビスはキョウスケの後姿を見ながら、なんとも言えない視線を彼に送るのだった――。

＊

「駄目だ」

「なっ、どうしてですの！？」

「お前と一緒だと色々と面倒だ。ともかく、その要求は却下させてもらう」

場所は食堂。夕飯時となり、今は大勢の女子生徒がわいわいと騒ぎながら食事を採っていた。
俺達も同様であり、いつもの面々――セシリアとアイビス、そしてルームメイトでもあり、先ほどセシリアとの勝負を終えたセツコ

も俺達と夕食を共にしていた。
最初こそ「本当にいいのか？」とビクビクした様子を見せていた彼女であったが、別に一人増えようが問題はないと誘った。
セシリアもセシリアで、彼女の実力を認めたのか、数日前の尖った態度ではなく普通に彼女に接している。が、話がなにやらセツコと部屋を変わるといい始めた頃から、俺は即座にそれを拒否した時から始まる。

「し、しかし、わたくしは小原さんに勝ったのであって…」

「知らん」

「もぅ……。そんなにわたくしといるのが嫌なのですか、響介さんは？」

「研究所でも一緒だっただろう。それに、今も同じだ。部屋まで同じにする必要はないと俺は思うのだが」

そういって俺は毎度お馴染みとなってきている食後のコーヒーを啜る。
セシリアは俺の言葉に関してやや不満げにブツブツと呟き、まるでコーヒーと対抗するかのように紅茶を掴み、優雅に口にする。
――しかし、其処にセツコが俺の方を向き、こう発言してきた。

「あの……部屋を交換する分では、私は構いませんが……」

「いや、気にする必要はない。セシリアが勝手に言ってきたことだからな」

「……はぁ、もういいですわよ。わたくしも響介さんを説得しても、

恐らく卒業してでも折れないでしょうから、諦めますわ」

セシリアにしては珍しく、首を振りながらかなり残念そうにセツコを制す。

最初のころは神聖な決闘で決めたので、といっていたが、俺の性格を把握しているのでこういったのだろう。ただ、何故かセツコの方をやや羨ましそうに眺めていたが。

――別に一緒の部屋になろうが、今までと対して変わらないとは思うのだが。いや、そもそも自室にいる以外は、ほとんどセシリアがいる気はする。最近の訓練は別として、だが。

「でも、オルコットさんは積極的だね。あたしには到底お願いできないような事を言い出すなんて」

「そ、それは……当たり前ですわ。わたくしはこの中において、一番響介さんと共に学んできた日数が長いのですから。そ、それに、他の方ともしもの事があっては……」

「妙な心配をするな、セシリア」

頬を赤らめながらとんでもない事を言ってきたセシリアに、俺はジト目を向けながら否定する。

しかし、いきなりこいつは何を言い出すのだろうか、と思えばそんな事か。

――悪いが、今はそんな事は微塵にも思った事はない。冗談などではなく、それは本心から思う事だ。

今は、記憶を取り戻す事。それだけが俺の目標かもしれない――。

「そういえば、来週は響介さんとあのお馬鹿さんの試合ですわね」

「――織斑の事か」

「一応、専用機が学園に届くという事ですわ。まあ、響介さんがあんなお馬鹿さんに負けるとは到底思えませんが」

そういえば、セツコとセシリアの決闘の話ですっかり忘れていたが、次は俺の番だという事を今頃になって思い出す。

確か、クラス代表を決めるための勝負だった気がする。おまけに、俺を推薦したのは目の前にいるセシリアだ。

「あ、あの……頑張ってくださいね、南部さん」

「ああ……ありがとう、小原」

「い、いえ……」

横から応援してくる小原に、俺はそういって答えるが――果たして、どうするべきか悩むところだった。

ハッキリ言って、クラス代表など面倒だ。更に厄介ごとが増え、自分自身の訓練の時間も損なわれると考えればデメリットでしかない。

もっとも、卒業後の進路が～と人は言うが、恐らくは大倉研究所に強制送還されるので考える事など無意味に等しい。それに、アイビスに教えるといった建前、時間が失われるのも厄介だ。

ただ、わざと負けるつもりなどは毛頭ない。全力でぶつかり、恐らくは倒すつもりで本番は望むだろう。手加減など、したくはないからだ。

「そっか。次は響介の番だったね。あたしも応援するよ」

「ああ……すまないな、アイビス」

それに、俺に期待してくれる人がいるという事も忘れてはならない。

それを裏切るような、無様な戦いなどしたくはない。だからこそ――俺は相手が織斑とはいえ、本気で挑む。

なりたくない、と言っている場合ではない。それは子供の言い訳に過ぎないから。

それに、この時から俺の本心は決まっていたに違いない。どんな結末になろうと、俺は――――。

「其処のお前、少し……いいか？」

「ん？」

と、その時。ふと誰かに呼ばれたかと思うと、俺達は一斉に声がした方を振り向いたと同時に、俺は内心で首を傾げた。

何故か。それは、相手が予想外の相手だったからである。其処に立っていたのは、髪を後ろに結い、やや不機嫌そうな目付きを俺に対して向けている女性だった。

彼女は、俺と同じクラスである篠ノ之箒。彼女は何を隠そう、ＩＳの開発者である篠ノ之束の妹であるという。

ただ、どうやら姉の事に関しては触れられたくはないのか、その話題がクラスの中に持ち上がった時はやや怒りを表したかのような声を出していた。

しかし、彼女と話すのは初めてだ。一体何の用だというのか。

「別に構わないが……大事な話か？」

「まあ……そうかもしれない。ただ、此処で話しにくいというのは

事実だ」

「……分かった。一旦、此処から出るとしよう。セシリア、アイビス、また明日な。小原は先に部屋に戻っていろ」

「あ、はい……」

唯一答えたのは、セツコのみだった。それ以外はあまりにも唐突過ぎて言葉が出ない、といったところか。

俺は彼女たちにそういうと、篠ノ之と共に食堂を出ていく。一体、何の話なのかは分からないが――。

ともかく、俺達は食堂を出て、人気のない場所へと移動する。

其処にたどり着くなり、俺は壁に背中を預けて寄り掛かると、開口一番に篠ノ之に尋ねる。

「それで、俺を呼び出した理由はなんだ？」

「そうだな…。本当に忘れてしまったのか、という事だ。一夏の事も、織斑先生の事も、それから……私の姉の事も含めて」

その言葉に、俺は眉根を寄せる。

彼女――篠ノ之も、織斑姉弟のように俺の事を知っているかのような、そんな口ぶりだった。

だが、当然そんな記憶は全くない。忘れているから、というのも考えられるが、もしも本当に知り合いなのだとしたら少しぐらいは頭痛がしてもおかしくはないと俺は思う。

無論、そんな事は一切ない。不思議なくらいに――。

「……すまないが、分からないんだ。今の俺は――お前たちの事を言われたとしても、答えることは出来ない」

「……そうか。だが、よく似ているから、皆そう思ってしまうんだ」

その言葉に関しても、俺は眉を寄せる。

似ている――それは果たして、過去の俺の事なのだろうか。それとも、他の誰かなのだろうか。

もしも後者だった場合、俺としてはあまりいい気はしない。似ているからといって、それを勝手に照らし合わせることはあまりいい気はしないというのもある。

織斑姉弟、そして篠ノ之――関係があるか、ないか。全く分からない状態が続く。

「それより、お前の姉と――『そいつ』とは、どういう関係だったんだ？」

「……姉が突然連れてきて、私の彼氏だと言い張った。無論、困ったような表情を浮かべていたので、即座に嘘だと分かったが」

当時を懐かしむかのように篠ノ之はやや上を見上げながら呟く。

しかし、それはまた強引だなと俺でも思う。恐らくはいきなり連れて行かれて、その時に宣言されたのだろう。それは俺でも難色を示すほかない。

「……やはり、覚えていないか？」

「ああ、全くと言っていいほどに」

「そうか……」

視線を微かに下に向ける篠ノ之。

ただ、それだけを確認する為に俺と接触したようであり、言い終わると彼女は俺に対して踵を返す。

「話はそれだけか？」

「ああ。時間を取らせて悪かったな。あと、一つ言っておくことがある」

「ん？」

言うと、篠ノ之は再び俺の方へと向き――ビシッと指を俺に向けながら、堂々と俺に言ってくる。

「来週の勝負――――勝つのは一夏だ。お前に…あいつは負けない」

「フッ……そうか。無論、俺も手加減などするつもりはないと、あいつに伝えておけ」

「無論だ。では、私は失礼する」

今度こそ篠ノ之は歩き始め、上の階へと上がっていく。

そんな篠ノ之に対した自信だ、と俺は感心する。それほど織斑の事を信頼し、信じているからであろう。

そんな時、ふと後方から気配を感じたので、俺は即座に振り返る。

そして、やや呆れたように嘆息し――呼びかける。

「セシリア、アイビス……それから小原、さっさと出て来い」

瞬間、廊下の端の方で小さくガタッと音がするや、恐る恐るといった感じで名指しされた三人が出てくる。

セシリアは何故か毅然と、アイビスは少し申し訳なさそうに、そしてセツコはアイビスと違って本当に申し訳なさそうな表情を浮かべながらだったが。

「盗み聞きは感心しないな、お前等」

「ち、違いますわ。響介さんが篠ノ之さんに襲われることを危惧したのであって、わたくしたちは別に……」

「本当は物凄く慌てて追いかけてきたんだけどね…。主にオルコットさんが」

「なっ、ダグラスさん!?　どうしてそういう事を言うのですか!?」

「いや、本当の事だから……」

「いくらそうでも、口に出す必要なんてないですわ!」

なにか焦ったような口ぶりでアイビスに突っかかるセシリア。

俺はそんな様子に溜息を吐くが、ふと気が付けば申し訳なさそうな表情を浮かべていたセツコが、俺に対して頭を下げてきた。

「その…盗み聞きする気はなかったのですけど、少し気になってしまって…ごめんなさい、南部さん…」

「……まあ、いいだろう。それに、今までと同じような話だったからな……」

「……？」

セツコは首を傾げるが、それは分からなくてもいい内容だ。
ともかく、織斑姉弟と篠ノ之――果たして、本当に俺の過去を知っている人物たちなのだろうか。それとも――。

（いや、今はそれについて考えている暇はない。まずは来週の勝負…か）

一先ず、意識を向けるのはそちらでいいだろう。
果たして、織斑がどんな戦法で向かってくるか――。それが、今現在においての楽しみの一つだった。

「ですから、何故あのような事を口にしたのかを明確にしていただかなければ、わたくしは納得が出来ませんわ！」

「えっと…オルコットさん、ごめんなさい……」

……後ろの二人は、無視した方がいいのだろうと俺は思うのだった。

第十七話　キョウスケ対一夏（前書き）

お、お待たせしました。第十七話を投稿いたします。

少々残念な出来かもしれませんが……まだ、一夏君は初心者だという事で、ご勘弁を…。いや、即座に負けることはありませんが…。

第十七話　キョウスケ対一夏

月曜日――それは、織斑一夏と南部響介の勝負がある日だった。
あまり授業時間を割きたくはないのだが、こうでもしなければクラス代表というのは決まらない。何故ならば、男が二人もいるクラスだから。
――というのは、あくまで建前だ。実際には一夏の実力を測る目的があるという事と、キョウスケが一夏の知っている“響介”ではないという事を分からせるために設置した大掛かりな出来事。
授業時間をわざわざ割いたのも、元はといえば一夏の為といっても過言ではない。
無論、ひいきしている訳ではない。彼に実戦の厳しさというものを分からせるためにある。
そんな千冬の思惑はともかく、場所は第三アリーナのＡピット。既にキョウスケは自機であるアルトアイゼンを展開し、調整を行っている最中だった。
その近くには、いつもの面々――セシリア、アイビス、そしてセツコ、更には篠ノ之箒がその場にいた。
箒だけは腕組みをしながら目を吊り上げ、険しい目付きでキョウスケを見やっている。キョウスケはそんな視線を後ろから浴びつつも、入念に機体をチェックしているのだが。
しかし、そんな篠ノ之に対し、セシリアはジト目を向けながら彼女にこう尋ねる。

「……どうして篠ノ之さんがこちら側にいらっしゃるのですか？
まさか、スパイでもしにきたのですか？」

「……一夏から先生と二人にしてくれと言われただけだ。だから、

仕方なくこちら側に来たまでだ」

「客席でも十分勝負は見れますわ。それに、貴方はこの一件では部外者だという事をお忘れなく」

「そ、それはお前達だって同じだろう…」

「ち、違いますわ！　わたくしは響介さんの事が心配でして…って、こ、これ以上は言いませんわよ！」

「別に聞いていないんだが……」

顔をやや赤く染めながら騒ぐセシリアに、箒は呆れるしかなかった。

確かにセシリア達も部外者であり、別にピットにいる必要はない。だが、勝負を前にしたキョウスケを激励するために此処にいるのだ。――恐らく。

そんな二人の会話は置いておき、キョウスケはただ黙々と機体を確認している。

試合開始まで残り十分。全力で戦うと誓ったからには、手加減など許されない。いや――する筈がない。

全力を出すためにも、機体の何処かが不具合では全力など出せる筈がない。だからこそ、こうして入念にチェックを行っているのだ。

ただ、異常な点は何処にもなく、全ての項目が良好だったのだが。

「どうですか、南部さん……？」

「ああ、これといった問題はない。心配するな」

セツコの問いに、キョウスケは振り返ることなく答える。

そうですか、と彼女は胸を撫で下ろすが、キョウスケはセツコの方を向くことなく展開した機体に搭乗する。

搭乗した瞬間、視界が全方位へと広がる。最初は少々戸惑った感覚も、今では不思議な事に慣れたものだ。慣れとは怖い、人は言うが、まさにその通りだとキョウスケ自身もそう思う。

マニュピレータをゆっくりと動かし、指の感触を確かめる。やや分厚い装甲越しに伝わるその感触を確かめ、キョウスケはゆっくりと拳を握った。

「大丈夫そうだね、響介」

「ああ。――――やれそうだ」

口元を微かに吊り上げて笑みを浮かべる。

戦場に赴くときのどことない高揚感――それが、今は二倍になっているような気がした。果たして、一夏はどれほどできるか。どの程度でぶつかってくるか――楽しみは尽きない。

それを言えば、彼女たちはどんな顔をするのだろうか。だが、そんな事を気にしている場合ではない。

本気で勝負をしながらも、自らも楽しむ――。この勝負はそうしようと、キョウスケは決めていた。勝っても負けても、関係ない。今は――だが。

「接近戦用の機体か……」

「だが、悪くない」

箒の呟きに、キョウスケは微かに笑みを浮かべながら返した。

今の呟きが聞こえたのか、と箒は思わず口に手を当てる。と、同時にＩＳのハイパーセンサーで微かな声すら感知する、という項目

を思い出した。

「響介さん！　あんなお馬鹿さんに負けるような貴方ではないと、わたくしは信じておりますわ！」

「なっ！　確かに一夏は馬鹿だが、今回の勝負は負けんぞ！」

「あら、たいそう自信がおありのようですわね。ですが、あのような無知な方と響介さんとでは天と地の差がありますわ。分かっていますの？」

「果たしてどうかな。確かに南部の方が経験上では上なのだろうが、一夏もそう簡単に負けはしない」

「どうですかね…。開始三秒で終わりそうな気がしてならないのですが……」

「な、なんだと！？」

勝負を前にしながら、セシリアと箒の言い争いは続く。

そんな様子のこっちが今度は溜息を吐いてしまうが、キョウスケは彼女たちを無視してピット・ゲートへと機体を進める。

ハイパーセンサーで嫌でも雑音が耳の中に入ってくるが、それもありか、とキョウスケは笑った。

「…響介さん、わたくしのどこが可笑しいのですか？」

「気のせいだ」

「普通に見えたのですけれど」

「……出る」

「ちょっ、響介さん！」

機体を前進させ、キョウスケはアリーナ内に入っていく。

一方のセシリアはやや不服そうな表情を浮かべながらも、その後姿をただ見送っていた。それに、キョウスケが一夏に負けるはずがないと――信じていた。

（そうですわ…。響介さんが負けるはずがないですわ。混沌（カオス）を退けた響介さんなら……）

一か月前の出来事を思い出したところで、セシリアは目を伏せた。思い出すたびに歯痒くなり、そして助けに来てくれたキョウスケの事が脳裏に浮かぶ。不甲斐ないからこそ、もっと自分を伸ばしたい。何時かは――キョウスケの隣で戦えるようになりたい。

無論、セシリア自身が劣っている訳ではない。口ではいつものように振る舞っているものの――その心は、不安だらけだ。

だからこそ、最近は一人で我武者羅に訓練をしている。

それこそ、いざという時にキョウスケの足手まといにならぬように――。

「どうしたの、オルコットさん？　急に黙り込んでたけど…」

「な、なんでもありませんわ。響介さんがどのようにあのお馬鹿さんを負かすのかを考えていただけですから」

「ま、まだいうか、お前は！」

アイビスの呼びかけに内心で少々動揺しながらも、面には出さない。
言われた篠ノ之は当然のように怒り出すが、セシリアはそのまま聞き流す。そして、アリーナ内を映し出しているモニターの方に目を向けた。
（響介さん……）
モニターを見つめながら、セシリアは胸の前で軽く拳を作るのだった――。

＊

第三アリーナのフィールド内は、殺風景といっても過言ではない。従来のフィールドも似たようなものなのだが、此処はそれ以上にそう感じられた。周囲に配置されている客席には一年一組のクラスメイト達が今か今かと勝負が始まるときを心待ちにしているように、出てきたキョウスケの方を見ていた。
そんな視線がキョウスケに一点に集まるが、キョウスケは動じることはない。深呼吸をし、向こう側のピットを軽く睨み――アルトアイゼンの武装を展開する。
左腕には三連装のマシンキャノンを、そして右腕には愛用のリボルビング・ステーク。スクエア・クレイモアの充填は完了済み。ヒートダガーをぐるりと軽やかに回転させながら構え、臨戦態勢へと移行する。
その時、向かい側のピット・ゲートの扉がゆっくりと開き――其

処から白く輝くＩＳが飛び出す。
飾り気などなく、まさに白一色の機体。凛々と輝く太陽の日差しを浴び、それは更に美しく輝きを放つようにも思えた。

「来たか……」

キョウスケの呟きと同時に白い機体は地上へとゆっくり降下し、キョウスケと向かい合う。
その白い機体に搭乗しているのは、例によって織斑一夏。鋭い眼光と共にキョウスケを見やり、すでに臨戦態勢を敷いていたキョウスケ同様に身構える。

（関連データなし。全くの新型か。さて、どのように仕掛けてくるか…）

思考が頭の中で渦巻く。
データを見てみたところ、当然といえばそうなるだろうが、全くデータがない新型。ただ、名前が『白式（びゃくしき）』だという事ぐらいしか判明しなかった。
全くもって未知の機体。それ故に、キョウスケは面白いと思った。
更に、一夏がどれほどの覚悟でキョウスケに挑んでくるのか――それもまた、見物である。
ただ、一夏の表情を見る限りではこの勝負に対する気迫というものはどことなく感じられた。
緊張感からか、アリーナ内が妙に静か。観客席で見守っているクラスメイト達も食い入るように対峙している両者を見やっていた。
赤と白――果たして、一体どちらが勝つのだろうか、と。
試合開始まで残り三十秒というところか。その時になって、キョウスケが一夏に対して口を開いた。

「本気で行くぞ、織斑」

「当たり前だ。それにこの勝負……俺は、負けられない」

「そうか」

たんたんと、それでいて力強い声。

内心でキョウスケは笑むが、すぐに次の行動に移るために姿勢を小さくし、いつでも突撃できるような体勢になる。

『それでは両者、試合開始』

場内アナウンス――声からして、千冬の声であったが――が聞こえた瞬間、まず動いたのはキョウスケだった。

彼の持ち味である、先手必勝。定番ともいえるようになってしまったそれだが、開始早々にいきなり目の前に突出してくる方法は、並みの相手といえどもそう簡単に反応できるものではない。

当然、一夏もハッとするものの、思うように体を動かすことが出来なかったが――まるで、金縛りにでもあっているような感覚に近いか――どうにか初手だけは防ごうと両腕をクロスして胴体だけは守る。

其処に、アルトアイゼンの左手が飛ぶ。重い一撃が防御したはずの一夏の全身に響き渡り、歯を食いしばって抑えはするものの、微かに防御したはずの両腕のガードが崩れた。

「甘いな…」

「っ！　ガハッ！」

その声が聞こえた刹那、今度は右足で一夏の脇腹を容赦なく蹴り

つけた。
その衝撃は先ほどとは比べものにならず、体は右側へと吹っ飛ばされた。砂煙をあげて地を削り、暫くいったところで止まる。
抑えられなかった痛みが全身を襲うが、一夏はなんとかして立ち上がろうと左手を地につけ、力を込める。
だが、キョウスケは追撃とばかりに左腕に搭載したマシンキャノンを一夏に向けて発射する。

「っ…当たる、かよ！」

ようやくスラスターを活用し、一夏はマシンキャノンを回避する為にキョウスケと距離を取るために一時的に後退する。
だが、回避運動がやや遅れたためかマシンキャノンの銃弾によって右足の装甲に掠り、一部が吹き飛ぶ。威力こそ低いマシンキャノンだが当たればＩＳの装甲といえど簡単に吹き飛ぶ代物に変わりはない。
その光景を見て、息をのむ一夏。だが、キョウスケは距離など取らせないとばかりにバーニアを噴かして再び一夏に迫った。

「くそっ、武装を……！」

このままでは勝てる筈もなく、一夏はＩＳ『白式』が今現在使用できる武装の装備一覧を呼び出す。
すると、其処には一つの武装――――といっても、実際に一つしかない武装であったが、何もないよりはマシとその武装を展開する。
果たして、一夏が呼び出した武装は近接専用のブレードだった。セシリアのインターセプターのようなショートブレードではなく、実体剣である。
鋭利な刃がキラリと光り、それは一夏の腕の中に納まる。一夏はそれを構えると、今まで後退していたスラスターを逆噴射させ、一

転してキョウスケへと迫る。

「おおおっ！」

「格闘戦に持ち込むか…。だが」

上段から斬りかかってくる一夏に対し、キョウスケは刃の方に左腕を向ける事でその斬撃を防ぐ。ギリギリと音を立てているものの、刃はそれ以上動く事すらなかった。

「ぐっ……！」

「簡単に攻めすぎだ。それに、剣の軌道も見え見えだ。すぐにどこに飛んでくるのかが分かるようでは、まだまだだな」

「あいにく剣は再開したばかりなんだよ……！」

更に力を込める一夏であったが、キョウスケは力を込めていた筈の一夏を振り払うように左腕を動かし、即座にステークを構えながら突進する。

「悪いが、終わりだ……」

「そう簡単に……終わるかぁ！」

キョウスケのステークは、的確に一夏の胴体を捕えていた。

だが、一夏は本能的な判断で胴体を逸らす事でステークを回避する。だが、これに驚いたのはキョウスケの方だった。

「…ッ」

「ぜあああっーー！！」

驚くキョウスケを余所に、一夏は下段から近接ブレードを振り上げる事でキョウスケに斬りかかる。

その斬撃はキョウスケの胴体にかすり、微かな傷をつける。これを見て、キョウスケは一夏に左腕を押し付けると、すぐさまマシンキャノンの引き金を引き、その勢いのまま珍しくやや後退した。

「あ、危ねえ！」

一夏もスラスターを駆使して後ろにいったん下がる。

だが、すぐに近接ブレードを両腕で構えると、ふうと一回だけ大きく深呼吸をし、キョウスケを見やった。

（まさか……あの位置でのステークを避けられるとは…）

予想外。外したつもりはないのだが、一夏はそれを避けた。

だが、それもまた面白い事だとキョウスケはやや怪しく笑みを浮かべた。そう、これくらいでなくては面白味がない。ステークを避けたことに関しても、それは言えた。

（余計に……負けることは出来んか）

一夏を見ながら、キョウスケはそう思うのだった。

＊

様子を見ていたピットのモニター前では、戦況を見守っていたセシリアが目を見開いていた様子があった。
アイビスもセシリアほどではないにせよ、驚きを隠せないといった表情を浮かべている。何故ならば、あの至近距離でキョウスケのステークを避けたことに対してだ。

「あの至近距離で響介さんのステークを避けるなんて……ありえませんわ」

「フン、一夏をそう甘く見るな。それに、剣を使う者があの程度の攻撃など…「あの程度ですって!?　受けたこともない方が、そのような事を仰る資格などありませんわ!」

箒の言葉に、思わず怒声を放ってしまうセシリア。
それに対して箒はやや眉を潜める。一夏が避けられたのだから、所詮はその程度の攻撃だったのだと箒は内心で思っていた。
だが、セシリアやアイビスは違う。キョウスケの近接戦闘での恐ろしさを知っているからこそ、それを一回だけとはいえ、避けた一夏の事が信じられないのだ。

「……何を其処まで怒っているのだ、お前は」

「響介のステークを避けるなんて、あたし達――代表候補生でも出来なった事だからだよ」

箒の訝しげな言葉に答えたのは、セシリアではなくアイビスだった。
モニターを見やりながらも、アイビスは思い出すかのように目を細め――語る。

「多分、オルコットさんの方が分かってると思うけど……あのステークを、織斑君の距離で避けるなんて相当な芸当だよ。まぐれではあると思うけど……普通は反応できないほどに速いんだよ」

「速い？」

「うん。それが響介の持ち味だし、決め手の一つでもあるから」

やけに真剣な面持ちで答えるアイビス。

受けてみて、初めてわかるキョウスケの一撃。セツコも微かに頷いていたが、彼女はまだキョウスケの真骨頂を見た訳ではない。

ただ、何度も模擬戦闘を行っているセシリアや近接戦闘の指導を受けているアイビスが言うのだから、間違いはない。

それに、キョウスケも手を抜いていた訳ではない。本気でやって、それで外した。まぐれ――なのかはさておき。

「……まあ、一夏も負けられないからな。必死なのだろう」

「……」

箒の呟きなど、耳に入ることなく――セシリアは再びモニターに意識を移す。

だが、ステークが外れた事でキョウスケが負けた訳ではない。それに、セシリアは確信しているのだから。

（必ず…勝ちますわ。響介さんなら……）

＊

此処まで戦ってきて、一夏は機体が思うように動かない事を感じていた。

千冬には『初期状態』などといわれたが、あまり理解していなかった一夏。だが、それが今になって重要だった事を思い出し、少々焦る。

先ほどのステーク然り、紙一重とはいえ攻撃を避けたのはいいのだが、一歩間違えば撃墜だ。この『初期状態』がいつまで続くのかは定かではないが、今の状態でキョウスケとやりあうには分が悪い。

ただ、こういう時こそ集中する。剣道においてもだが、集中することは非常に重要な事であり、必然ともいえる。ただ、キョウスケも不気味なほどに集中しており――なにより、隙というものが一夏の目には映らなかった。

更に、見えない気迫というものもヒシヒシと伝わってきている。だが――引くわけにはいかない。

（千冬姉の為にも、今は――！）

近接ブレードを構え、一夏はスラスターを噴かしてキョウスケへと再び迫る。

対するキョウスケは迎え撃つかのようにヒートダガーを構え、中段より微かに上より迫りくる一夏の斬撃を防ぐ。

「まだまだっ！」

「……！」

斬撃を防がれたものの、一夏は諦めることなくキョウスケに対し

て刀を振るう。一方のキョウスケはどうしたことか、防戦に回った。
だが、一夏の斬撃をいとも簡単に防いでいる事から、何かを伺っていることは分かる。それが一夏にとっては不気味であり、苦い表情を浮かばせることになる。

（一体、何を……？）

一夏が疑問に思った瞬間、キョウスケの目付きが変化した。
防戦に回っていたキョウスケであったが、突如として一夏の近接ブレードを斬り払う。
いきなりの事に一夏は先ほどのような反応が出来ず、胴体部分がガら空きになる。キョウスケは間を入れずに一夏を蹴りつけると、壁際へと追いやった。

「てぇ…。ん？　壁際に……まさか、最初から…！？」

「そのまさかだ」

気付いた時には、すでにキョウスケが目の前にいた。
壁際に追いやられたという事は、退路をなくすという事と同義である。近接戦闘において実力を発揮するキョウスケにとっては、追いやった方が都合がいいのだ。
一夏も近接格闘戦しか出来ないのだが、キョウスケのような技量は持ってはいない。これには顔を顰めるが、キョウスケは既に次の行動を取っていた。

「悪いが、今度こそ勝負は決めさせてもらうぞ」

「しまっ……！？」

「クレイモア」

言い終わる前に、キョウスケは肩部のハッチを開いて一夏に対してクレイモアの雨を浴びせる。

直撃した瞬間にクレイモアは爆発を起こし、それが他のクレイモアにも連なって誘爆していく。

次々と爆発していくクレイモアの反動を生かし、キョウスケはそのまま後退した。地をやや滑るようにしながら足を止め、一夏の方を見やる。

「やったか……？」

訝しげに黒い煙の中を見やっていたが――その時、煙が瞬時に斬り裂かれると同時にその中から、ゆっくりと誰か――恐らくは一夏だろうが――が出てくる。

その姿を見た瞬間、キョウスケはやや目を見開くが、すぐに面白いとばかりに微かに笑った。

「……フッ、サマ師め」

「違うな……。これが、『白式』の“本当の姿”だ」

先ほどとはまた違う、白式の姿。

装甲が更に純白と化し、装甲の形状もやや異なっていた。すぐにハイパーセンサーが白式の事を調べ、どうやらあの爆発の間に初期設定から一次移行（ファースト・シフト）した事を告げる。

更に上げる点は、先ほどまで近接ブレードであった刀であろう。

この近接ブレードの本当の名称は――『雪片弐型（ゆきひらにがた）』。先ほどのまで実体剣に近かったそれは、鎬にわずかに溝が出来ており、其処から溢れんばかりの光を放っている。

それがエネルギーで形成されているレーザーブレードに近い武器だと悟るのにそう時間はかからなかった。

「どうやら、これからが本番のようだな」

「ああ……。そうだ」

雪片弐型を両手で構え、一夏はキョウスケに向かって構える。

まるで剣道の構えを彷彿とさせるその構えに、キョウスケも目付きを鋭くさせ、応えるようにステークを構えた。

ここからが本番――そして、最後の一撃だと両者が悟っている事だった。そして、両者は勝負を決めるべく、同時に動き出す。

同時にバーニアを最大出力で噴かしたかと思うと、かなりの速さで両者がぶつかり合った。

「おおおっ！！」

「……！」

一夏が上段から斬撃を放つが、キョウスケはしっかりと剣の軌道を見切った上で、先ほどのお返しとばかりに至近距離にて一夏の斬撃を避けてみせた。

それに驚いたのは一夏だった。重い機体のくせに、まるで影のように動いてみせるキョウスケを目で追うが――その時には、全てが遅かった。

「なに！？」

「言ったはずだ。剣の軌道が見え見えだとな……！」

言うや、キョウスケは一夏に対してステークを突き出す。
流石に先ほどと同じような行動はとれず、一夏はまるで硬直したかのような姿勢だった。
だが、ステークは一夏にぶち当たることはなく――あと数センチで直撃するかのような、首筋辺りで制止した。

「……どうして、止めたんだ？」

「勝負は決した。これ以上はやる必要はないと、そう思っただけだ」

「……っ」

悔しげに、一夏はキョウスケから視線を逸らす。
――完敗だ。ＩＳ初心者というのもあるが、戦い方が段違いすぎる。状況把握もキョウスケの方が数倍上手であり、機体の性能もよくわかっている。
今の時点で一夏がキョウスケに勝つことなど――至難の業に違いなかったのだ。

「く、くそおおお！！！」

分かっていても、悔しさをぬぐう事など出来なかった。
今にも雪片を投げつけそうな勢いで悔しげに声を放った一夏。
そんな一夏に対し、キョウスケは即座にステークを下げるや、アルトアイゼンを待機状態であるガントレットへと戻した。

「ほぼ初めてにしては、なかなかいい出来だったと思う。だが、お前はまだ詰めが甘い。その辺をどうにかすれば、俺にも勝てるようになるだろう」

「……」

キョウスケの言葉に、一夏は何も答えることはしなかった。

ただ、悔しげに歯を食いしばり、視線を横に逸らしていた。あれだけ大口をたたいた割には、惨めすぎて――そして、本当に悔しくてたまらなかった。

何も答えない一夏に、キョウスケは踵を返して歩き始める。一夏は見送ることも、見る事すら出来なかった。

今にも感情が爆発してしまうそうな彼が、キョウスケを見る事など――出来るはずもなかった。

「くそっ……！」

声をかみ殺し、ただただその場に立ち尽くす事しか出来なかった――。

閑話　『ＩＳ学園新聞部　その一』（前書き）

不定期になりますが、今回の話は閑話において新聞部に目を向けるお話になります。

また、新聞部にはオリキャラと共に薫子の立場が変更。副部長→部長になっています。それから、薫子の性格が若干おかしくなっております。

ではでは、くだらない文章ですが、それでもよろしければ次へお進みください。

閑話　『ＩＳ学園新聞部　その一』

最近、ＩＳ学園においてこのような噂が広まっているのはご存じだろうか？

いや、そんなものなど書いた覚えは全くないので知る筈がないのだが、それはこのような内容である。

『南部響介と織斑千冬には、何らかの関係が？』、という事だ。

事の発端は――織斑一夏が一年一組で周りの事を半ば放置プレイでキョウスケに言い放ったことから噂が学園中に広がった。

当然、発した本人やキョウスケはこのことを知らない。千冬は噂こそ耳にしたものの、口は堅く――いや、当然のように誰も口を割らせることなど出来るはずがないだろう。

しかし！　しかしだ、こんな誰もが食いつきそうなネタを、このまま放置していてよいのだろうか？　否！　そんな事は考えられないのである！

そして、此処にそのような噂を解き明かそうとする面々がいたのであった――という話。

「というわけで、今現在ＩＳ学園においては南部響介君と織斑千冬先生の噂で盛り上がっているわ！　此処に確固たる証拠があれば、もはやこの二人は逃げられない！　生徒と教師の禁断の愛が完成する筈なのよ！」

「いつになく燃えてるねぇ、薫子は」

壊れるくらいにホワイトボードをバンバンと叩き、今にも飛び上がらん勢いである新聞部のエース（自称）、黛薫子（まゆずみかおるこ）。

そんな彼女に、同じ新聞部の部員である関根順子（せきねじゅんこ）が、湯呑みに入

ったお茶をずずっと音を立てながら啜りながら呟いた。

「ほう、私もその噂は耳に入っているぞ。しかし、どうしてそのように皆が噂するのだ？　他人の恋愛事など、黙って応援すべきだと私は思うが？」

「甘いわね、コーネリア！　そう黙って静観することが出来ないから、皆真実を知りたいのよ。それに、事の対象はあの織斑千冬先生……売れない筈がないわ！」

「なるほど！　それは確かに私も興味があるな。是非とも調べてみたいな」

なにやら納得してしまった様子のコーネリアと呼ばれた部員――名をコーネリア・ブラウンといい、アメリカ合衆国出身の生徒である。

ただ、人より何処か抜けたところがあり、なんでもかんでもすぐに真に受けてしまうのが玉に傷か。

「えっと……」

「空よ、空！　名前くらいさっさと憶えてよね！」

「そう、それ！　空もそれでいいわよね？　って、答えは聞くまでもないけれど！」

「ちょ、ちょっと！　私の意見は無視とかどういう意味よ！」

「さて、まずは真実を知るために聞き込みを開始するわ」

「無視するなーっ！」

薫子に向けて叫ぶ一人の部員――――上条空（かみじょうそら）を無視し、薫子は黒ペンを持ち出して先ほどのホワイトボードに何事かを書いていく。

それをコーネリアは目を輝かせながら見つめ、順子は対して興味なさげにお茶を啜り、空は無視を続ける薫子に叫びをぶつける。ただ、それもお決まりのように無視されたわけなのだが。

「さて、まずは真実を知るために聞き込みを開始するわ。まずは…そうね、南部響介の取り巻きから調べていくのがよさそうね」

「取り巻き？　ああ、そういえば南部響介君といつも一緒にいる面子の…」

「そう、あの金髪さんと貧乳さんと少し大人しそうなあの子の事よ。名前は調査済みだけど、あえて特徴を言ってみたわ」

――本人が聞けば間違いなく怒り出しそうなフレーズが一部交じっているが、それはさておき。

ともかく、手始めに情報収集の一環として聞き込みを開始するようだった。

「けど、当人たちに悟られないように聞き込みをしなくちゃならないわ。まずは呼び出すのが一番手っ取り速いわね。順子、もう手は打ってるでしょうね？」

「あいあい、もちのろんろん。でも、リア充絡みだと妙に燃えるよね、薫子って」

「フフン、ネタになるものはとことんまで追求するのが私の持ち味

だしね」

「まっ、それくらいは知ってるけど」

今度は飴玉を口にし、ゆっこらしょと声を出しながら立ち上がる順子。

薫子が先ほど確認したように、なにやらすでに手は打ってある様子。

そのまま部室の入り口まで移動すると、ドアを開けて何処かへと行ってしまう。

「……？　順子は何をしにいったのだ？」

「今からその取り巻きの一人を尋問……いえ、取材するのよ。順子は迎えに行ったってところ」

「おおっ、流石は部長！　手の速さが相変わらずだな。……ところで、先ほど順子が言っていた『リア充』とは一体何の事なのだ？」

首を傾げながら尋ねるコーネリアだったが、それを尋ねられた瞬間に薫子の瞳が怪しく光る。

そして、ささささと早足でコーネリアへと近づき――今度は薫子がコーネリアに尋ねる。

「知りたい？」

「うむ。何事も知っておかなければ、後々困ることになるかもしれない。是非とも教えてくれ」

「分かったわ、コーネリア。じゃあ、リア充について私が簡単にだ

けど教えてあげる！」

「宜しく頼むぞ、部長」

説明しよう！

リア充とは、爆発するものである！　というのも、こいつは主に恋人がいる人に関して使われることがほとんどである。そこ！　元々はネットの住人が現実世界を～とか言うんじゃない。いや、本当はそうだけどさ…。

まあ、それはともかく。そういった恋人たちに妬みを向ける…それは至急当然の事なのだ。……恐らく。

「ふむ、つまりイチャイチャとしている恋人たちにこういえばいいのだな？　『リア充め、爆発しろ！』と」

「まあ、大凡はそれでいいわ」

「いや、よくないでしょう。それより薫子、コーネリアにまたよくわかんない事を噴きこまないでよね」

「いや、勉強になった。流石は部長だ、相変わらず博識だな」

「フフン、まあね」

「……そんなことで大きな顔をしても、みっともないだけよ……」

コーネリアと薫子の様子を見ていて、空は溜息を吐くしかなかった。

まあ、このように空がツッコミをいれたり、呆れたところで到底

相手にされるはずがないのだが――。
と、その時。コンコンとドアを二回、間を置いて一回、更に間を置いて二回ノックする音が室内に響く。
その音に、薫子はにやりと怪しく笑みを浮かべる。これは新聞部内で使われている合図であり、どうやら獲物を連れて来たようだった。

「フッフッフ、さぁて……どう聞き出そうかしら……？」

「腕の見せ所だな、部長。私も協力するぞ」

（それより、あの合図って何？　軍隊か何かなのかしら、此処……）

冷静に心の中でツッコミを入れるが、当然返事は返ってこない。
そんな現状に空はまたして嘆息する。
と、合図をした本人である順子が部屋の中に一人の少女――セシリアだった――を連れてきていた。
いきなり連れてこられたセシリアは、何故か不機嫌気味。というのも、現在の時間は昼休みであり、キョウスケと共にランチにしようとしたところ、半ば強引に連れてこられたのが原因だ。
そのおかげもあってか、セシリアの状態は不機嫌そのもの。相手は上級生にも関わらず、であるが。

「……それで、わたくしを取材したいとのお話でしたが。何についての取材でしょうか」

どうやら道中でセシリアには順子から話を通していたようで、すぐさま本題へと移行しようとする。
というのも、速く昼食を取らなければ午後の授業が持たないというのと同時に――キョウスケと過ごせる時間が一分一秒でも惜しい、

という心境故なのだが。

「うむ、君ならば少しは知っているかと思ってな」

「…？　何のことですの？」

コーネリアの発言に、首を傾げるセシリアだったが、コーネリアは更に言葉を続ける。

「私たちが君に聞きたいことは――南部響介と織斑千冬先生との関係だ。あの二人はリア充なのだろう？」

「……はい？」

まるで意味が分からない、とばかりにセシリアは眉根を寄せる。しかし、いきなりリア充発言が来たところでこのような反応になるのは当然といえよう。それに、セシリアのような人間がリア充という言葉を知っている筈がないので、余計に意味が通らない。

「リア充……って、なんですの？」

「うむ。爆発するものらしい」

「……爆発？」

もっと意味が分からなくなる。

あまりもの素っ頓狂な発言に、セシリアの頭は混乱する。この人は一体何の事を言っているのだろうと、頭の中で思考を巡らせるが――当然のように答えは出てこない。

必死に頭をひねっていたが、どうやら話が進まないと悟った薫子

が口を開いた。

「つまり、二人は恋人なのか、っていう事を聞きたいだけよ」

「……はぁ！？　そ、そんな筈がありませんわ！　響介さんが織斑先生と付き合ってるなんて……でたらめもいいところですわ！」

「でも、学園中に噂が広まってるんだよね。其処で、私たち新聞部が真相を探るためにこれから調査を開始する訳なのだよ」

「……ちなみに、その噂は誰から発せられたものですの？」

「えっと……織斑先生の弟さんが放った発言から、噂が広まったのよ」

「……あのお馬鹿さん……！」

ＨＡＨＡＨＡと笑い、アホ面を浮かべた一夏の姿がセシリアの脳裏に浮かぶ。

しかし、其処まで言われて、ようやくセシリアは新聞部に呼び出された意味を理解した。

どうやら、こいつらはセシリアに事の真相を聞き出すつもりらしい。まあ、そんな事をして誰が面白いのか、という事はセシリアにとってあまり理解できるものではないのだが。

だが、意図を理解すれば話は簡単でもある。フフッとセシリアは微笑むと、四人に対してこのような事を言った。

「――それはあり得ないですわね」

「それはどうして？」

「それは織斑先生自身が否定したからですわ。確かに知っているような素振りはありましたけど……ですが、それはわたくしが知っている響介さんではありませんわ」

「つまり、今現在学園にいる南部響介と、織斑先生の恋人とは違う…って事かしら？」

「確証はありませんが……そうなりますわ。それに、人様の恋愛事に土足で入りこむのはあまり感心された事ではないとわたくしは思いますけど」

「でも、関心を持たれるような記事を書きたくなっちゃうのが私たちなんだよね。だからこそ、出来るだけ嘘はつきたくないし、真実を知りたいからこうして貴方を呼んだのよ」

セシリアの言ももっともだが、薫子の発言もまた的を得ていた。興味のある事柄には、人は当然のように読みたがる。この学園においても例外ではない。

捏造記事ならいくらでも出来よう。あることやない事など、いくらでも好きに書くことが出来よう。

だが、それでは確証がない。皆が納得できるような記事にすることこそ、新聞部に求められた事でもあるのだから・

「まあ、貴方に聞いても否定するだけのようね」

「お分かりいただけたのなら、わたくしはこれにて失礼いたしますわ」

そういってセシリアは立ち上がるなり踵を返すと、ドアを開ける

なりさっさと出て行く。
彼女の退室を見るなり、コーネリアは薫子の方を向き――尋ねた。
「薫子、リア充は誰もが知っている単語ではなかったのだな……」
「なんでそんなに残念そうなのよ、貴方は」
しゅんとなるコーネリアに、ツッコミ担当の空の容赦ない言葉が飛ぶ。
そんな二人を余所に、傍らで話を聞いていた――いや、本当は興味がないかのように本を読んでいたのだが、ふと疑問に思った事を順子が薫子に問う。
「残りの二人も連れてきた方がいいの？」
「うーん、呼んだところで無駄足かもね」
「そ。で、どうする？」
「決まってるじゃない。――監視よ、監視！　常にあの二人に目を光らせるのよ！」
無論、薫子は引き下がるような人物ではない。
他人に見せるような態度から一変しているように、この部室内では半ば彼女の独壇場である。
「順子！」
「あーい」

「コーネリア！」

「うむ」

「それから……えっと……」

「空よ！」

「ああ、ごめんごめん。みんな、暫くはこのネタを集中的に取材するようにするから、頼むわよ！　以上、今日は解散！」

バン、とホワイトボードを薫子が叩き、それは室内中に響き渡ったところで本日の解散を告げるのだった――。

こうして、南部響介と織斑千冬の関係を追いかける新聞部員四人の話が始まったのだが――その続きは、またの機会に話す事にしよう。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第十八話　クラス代表就任祝い（前書き）

今回で十八話です。第一章もようやく中盤の終わり。ちまちまと更新しているので、もう少し長めの文章を今度は書いていこうと思います。

ではでは、第十八話の開始です。

第十八話　クラス代表就任祝い

クラス代表を決める、俺と織斑での勝負から数日が経過した。
結局、勝負に勝った俺が一年一組のクラス代表を受け持つことになった。いや、なってしまった。拒否しようにも、織斑先生曰く『勝負に勝ったのだから、当然の事だ。文句を言うな』とのことだった。
その言葉に、俺は反論すら出来ないまま引き下がる事しか出来なかった。先生から放たれる威圧感に押されたといっても過言ではなかったのだ。情けないとは思うが、本心からの言葉であった。
そして、今――。俺の代表決定を祝す、という事で、一年一組の面子が食堂に集まっていた。そのセンターには主役である俺が座り、その周りを一組の女子たちが取り囲んでいる。

「というわけで、南部君がクラス代表になった事を祝して！　乾杯～！」

『かんぱ～い！』

一人の女子生徒の掛け声に呼応し、グラスを持った周りの女子たちが一斉にグラスを掲げて乾杯しあう。更に何処から取り出したのか分からないのだが、無数のクラッカーがパンパンと音を立てて弾ける。
小うるさい――いや、それ以上の音が食堂内部に響くが、皆は対して気にするような素振りを見せない。
そもそもこの食堂にいるのはせいぜい俺達くらいなので、さほど迷惑ではないのかもしれない――いや、そんな事はないかと思うのだが。

「いや～、これで代表戦は優勝したも同然だね～」

「ほんとほんと。それに、専用機持ちもうちのクラスと四組しかいないそうだし、楽勝だよね」

「うんうん。同じクラスでよかった～！」

わいわいと談笑しているが、何気ない会話の筈がそれは俺に重くのしかかる。どうやら、優勝しなくては戦犯として扱われるのだろう。

しかし、彼女たちが言っているように、今年の一年には一組と四組にしか専用機持ちという者はいないそうだ。

無論、専用機持ち以外で代表候補生も多数存在する。だが、ＩＳの実戦経験豊富な織斑先生に任せている――いや、押し付けている点も多く、そのおかげでほとんどの専用機持ちが一組に混同している状態だ。

おかげで織斑先生の責任も重大になってきているという状態だ。本当に、先生には頭が上がらない。

「それにしても、織斑君ってどこに行ったんだろうね？」

「さあ？　でも、南部君と仲が悪いみたいだし…居づらいんじゃない？」

「かもねー。会っていきなり、『生きてたのかよ！』って……」

先の会話の通り、この賑わいの中に織斑の姿はなかった。

確かに俺と織斑との折り合いは悪い方だ。いや――話そうとするが、何故か険悪な雰囲気がにじみ出てしまう。

――失った過去を、織斑は知っているような素振りを見せたこと

からも、何かのヒントになるかもしれないというのは前も思った。
だが、何か違うと俺は内心で思っていた。何が違うのか、といわれれば…分からないとしか言いようがない。
その引っ掛かりに違和感を覚えるが――と、そのような思考していると、俺の正面に誰かが来たかと思うと、声を掛けてくる。

「浮かない顔をしているな、南部」

「篠ノ之か…」

俺が微かに顔を上げると、其処に立っていたのは篠ノ之箒。軽く腕組みをしながら、やや不満そうに俺の方を見ていた。
その態度は、まるで見下しているようなものであったが――篠ノ之は構わずに続ける。

「主役がそのような顔をしていてどうする。お前もあの輪の中に入ってきたらどうだ？」

「……あいにく、騒がしいのはいいが、進んで入っていくような性格ではないのでな」

「ほう、そうなのか」

「ああ」

少し意外だ、といわんばかりの表情を浮かべる篠ノ之。
うるさいのは構わないが、別に進んで入るような性格でもないのでな。それに、クラスメイト達も口実が欲しい、というのも兼ね揃えている。
この集まりも実質的に彼女たちが騒ぎたいだけだ。気晴らしとい

う事でいいかもしれないが、あまり騒がれるのも面倒といえば面倒だ。

「だが…意外だな。お前がこの集まりに参加するとは」

「私もそう思っている。だが、一夏が行って来いとうるさかったから、来ただけだ…」

全く、迷惑な奴だと呟きながら篠ノ之は椅子に腰かけ、傍らにあった急須を手に取って湯呑みにそそぐ。

こぽこぽと周りの騒ぎに反比例したような、静かで鮮明な音と共にお茶が注がれていく。淹れ終ったところで、篠ノ之はそれを両手で持ち、ゆっくりと口に含んだ。

と、湯呑みを離したかと思えば、少しだけ俺の方に視線を向けてこういってくる。

「見世物ではないぞ」

「知っている」

「ふん…」

鼻を鳴らすと、篠ノ之は引き続きお茶を口に含む。

そんな篠ノ之から目を離した瞬間、一人の女生徒と目があった。

が、俺はすぐに目線を逸らし、篠ノ之同様に急須を取る。

「響介さん、どうしてわたくしから目を逸らすのですか？」

「……今日もお茶がうまいな」

「怒りますわよ？」

笑顔でそういってくる人物――セシリアに、俺は内心で冷や汗をかきながら彼女の方をゆっくりと向く。

分かればよろしいとセシリアは何事もなかったように俺の隣に座った。少し近いような気もするが、気にしてはいけないのだと思う。

「こほん。改めまして…響介さん、クラス代表就任おめでとうございます」

「ああ……ありがとう」

微笑みながら言ってくるセシリアに、俺も彼女に軽く笑みを浮かべながら返す。

思い返せば、セシリアが俺を推薦したのだった。出会ったころのセシリアならば、間違いなく自分こそがと手を上げていたような気もするが――。

「来月はクラス対抗戦（リーグマッチ）ですわね…。まあ、響介さんの実力なら、必ず一番でしょうけど」

「さて……どうだろうな」

苦笑を浮かべ、お茶を少しだけ口に注いだ。

セシリアはああいうが、実際のところは戦って見なければ分からない。無論、専用機持ちでなくとも、代表候補生を立ててくるクラスは多い。

量産機と専用機は全く別物というが、相手も訓練を受けてきている相手だ。そう簡単に勝たせてはくれないだろう。

だが――それでこそ、勝負というものだ。それくらいなくては、

面白味などまるでない。
それに、そういった機会でも実戦経験を積めるのは俺の中でもプラスに働く。いつもの面子だけではなく、様々な相手と戦って経験を積んだ方がいいのは明らかだ。
そういった意味合いでも、クラス代表になったというのはいい事かもしれない。――ただ、これで放課後の時間が少々削られることは確定のようだが。

「あ、響介。此処にいたんだ」

「ん？　ああ、アイビスか。何の用だ？」

「うん、新聞部の人が響介に取材したいんだって。クラス代表になった意気込み…だったかな？」

「…そうか。分かった」

噂を聞きつけてやってきたのであろう新聞部に対応する為に、俺は湯呑みをテーブルの上に置いて立ち上がる。
すると、アイビスの少し後ろ辺りに二人組がおり、どうやらその二人が新聞部なのだろうと推測する。さっさと取材を終わらせるために、俺はその二人へと近づいた。

「む？　君が南部響介か。私はコーネリア・ブラウン。二年生だ。宜しく頼む」

「初めまして、コーネリア先輩。南部響介です」

軽く頭を下げて挨拶をする。顔からして日本人ではないとは思っていたが、思った通りだったようだ。

「では、早速聞きたいのだが……君、織斑先生とはどういうか……むぐぅ！」

「ああ、ごめんごめん。今のなしでお願いね」

「……分かりました」

なにやら禁則事項を口走ったコーネリア先輩の口を強引に抑え、俺の方に笑顔を振りまいてくるもう一人の人物。

どうやら彼女も新聞部の一人のようで、どうやらコーネリア先輩を抑える係のようであった。

「ん、んん～～！！」

「あんたは少し黙ってなさい！　事態がややこしくなるから！」

相変わらずコーネリア先輩の口を押えていたもう一人の人物は、彼女にそういって黙らせる。

そして、改めて俺の方を向くと、その人物は俺に対して名刺を差し出す。それを見ると、上条空と書かれていた。

「じゃあ、改めて取材するけど……クラス代表になった、今の感想は？」

「出来る限り頑張ろうと思う、と書いていただければ」

「頑張る、ね…。それじゃあ、来月の対抗戦についての意気込みはどうかしら？」

「それに関しては、全力でやらせていただきます。手を抜くのは、あまり好きではないので」

「目標はやっぱり優勝？」

「……できれば、そうなることを願いたいですね」

「じゃあ次は――」

その後は、二、三程度の質問があった程度で取材が終わる。すらすらとメモに何事かを書き込んでいるあたり、手慣れていることが伺えた。

「それじゃあ、最後に一枚写真が欲しんだけど、いいかな？」

「構いません」

即答する。いや、断ってもいいのだが、新聞部としては写真も欲しいだろうと思った上での判断だ。

と、その時。上条先輩の目にセシリアとアイビスの姿が映り、そうだといって二人のところに近付いていく。

「…？」

何をしにいったのか分からなかったが、少しすると上条先輩は二人を連れて俺のところまで戻ってくる。

そして、彼女はこんな事を言い出した。

「せっかくの専用機持ちがこんなにいるんだし、それも写真に収めたいんだけど…いいかな？」

「ええ、別に構いませんが」

「ありがとう。それじゃあ、準備するからちょっと待っててね」

上条先輩はそういってカメラの用意をし始める。

と、俺が少しだけ横を向くと――其処にはやけに気合が入っているセシリアの姿があり、手鏡を見ながらおかしなところはないか確認している様子があった。

流石は女子であり、写真写りもばっちり決めたいというところだろうか。

しかし……今更になって思ったが、セツコの姿が何処にも見当たらない。確か、この集まりの初めごろにはいた筈だ。

疑問に思い、俺は集中しているセシリアではなく、アイビスに声を掛けた。

「アイビス、小原はどうしたんだ？」

「小原さん？　確か、部屋に戻るって言ってたよ。人が多いところはどうしても落ち着かないって言ってたし」

「そうか…」

確かに、セツコはこういった人が多い場所はあまり好きではないといっていた。

人付き合いがそれほどあった訳でもないらしく、今でも少しおどおどしながら話すことがほとんどだ。誰とでも分け隔てなく話すのは、どうやら時間が掛かりそうだ。

と、そう思っているうちに上条先輩がカメラを持って帰ってくる。

「お待たせ。それじゃあ、並んでもらっていいかな？」

「え、ええ……。その、撮った写真は後程いただけるのですか？」

「写真？　うん、いいよ。それに、貴方にはこの間のお詫びもあるし」

「はぁ……。こんな事なら、着替えてから撮ってもらいたかったですわ……」

やや残念そうに呟くセシリア。

いや、それよりもだ。先日のお詫びといっていたが、新聞部はセシリアになにかやったのだろうか。いや――気にしない方がいいのかもしれない。

「しれ、あたしも写真貰っていいですか？」

「うん、いいよ。南部君も欲しい？」

「出来るのでしたら」

「それじゃあ、三枚ね…。じゃあ、撮るよ」

カメラを構えて俺達へと向ける上条先輩。

――カメラを向けた瞬間、セシリアがやけに俺の近くに密着してくる。その距離は非常に近かった。

「セシリア」

「な、何ですの？」

「近い。少し離れろ」

「こ、これくらい許容範囲ですわ」

「……」

言いながら更に近寄ってくるセシリア。

もはや諦めるしかないと、俺は軽く嘆息したところで、カメラのシャッターが切られる。

「よし、こんな感じでいいかな。写真は後日届ける事になるけど、それでいいかしら？」

「ええ、頂けるのでしたらわたくしは構いません」

「あ、あたしもそれでいいです」

「南部君もそれでいいかしら？」

「構いません」

俺達三人の返事を聴き、上条先輩はゆっくりと頷く。

そして彼女はカメラを直し、突っ立っているだけのコーネリア先輩を掴み、早々に立ち去るのだった。

「空、まだ本当の内容を聞いていないぞ」

「それはいいの！」

「むぅ……」

何か不満げだったコーネリア先輩だったが、特に反論することもないまま食堂から姿が消える。

新聞部も大変だなと、俺は彼女たちを見ながら思った。それと同時に、出来ればあまり関わりたくないと――何故か感じてしまったわけだが。

「写真、楽しみだね」

「そうだな……」

アイビスの言葉に、俺は素直に答えるのだった――。

＊

未だに盛り上がりを見せていた食堂から抜け出し、俺はＩＳ学園の中庭を歩いていた。

食堂とは違い、この場所に人気というものは感じない。それもそのはずで、ほとんどの学生は寮に戻っている。

一組の連中は未だに騒いでるだろうが、それは例外だ。この場所は静かであり、心も落ち着く。

きちんと整備されてある道を歩きながら、俺は軽く空を見上げた。

漆黒に染まった空の中に、少しだけ輝く白色の星々。しかし、今日はその数が何処か少なかった。

都会の空では、あまり星は見られないと聞く。此処もその都会に近い場所に存在しているため、影響を受けているのだろう。空を見上げながら、そんな他愛のない事を思い、苦笑する。

その時、ブン、ブンと何かを振っているような音が聞こえ、俺は音が聞こえる方向に目を向けてみた。

其処には一つの人影が存在し、ただ一心に何かを振っている様子が目に映る。音の正体は竹刀のようで、それが振り下ろされる度に空気を斬るような乾いた音が微かに響く。

（あれは……織斑か？）

姿を見ているうちに、それを行っているのが織斑だと気付く。ただ我武者羅に竹刀を振るのではなく、その姿は実際に剣道を行っているものにしか出来ないような綺麗な素振り。

集中しているようで、後ろで見ている俺の存在にも気づかないほどらしい。そんな様子に、俺は軽く笑いながら織斑に近付く。

「精が出てるな、織斑」

「ん？　なん、だっ、響介、さん、かよっ」

微かに俺の方を向いたが、すぐに視界は正面に戻す。ただ、織斑は返事をするときも竹刀を振ることを忘れない。

そんな織斑の様子に、俺はただただ苦笑した。

「それより、いいのかよっ」

「何がだ？」

「主役が、パーティーに、参加、しなくてよ」

「――構わん。それに、男抜きで話したいこともあるだろうからな」

「あっそ」

素っ気なく返され、織斑は再び竹刀を振る事に集中する。

乾いた音が今度は間近で聞き取れ、リズムよく繰り返される。何回かその行動を繰り返した後、織斑はようやく竹刀を振ることを止め、俺と視線を合わせた。

「なんだ、織斑」

「正直に言ってくれ、響介さん。あんたは――「前にも言ったはずだ。俺は、お前たちの事は知らない」

嘘を吐く必要などない。だからこそ俺はしっかりと織斑の視線を見ながらそう言ってやった。

俺の言葉に対し、織斑は何か言いたげに見えた。しかし、それが口から出ることはない。だが――何処か、諦めたように肩を落とす姿が見えた。

「はぁ……。そうか、やっぱり――そうなのか」

「そんなに似ているのか、俺とそいつは」

「似てるなんてものじゃないさ。雰囲気や声、いや――ほとんどが、そっくりなんだよ。名前も含めてな」

あのような言動をした以上、織斑は嘘を言っている訳ではないだろう。なるほど、そんな奴が目の前にいるとは――叫びたくもなる。

「でも、やっぱり――千冬姉の言う通りなのかもな…」

「どういう事だ？」

「あんたと俺の知っている響介さんとは…別人だって事だよ」

織斑はため息交じりにそう言葉を漏らした。

その目は――ようやく、分かったというような目。まだ諦めきれない気持ちも多少は存在するが、何処か認めたような――そんな目付き。

「ま、最初から薄々は感じてたんだけどさ――」

「そうか……。ところで、お前の知っている奴と、織斑先生……一体、どういう関係なんだ？」

興味があるのはそれだった。

俺を見るたびに寂しそうな、そんな視線を向けてくる原因が知りたかった。

ただの友人――という訳ではないのだろう。なにか、特別な関係に違いないだろうが。

「関係か……。あの人は、千冬姉の幼馴染で――“婚約者”だよ。でも、二年前に航空機の事故で死んだんだ」

当時を思い出したのか、織斑も漆黒に染められた空を見上げる。

だが、これではっきりした。なるほど、確かに織斑先生が俺にあんな視線を向けてくるのもわかる気がする。

死んだと思っていた恋人が、帰ってきたという思い。そして、そ

れは別人だと諦めている気持ち――。それが交錯し、あのような事になっているのだろう。

「――そうか。そういう事か」

「ああ。けど、お前には関係のない話だ。忘れてくれよ」

「……そうだな」

――話を聞いたところで、思い出せなかった。

それほど特別な関係ならば、フラッシュバックしてもいいはずだ。頭痛がしてもおかしくはないと思う。

だが――それすらない。という事は、俺には関係のない話だという事なのだろうか。

「妙な事を話させたな。すまない」

「いいさ、別に」

俺は織斑に対して踵を返し、歩き始める。

これ以上此処にいたところで、恐らく意味はないのだろう。それにこれ以上――織斑の邪魔をするわけにもいくまい。

「なあ……南部」

「うん？」

立ち去ろうとした俺に対し、織斑が呟くようにして呼び止める。

今まで歩き始めていた足を止めたが、振り返ることはしない。ただ、織斑からの言葉をじっとして待っていた。

そして――織斑はこういってきた。

「次は俺が勝つ。だからそれまで、お前は誰にも負けないでくれ」

「――――覚えてこう」

それだけ聞くと、俺は再び足を進める。

事実上の宣戦布告――。何時か、お前を倒すという現れの言葉だ。

ただ――――俺の口元は無意識に吊り上っており、面白いとばかりの笑みを浮かべていたのだった。

そして、俺が立ち去ると同時に――再び、竹刀を振る乾いた音が微かに耳に届くのだった。

第十九話　拒絶（前書き）

第一章は次からがクライマックスに突入。今回の話は、それに繋がるお話となっております。

ちょっと駆け足気味な気は致しますが、それでも良い方は続きをどうぞ。

第十九話　拒絶

俺のクラス代表就任パーティから一夜明け、今日も教室に朝がやってくる。

昨日あれだけ騒いでいた女子たちは、何事もなかったようにぴんぴんとしている者もいれば、朝のＳＨＲ（ショートホームルーム）の前の居眠りを行っている者も当然のようにいる。

活動している女子たちに軽い挨拶をし、俺は自席に腰を下ろす。

ＳＨＲ（ショートホームルーム）まであと十分といった時間帯で、俺は机に肘をついて頬を掌に乗せる。いわゆる頬杖だ。

其処までやったところで、数人の女子たちが俺に近付いてくるかと思うと、彼女たちはこんな話をし始めた。

「南部君は聞いた？　転入生の話」

「転入生…？」

「うん。今日この学校の来るんだって。なんでも、中国の代表候補生らしいよ」

それはそうだろう。

この学園の基準は相当高い。試験のレベルもそうだが、国の推薦なしでは転入すら出来ないと聞く。中国の代表候補生と聞き、俺は咄嗟にそう思ったのだが。

「転校生？　あらあら、本当に今更ですわね」

噂を聞きつけてやってきたのか、俺の隣でセシリアがその転校生

をあざ笑うかのような口調を放つ。

「でも、急だよね。なんで入学じゃなくて転入なんだろう？」

更にその後ろにはアメリカの代表候補生であるアイビスもおり、疑問を口にしていた。

確かに今の時期に転入するのならば、その前に入学した方が速いはずだ。国の事情で遅れたか、あるいはその本人に何らかの事情が出来たか――――という事が考えられる線だろうか。

「でも、流石にこのクラスの転入はないだろうけどね」

「そうだよね～。もう三人も代表候補生が集まってるし、専用機持ちは五人もいるしね。流石の織斑先生もこれ以上はキツイと思うけど」

彼女たちの言うように、これ以上の転入はうちのクラスにはないだろう。

織斑先生の責任能力もそうであるが、一つのクラスに戦力が集中すれば間違いなく問題がおきる。教師間だけでなく、生徒間の話でもある。

現状ではさほど問題ないだろうが――季節が進むごとにそれは表面化していきそうだ。色々と厄介な事にならなければいいのだが。

「でも、その子が別のクラスに行けば、響介にとっては面倒な相手になるんじゃないかな？　来月の対抗戦の事もあるからさ」

「……誰が来ようと、俺はぶつかるだけだ。それに、手ごわい奴の方がやりがいはある」

率直に答えると、アイビスは「それでこそ響介だよね」といって微笑む。

確かに面倒な相手になるかもしれないが、歯ごたえがないよりは遥かにマシだ。俺は少なくともそう思っている。

「ふーん、自信満々ね。でも、その自信も速攻で崩れることになると思うけどさ」

と、その時。俺の周囲で盛り上がりを見せている女子たちの後方からなにやら声が聞こえてきた。

その声に女子たちは振り返り、俺もわずかに声のした方を見やる。其処には、髪をツインテーに結んだ、少し小柄な少女が腕を組みながら立っている様子が伺えた。

「誰？」

「さあ？」

女子たちが顔を見合わるが、誰か分からないために首を傾げる。ただ、その少女はそんな言葉など聞こえないかのようにスルーし、ヅカヅカと教室に入ってきたかと思うと、俺の目の前までやってきた。

「……なんだ？」

「私は中国代表候補生の凰鈴音（ファン・リンイン）よ。二組のクラス代表で、専用機持ち。今日は別件で来たけど、ついでに一組のクラス代表だって噂のアンタに宣戦布告しに来たってわけ」

小柄な少女――凰は、俺に指差しながら言い放ってくる。

なるほど、彼女が噂の転入生らしい。おまけに専用機持ちとは恐れ入る。

「専用機持ちか…」

「そう。じゃ、言いたいことはそれだけだから」

言うや、凰は俺に対して踵を返す。

周りの女子陣はポカンと口を開けながら凰を見送るが、その凰は誰かを見つけたかと思うと、パアッと顔を輝かせ――その人物に近寄る。

「一夏っ！」

「ん？　……なっ、鈴!?　なんで此処に!?」

「なんでって、転校してきたからにきまってるじゃない」

「転校って……お前がかよ!」

かなり驚いている様子の織斑。対する凰は腰に手を当てながらも、先ほどとは打って変わって柔らかい表情を浮かべていた。

その様子に、更にポカンとなる女子たち。俺はただ黙ってその光景を眺めているのみだった。

「……え？　あの子、織斑君の知り合いなの？」

「らしいね…。でも、専用機持ちかぁ～」

「いいなぁ、私も専用機欲しいな～」

何処か羨むような視線を鳳に送るが、当の本人は一夏との会話に集中しているのか、それらを意に介さない。
と、そんな空気の中でセシリアがどんと机を叩きつけたかと思うと、前のめりになって叫ぶように言い放つ。

「響介さん！　あのような小娘に負けてはいけませんわ！」

「……近い。離れろ、セシリア」

「そんな事、今は関係ありませんわ！　響介さんにあのような態度をとるなんて…許せませんわ！」

「……そうだな」

「まあ、あれだけ言われたからね」

「ああ……」

前に似たような事を言った様な気がするが――気のせいだろうか。
それはともかく。鳳の発言に何故かセシリアが怒り心頭な様子。どうしてこいつは、俺が言われた事を自分が言われたように思えるのだろうか。
いや、それはそれで少し喜ばしい事なのかもしれない。誰にも相手にされないより、遥かにマシであろうが。

「で、一夏。なんでＩＳなんか動かせるのよ」

「はぁ？　いきなり直球すぎる質問だな、おい」

「そりゃそうでしょ。久しぶりにあんたの顔を見たかと思えば、ＩＳに乗れるって、驚かない方がおかしいわよ」

「まあ、そうだけどさ……」

尚も続いていく会話の数々。

それらを聴いていても、対して意味はないのだが、聞こえてしまうのだから仕方がない。

と、俺が二人から視線を逸らすと、ふとセツコの方に目が行った。

昨日、何やら神妙な面持ちで紙のようなものを見ていたセツコ。

尋ねようにも、声を掛ける事すら出来なかった。

それだけ、集中していると同時に――誰からの声も届かない様子であった。

そんなセツコの様子に眉根を寄せたが、少々疲れているという事もあって俺はさっさと寝てしまった。

そして、今に至る訳だが――果たして、あの紙の内容はなんだったのか。

「凰代表候補生！　こんなところで何をしているのですか、貴方は！」

セツコの方を少しだけ見ながら考え事をしていた矢先、唐突に教室の入り口で声が響く。

声を発した女性は、鳳の方を吊り上った目付きで見やり、微かに怒っているのか、眉根も寄せられている。当の鳳は、これはまずいといった表情を浮かべていたのだが。

「……誰だ？」

「二組担任の城ヶ崎葵先生ですわ。なんでも、元軍人上がりらしい

ですけど」

俺の疑問にセシリアが小声で答えてくれる。

しかし、元軍人か。きりっとした態度は勿論の事、見た目からもどことなくそれらしい雰囲気は漂ってくる。

そして、城ヶ崎先生の声に鳳はダッシュで――いや、速足で彼女の元へ行く。最早、織斑の事を忘れたかのような、そんな速さだった。

「す、すみません…」

「貴方は転入初日なのですよ。勝手な行動は慎むように」

「はい……」

「声が小さい！」

「は、はいっ！」

ピクッと体を反応させ、鳳は背筋をピンと伸ばして返事をする。

あの雰囲気――やはり、其処等の先生とは比べものにならないほどの威圧感が漂い、自信満々で此処にやってきた鳳ですらあの態度だ。

「……すぐにＳＨＲ（ショートホームルーム）が始まります。私が呼んだら教室に入るように。いいですね？」

「わ、分かりました」

素直に頷くのを見ると、城ヶ崎先生はさっさと二組の教室の方へ

と行ってしまう。
しかし、鳳は城ヶ崎が数歩行ったのを見送ると、再び一夏の方を見る。
「また後で来るからね！　逃げるんじゃないわよ、一夏っ！」
『凰代表候補生！』
「は、はいっ！」
怒鳴り声が廊下に響くと、鳳は慌てて廊下へと出る。
まるで嵐が過ぎ去ったかのように、たった数分の出来事だった。
周囲は相変わらず唖然としているが、そんな中で織斑先生が教室に入ってくるなり――声を出す。
「……殴られたくなければ、さっさと席に着け、貴様ら」
その声が耳に届くなり、一斉に我に返った女子たちは素早く自分の席に着くのだった。
＊
昼休みの事。
セシリアとアイビスはアリーナの訓練申請に行っており、今はいない。俺は既に済ませていたため、一人で学園内を歩いている。
今現在、俺が目指しているのは屋上だ。あそこならば、不思議と

気分が落ち着くから、という理由が強い。
長い階段を上り、ドアを開けると視界にはよく手入れされた花壇と欧州地方を思わせるような石段が並ぶ。
いつもならば数人の女子たちが円テーブルに座って何事かを話し込んでいる様子があるが、今日は今にも雨が降ってきそうな空模様な為に人気はない。いや、一人だけいたのだが。
俺はその少女を見つけるなり、彼女の方へと近づく。
その少女は、何処か寂しげな様子で空を眺めていた。感慨深そうで、そして思い詰めたような――そんな、表情で。

「小原」

「……南部さん、ですか」

「ああ」

その人物とは、セツコの事だった。
今まで空を眺めていたセツコは、俺が声を掛けてきたことによってそれを中断し、俺に視線を向ける。
しかし、すぐに彼女は俯くと――軽く息を吐いた。

「考え事か？」

「……はい」

素直に頷くが、発する言葉に元気というものがない。
此処からでは表情を伺うことは出来ないが、様子を見る限りでは暗い表情をしているのだろう。一体、何について悩んでいるのだろうか。
――いや、言いたくない事もあるだろう。俺は聞き出すことは

せず、黙ってセツコの隣に座った。

「……」

「……」

沈黙という文字通りの言葉が俺達の間に流れる。

俺が言葉を掛けようにも、その言葉が浮かんでこない。励ます？　一体何に対して？　聞き出す？　そんな馬鹿な事はしない。いや、出来ない

だからこそ、今は隣にいてやることぐらいしか出来ないのだと――俺は思った。

まあ、そんな事でセツコの気が和らぐ筈がないと承知しながらも。それでも、思い詰めている様子のセツコを放っておく事など――出来なかった。

（悪い癖だな……）

それはただの偽善だ。だが、分かっていても――分かっていたとしても、他に方法がなかった。

そんな自分の姿を見て、俺は内心で笑ってしまう。何の力になってやれない、自分自身の姿に対して。

「南部さんは……」

「ん？」

と、先に切り出したのはセツコの方だった。

呟くように微かに声を出したのを聞き漏らすことなどしないように、俺は微かに彼女の方を見た。

「南部さんは……家族がいますか？」

「家族…か」

セツコの問いに、俺は――何も思い出す事が出来なかった。

家族――覚えている筈がない。だが、俺が此処にいるという事は少なくとも親族が一人はいるという事だ。

だが、そんな事すらも思い出す事が出来ない。大切な筈の家族であるが――何一つ。

「さあな…。覚えていない」

「そう……ですか」

「お前の方はどうなんだ、小原？」

それは――何気なく尋ねた質問だった。

だが、俺はしばらくの間、そのことを後悔することになる。“なんて、浅はかな質問だったのか”と。

「私の家族は……いません。お父さんも、お母さんも……殺されましたから」

「……！」

何気ない問いは、彼女の心の傷を更に傷つけたのだと――尋ねてから気付く。

淡々と呟いた後、セツコは下唇を噛みしめ、制服のスカートを強く握りしめる。そして、彼女は黙って立ち上がると――口を開く。

「幼いころ、両親は私の目の前で殺されました。私は何も出来ず、ただただ怯える事しか出来ませんでした」

「小原……」

「何度、そのことを夢に見たでしょうか…！　いっそのこと、私も南部さんのように覚えていないと……そう思いたいです。でも、そんな器用な事なんて私には出来ませんから…」

「……」

セツコの言葉に、俺は返す事が出来なかった。

何を言えばいいのか、分からなかったというのが本音かもしれない。今、彼女に言葉を掛けたとしても――逆効果だと知っていたから。

俺が黙り込んでいると、セツコは俺に顔など向けないまま、此処から去ろうと足を進める。が、俺の前で立ち止まったかと思うと――相変わらず顔を此方に向けることはせず、こう切り出してきた。

「……それから、南部さん。もう、私に構わないでください」

「何……？」

「正直に言って、迷惑なんです。それに、私……一人の方が好きですから。だから、もう気にしないでください」

淡々とした口調で、セツコは俺に言い放ってくる。

その言葉には流石に眉根を寄せ、セツコ同様に立ち上がり、彼女に向かって言葉を投げかける。

「確かにお前にとっては迷惑かもしれない。だが、放っておけないのも事実だ」

「――だとしたら、それこそ困るんです。私は、別にあなたに助けを求めた訳じゃありません。私に恩を売るつもりですか、南部さんは」

「俺はそんな意味で――」「もう、いい加減にしてください！　南部さんのお節介は……私の取って迷惑なんです！　本当に……っ」

言うや、セツコはまるで逃げ出すかのように走りだし、校舎に繋がる扉を潜って行ってしまう。

そんなセツコを、俺はただ見送る事しか出来なかった。追いかける事も、手を伸ばすことも出来なかったのだ。

「迷惑……か」

彼女の後姿を見送りながらも、薄々ながら感じていた事に俺は再び自分で自分の事を笑った。

そう――俺の行動は、セツコに望まれてしたわけじゃない。俺の行った事は、俺自身での自己満足だったのかもしれなかった。

今更になってそんな事を痛感するとは――浅はか過ぎる。

セツコの心に土足で入りこんだも同じような事をしたのだ。それに――セツコにとって、触れてはいけない事を触れてしまった。

後悔してもしきれない。やるせない気持ちが俺を襲っていた。

「……ん？」

その時、自分の足元に一枚の紙切れが落ちている事に気付く。

クシャクシャに丸められたそれを拾い、一体誰がこんなものを捨てたのだと思いながらも、ふと何らかの字が書いてあることに気付くと、それを広げる。

「これは……」

その紙切れに書かれている内容を読み――俺は、先ほどよりも深く眉根を寄せ、その紙切れを拳の中で握りしめる。

ポツポツと雨が降り、それはやがて土砂降りになっていく。だが、俺は其処から動くことはせず、セツコが去っていた方を見ていた。

「小原……お前は……」

俺の呟きは、振ってきた雨によってかき消されるのだった――。

＊

「はぁ、はぁ、はぁ……」

一体、どれくらい走っただろうか。

あの人から逃げるように、セツコは走っていた。

走りながらも途絶える事のない熱い雫が頬を伝うが、それを拭っている余裕すらもなかった。

（あんな事……言いたくなかった。なのに、私は……）

走りながらも、考えていたのは先にキョウスケに向かって放った言葉の数々。

言いたくなかった。だが、ああでも言わなければ“彼は自分から離れてくれない”。

仕方がなかった。彼を巻き込むわけにはいかなかった。なぜなら、これから起こることは全て、“セツコ自身が解決しなければならない事”だから。

（嫌われた……。でも、そうしなきゃ…）

考えるたびに、セツコの瞳からポロポロと涙が零れ落ちる。

決壊したダムのように、収まる事のない雫の数々。それはやがて大地を濡らしていく。

いつの間にかセツコは立ち止まっており、人に見せられないような顔を空へと向ける。

今にも雨が降ってきそうなどす黒い曇り空。まるで、セツコの心を表しているかのような——そんな空模様だった。

「はぁっ……はぁ……」

心の靄が晴れず、セツコはその場で力を無くしたかのように座り込む。制服が汚れる事など厭わない。キョウスケに向かっての言葉に比べれば——。

「ごめん、なさい……。南部さん……ごめんなさい……」

ひたすら、キョウスケに向かって謝るセツコ。だが、それに返事をする者は誰もいない。

その時、上空からも雫が数滴落ちてきたかと思うと、それはやがて連なったかのように落ちていき、セツコの体を濡らしていく。
セツコが泣いているのと同じで、空も泣いているかのようだった。

「ごめんなさい……ごめんなさい……っ。うっ、ううっ……」

その涙は、留まることなど知らない。
雨は必要以上にセツコを濡らす。否応なしに、そして躊躇することなく。
そして、それは――覚醒に繋がる。

「そう――覚醒に、ね。今度は容易く奪えそうだよ、セツコ・オハラ」

其処は海上だった。
しかし、海上に地面は存在しない。だから、立てるはずがない。
だが、その青年は海上に立っていた。いや、この場合は浮かんでいるといった方が正しいのかもしれないが。

「すべては僕の為に、君の命を頂こう。もっとも――まだ僕は介入できない身にある。だから、促す役は既に潜り込んでいるんだ。頼んだよ、『僕』」

瞬間、青年の姿は海上から消えていた。
彼が何を言いたかったのか。何を企んでいるのか。果たして、それを知る者は――現在の段階では、誰もいなかった。

第二十話　代理（前書き）

今回は場面がかなり変わります。戦闘は次回から、かな？

というわけで、とりあえず第二十話を投稿いたします。

第二十話　代理

「では、これより明日のクラス対抗戦においてのルールを説明します」

場所は一年二組の教室内。其処には明日とり行われるクラス対抗戦（リーグマッチ）においての諸注意を説明を受けるために各クラスの代表たちが介していた。

一組の代表となったキョウスケ以外は全て女子というどうにも馴染みにくい雰囲気の中、二組の担任である城ヶ崎葵が特別に用意されたモニター画面へと指示棒を向けながら説明へと入る。

「まず、試合時間は一試合において二十分間。インターバルはほとんどないと考えるように。つまりは、体力勝負も課せられています」

その言葉に、数人の生徒が内心で驚く。

つまり、上に登っていくに従って休憩時間という者はほとんどなくなる。更に、二十分という短時間しかないのも特徴か。

ここまで時間を詰めるのは、今回のクラス対抗戦は一年から三年まですべて第三アリーナでとり行うからだ。というのも、他のアリーナは施設の点検作業に入る為である。

そのせいで、対抗戦において使えるアリーナが一つしかないという事態になった。

もう少し早くすればいいのではないか、という疑問も尽きないが、業者側が折れなかったらしい。

「勝負は従来のＩＳ同時に試合に準じて行います。尚、今回は特別ルールとして二十分間の間で決着がつかない場合、その瞬間のシールドエネルギー残量によって勝敗を決します。ですから、一発だけ

当てて後は逃げ回るという戦法も構いません」

（それはそれで無理でしょ）

話の内容を伺っていた鈴音は、画面上を眺めながらそんな事を思う。

というのも、キョウスケ以外は全て代表候補生の集まりだ。ＩＳを使っての訓練は皆が皆同レベルといっても過言ではないだろう。つまり、当てるのも避けるのも実際にはなかなか難しい。それなりの知識がある場合、尚更だ。

しかし、鈴音とキョウスケ以外で専用機を持っている者はいない。打鉄同士やラファール同士の試合を見たところで、盛り上がりには欠けそうだと鈴音は少なからず思っている。

「第一試合は午前八時からとり行います。一試合目の対戦は、三組と六組。二試合目は四組と五組。三試合目は七組と八組。四試合目は一組と二組です。各自、遅れないように。では、解散」

簡単に説明を行った城ヶ崎は、モニターを直すと何事もなかったかのように外へと出ていく。

その瞬間、この場に集まっていた女子たちが溜息を漏らす中、鈴音はすっと席を立ちあがったかと思えば、キョウスケの方に近付き、正面へと立つ。

「初戦がアンタと相手だなんて好都合だわ。ぼこぼこにしてあげるから、覚悟しときなさいよね」

「……そうか」

「なによ、その態度。アンタ、さっきからずっと上の空だけどさ、

どうしたわけ？」

「お前には関係ない。気にするな」

鈴音の指摘通り、今のキョウスケは何処か上の空だった。

城ヶ崎が説明を行っている間も、キョウスケはこの場に心なしか、といった表情を浮かべていた。それを察知していた城ヶ崎の目尻が若干吊り上っていたことも、鈴音は気付いている。

「ま、そうね。別にアンタが何を考えてても関係とかないし。それじゃあ、明日絶対にぼこぼこにしてあげるんだから」

「……」

「ふん」

無視された事に少々苛立ちを感じながらも、鈴音はキョウスケに対して踵を返してそのまま行ってしまう。

だが、キョウスケは動かない。それどころか、何かを考えているように頬杖をつき、外を眺めていた。

「馬鹿じゃないの、あいつ……」

教室から出ていく際、鈴音はキョウスケに対して小声で呟く。

しかし、それがキョウスケの耳に入ることはない。いや――今のキョウスケには、誰からの言葉も耳に入らないのだろうと判断する事が出来た。

何を考えているのか。それを鈴音が考えたところで意味がないのは明白だった。その為、鈴音はさっさと二組の教室を離れた。

それから十分くらい経ったか。人気のない――いや、相変わらずキョウスケが一人で座っていると、誰かが教室内へと入ってくる。
その人物は、入ってきたはいいものの、動こうとはしない。ただ、真っ直ぐにキョウスケだけを見ており――やがて口を開く。

「どうしたんだよ、こんなところに呼び出して」

「来たか、織斑」

ようやくか、と内心で思いながら、キョウスケはゆっくりと立ち上がり、やってきた人物――いや、キョウスケ自身が呼び出した人物である織斑一夏の方に向き直る。
今までＩＳの訓練を行っていた一夏の髪は、薄らと汗でぬれている。恐らくはさっさとシャワーでも浴びたいと思っているに違いないのだろう。
だが、一夏は来た。本当に、律儀な男だとキョウスケは思うが――今はそれどころではない。

「で、話ってなんだ？」

「そうだな…。お前に一つ、頼みがある」

「頼み？」

「ああ、頼みだ。それに、受けてもらわなければ俺が困る」

「……そうかよ。で、何なんだ？」

「実はだな――――」

「……はぁ？」

キョウスケの言葉を頼みごととやらを聴き、一夏は驚くしかなかったのだった。

＊

試合当日――。一台の車がＩＳ学園に向けて走っていた。

漆黒に染められたその車に乗っていたのは、栗毛の髪をしており、眼鏡をかけた女性と白い髭がまるでトレードマークのような人物。

眼鏡の女性はまだしも、その白い髭の人物には独特の雰囲気というものが渦巻いていた。しかし、それに動じる事のない栗毛の女性も大したものである。

と、栗毛の女性が手帳を取り出したかと思うと、白い髭の人物に対して声を掛ける。

「もうすぐＩＳ学園に到着予定です」

「うむ。今日はクラス対抗戦においての視察だったな」

「はい。一年生から三年生までの試合を観戦。その後はアメリカのケーラ委員と会合になっております」

「そうか…。ケーラとの会合は何時からになるのだ？」

「だいたい六時くらいかと。どうかされましたか？」

「いや――久々に、あの二人に会っておこうと思ってな」

「あの二人――織斑姉弟ですか？」

「そうだ。しばらく会っていなかったからな、挨拶程度だが。それに、君もあっておかなければならない子がいるだろう？」

「……」

白い髭の人物に指摘されると、栗毛の女性は途端に黙り込む。

更には視線を軽く下に向け、持っていたメモ帳を軽く握りしめる。

その様子を見ていた白い髭の人物は、視線を正面に向けるや、呟くように口を開く。

「会っておきなさい。次は、いつ会えるか分からんからな」

「ですが……私は、プロジェクトを抜けてしまった身です。いまさら…」

「それでもだ。和解しろとはいわん。ただ、会って話をしてみればいい。フィリオも、それを望んでいる筈だ、高倉君」

「……」

その名前を聞くたびに、栗毛の女性――高倉つぐみの胸が締め付けられる。

共に夢を追いかけた人物であり、恋人だった彼――。志半ばで逝った彼に対し、彼女は何も出来なかった。

あのまま、計画に残っていたらどうなったであろうか。いや――すでにアメリカ政府はプロジェクトＴＤの存在など記憶の片隅にも残っていないだろう。興味があるのは、ＩＳのコアのみ。

「……」

「……どうするかは、君が決める事だったな。言うべきではなかったかもしれん」

「いえ、別に構いません。その……決心がついたら、会ってみようと思います」

「そうか」

それだけ言うと、白い髭の人物は再び目を閉じる。

ＩＳ学園に到着するまで、両者は互いに無言のままであった。

＊

ＩＳ学園を目前にしながらも、近くの森林で待機している女性がいた。

その女性の両脇には異形の形をした物体が二機。鎮座したように背を低くし、森林に身を隠すようにして待機している。

更に、その後方にはカラスのような物体が待機している。その全ては機動こそしていないが、ざっと二十機近く存在した。

それらを構えながら、女性――混沌（カオス）の幹部の一人であるツィーネ・

エスピオは機を待つかのようにその場に待機していた。
自分のＩＳであるエリファスはまだ待機状態のまま。今展開してもいいが、察知された場合は非常に面倒になる。
――いや、そんな可能性などないのであるが。

「さて、もうすぐね。あの時の小娘を始末しろ、って話だけど――あの時殺し損ねた小娘がこんなところに…ね」

ツィーネがクスッと笑みを浮かべ、懐かしむかのように当時の事を思い出すが――すぐに首を振って中断した。
何故か？　その出来事を、彼女の前で公言することが楽しみだからである。すでに彼女が孤立する手筈は整えている。揺動も抜かりはない。

「その為の“ゴーレム”…か。フフッ、それも二機寄越してくるなんて、よっぽどあの子を始末したいのかしらね」

その用意周到ぶりにはツィーネも驚くしかない。更にはカラス型の試作機――“コルスニク”の大群のおまけ付きだ。邪魔が入らないよう、この使い捨て型のカラスたちには周辺の警戒をしてもらう。
あとは自分が彼女を仕留めれば問題ない。そう、問題は――。

「――ッ」

瞬間、ツィーネに軽い頭痛が襲う。
それはすぐに収まるが、ツィーネは顰め面を浮かべたまま頭をさえる手を離さない。寧ろ、やけに苛立ったかのような雰囲気を醸し出す。

（っ…。疲れてるのかしら…最近、こんな痛みが度々起こる…）

それは一種の悩みの種であった。
原因不明の謎の頭痛。更に、それは最近頻発している事態になっていた。

「まったく……やってられないわね、これは…」

ゆっくりと立ち上がると、ツィーネは時計を見やる。時刻はちょうど九時を指しており、ツィーネは口元を吊り上げる。

「さて……作戦開始時刻までもう少し。揺動は頼むわ、ゴーレム」

傍らに待機していた物体――ゴーレムを軽く撫でると、ゴーレムはそれに応えるかのように起動する。
目指すはＩＳ学園の第三アリーナ。ただ、其処だけだった。

＊

場所は変わって、ＩＳ学園第三アリーナ。ちょうど六組代表の浅村楓と七組代表である奥村香苗の試合が終わった時間帯だった。
機体は互いに打鉄。さほど盛り上がる試合ではなかったが――勝負七組の方に軍配が上がった。その後はさっさとピットに引き上げたが、その瞬間に歓声が上がったのは言うまでもない。
さて、それは彼女たちにとっては建前である。次の試合は一回戦第四試合。一年一組と一年二組との試合だ。

「響介の出番って次だよね？」

「ええ、そうですわ。ま、響介さんがその程度の相手に負けるはずがないとは思っていますが」

会話しているのは、客席から観戦しているセシリアとアイビスだった。

本来ならば試合前のピットに入りたかった彼女たちであったが、関係者以外立ち入り禁止とあって入ることは許されなかった。

セシリアは関係者だと詰め寄ろうとしたが、それはまずいという事でアイビスによって連れ出される形となってしまった。

先ほどまでやけに不機嫌なセシリアであったが、キョウスケの試合が近づくたびに冷静さを取り戻していったのはアイビスにとっても救いではあったが。

「それで、響介さんが戦う相手は誰ですの？」

「えっと……二組の鳳鈴音さんだよ。知ってるよね？」

「まあ、見たことはありますけど。ですが、例えどんな相手でも響介さんが負けるはずがありませんけど」

「じ、自信満々だね、セシリアは…」

「当たり前ですわ」

苦笑いを浮かべるしかないアイビスであった。

それから、彼女たちは今では互いに名前で呼ぶ仲になっている。

少々他人過ぎる、という事も手伝っての事であったが、今ではこれが通常だ。

と、苦笑いを浮かべるアイビスとは対照的にセシリアは別に自分が戦う訳でもないのに、やけに自信満々な表情を浮かべ、更には腕組みまでしていた。

キョウスケをクラス代表に推薦したのはセシリアであり、更にその実力を誰よりも知っているのも彼女だ。当然、キョウスケには勝ってもらわねば困るというもの。

いや――キョウスケが負ける姿など、今のセシリアには考えにくいというのもあるか。そう、先日のどこから来たのかも分からないような者達と戦った時のように――。

「それにしても、あの方たちは一体どこに消えたやら…」

「あの方って？」

「先日、響介さんと勝負をした金髪の方と、一緒にいた男の方ですわ。煙のように消え失せましたから、どうしたものかと」

「ああ、それは確かに。それに、どうやって学園の中に入ったのかも謎のままだって」

その時の事を思い出したのか、セシリアの眉根が若干狭まる。

あの時はキョウスケが相手をしたが、セシリアとしても退くわけにはいかなかった。まあ、キョウスケが誘いに乗った、という事も関係しているのだが。

（……。でも、響介さんももう少しわたくしの事を頼りにしてくだされればいいですのに…）

あの時の事を思い出し、セシリアの顔が若干伏せられた。

頼りにしていない訳ではない。眼中にない、という訳でもないの

だろう。だが、最近のキョウスケは何かを考えている様子だった。
一体何を考えているのか、セシリアにはわからない。それとなく聞いてみたこともあったが、すぐに話を逸らされた。

（はぁ…）

内心で嘆息。だが、溜息を吐いたところで状況が変わるわけではない。

「あ、もう始めるみたいだよ」

軽く落ち込んでいた時、隣のアイビスの言葉が耳に入り、セシリアは一旦考えるのをやめてアリーナ内に視線を送る。
クラス対抗戦が終わった後、キョウスケに聞いてみよう。今度はしっかりと、はぐらかされないように。
そう思った矢先――セシリアとアイビスは、ピットから出てきた人物を見て、目が点になった。

「……え？」

「……はい？」

二人が驚いたのも無理はない。いや――仕方がないというしかなかった。
共にアリーナ内を見ながら、目が点になるという異常事態であったが――急にセシリアが立ち上がると、何処か怒った様子で歩き始める。
そんなセシリアを、アイビスは慌てて追いかけて呼び止めた。

「せ、セシリア、何処に行くの！？」

「聞くまでもありませんわ…。響介さんのところに決まってますわ！」

今現在、織斑千冬は頭を抱えていた。

頭を抱えるしかない。これぱかりは本当に。それこそ、千冬自体が予測していなかった事態だったのだから。

「えっと……織斑先生？」

「……山田先生、君は知っていたのですか？」

「な、何のことですか～？　あ、あはは……」

引き摺った笑いしか出てこない真耶。更に目線は千冬ではなく別の砲口に向けられており、嘘をついている事はすぐに分かった。

そのことに対しても頭を抱えるしかない。全く、一体何がどうなったやら。

「山田先生、後で組手だ。最近体が妙になまっていてな。そうだな、五百セットぐらいしよう」

「え、ええ～～！？　さ、流石に死んじゃいますよ！」

「残念ながら決定事項だ。で、何故あそこに……一夏がいる？」

千冬が親指でモニターを刺すと、其処に映っているのは白式を展開状態にした織斑一夏の姿だった。

セシリアとアイビスが目を点にしたのも無理はない。キョウスケが出てくると思えば、出てきたのは一夏だったのだ。これは、実は彼女たちだけではなく、海上のほとんどが目を点にしたのだが。

「え、えっと、それは……」

「言わなければ、組手をプラス百回上乗せすることになるが？」

「は、はい！　言いますからお許しください！」

「そうか。で、何故だ？」

「その……昨日、南部君からクラス対抗戦に関する変更届が提出されまして…それが見事通ってしまったようで…」

「で、君は知っていたにも関わらず黙っていたのか？」

「ひぅ！　え、えっと、南部君が織斑先生には絶対に言わないでくれって言ってので、それで……」

「はぁ……」

真耶の言葉を聞き、千冬の顔が険しくなると共に盛大に嘆息した。いきなり変更するとは、どういった風の吹き回しなのだろうか。おまけにそれを受理した学園側も学園側だ。あまりにも急な事で、千冬自身も混乱するしかない。

「で、何が原因だ？」

「その…用事が出来たとしか…」

「用事…？」

「逃げ出しただけじゃありませんか、織斑先生？」

その時、隣から誰かの声が聞こえたかと思えば――千冬は軽く視線を其方へと向ける。

其処に立っていたのは二組担任の城ヶ崎葵であり、千冬は怪訝そうな表情を浮かべた。

「それはどういう事ですか、城ヶ崎先生」

「負けるのが怖くて逃げだした、という意味ですよ、織斑先生。まあ、私の二組はちょうど専用機持ちが代表になりましたし…恐れをなしたとしか言いようがありませんが」

「……南部はそんな奴じゃありませんよ」

「どうでしょうか。男というのはいざとなれば逃げるような卑怯者ばかりですからね。彼もその一人だったという事でしょうが」

「……っ」

無意識に、千冬の奥歯に力が籠る。

城ヶ崎の言い方もそうだが、キョウスケを馬鹿にするのがどうにも許せなかった。

それはすなわち、千冬がキョウスケの事を割り切っているつもりでも、本心ではそうではない事を意味している。

だが、千冬は気が付かない。それを、無理やり抑え込んでいる状態なのだから。

「しかし、相手が織斑先生の弟さんですか。フッ、これはもらいましたね」

「…あいつは馬鹿者だが、ここ一番という時は強い。それが例え代理であろうともな」

「どうでしょうか。所詮はＩＳに乗れて騒がれているだけの素人。実力派である代表候補生には適わないでしょう」

「……」

もはや、それは挑発に近かった。だからこそ、千冬はもはや城ヶ崎と話す事をやめ、あえて口を閉ざす。

それに、これ以上言い合ったところで醜い言い争いにあるのは必然だと千冬は気付いたのだろう。それに、今は一夏の試合に集中したいというのが本音か。

（しかし……どこに行った、南部？）

モニターを見ながらも、千冬の頭を過るのはそれに尽きたのだった――。

第二十一話　来襲（前書き）

今回の戦闘は少ししかありませんが、次回からは本格的に移行しそうです。

主役が全然出てませんが……ご勘弁を。それでも宜しい方は次にお進みください。

第二十一話　来襲

凰鈴音は、ピットから自分の見知った相手が出てきた瞬間――驚きが半分、そしてこれは面白いと思ったのが半分だった。

鈴音にとって、キョウスケという存在は眼中にはない。ただ、どうせなら戦うのが一夏ならばいいのに――と、心の中で思っていたのは事実。

それが今、現実となった。勢いよく一夏がピットから出てきた瞬間、アリーナ会場は困惑したようにどよめいた。

だが、鈴音だけは違う。彼女は口元を薄く吊り上げ、会場内に自分の音声を拾われないように一夏に対してプライベート・チャンネルで回線を開く。

『どういう風の吹き回しなのよ、一夏？』

「……色々あったんだよ」

鈴音の音声を拾った一夏であったが、まだ彼はＩＳにおけるプライベート・チャンネルの開き方が分からない――いや、初めての相手との回線の開き方が分からないといった方がいいか――ため、必然的にオープン・チャンネルで聞き、少しばかり怪訝な顔を浮かべた。

一夏自身、何故この場に自分が立っているのか、首を傾げるような思いだった。だが、それと同時に昨日のキョウスケとの会話を頭の中で思い返す。

「実はだな、クラス対抗戦の代表の件だが……俺は、お前に代わってほしいと思っている」

「……はぁ？」

二組の教室に呼び出されたかと思えば、キョウスケの口から放たれた言葉は一夏が驚き、そして呆れたような声を出すのも頷ける。

だが、キョウスケは至って真面目な表情をし、一夏をただ見ている。そんなキョウスケに、一夏は自嘲気味に笑うと、彼に問う。

「いきなり何言ってるんだよ、南部。冗談はやめろ」

「本気だ。それに、他に頼める奴がいなかったのもある」

「ダグラスさんやオルコット……さんにも頼めない事なのか？」

「そうだ。――言えば、必ず理由を聞いてくるだろうからな」

それはそうだ、と一夏もキョウスケを見ながら思う。

しかし、これはまた唐突だ。一体、この男に何があったのか――疑問に思う。

だが、どうにもキョウスケからは理由など聴くな、と言わんばかりの雰囲気を前面に押し出しており、とてもではないが聞くに聞けない。

理由はなんなのか、一体彼が何をするつもりなのかは分からない。だが、一夏は一つ溜息を吐くと仕方がなさそうに返答する。

「まぁ――いいけどよ。だけど、そのかわりに一つ聞きたい」

「なんだ？」

キョウスケの視線が一夏を捕える。

真っ直ぐに捕えられた視線に、一夏は返すように視線を向ける。

臆することはない。ただ――これだけは聞きたいだけだから。

そう思った矢先、不思議と自分の口から言葉は漏れているのだった。

「勝負から逃げる訳じゃ、ないよな？」

「フッ――。傍から見ればそうなるだろうな」

うすく笑い、キョウスケは呟く。

一夏が問いたかったのは、それにつきる。対抗戦に出る分は別にいい。だが、それを辞退するキョウスケの考えを聴きたかったのだ。

果たして、それは逃げなのか。それとも対抗戦以上に――大事な事なのかを。

「だが、それはない。ただ……用事が出来ただけだ。大事な、用事が」

其処まで思い返したところで、一夏は頭を振る。

今この場において、キョウスケの話は置いておいた方がいいと判断した結果だ。目の前の出来事に対して集中する。今はただ、それだけだ。

一夏がゆっくりと地上に降り立つと、それと同時に自分の武器である雪片弐型を展開し、構える。

『早速やる気満々のようね、一夏。そっちの方が面白いけどさ！』

鈴音はやや嬉しそうに笑うと、彼女のＩＳ【甲龍（シェンロン）】の武装の一つである双天牙月を二本呼び出し、それを連結させた。

まるでバトンを振り回すように軽々と双天牙月を振り回すと、鈴音も一夏同様に構える。両肩部にある非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）のセーフティも外したのか、ガチャリという何かが開く音が一夏の耳に届く。

『手加減なんてしないから、そのつもりでいてよね』

「当然だ。だけど、俺も負けられない――」

『それでは両者、試合開始』

会話が終わった瞬間の試合開始の合図。開始と共に、両者は一斉に飛び出す。

雪片弐型の刃と双天牙月の刃が激しい音を立ててぶつかり合い、両者の間に火花が散る。初撃を受け止めたことに鈴音は内心で感心するが、それくらいでなくてはと今度は後ろの刃で一夏に斬りかかった。

「ぐっ！」

鋭い刃を受け止めた分、その重い衝撃が一夏を襲う。

それはまるで、キョウスケと戦ったあの時のようで――つい先日の勝負を思い出してしまう。

「ふうん、二撃目もなんてやるじゃない。でもさ――！」

「なに…！？」

言うや、肩のアーマーがスライドして砲口が開く。レーザーでも出てくるのかと思い、一夏は咄嗟の判断で後退する。だが――その考えは鈴音にとって甘いものでしかなかった。

「受けなさい！」

「なっ、がぁっ！」

刹那、一夏は甲龍から放たれた“見えない何か”に殴り飛ばされたような感覚が襲い、文字通り吹き飛ばされる。

一体何が起こったのか、と考えたが、すぐにＩＳの警告信号がうるさく鳴り響く。はっとして鈴音を視線で捕えたが、鈴音はにやりと笑みを浮かべるや、再び先ほどの見えない何かを再び彼にぶつける。

「がぁ！！」

追い打ちを掛けられるようにぶつけられ、一夏の全身に痛みが走り、地に打ち付けられた。

しかし、これはまた本当に厄介な武装だ。これならば、まだレーザーによる波状攻撃の方が幾分か読みやすい。だが、攻撃が見えないとなると恐ろしい事は極まりなかった。

この武装の制式名称は、『龍砲』。砲身も砲弾も見えないそれは、俗にいう衝撃砲と呼ばれている武装であった。

衝撃砲とは、空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、その衝撃を砲弾として撃ちだすというもの。しかし、それが分かったところでどうしようもないのだが。

「もう一撃！」

「さ……せるかぁ！」

畳み掛けるように龍砲を撃ちだす鈴音だったが、一夏は痛む体に鞭打つかのようにスラスターを噴かし、どうにか事なきを得る。

ただ、一夏が今まで転がっていた場所は弾き飛ばされるように吹き飛び、改めてその威力を思い知らされる。

「へえ、よくよけたわね」

「そう何度も何度も当たってられるよ……」

歯を食いしばりながら、一夏は余裕そうに構えている鈴音に返した。

強がって見せるものの、先ほど受けたダメージは相当堪えている。絶対防御が展開されているとはいえ、ずきずきと痛みが全身を襲い、一夏は若干顔を顰める。

だが、反撃しなければどうにもならないのも事実。しかし、飛び出していったところで返り討ちにあうのは必然だ。

（なにか、手は……）

雪片弐型――自分の唯一の武装であり、必殺の一撃を叩き込むのに十分なそれを握りしめながら、一夏は一時的に思考の渦に入る。

一撃で決めるには、やはり距離を詰めてから全力で“零落白夜”――これは、白式の単一使用能力であり、自分のシールドエネルギーを犠牲にするかわりに相手に対象のエネルギーをすべて消滅させるというもの――を撃ち込むしかない。

もっとも、これを使っての訓練はまだ行った事がない。今までは篠ノ之に頼み込み、只管剣道の訓練を行っていたようなものだ。

だが――それは逆に、一夏にとって使えるものかもしれなかった。
今までの経験を、この場で出す。
と、その時。一夏の頭にとある考えが思い浮かんだ。中々危険な代物だが――勝つためには、それしかない。
そして、一夏は何を思ったのか――雪片弐型を持ち上げると、それをあろうことか鈴音に向かって投擲する。

「でぇい！」

「なっ……？　あんた、馬鹿じゃないの！？」

投擲してきた雪片弐型を軽々と避けると、鈴音はわけのわからぬ行動を取ってきた一夏に対して声を浴びせる。
だが、一夏は投擲すると同時に鈴音に対して突撃を仕掛けていた。
これに鈴音は不意を付かれた形となったが、返り討ちにしてやろうと双天牙月を一夏に対して振るう。

「させるかよ！」

「……っ！」

鈴音が双天牙月を振るおうとした瞬間、一夏の手が鈴音に届く。
力を精一杯振り絞って、その左腕を一夏の右腕で抑えると、一夏は間を入れないように思いっきり鈴音の脳天に向かって頭突きを行う。

「つぅ～～～」

「や、やったわねぇ！！」

互いの頭になんともいえない痛みが襲うが、いち早く動いたのは

鈴音だった。
　両肩部に浮遊させたアーマーの砲身を一夏に向けるが、一夏は鈴音から離れることはなかった。　その一夏の行動に鈴音が内心で苛立ち、どうにかして振り張ろうとするが、一夏は鈴音にしがみ付いたままで離れようとはしない。

「この、変態！　さっさと離れなさいよ！」

「うっせ！　これも戦略の一つなんだよ！」

「なにが戦略よ！　さっさとどきなさいよ、変態！」

「離すもんかよ！」

「うぅ……」

　一夏を取っ払おうと容赦なく蹴りつける鈴音だったが、一夏は死んでも鈴音を離さないとばかりにしがみ付く。
　個人的には嬉しい事に違いなかったが、今は試合中。おまけに此処まで距離を詰められれば龍砲を撃とうにも難しいというのがあった。
　ほぼ至近距離。一夏を撃てば、彼を剥がすことは出来ようにも自分まで被害を受けてしまうというのが頭にあった。引きはがしたところで龍砲の連続発射というのが願望だが、実際はそう甘くはない。
　おまけに先ほど一夏が苦し紛れにやったかのような頭突きによって、今でも頭が微かに痛む。戦闘時は冷静になれる鈴音であったが、相手が一夏ではそうもいかなくなっていた。
　と、鈴音が手こずっているのを見ると、一夏は時期が来たと思い――白式のバーニアスラスターを最大出力で噴かす。

「なっ――――！」

「おおおっ！！」

最大加速ではないが、かなりの速さで鈴音が押される。
これには鈴音自身が一番驚いたが、驚いている矢先にアリーナのフェンスに到達し、激しい轟音と共に押し付けられた。

「っ～～！　い、一夏、あんたねぇ！」

「とどめだ、鈴！」

「！？」

刹那、鈴音はハッとして顔を上げた。
すると、一夏の右手には先ほど投擲したはずの雪片弐型をフェンスから引き抜き、その刃先は最初と違って刃全体から溢れんばかりの光を放つ。

「まさか、最初からこれを狙って――――！」

「そのまさかさ」

ようやく、一夏がニッと笑った。
だが、それは不敵な笑い。そして、勝負を確信した時の笑み――。

「なるほど、最初からそれを狙っていた訳か。大胆な博打に出たな、一夏は」

「博打…ですか？」

「そうだ。鳳の武装があの青龍刀と衝撃砲以外に存在すれば、あいつは瞬く間に返り討ちだっただろう。だが、結果はあれだ。最初から、あいつは鳳の不意をつきフェンスに押し付けたところで最初に投げていた雪片を回収。そのまま単一能力である零落白夜を使い、とどめをさすといったところだろう」

真耶の問いに、千冬はやや安堵したような表情を浮かべる。

そう、一夏は最初からどうやれば鈴音の不意を突き、零式白夜を当てる事が出来るかを考えていたのだ。

ただ、単純に攻めたところで今の一夏の腕では返り討ちにされることは手に取るようにわかる。かといって、鈴音の攻撃全てを回避するという神業めいたことも、現状の一夏の腕では出来るはずもない。

だからこそ、こうした奇策をとるしかない。最初に雪片弐型を投擲し、丸腰になったのもそのため。ただ、それは千冬の言う通りに博打以外の何物でもなかったのだが。

知らず知らずのうちに、“響介”の博打好きという点が一夏にも移っているのではないか、と千冬はその戦法を見た時に瞬時に思ったのと同時に頭が痛くなりそうだったが。

「まったく、出鱈目（でたらめ）な戦法をとりますね、貴方の弟さんは」

「フッ、素人でもやろうと思えば出来るんですよ、城ヶ崎先生。まあ、やり方が雑なのは認めますが」

「……」

今度は葵が奥歯をギリッと強く噛みしめる。
恨めし気な視線を千冬に浴びせるが、千冬は至って涼しい顔をしながら、葵を無視する。もはや、勝負は決した。エネルギー数値も、鈴音のシールドエネルギーを削る分は存在している。

「勝負、あったな――――」

そう、千冬が呟いた瞬間だった。
ドゴォォォン、という轟音が鳴ると同時に、千冬たちが待機しているピット内も同様に激しく揺れる。

「きゃ！」

「っ…。なんだ？」

一体何が起きたか、といったような表情で千冬はモニターを見やる。
すると、アリーナ内を映し出しているモニター上からはもくもくと白い煙が上がっている。そのおかげで現状の状態を確認する事が出来ず、千冬は歯噛みした。

「すぐに別のモニターに切り替えろ！」

「は、はい！」

そのモニターが使い物にならないと判断すると、千冬は真耶を怒鳴りつけるようにして指示する。
一方、先ほどの衝撃で尻餅をついていた真耶であったが、千冬からの指示を聞いて立ち上がると、小型端末を呼び出してモニターを切り替える。

すると、モニターは別の画面に切り替わるが、原因と思われる白い煙の正体は分からないままだった。

「ちっ……状況は分からず、か。熱源は？」

「あ、はい。えっと……生体反応なし…？　でも、これは……識別、不明。ですが、形状からして……あ、ＩＳ！？」

「なんだと！？」

真耶の報告に、千冬は声を上げた。

熱源がない未確認ＩＳ――。ＩＳがアリーナ外部のシールドをぶち破ってきただけでも驚きだが、更に生体反応がないという。

千冬は眉を潜め、さっさと状況を確認したいのだが――煙は未だに晴れない。

「ですが、非常事態に変わりはないようですね。山田先生、全ての状況確認を」

「は、はい！」

と、言葉を発したのは城ヶ崎葵その人であった。

先ほどの恨めし気な表情は何処かへと飛んで行ったのか、今ではそのような事は微塵にも感じられない。それどころか、手慣れているかのように酷く冷静であった。

「…っ。城ヶ崎先生、遮断シールドがレベル４で設定中。更に、全ての扉が厳重にロックされています！」

「なるほど、出る事も入ることも適わない状況を作り出しましたか。

では、三年及び教師陣の半分を使ってシステムのクラックを。残る戦闘教員は全員ＩＳを装備。装備はレベル？で充分です。クラックが成功しだい突入を開始。侵入者の排除を」

「待て、城ヶ崎。アリーナ内にはまだ避難できていない生徒達が大勢いる。巻き込むつもりか？」

「今は侵入者の撃退が最優先です。それに、クラックが成功すれば生徒達も同様に外へと避難するでしょう。――ただし、避難誘導までは出来ませんが」

「なんだと……！　生徒たちはパニック状態だ。避難誘導もなしに、落ち着いて逃げられるものか！」

「……誘導を行おうにも、現場が混乱していては話になりませんからね。まあ、やっても無駄だといった方がいいのかもしれませんが」

「貴様……！」

「くどいですよ、織斑先生。それに、緊急時の指揮の全権は私が担っています。いうなれば、セキュリティの責任を預かっている筈の織斑先生に私は異を唱えたいところではありますが」

「くっ――――！」

そう――現在、ＩＳ学園においての緊急時の実質的な戦闘指揮というものは、元軍人である城ヶ崎葵が担当している。

というのも、これは千冬自身がその役職を拒否したという経緯もがある。理由は――彼女がＩＳに搭乗する事が“出来ない”からだ。

「ですから、現状は私の判断通りに動いてもらいます。といっても、貴方に出来る事はないですがね、“ＩＳ適正ランクＤ”の織斑先生」

「……」

何も、千冬は返す事が出来なかった。

通常、ＩＳランクというものはＣ～Ｓというのが常識である。しかし、ランクＤというのは実質的に適応外――ランク外といっても過言ではないものだ。

今の千冬は、其処まで落ち込んでいるという事。葵にしてみれば、過去はどうあれ今の千冬に権限を与える必要など見当たらないのも事実だった。

「城ヶ崎先生、それは言い過ぎです！」

「事実を述べたまでです。それよりも山田先生、各員への通達は完了したのですか？」

「一応は…。後はクラック次第、です……」

「そうですか。ああ、それから。今現在試合中であった二人は下がらせるように。いても作戦の支障になりますので」

と、葵が其処まで言った瞬間――今までアリーナを映し出していたモニター画面が突如消える。

それに気づいた葵と千冬、真耶はモニターに目を向ける。そして、葵が眉を潜めた途端、其処から何者かの声が流れ出る。

『ＩＳ学園の皆様、初めまして。我々は混沌（カオス）。まずは、試合中にいきなり乱入した非礼を詫びたい』

「混沌（カオス）……だと！」

その名称を聴いた途端、千冬は拳を握り、これ以上ないほどの怒りの形相を露わにする。

今まで見たこともない千冬の形相に真耶は多少怯えるが、葵は対して気にも留めず画面を見つめるのみ。

『今回、我々がこの場所に乱入したのは、とある目的の為。それが済み次第、我々はこの場所より速やかに撤収いたしましょう。ですが――もしも、我々の邪魔及び妨害をするのでしたら……アリーナに送り込んだ無人機が皆様方の命を容赦なく奪いますので、そのおつもりで』

すると、再び会場内のモニターが復活する。其処には先ほどの白い煙が消え、その正体が明らかになっていた。

中央に居座るように存在している物体――あれこそが混沌（カオス）の言っていた無人機の類だろう。しかし、姿はまさにＩＳ。“人が乗ることによって稼働する筈の兵器”が、其処に居座っていたのだ。

「驚きましたね…。まさか、無人機を作り出せるほどの技術力があるとは」

『お褒めいただき、感謝の極みでございます。それからもう一度いいますが……くれぐれも、我々の邪魔立てはしないでいただきたい。アリーナ内にいる観客――いえ、生徒さんたちの命は此方が握っていますので』

「無駄です。アリーナ内と客席の間にはＩＳと同じシールドエネルギーで守られています。滅多な事をしない限り、中央からの攻撃は

無意味に等しいですので」

『――ですから、その障壁を取り払いたいと思っております。まあ、ご覧ください』

「何……？　――！」

刹那、観客席とアリーナを隔てていたシールドエネルギーが上から次第になくなっていく。

完全に隔てているものはなくなり、いつでも生徒達を狙い撃てるような格好になったのと同義だ。事実、得体のしれないＩＳの右腕部の砲口は客席に向けられており、いつでも撃てるかのような格好を取っていた。

「システムにも介入できるという事ですか、貴方方は…」

『無論です。我々のハッカーは優秀ですからね。ですが、これでお分かり頂けたかと。大勢の人質は此方の手の中にあります。抵抗するようでしたら――その全てを焼き尽くしますが』

「……ふぅ。分かりました、条件はなんでしょうか」

「じょ、城ヶ崎先生!?」

「黙っていなさい、山田先生。流石にこれは分が悪すぎますので」

叫ぶ真耶を制し、城ヶ崎はモニターに向けて声を発する。

すると、画面上の向こうで声を発している人物は微かに笑う。そして、こういった。

『“今回の”我々の望みは一つだけ。ただ、それが適うまで大人しくしていただければいいという事です』

「その望みとは？」

『答える必要はありません。貴方方は黙って其処にいればいいだけ――。もっとも、生徒一人の命が犠牲になりますが。大人数と一人。天秤に乗せたところで、答えは自ずと出ているでしょうが』

「……なるほど、分かりました。では、抵抗しなければいいのですね？」

『そうです。話が分かる方で助かります。では、もうしばらくお待ちを。成功の暁には、すぐに“あれ”を退かせますので』

そういって、モニターからの声は途絶える。

至って冷静な表情を見せていた葵であったが、通信が終わると同時に嘆息。と、それと同時に千冬が葵に近付き、彼女の胸倉を掴んで見せる。

「どういうつもりだ、城ヶ崎…」

「私は当然の判断をしたまでです。もっとも、この状況下では動くに動けないのは明白でしょう？」

「貴様は――！」

「私に怒りをぶつけたところで、結果は変わりませんよ。見る所、憤りを隠せないようですが……ああ、そういえば。確か、恋人を殺されたのでしたね。混沌（カオス）によって」

「――――っ」

もはや我慢の限界と葵を殴り飛ばす勢いであった千冬だったが――その拳はあえなく止められた。

千冬は振り返ったが、其処にいたのは山田真耶であり、普段からは想像もできないような真顔になって千冬を見ており、こう口にする。

「今は仲間割れをしている場合ではありませんよ、織斑先生。どうにかしてこの状況を打破する対策を練った方がいいと思います」

「……分かっている」

真耶の手を振り払うと、千冬はやけに苛立ったようにその場を離れる。

千冬に捕まれた場所を整える葵は、歩いていく千冬の後姿を見ながらチッと舌打ちした。この二人が相容れない、そして犬猿の仲というものなのが、真耶にははっきりと見て取れた。

「ともかく、山田先生。今現在クラック中の生徒たちは撤収を。ただし、突入隊は残しておくように」

「……分かりました」

葵の指示に、真耶は内心で千冬同様の気持ちを持っていながらも――素直に従うのだった。

＊

ＩＳ学園第五アリーナ――。

この場所は、今現在整備中である。いや、その予定だったのだが――先ほどの緊急事態を受け、作業を行っていた整備士たちは全員避難。その中の一人が羨ましそうに第二アリーナの方を見ていたという情報があったが、それはまたの機会に。

と、余談はさておき。あちこちに部品や器具が転がっている通路を、一人の少女がゆっくりとした足取りで通る。

不気味なほどの静けさを保ったこの場において、少女はただ歩き続けていた。決意を秘めたその瞳で正面を見ながら、ゆっくり、ゆっくりと歩き続ける。

その少女は、小原節子。その出来事は、つい先日の一つの手紙から始まった。

『クラス対抗戦当日、一人で第五アリーナへ来るように。君の両親を殺した犯人が、其処で君を待っている――』

セツコあてに送り届けられた手紙には、このような事が書かれていた。

これを見た時、セツコの手は震えた。そして、どうにかしなければと――そう思った。

誰かを巻き込むわけにはいかない。これはセツコ自身の問題なのだから。

だからこそ、キョウスケを拒絶した。話をすれば、間違いなく手伝うといってくるから。いや――それと同時に怖い、という事があったのかもしれない。

もう、誰も失いたくない。迷惑を掛けたくはない。だからこそ、約束通り一人で来た。

後悔は――なくはない。最後に、キョウスケに言ったあの言葉。あれだけが心残りだったか。いや、それだけではない。アイビスやセシリア、一年一組の皆の事も頭の中にある。

（でも……だからこそ、これ以上の迷惑は掛けられないから……）

視界が晴れる。たどり着いたの先は、第五アリーナの会場内。

中央には派手に露出させているような衣装をまとった女と、一体の得体のしれない物体が鎮座しており、セツコが姿を現すと、女の方がセツコを見やる。

「ようやく来たか…。遅かったじゃないか」

「それについてはお詫びします。それで――貴方が、私の両親を殺した犯人ですか？」

その問いに、女――ツィーネは笑みを浮かべた。そして、改めてセツコの方を見やると――彼女に返答してやる。

「そうさ。この私――混沌（カオス）の？？、ツィーネ・エスピオがあんたの両親を殺した犯人だよ。久しぶりね、小娘」

「……っ」

ツィーネの返答に、セツコは下唇を噛みしめるのだった――。

第二十二話　ツィーネ・エスピオ

ツィーネと名乗った女の言葉――――自分の両親を殺したと言い張った人物を見ながら、セツコはギュッと力強く拳を握った。

彼女が幼いころ――正確に言えば、二歳のころに死んだ両親。幼かったために顔はあまり覚えてはいないが、それでも自分を生んでくれた両親だ。

だからこそ、目の前の女が憎い。憎悪と怒りがセツコの心の中で渦巻いていく。

「けど、あの時の小娘がまさか生きているなんて…これは少し予想外だったわ。あの時一緒に殺しておいてもよかったんだけど」

「……どうして、私だけは殺さなかったんですか？」

「ウフフ、面白いからに決まっているじゃないか」

多少俯いた状態でセツコが問いかけると、ツィーネは笑った。更に笑いながら、面白いとまで言い始めたではないか。

拳を握る力が更に強さを増す。すぐにでも飛び出していきたいのだが、どうにか堪えて踏みとどまるセツコの姿が其処にあった。

「おや、感情に任せて飛び出してくるかと思ったけど…意外に頑固なようね」

「…一応、代表候補生ですから」

「ハッ、そうかい。まあ、すぐに返り討ちっていうのもつまらないからいいんだけど……」

これに関しては多少不満げな表情を浮かべるツィーネ。普段から大人しい奴は、爆発した時が恐ろしいのだが――と頭の中でそんなことを考えるが、そう容易く挑発に乗るような人物ではないという事だと悟る。

しかし、それはそれで面白いとツィーネは内心で嘲笑し、今度は口元を微かに吊り上げた。

「まあ、それはともかく。“殺し損ねた”小娘だったけど――今度は確実に殺してあげる。さっさとあの世にいる哀れな両親に顔を見せてやりな」

「お断りします……！」

キッと表情を引き締めたかと思うと、セツコは自機であるバルゴラを瞬時に展開する。武装であるガナリー・カーバーを片手に持ったまま、その銃口を開き、ツィーネへと向ける。

表情こそ変えないものの、内心でたまった怒りが前面に押し出てくる。それはもはや、止めようのないものへと変貌しているといっても過言ではない。

「血気盛んなこと。でも、相手は私じゃないわ。こいつがあんたを甚振ってあげるから」

笑みを浮かべたままのツィーネが、後ろに控えていた巨大な何かに手を触れた瞬間――その巨大な何かがゆっくりと立ち上がる。

その巨大な何かというのは、先ほど第二アリーナに突っ込んだ物体――未確認ＩＳであった。名をゴーレムといい、完全自立型ＡＩ

を搭載した画期的なＩＳである。
ツィーネとしては、自分が手をかけるまでもないという事か。ゴーレムが完全に稼働し、彼女たちの間に割って入るかのような位置へと移動し、セツコと対峙する。

「さぁ、悲鳴を上げな！　嗜好の悲鳴を！」

「っ！」

刹那、ゴーレムは恐ろしいほどのスピードでセツコへと突撃をかける。
そのスピードにセツコは驚くが、バーニアを噴かしてその場を離れ、ゴーレムの右側に移動。移動したところで、ストレイターレットをゴーレムに対して放つ。
連続で四発はなったストレイターレットであったが、ゴーレムはその巨大な腕を振るう事によって実弾であるストレイターレットを弾き飛ばす。それどころか、薙ぎ払ったところで腕部に搭載されている砲口がセツコへと向けられ、その場所から閃光が放たれる。

「……っ！」

ハイパーセンサーにてその砲口からの熱源反応を察知していたセツコは後ろに後退することによって放たれた閃光――ビームのようだ――をどうにか回避する。
外したことによって地に当たり、ボンと弾けて砂煙が舞う。しかし、敵は正面だと踏んでいたセツコは、これを機として再びストレイターレットを放つ。
だが、その時。バルゴラの警告音が鳴り響いたかと思うと、左側から熱源反応を感知と頭の中に情報が入ってくる。

「なっ、左!?」

セツコが驚きの声を上げた瞬間、いつの間にか移動していたゴーレムがセツコの左側から躍り出るようにして出現する。

出てきたところで、ゴーレムはその巨大な右腕をセツコに対して打ち払う。ハッとなってセツコは咄嗟にガナリー・カーバーを前方へと押し出すが、ゴーレムから繰り出された力はセツコの想像を遥かに超えている者であり、機体ごと弾き飛ばされるように吹っ飛んだ。

「くうっ！　な、なんて力なの…?」

ビリビリと手が震える。攻撃をなんとか防いだとはいえ、その衝撃は凄まじいものがあり、セツコは同時に顔を顰めた。

だが、その程度でゴーレムは止まらない。全身に搭載されているスラスターを噴かし、最初の突撃同様に凄まじいスピードで迫ってくる。

しかし、それは直線のみ。右か左に回避すれば衝突は免れると踏み、セツコが動こうとした瞬間――後方から誰かの気配を感じる。

その気配に対してもセツコは逃れようと機体を動かそうとしたものの――その人物の方が早かった。

「――!?　あなたは…!」

「逃げちゃ駄目よ。潰れな」

セツコの背後にいたのは、ツィーネであった。

彼女もまたＩＳを展開しており、前回はバイザーで隠していた部分も今回は姿を露わにしており、不敵な笑みを浮かべながらセツコを掴んでいる。

更に、彼女はＩＳ【エリファス】の背後から巨大な蝙蝠（こうもり）の羽を出現させたかと思うと、その両手から紫色に光る炎を出現させ、セツコにぶつけた。

「受けなっ！」

「あっ……あああっ！」

背後からの一撃に、セツコは回避するタイミングというものを失う。

更に猛スピードで突っ込んできていたゴーレムがセツコに体当たりしたかと思えば、彼女を吹き飛ばした。

「きゃあ！！　……うう……」

ゴーレムの巨体も相まって、大きく吹き飛ばされたセツコ。抑えきれない痛みが全身に走るが、それよりも先にセツコは己の浅はかさを悔いた。

ツィーネが、ただ傍観しているのみだと思ったのが最大の失点。事実、彼女もまたＩＳを展開してセツコに対して攻撃を仕掛けてきた。

それは予想できない事ではなかったのだが――。そう、“敵は一人ではない”のである。

「決めな、ゴーレム」

セツコがなんとか起き上がろうと歯を食いしばっている時、ツィーネは無情にもゴーレムに対して指示を送る。

ただ命令のみに従う無機質な機械であるゴーレムは、ただツィーネの命に従うのみ。両手をセツコに向け、エネルギーを充填する。

（なんとか、逃げないと……）

警告音が絶え間なく鳴り響き、頭が痛くなるほどであった。

だが、逃げようにも体が言う事を聞かない。自分でもどうしてこの程度で、と思ったが――同時に、これが自分の限度なのだと悟ってしまう。

所詮、この程度の実力だ。刺し違えてもいいから、自分の両親を殺した犯人を絶対に倒そうと。そんな事さえ考えていた。

そして、誰かを巻き込まないようにと突き放しもした。それだけの覚悟が、自分にもあるのだと――証明したかったからかもしれない。

だが、現実はこうだ。何も出来ず、ただ受ける事しか出来ない。

そんな自分が悔しくて、情けなかった。

「やりな」

ツィーネが呟くと、ゴーレムは充填したエネルギーをセツコに向けて一斉に放つ。

全部で四つある砲口から連続で何本ものエネルギー群がセツコを襲い、バルゴラを、そして彼女自身を傷つけていく。

激痛という激痛が休むことなくセツコを襲い、今にも気絶しそうになる。だが、それだけは駄目だとセツコは自分に言い聞かして、必死にこらえた。今にもやめてと泣き叫びそうになるほどであったが――いや、それすらも言えない状態であったが――。

それがどれほど続いただろうか。もはや危険レベルを超える量を被弾したセツコであったが、ようやくゴーレムからの連続攻撃が止まる。

（とまっ……た？）

薄らと目を開けると、前方に控えているのはゴーレムの姿のみ。
そのゴーレムは相も変わらずセツコに対して砲口を向け、すぐにでもビーム砲を発射できるような体制をとっている。が、何故かそれ以上攻撃しようとはしなかった。
それは好機だとも思うのだが、体が痛みで全く動かないのが現状だ。それ以上に体は損傷し、もはや再起は不可能だといっても過言ではない。

（でも……動か、ないと……）

セツコの手が微かに動き、アリーナの地を掴む。
指はどうにか動く。ガナリー・カーバーのトリガーさえ引く事が出来れば、あのＩＳに一矢報いる事が出来る。いや、そうしなくてはならない。
が、その時。動かせた方の腕――左腕だったのだが――を誰かが踏みつける。

「あああっ！」

「フフ、反撃しようとしたでしょ？　駄目よ、あなたは其処で転がっている方がお似合いだわ」

嘲笑を浮かべ、セツコの腕を容赦なく踏みつけたのは、ツィーネである。彼女に対し、遠慮など必要ないと踏んでいるのか、ツィーネは踏みつけた足とは逆の足で今度はセツコを容赦なく蹴りつける。

「ほらほら、喚きな！　叫びな！　やめてくださいって懇願しな！」

「……っ。――――！」

「ハッ、強情な奴だね。素直じゃない子は嫌いだよ、あたしは」

まるでゴミでも見るかのような視線をセツコに投げかけ、言葉を吐き捨てるツィーネ。

だが、セツコは歯を食いしばってひたすら耐える。体は正直限界に近く、今にも失神しそうなレベルである。だが、彼女は耐えた。

――――耐えるしかなかった。

「まあ、遊びは此処までにして……本題に入ろうか、小娘」

「……」

本題、といったツィーネはセツコの栗毛に近い髪を乱暴に引っ張る。だが、セツコに対抗するだけの力はもはやなく、ただ恨みの籠った視線をツィーネにぶつけるのみだった。

そんなセツコを見て、ツィーネは鼻で笑ってやる。それと同時に、彼女自身が持っていたリモコンのようなものを取り出し、それをセツコに見せる。

「これがなんだかわかるかい？」

「……知り、ません」

「まあ、そうよね。それじゃあ、見せてあげる」

リモコンのようなものについていたスイッチを押すと、ツィーネの後ろに数枚のモニターに映像が表示される。

その映像は、現在の第三アリーナの様子であった。画面には怯える生徒達と、すぐそこにいるはずのゴーレムの姿が映し出されてお

り、ゴーレムに至っては客席に砲口を向けている状態だった。

「こ、これは……」

「今現在の第三アリーナ内部の映像さ。客席とアリーナ内部を隔てるシールドエネルギーは解除してあるし、あれを止める方法はもはやない。そして――今からあんたが見ている目の前で、あの生徒達を焼き払ってあげる」

「なっ……！？」

その言葉を聞いた時、初めてセツコの瞳は限界まで開かれ、信じられないといったような目をし始めた。

だが、ツィーネは気にせずに更に言葉を続ける。

「しかし、此処の指揮官は馬鹿なのかね。こっちが本当に約束を守るなんて確証すらないのに……ほんと、愚かよね」

「どう……して？」

「あん？」

「どうして、そんな事をするの……？　目的は、私一人の筈じゃないの……？」

まさに驚愕という言葉が似合うだろうか。言葉を詰まらせながらも、セツコはツィーネに対して言葉を投げかける。

人道的ではないその行為。ツィーネの狙いは自分とばかり思っていたのに。なんなのだ、これは。

そうセツコがツィーネに言葉を投げかけた時。ツィーネはクック

ッと笑うと、セツコの耳元に口を近づけ――――呟く。

「決まってるじゃないか。――――あんたを苦しめるためだよ」

その、乾いた言葉にセツコは絶句する。

自分を苦しめるためだけに、其処までする必要があるのか？　関係のない人たちが、自分が苦しむという理由だけで殺されなくてはならないのか？

セツコの体が諤々と揺れる。そう、分かってしまったのだ。ツィーネの目的が。彼女の――本性というものが。

「このスイッチを押すことで、あっちに送り込んだゴーレムが客席に向けて攻撃を開始する。勿論、その光景はしっかりと見てもらうから、目を背けるんじゃないわよ。そして、あそこにいる人間は、お前のせいで殺されるの。お前が生きているから、関係のない人間が死んでいく。フフ、滑稽ね」

「や……めて……」

「【やめる？　アハハ、馬鹿じゃないの？　こんな面白い事、やめられるはずがないよ】」

突如、ツィーネの話し方が変わっていく。

瞳は何故か真っ赤に染まり、まるで血の結晶が瞳の中に入り込んでいるよう。

そして、セツコはその瞳に射抜かれるような気がして、寒気と悪寒が止まらない。震えが全身に回り、どうにか堪えていた悲しみが溢れていく。

「やめて……！　お願いだから、お願いだからやめてぇ！」

「【ハハハハハ！　無駄だよ、セツコ・オハラ。君が叫ぼうが、嘆こうが、懇願しようがやめることはない。君のせいで、無関係の人々は死に行く。彼女たちは君の事を呪うだろう。それはたとえ、冥府に行ってもだ】」

「あ……あ、あ……」

恐怖で体を支配され、ポロポロと涙がこぼれる。

決壊したダムのように、己の瞳から零れる雫。止めようにも、恐怖に支配された人間が、そう簡単に行動できるはずがない。

ツィーネ――いや、それはもはや別の何かへと変貌していた。それが誰なのか、セツコにはわからなかった。もはや、先ほどまで其処にいた女性はもういない。

そう、例えるなら――それは悪魔、いや死神といったところか。

「いや、いや……いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「【ハハハハハ！　そう、その悲鳴だ！　もっと泣け！　もっと悲しめ！　それが覚醒へと繋がるのだから！】」

目の前の人物は、とても嬉しそうに笑みを浮かべ――手にしたリモコンのようなものに指を乗せる。

それはすなわち、ゴーレムへの攻撃指示だ。今まさに、大量虐殺が始まろうとしている瞬間でもあった。

「やめて、お願いだからやめてぇ！」

「【己の定めを呪え、セツコ・オハラ！】」

そう言い放ち、まさにスイッチを推そうとしたその瞬間であった。

「やらせはしない――――」

突如、第五アリーナのフェンスが破壊されたかと思うと、其処から高速で何かが飛び出す。飛び出したものは、一直線にセツコとツィーネだった人物へと近づき、右腕を突き出す。

「【！？】」

「一発……貰って行け」

果たして、その鋭くて鋭利な物体がツィーネだった者に直撃し、ズガンと一発轟音が鳴る。

直撃を貰ったツィーネだった者は、やや意外そうな表情を浮かべ、セツコを離すと後方へと後退する。

ちょうど脇腹辺りに一発貰ったのだが、痛がる様子など微塵にもない。痛覚というものを捨て去っているかのようにも見え、薄気味が悪かった。

「【フッ……騎士（ナイト）は遅れて参上という事か】」

「お前の用意したカラスの始末に少々手間がかかってな。それで遅れただけだ」

ガシャ、と音がしたかと思えば、其処にはカラスの首が転がっていた。しかし、それは生き物ではなく機械であり、ツィーネが用意したはずのコルニクスの首であることが確認できる。

それを見て、ツィーネだった者は口元を吊り上げる。どうやらコルニクスは全滅したようだ。眼前にいる、“赤い孤狼”の手によって。

「【久しぶり、か。南部響介】」

「……そうだな。混沌（カオス）の構成員。久しぶりと言っておこう。あまり出会いたくはなかったが」

そう、突如として現れたのは、キョウスケであった。

その身にはアルトアイゼンを装備し、怖いくらいに無表情を浮かべている。しかし、彼から放出される怒気というものは凄まじく、近寄れないほどだ。

「響介……さん？」

「すまんな、小原。少々遅れた」

「どう、して……？　どうして、来たんですか…？　私、貴方にあんなひどい事を……」

その時の事を思い出したのか、セツコは俯き、キョウスケの方か

ら視線を外す。
迷惑だと、突き放した筈の彼。それがどういう訳か、この場に来てくれた。
嬉しくないといえば嘘になる。だが、セツコには理由が分からなかった。どうして、彼は来てくれたのか。彼に関係のない話の筈なのに――。
その問いに、キョウスケは少しの間無言だった。やがて、静かに口を開くと、彼はこういってのける。

「――どうしても、放っておけなくてな」

「え……？」

「確かに、俺はお前に望まれていない。言うならば、自己満足かもしれない。だが、いつも一人でいるお前を、どうしても放っておけなかった」

「あ……」

「それに、前にも言ったはずだ。関わった以上、無下には出来ん。困ったことはお互い様だ、小原」

「響介さん……」

その言葉を聞いた時、セツコの目頭が熱くなった。
あんなひどい言葉を吹っかけたにも関わらず、ただそれだけの理由でキョウスケはこの場に来てくれた。
なんてことのない、他愛ない理由。それでも、セツコは嬉しかった。そして、同時に――それがキョウスケの優しさなのだと悟る。

「【フッ、臭い事を言うじゃないか】」

「……」

「【けど、君が来たところでもう遅い。アリーナ内の人間たちが、死ぬことに変わりはないのだからね。さあ、絶望を――――】」

再びリモコンのスイッチに触れようとしたとき――耳をつんざくような音がしたかと思うと、それは見事にツィーネだった者の手に直撃する。

「【ぐっ！】」

不意に撃たれたため、起動スイッチがその手から離れてしまう。と、その手から離れた瞬間に一発のレールガンが飛んできたかと思うと、それは見事にスイッチに直撃し、破壊される。

「【何……？】」

「まったく、水臭いですわね…。一言くだされば、すぐに駆けつけましたのに」

「ほんと、そうだよね。でも、間に合ってよかったよ。大丈夫？小原さん」

「オルコットさんに、ダグラスさん…」

やや不満げな言葉を呟きながらも、腕を撃った人物――セシリア・オルコットはキョウスケの隣に立ち、愛銃であるスターライトＭｋ－？を構える。

アイビスはセツコの状態を確認するかのように片膝を下す。キョウスケだけではなく、この二人も来てくれるとは――想像すらしていなかった。

「【フッ、役者は揃ったか。でも、好都合だ。君たちを殺すことで、セツコ・オハラの覚醒は更に早まるからね】」

「意味の分からん事をほざくな、下種め。行くぞ、セシリア」

「勿論ですわ、響介さん！」

セシリアはスターライトを構え、キョウスケは右肘をおり、ヒートダガーを逆手に構える。

二人の臨戦態勢を見て、ツィーネだった者は不敵に笑みを浮かべた。

（――――すべて、計画通りだ。後は……フフフ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1330u/

IS～インフィニット・ストラトス～　【異世界に飛んだ赤い孤狼】

2011年11月5日06時42分発行